秋田県文化財調査報告書第188集

竜毛沢館跡発掘調査報告書

一般国道７号二ツ井バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査

秋田県埋蔵文化財センター

１９９０・２

秋田県教育委員会

竜毛沢館跡発掘調査報告書

りゅうげさわたてあと

一般国道７号二ツ井バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査

１９９０・２

秋田県教育委員会

巻頭図版1　竜毛沢館跡遠景（南側から）

巻頭図版2　竜毛沢館跡遠景（西側から）

巻頭図版3　竜毛沢館跡全景（東側から）

巻頭図版4　竜毛沢館跡全景（上空から）

序

本県には、私達の祖先が営々として築きあげてきた貴重な文化財が数多く残されております。

最近の急速な開発事業の進展に伴い、地理的景観や歴史的風土は著しく変貌しつつあります。開発の波は、平野部から丘陵・山地へと押し寄せており、中世城館跡にまで及んでおります。秋田県教育委員会では、文化財保護の立場から開発事業側と協議し、鋭意その保護に努めております。

このほど、建設省東北地方建設局が山本郡二ツ井町地内の一般国道７号の交通の流れと生活環境の改善のため、二ツ井バイパスを建設することになり、事前に計画路線内の埋蔵文化財分布調査で判明している竜毛沢館跡の発掘調査を工事に先立って実施いたしました。　その結果、旧石器時代の遺物、縄文時代の集落、平安時代の製鉄炉、中世の建物跡群等が発見されました。

特に中世の建物跡群には形態（様式）の変遷がみとめられるなど建築学史的にも新知見が得られました。

本書は、この発掘調査の成果をまとめたものでありますが、埋蔵文化財の保護への御理解と、郷土の歴史解明に御活用いただければ幸いです。

最後に、この調査に御協力いただきました建設省東北地方建設局能代工事事務所・同能代国道維持出張所、二ツ井町教育委員会はじめ関係機関各位、並びに調査及び本書作成にご協力いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

平成元年12月

秋田県教育委員会

教育長　橋　本　顕　信

例　言

1.　本書は、建設省東北地方建設局能代工事事務所の一般国道７号二ツ井バイパス建設に伴い、山本郡二ツ井町切石字竜毛沢164外に所在する遺跡が計画路線内にかかり消滅することから、記録保存を目的に発掘調査を実施した竜毛沢館跡の記録である。

2.　本書で竜毛沢館として調査した遺跡の範囲は、昭和52年３月に二ツ井町が刊行した『二ツ井町史』に記載されている「竜毛沢Ⅰ遺跡（館跡）」、昭和53年３月に秋田県教育委員会が刊行した『秋田県の中世城館』に、「竜毛沢館のうちの西部段丘台地部」として記載されている範囲の北東端区域である。

3.　現地での調査は、昭和60年12月２日の現地調査、昭和61年12月８日から12月13日まで実施した範囲確認調査の結果をふまえ、12,000㎡の調査予定面積で、昭和63年５月９日から11月15日まで実施した。

4.　本書に掲載した地形図は、国土地理院発行５万分の１「中浜」「能代」「鷹巣」「羽後浜田」「森岳」図幅と、二ツ井町発行１万分の１地形図である。

5.　遺跡付近の調査前垂直航空写真は、二ツ井町教育委員会の協力により、二ツ井町から借用・部分複写したものである。

6.　中世の遺構については、高島成侑八戸工業大学助教授の指導と玉稿を賜った。

7.　出土炭化材の樹種同定については、パリノ・サーヴェイ株式会社の他に、嶋倉巳三郎元奈良教育大学教授にお願いした。

8.　須恵器系中世陶器については、鑑定を吉岡康暢国立歴史民俗博物館教授、産地同定を三辻利一奈良教育大学教授にお願いした。

9.　陶磁器の鑑定は、大橋康二佐賀県立九州陶磁文化館学芸課資料係長にお願いした。

10.　中世城館出土の炭化穀類については高橋與右衛門岩手県文化振興事業団埋蔵文化財セン

ター主任文化財専門調査員と畠山昇青森県埋蔵文化財調査センター主査から御教示を得た。

また、現世穀類は、二ツ井町在住の工藤キエ、工藤ミサヲ、阿部京子、桜庭朋人の４氏から提供をうけた。

11.　本遺跡の発掘調査・資料整理に際し上記の方々の他に、次の諸氏から御教示を賜った。記して謝意を表する。（敬称略・順不同）

村越　潔　佐々木達夫　工藤雅樹　久保哲三　広岡公夫
工藤清泰　坂本洋一　本澤慎輔　赤平智尚　佐々木清文
中川重紀　穴澤義功　秋元信夫　小山彦逸　安村二郎
吉田昭治　古内龍夫　村木悦也　栗村知弘　佐々木浩一
板橋範芳　工藤　晃　相原嘉之　寺島文隆

12.　本報告書の草稿執筆は、縄文時代の遺物を能登谷が、その他を桜田が分担した。

凡　例

1.　遺構番号は、プラン確認時の発見順に付しているが、精査時に非遺構と判断されたものがあり、欠番となっている。

2.　本報告書で使用した遺構の略記号は次の通りである。

ＳＡ	柵列・板塀・柱穴列
ＳＢ	掘立柱建物跡
ＳＤ	空堀・溝
ＳＦ	土塁状盛土
ＳＩ	竪穴住居跡・竪穴建物跡
ＳＫ	土坑
ＳＫＦ	フラスコ状土坑
ＳＫＳ	土壙墓
ＳＫＴ	Ｔ－Ｐｉｔ（溝状陥穴）
ＳＭ	土橋
ＳＮ	焼土遺構・屋外かまど
ＳＱ	配石遺構
ＳＲ	土器埋設遺構
ＳＳ	製鉄炉
ＳＷ	炭焼窯

3.　縄文時代の石器実測図に貼付したスクリーントーンは次の通りである。

くぼみ石のくぼみ範囲

敲磨器の敲打範囲

敲磨器の擦面範囲

4.　本報告書で「柵列」「溝」「板塀」という用語を用いているが、その定義は以下の通りである。

柵列　館跡の各部の区画施設である。郭縁辺部に、内部に一定間隔で柱穴が穿たれて溝が巡っている。「布堀り溝をもつ柱穴列」であり、板塀跡と考えられるが、建物跡等の周囲を巡る板塀と区別するため柵列と呼称する。

溝　　郭上面にあり内部に柱穴等の穿たれていない細長い掘り込み。

板塀　　2種が考えられる。

1　郭上面にあり建物跡等の周囲を巡る区画施設と認識され、「布堀り溝をもつ柱穴列」で一定間隔で柱を建て、溝に板を並べた板塀。

2　区画施設であるが、柱穴が一定間隔で連続して穿たれているもの。

5.　須恵器系中世陶器（珠洲焼）の拓影図は縄文土器の拓影図と異なり左側に内面の拓影、中央に断面、右側に外面の拓影を配置している。この場合、断面は、左側が内面側となり右側が外面側となるよう作図した。また内・外面いずれか一方しか採拓しない場合も同様の配置をしている。

6.　遺構埋土等の色調については、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」4版 1973（昭和48）年を使用して表記した。

7.　掘立柱建物跡の柱穴の呼称は、本来的には梁行方向と桁行方向で統一して行うべきであろうが、本遺跡では東西方向（見かけの東西方向も含む）をX軸、南北方向（見かけの南北方向も含む）をY軸とし、X_0、Y_0、X_1、Y_1の方眼をつくり、柱穴はその交点の（X、Y）で表示した。

8.　掘立柱建物跡の柱間寸法で、メートル法から曲尺に換算する場合は1尺を30.3cmとした。メートル数値を30.3cmで除算し、小数点第3位で四捨五入している。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表 目 次
図版目次

第１章　はじめに……1
　第１節　発掘調査に至るまで……1
　第２節　調査の組織と構成……4
第２章　遺跡の立地と環境……4
　第１節　自然的環境……4
　第２節　歴史的環境……7
第３章　発掘調査の概要……15
　第１節　遺跡の概観……15
　第２節　調査区の設定……17
　第３節　調査の経過……19
第４章　調査の記録……24
　第１節　検出遺構と遺物……24
　　1　旧石器時代……24
　　2　縄文時代……24
　　(1)　遺構・遺物の概観……24
　　(2)　竪穴住居跡とその出土遺物……27
　　(3)　土坑とその出土遺物……53
　　①　フラスコ（袋）状土坑……53
　　②　土坑・土壙墓……58
　　③　Ｔ－Ｐｉｔ……81
　　(4)　土器埋設遺構……83
　　(5)　配石遺構……90

(6) 遺構外から出土した遺物…… 92
① 土器…… 92
② 土製品…… 140
③ 石器…… 145
④ 石製品…… 198
3 平安時代…… 200
(1) 遺構の概観…… 200
(2) 製鉄炉とその出土遺物…… 200
(3) 炭焼窯・土坑…… 200
① 炭焼窯…… 200
② 土坑…… 203
(4) 遺構外から出土した遺物…… 205
① 土師器…… 205
② 須恵器…… 207
③ 鉄滓…… 207
④ 砥石…… 209
⑤ 羽口…… 209
4 中世…… 213
(1) 遺構・遺物の概観…… 213
(2) 竪穴建物跡とその出土遺物…… 214
(3) 掘立柱建物跡とその出土遺物…… 220
(4) 土坑・焼土遺構とその出土遺物…… 241
(5) 空堀・土橋とその出土遺物…… 244
① 空堀…… 244
② 土橋…… 253
(6) 柵列・溝・板塀とその出土遺物…… 253
① 柵列…… 253
② 溝…… 256
③ 板塀…… 256
(7) 遺構外から出土した遺物…… 266
① 掘立柱建物跡柱穴様ピット出土の縄文時代遺物…… 266
② 施釉陶磁器…… 266

③　須恵器系中世陶器…… 269
第５章　自然科学的分析調査…… 279
第１節　自然科学的分析調査試料…… 279
第２節　縄文土器内に堆積する土壌に混入する花粉化石の分析…… 279
第３節　炭化材の樹種同定…… 282
第４節　須恵器系中世陶器の蛍光Ｘ線分析法による産地同定…… 286
第５節　放射性炭素年代測定法による年代測定…… 289
第６章　考古学的分類・分析と考察…… 290
第１節　旧石器時代…… 290
第２節　縄文時代…… 291
1　遺構…… 291
2　遺物…… 293
第３節　平安時代…… 308
1　遺構…… 308
第４節　中世…… 309
1　遺構…… 309
(1)　竪穴建物跡…… 309
(2)　掘立柱建物跡…… 311
(3)　空堀・土橋・柵列・板塀…… 328
2　遺物…… 329
(1)　須恵器系中世陶器…… 329
(2)　施釉陶磁器…… 331
(3)　穀類…… 336
3　中世城館としての構造と性格…… 337
第７章　まとめ…… 340

挿　図　目　次

第　1図　遺跡の位置……　2
第　2図　バイパス位置と調査対象範囲……　3
第　3図　地形区分図……　5
第　4図　周辺の遺跡……　9・10
第　5図　「竜毛沢館」の範囲と現況……　16
第　6図　グリッド配置図……　18
第　7図　旧石器時代の遺物実測図(1)……　25
第　8図　旧石器時代の遺物実測図(2)……　26
第　9図　ＳＩ 02 竪穴住居跡と出土遺物……　28
第 10図　ＳＩ 04 竪穴住居跡……　30
第 11図　ＳＩ 04 竪穴住居跡と出土遺物……　32
第 12図　ＳＩ 07 竪穴住居跡と出土遺物……　34
第 13図　ＳＩ 08 竪穴住居跡と出土遺物……　35
第 14図　ＳＩ 10 竪穴住居跡と出土遺物……　37
第 15図　ＳＩ 13 竪穴住居跡と出土遺物(1)……　39
第 16図　ＳＩ 13 竪穴住居跡と出土遺物(2)……　40
第 17図　ＳＩ 13 竪穴住居跡と出土遺物(3)……　42
第 18図　ＳＩ 13 竪穴住居跡と出土遺物(4)……　44
第 19図　ＳＩ 13 竪穴住居跡と出土遺物(5)……　46
第 20図　ＳＩ 19 竪穴住居跡と出土遺物……　47
第 21図　ＳＩ101 竪穴住居跡と出土遺物(1)……　49
第 22図　ＳＩ101 竪穴住居跡と出土遺物(2)……　50
第 23図　ＳＩ102 竪穴住居跡と出土遺物……　52
第 24図　ＳＩ105 竪穴住居跡出土遺物とＳＩ106 竪穴住居跡……　54
第 25図　ＳＫＦ116 フラスコ状土坑……　55
第 26図　ＳＫＦ116 フラスコ状土坑出土遺物……　57
第 27図　ＳＫ02・03・07～09土坑と出土遺物……　59
第 28図　ＳＫ10・11・14・20・22土坑と出土遺物…　61
第 29図　ＳＫ23・25・26土坑と出土遺物……　62
第 30図　ＳＫＳ31土壙墓・ＳＫ34～36土坑と出土遺物……　64
第 31図　ＳＫ37・38・41～44土坑と出土遺物……　66
第 32図　ＳＫ45～48・50～52土坑と出土遺物……　68
第 33図　ＳＫ53・55・60土坑と出土遺物…　70
第 34図　ＳＫ60土坑と出土遺物……　71

第 35図　ＳＫ101・102・105土坑、ＳＫ103・104土壙墓と出土遺物…… 73
第 36図　ＳＫ111・114・115・118・119土坑と出土遺物…… 75
第 37図　ＳＫ121・123・124・126・127土坑…… 77
第 38図　ＳＫ126土坑と出土遺物…… 78
第 39図　ＳＫ127土坑と出土遺物…… 80
第 40図　ＳＫ131・132・135土坑、ＳＫＴ01～03T-Pitと出土遺物…… 82
第 41図　ＳＲ01・02土器埋設遺構と出土遺物…… 84
第 42図　ＳＲ04・101土器埋設遺構と出土遺物…… 86
第 43図　ＳＲ102・103土器埋設遺構と出土遺物…… 88
第 44図　ＳＲ104・105土器埋設遺構と出土遺物…… 89
第 45図　ＳＲ106土器埋設遺構と出土遺物及びＳＱ101配石遺構…… 91
第 46図　第Ｉ群土器拓影…… 93
第 47図　第Ⅱ群・第Ⅲ群拓影…… 95
第 48図　第Ⅳ群土器拓影(1)…… 97
第 49図　第Ⅳ群土器拓影(2)…… 100
第 50図　第Ⅳ群土器拓影(3)…… 103
第 51図　第Ⅳ群土器拓影(4)…… 105
第 52図　第Ⅳ群土器拓影(5)…… 107
第 53図　第Ⅳ群土器実測・拓影(6)…… 109
第 54図　第Ⅳ群土器拓影(7)…… 111
第 55図　第Ⅳ群土器拓影(8)…… 113
第 56図　第Ⅳ群土器拓影(9)…… 114
第 57図　第Ⅳ群土器・第Ⅴ群土器拓影…… 116
第 58図　第Ⅴ群土器・第Ⅵ群土器実測…… 117
第 59図　土製器(1)…… 141
第 60図　土製品(2)…… 142
第 61図　石　鏃…… 146
第 62図　石　槍(1)…… 148
第 63図　石　槍(2)・石　錐(1)…… 149
第 64図　石　錐(2)・石　匙(1)…… 150
第 65図　石　匙(2)…… 151
第 66図　石　匙(3)…… 152
第 67図　トランシェ様石器・箆状石器(1)…… 154
第 68図　箆状石器(2)…… 155
第 69図　箆状石器(3)…… 156
第 70図　箆状石器(4)…… 157
第 71図　掻　器(1)…… 160
第 72図　掻　器(2)…… 161
第 73図　掻　器(3)…… 162
第 74図　掻　器(4)…… 163
第 75図　削　器(1)…… 164
第 76図　削器(2)・鋸歯様石器・磨製石斧(1)…… 166
第 77図　磨製石斧(2)…… 167
第 78図　磨製石斧(3)・打製石斧…… 168

第 79図　石　錘(1)…… 169
第 80図　石　錘(2)…… 170
第 81図　石　錘(3)…… 171
第 82図　石　錘(4)…… 172
第 83図　石　錘(5)・敲磨器(1)…… 175
第 84図　敲磨器(2)…… 176
第 85図　敲磨器(3)…… 177
第 86図　敲磨器(4)…… 178
第 87図　敲磨器(5)…… 179
第 88図　敲磨器(6)…… 180
第 89図　敲磨器(7)…… 181
第 90図　敲磨器(8)…… 182
第 91図　敲磨器(9)…… 183
第 92図　敲磨器(10)…… 184
第 93図　敲磨器(11)…… 185
第 94図　敲磨器(12)…… 186
第 95図　円盤状石製品・線刻礫…… 199
第 96図　ＳＳ01製鉄炉と出土遺物…… 201
第 97図　ＳＷ04炭焼窯と出土遺物…… 202
第 98図　ＳＷ110・120炭焼窯、ＳＫ05・54土坑…… 204
第 99図　土師器・須恵器…… 206
第100図　遺物出土分布図(1)…… 208
第101図　砥　石…… 210
第102図　羽　口…… 211
第103図　遺物出土分布図(2)…… 212
第104図　ＳＩ01・14竪穴建物跡…… 215
第105図　ＳＩ01・104竪穴建物跡出土遺物…… 216
第106図　ＳＩ103・104竪穴建物跡…… 218
第107図　ＳＢ01・03掘立柱建物跡…… 221
第108図　ＳＢ02掘立柱建物跡…… 222
第109図　ＳＢ04・06掘立柱建物跡…… 224
第110図　ＳＢ05掘立柱建物跡…… 225
第111図　ＳＢ07～09・12・13掘立柱建物跡…… 227
第112図　ＳＢ10掘立柱建物跡…… 229
第113図　ＳＢ11掘立柱建物跡…… 230
第114図　ＳＢ14掘立柱建物跡…… 232
第115図　ＳＢ15掘立柱建物跡…… 233
第116図　ＳＢ16・18掘立柱建物跡…… 235
第117図　ＳＢ17掘立柱建物跡…… 236
第118図　ＳＢ19・20掘立柱建物跡…… 238
第119図　ＳＢ21・22掘立柱建物跡…… 239
第120図　ＳＢ02・03・05・14掘立柱建物跡出土遺物…… 240
第121図　ＳＫ01・16・117土坑…… 242
第122図　ＳＫ01・06土坑出土遺物…… 243
第123図　ＳＮ01・02焼土遺構…… 245
第124図　空堀内埋土断面図化位置図…… 246
第125図　ＳＤ01空堀内埋土断面…… 247
第126図　ＳＤ01空堀内出土遺物…… 248
第127図　ＳＤ02空堀内埋土断面…… 250
第128図　ＳＤ04空堀内埋土断面(1)…… 251
第129図　ＳＤ04空堀内埋土断面(2)…… 252
第130図　第Ⅰ郭柵列(1)…… 254
第131図　第Ⅰ郭柵列(2)…… 255
第132図　第Ⅱ郭・第Ⅲ郭柵列…… 257
第133図　溝・板塀(1)…… 258
第134図　板塀(2)…… 259

第135図　板塀(3)…… 260
第136図　陶磁器出土分布図…… 267
第137図　柱穴様ピット内・遺構外出土遺物(1)…… 268
第138図　遺構外出土遺物(2)…… 270
第139図　遺構外出土遺物(3)…… 271
第140図　遺構外出土遺物(4)…… 273
第141図　遺構外出土遺物(5)…… 274
第142図　遺構外出土遺物(6)…… 275
第143図　遺構外出土遺物(7)…… 276
第144図　遺構外出土遺物(8)…… 277
第145図　遺構外出土遺物(9)…… 278
第146図　ＳＩ103竪穴建物跡炭化遺材出土状況…… 283
第147図　Ｒｂ－Ｓｒ分布図…… 288
第148図　縄文時代遺構配置模式図…… 292
第149図　掘立柱建物跡模式図(1)…… 317
第150図　掘立柱建物跡模式図(2)…… 319
第151図　掘立柱建物跡模式図(3)…… 321
第152図　掘立柱建物跡模式図(4)…… 323
第153図　掘立柱建物跡の変遷…… 326
第154図　米代川流域における中世陶磁器出土分布図…… 331
第155図　建設工事設計図…… 341

表　目　次

第　1表　遺構外出土土器一覧表…… 118
第　2表　円盤状土製品一覧表…… 143
第　3表　遺構外出土土器一覧表…… 187
第　4表　円盤状石製器一覧表…… 198
第　5表　土師器出土位置等一覧表…… 205
第　6表　須恵器片出土位置等一覧表…… 207
第　7表　鉄滓出土地区一覧表…… 209
第　8表　砥石出土地区等一覧表…… 209
第　9表　羽口出土地区等一覧表…… 213
第 10表　第Ⅰ郭柵列一覧表…… 262
第 11表　第Ⅱ郭柵列一覧表…… 263
第 12表　第Ⅲ郭柵列一覧表…… 263
第 13表　溝一覧表…… 264
第 14表　板塀一覧表…… 265
第 15表　施釉陶磁器片出土位置等一覧表…… 269
第 16表　竜毛沢館跡出土須恵器系中世陶器の分析結果…… 289

図　版　目　次

巻頭図版１．竜毛沢館跡遠景
巻頭図版２．竜毛沢館跡遠景
巻頭図版３．竜毛沢館跡全景
巻頭図版４．竜毛沢館跡全景
図版　1．発掘調査前現況（１）
図版　2．発掘調査前現況（２）
図版　3．発掘調査前現況（３）
図版　4．竜毛沢館跡から南側の眺望

図版　5. 縄文時代竪穴住居跡(1)
図版　6. 縄文時代竪穴住居跡(2)
図版　7. 縄文時代竪穴住居跡(3)
図版　8. 縄文時代竪穴住居跡(4)
図版　9. 縄文時代竪穴住居跡(5)
図版 10. 縄文時代竪穴住居跡(6)
図版 11. 縄文時代竪穴住居跡(7)
図版 12. 縄文時代土坑(1)
図版 13. 縄文時代土坑(2)
図版 14. 縄文時代T—Pit
図版 15. 縄文時代土器埋設遺構(1)
図版 16. 縄文時代土器埋設遺構(2)
図版 17. 縄文時代土器埋設遺構(3)
図版 18. 縄文時代土器埋設遺構(4)
図版 19. 縄文時代土器埋設遺構(5)
図版 20. 縄文時代土器埋設遺構(6)
図版 21. 縄文時代土器埋設遺構(7)・配石遺構
図版 22. 旧石器時代の遺物(1)
図版 23. 旧石器時代の遺物(2)
図版 24. 縄文時代の遺物(1)
図版 25. 縄文時代の遺物(2)
図版 26. 縄文時代の遺物(3)
図版 27. 縄文時代の遺物(4)
図版 28. 縄文時代の遺物(5)
図版 29. 縄文時代の遺物(6)
図版 30. 縄文時代の遺物(7)
図版 31. 縄文時代の遺物(8)
図版 32. 縄文時代の遺物(9)
図版 33. 縄文時代の遺物(10)
図版 34. 縄文時代の遺物(11)
図版 35. 縄文時代の遺物(12)
図版 36. 縄文時代の遺物(13)
図版 37. 縄文時代の遺物(14)
図版 38. 縄文時代の遺物(15)
図版 39. 縄文時代の遺物(16)
図版 40. 縄文時代の遺物(17)
図版 41. 縄文時代の遺物(18)
図版 42. 縄文時代の遺物(19)
図版 43. 縄文時代の遺物(20)
図版 44. 縄文時代の遺物(21)
図版 45. 縄文時代の遺物(22)
図版 46. 縄文時代の遺物(23)
図版 47. 縄文時代の遺物(24)
図版 48. 縄文時代の遺物(25)
図版 49. 縄文時代の遺物(26)
図版 50. 縄文時代の遺物(27)
図版 51. 縄文時代の遺物(28)
図版 52. 縄文時代の遺物(29)
図版 53. 縄文時代の遺物(30)
図版 54. 縄文時代の遺物(31)
図版 55. 縄文時代の遺物(32)
図版 56. 縄文時代の遺物(33)
図版 57. 縄文時代の遺物(34)
図版 58. 縄文時代の遺物(35)
図版 59. 縄文時代の遺物(36)
図版 60. 縄文時代の遺物(37)
図版 61. 縄文時代の遺物(38)
図版 62. 縄文時代の遺物(39)
図版 63. 縄文時代の遺物(40)
図版 64. 縄文時代の遺物(41)
図版 65. 縄文時代の遺物(42)
図版 66. 縄文時代の遺物(43)
図版 67. 縄文時代の遺物(44)
図版 68. 縄文時代の遺物(45)

図版 69. 縄文時代の遺物(46)
図版 70. 縄文時代の遺物(47)
図版 71. 縄文時代の遺物(48)
図版 72. 縄文時代の遺物(49)
図版 73. 縄文時代の遺物(50)
図版 74. 縄文時代の遺物(51)
図版 75. 平安時代の遺構(1)
図版 76. 平安時代の遺構(2)
図版 77. 平安時代の遺物(1)
図版 78. 平安時代の遺物(1)
図版 79. 平安時代の遺物(3)
図版 80. 平安時代の遺物(4)
図版 81. 平安時代の遺物(5)・自然遺物
図版 82. 平安時代の遺物(6)
図版 83. 平安時代の遺物(7)
図版 84. 平安時代の遺物(8)
図版 85. 平安時代の遺物(9)
図版 86. 平安時代の遺物(10)
図版 87. 中世の遺構(1)
図版 88. 中世の遺構(2)
図版 89. 中世の遺構(3)
図版 90. 中世の遺構(4)
図版 91. 中世の遺物(1)
図版 92. 中世の遺物(2)
図版 93. 中世の遺物(3)
図版 94. 中世の遺構(5)
図版 95. 中世の遺構(6)
図版 96. 中世の遺構(7)
図版 97. 中世の遺構(8)
図版 98. 中世の遺構(9)
図版 99. 中世の遺構(10)
図版100. 中世の遺構(11)
図版101. 中世の遺構(12)
図版102. 中世の遺構(13)
図版103. 中世の遺構(14)
図版104. 中世の遺構(15)・遺物(4)
図版105. 中世の遺構(16)
図版106. 中世の遺構(17)
図版107. 中世の遺構(18)
図版108. 中世の遺構(19)
図版109. 中世の遺構(20)
図版110. 中世の遺構(21)
図版111. 中世の遺物(5)
図版112. 中世の遺物(6)
図版113. 中世の遺物(7)
図版114. 中世の遺物(8)
図版115. 中世の遺物(9)
図版116. 花粉化石顕微鏡写真(1)
図版117. 花粉化石顕微鏡写真(2)
図版118. 炭化材顕微鏡写真(1)
図版119. 炭化材顕微鏡写真(2)
図版120. 炭化材顕微鏡写真(3)

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

二ツ井町内を東西に走る一般国道７号は、町の商業中心地を通り、数の多い信号機と幅の狭い米白橋などにより、交通の流れと生活環境に大きな影響を与えている。このため、建設省東北地方建設局能代工事事務所では、切石地内からきみまち坂大橋までの区間の街区を避けて北側の山間部を通過する改築工事（二ツ井バイパス）を計画した。

しかし、計画路線内（延長4,850ｍ）に埋蔵文化財包蔵地のある可能性がある(註１)として、県教育委員会と協議を重ね、昭和60年12月２日に、県教育庁文化課の冨樫泰時学芸主事（当時）が、能代工事事務所技官と現地調査し、計画路線内に竜毛沢館が所在していることを確認した。

昭和61年12月８日から12月13日まで、バイパス路線区域内の竜毛沢館推定区域に冨樫泰時学芸主事と県立博物館庄内昭男学芸主事（当時）が31本のトレンチを設定し、遺構・遺物の出土状況と土層などの観察を行ったところ、路線区域内における遺跡の広がりは、12,000㎡の範囲であり、縄文時代前期・中期・後期初頭、古代、中世と何回かにわたって活用された遺跡であることがわかった(註２)。

この結果に基づいて、県教育委員会と能代工事事務所が協議し、昭和63年度に発掘調査を実施し、記録保存をはかることになった。

註

１．　本遺跡については、『二ツ井町史』に「竜毛沢Ｉ遺跡（館跡）」・『秋田県の中世城館』に「竜毛沢館のうち西部段丘台地部」と記載されているが、『秋田県遺跡地図』には登載されていなかった。

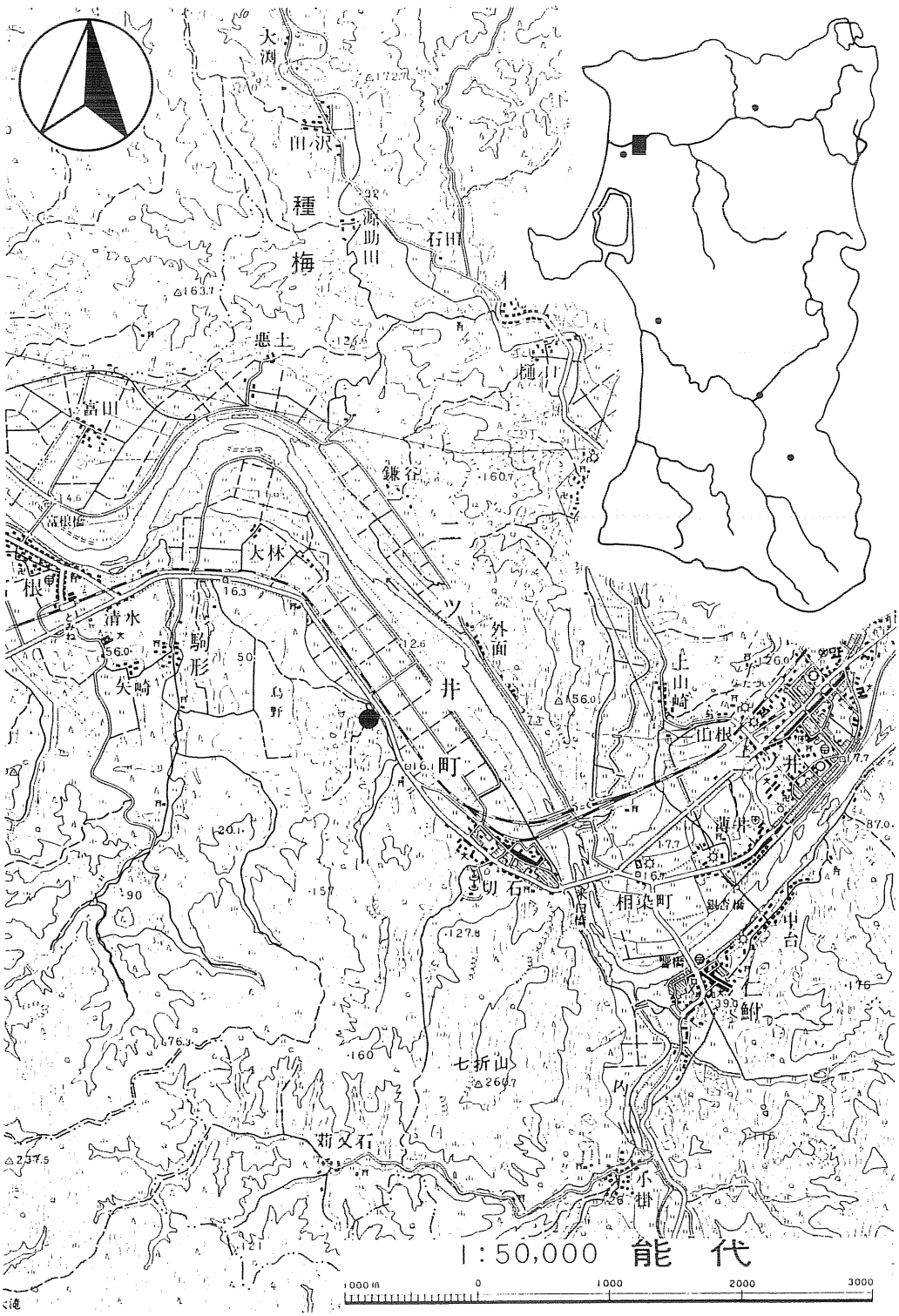
二ツ井町町史編さん委員会　『二ツ井町史』 1977（昭和52）年

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年

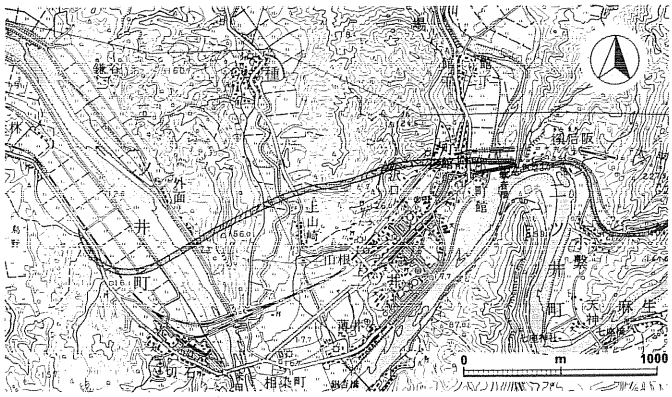
秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図』 1976（昭和51）年

２．　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第155集

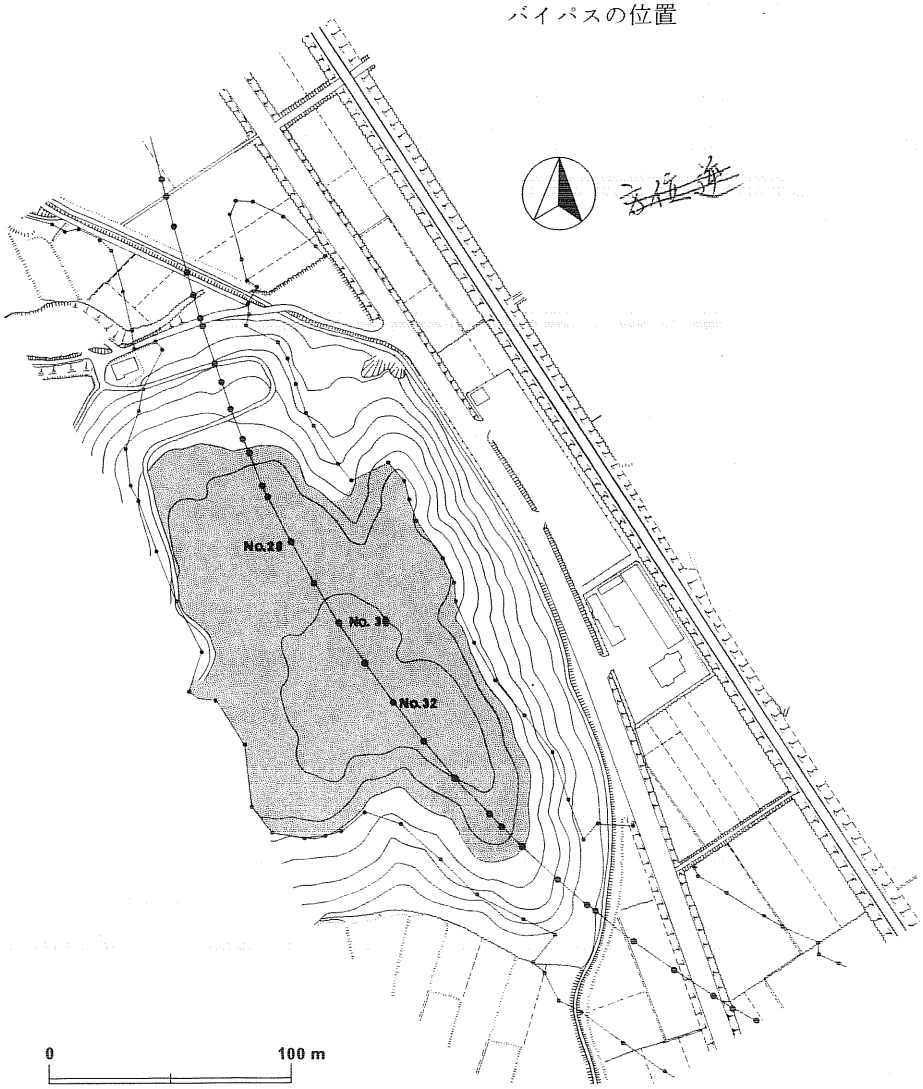
1987（昭和62）年


大渕
田沢
種
梅
石田
悪土
富山
鎌谷
大林
清水
駒形
矢崎
外面
井
町
切石
相染町
薄井
山根
上井
中台
仁鮒
七折山
新又石
小掛
1:50,000
能代
1000m
0
1000
2000
3000

第１図　　遺跡の位置



バイパスの位置



第２図　　バイパス位置と調査対象範囲

第２節　調査の組織と構成

調査主体者	秋田県教育委員会	
調査担当者	桜田　　隆	秋田県埋蔵文化財センター 文化財主任　主担当 （現　文化財主査）
	船木　義勝	秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事
	能登谷宣康	秋田県埋蔵文化財センター 嘱託（平成元年３月末退職） （現　財団法人福島県文化センター 文化財主事）
事務担当者	加藤　　進	秋田県埋蔵文化財センター 主査（平成元年３月転出）
	佐田　　茂	秋田県埋蔵文化財センター 主査（平成元年４月転入）
	高橋忠太郎	秋田県埋蔵文化財センター 主事
調査協力機関	建設省東北地方建設局能代工事事務所・能代国道維持出張所	
	山本郡二ツ井町教育委員会	

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　自然的環境

山本郡二ツ井町は、秋田県北西部に位置している。

二ツ井町を中心とした秋田県北西部区域の地形を観察すると、岩手県四角岳に源を発し、秋田県北部を西流し、能代市で日本海に注ぐ米代川の右岸区域には、標高1,000ｍ±の白神山地があり、その南側の山腹際をなぞるように標高100～200ｍの山頂が斉高性を示す大小起伏丘陵地が発達している。この丘陵地の西側と南側には標高20～50ｍの台地・段丘が開け、波浪状の小起伏面を含む一大平坦面を呈している。これらの丘陵・台地・段丘を開析する小河川は、南西あるいは西に流れて沖積低地をつくり、海岸砂丘地を隔てて日本海に注いでいる。

米代川左岸地域は七座山山地の西側に山頂が斉高性を示す大小起伏丘陵地が発達し、さらにその西には６～７段の台地・段丘が東から西に向かって傾斜しながら展開し、八郎潟の湖岸低地及び砂丘地を経て日本海に続いている。

この地域の地形は、①山地、②丘陵、③台地、④沖積低地、⑤砂丘地に大きく５区分できる。このうち③台地は、高位段丘面（標高100～200ｍ）と、中・低位段丘面（標高20～100ｍ）か

らなっている。中・低位段丘面はまた、場所により7～8段の段丘に分けられる。

沖積低地は、現河川沿い及び、砂丘地と台地の間に分布しているが、米代川沿いでは蛇行した旧河道が微地形としてよく残されており、現河床に近い面と、10m高度の面の2段に段化し

第3図　地形区分図

ている。後者は所謂洪水シラス面である。

二ツ井町は地理的には、北緯40°2′50″～40°21′33″、東経140°8′36″～140°18′15″に位置し、町域は東西14.3㎞、南北34.55㎞、面積180.89㎢の細長い菱形を呈する。町域のうち70％（12,636㎢）は、山林原野となっている。

町の中央部を東から西に米代川が蛇行しつつ貫流しているが、町の東部で北上してきた阿仁川と、白神山地から南下してくる藤琴川が米代川に合流する。また、小滝山に源を発する種梅川は、河岸段丘を形成しながら南に流れ、房住山に源を発する内川も段丘を形成しながら北に流れ、ともに二ツ井町西部で相前後して米代川に合流し、日本海に注がれている。

竜毛沢館は二ツ井狭隘部の出口部分の左岸、北能代第３段丘面と呼ばれる段丘の縁辺部に位置する。段丘は（遺跡の東・西で）奥深く開析されているため、遺跡が舌状台地に立地している感がある。

遺跡の東側（米代川側）下方の沖積低地には、一般国道７号とＪＲ東日本の奥羽本線が並走している。

植物分布を観ると、米代川を挟み南北で著しい相違を呈している。また河岸地帯では、日本海の影響を受けた植生を示している。つまり、南部（米代川左岸側）はスギを主とする地帯でスギの純林が続いている。北部（米代川右岸側）は広葉樹を主とする地帯で、トチ・クリ・コナラなどの混生林から北上するにつれブナが多くなり、ブナ純林へと変化する。中央部（米代川河岸）はマツを主とする地帯とで、地形上海風の影響を受けており、河岸の丘陵地はマツ群落が良く発達している。マツのうち、クロマツは海岸地帯に多く分布し、内陸に入るにつれてアカマツがこれにかわるのが常であるが、二ツ井町は、この両種の変移点（混生帯）となっている。竜毛沢館跡の立地する段丘上には、スギ・サクラ・クヌギ・ナラなどがみられるが、スギの人造林が主体をなしている。

参考文献

二ツ井町町史編さん委員会　『二ツ井町史』 1977（昭和52）年

秋田第四紀研究グループ米代川班（鎧敏春・小川敏郎・工藤英美・夏井恭子・藤本幸雄）「秋田県能代平野から藤里地域にかけての段丘群について」　『秋田地学』№140 1966（昭和42）年

平山次郎・市川賢一　「1000年前のシラス洪水――発掘された十和田湖伝説――」　『地質ニュース』№140 1966（昭和42）年

秋田県　『土地分類基本調査　能代』 1983（昭和58）年

第２節　歴史的環境

竜毛沢館跡の所在する二ツ井町は、秋田県北部を貫流し、能代平野から日本海に注ぐ米代川の下流域に位置し、旧石器時代から中世にかけての遺跡は丘陵、台地（段丘）上に立地している。本項では、米代川下流域に分布する遺跡群のうち本遺跡と関連する遺跡を中心として竜毛沢館跡の歴史的位置付けを試みたい。

旧石器時代の遺跡は、彫刻刀形石器を出土した八森町土井遺跡（３）、掻器を出土した古館遺跡（20）、ナイフ形石器を出土した能代市落合遺跡（23）、杉久保型ナイフ形石器を出土した能代市館下Ⅰ遺跡（97）、ナイフ形石器・彫刻刀形石器・米ケ森型台形石器・石刃・局部磨製石・石核等を出土した能代市此掛沢Ⅱ遺跡（88）、石刃・石核が出土した山本町逆川遺跡（96）の６遺跡があげられる。

このほかに、故吉田礼三氏のコレクションの中から二ツ井町出土とされるナイフ形石器がある。

縄文時代の遺跡としては、能代市の杉沢台遺跡（21）・館下Ⅰ遺跡（97）・上ノ山遺跡（45）・真壁地遺跡（98）・落合貝塚（24）・腹鞁の沢遺跡（42）・大内坂Ⅱ遺跡（28）・柏子所貝塚（41）、八竜町の萱刈沢貝塚（94）、二ツ井町の麻生（上ノ山）遺跡（80）・烏野遺跡（54）などがあげられる。

杉沢台遺跡（21）は、縄文時代前期末葉の長さ31ｍ、幅8.8ｍ、面積222㎡を最大とした４軒の大型住居跡と40軒の竪穴住居跡を持つ集落で、縄文社会を考えるうえで看過できない遺跡である。また、103基のフラスコ状土坑が台地縁辺部に群在し、その１基中にヤマトシジミの貝殻が捨てられていた。小池裕子氏の研究の結果、貝の採集は晩春から夏にかけての時期に多いことがわかった。この貝層内から検出された骨類は、上野輝弥氏の鑑定で、ウグイ・フナ・ニシン科・サケ科・サバ科・フグ科の魚骨と、カエル・ネズミ（ハタネズミ属）・鳥類・中型哺乳類の鳥獣骨であることが判明した。

萱刈沢貝塚（94）は、竪穴住居跡12軒・フラスコ状土坑などが検出された縄文時代中期前葉の貝塚で、八郎潟沿岸という立地条件を生かして魚介類（チリメンカワニナ・アカニシ・ヤマトシジミ・チョウセンハマグリ・コタマガイ・コイ・ウグイ・フナ・マサバ・マアジ・スズキ・クロダイ・コチ・ヒラメ・ハリセンボン科の一種）や鳥獣（キジ・ガンカモ科の一種・ムササビ・ノウサギ・タヌキ・イヌ・ニホンシカ・イノシシ・ツキノワグマ・アシカ）・堅果類（クリ・ドングリ）を採取し、食糧としていたことが判明した。また、１軒の竪穴住居跡からは、東北南半の土器（大木７ａ式）・東北北半の土器（円筒上層ａ式）・北陸の土器（新崎式）が共伴出土している。

館下Ⅰ遺跡（97）では、縄文時代中期から後期初頭の竪穴住居跡34軒とフラスコ状土坑15基等が検出されている。

上ノ山遺跡（45）からは、新潟県を中心とした分布圏をもつ馬高式土器が１点採集されている。

柏子所貝塚（41）は、縄文時代晩期前半の貝塚で、鹹水域に生息するコタマガイ・サルボウ・ベンケイガイ・アカニシ・イタボガキ・淡水域のカワニナ・イシガイ、半鹹半淡のヤマトシジミの貝殻が出土したが、コタマガイが過半数を占め、次いでベンケイガイ・ヤマトシジミであることから、日本海側には珍しい主鹹貝塚であることが判明した。また、スズキ・クロダイ・オットセイ・ウサギ・シカ・イノシシ・クマなどの魚・鳥・獣類やクリ・クルミなどの堅果類も出土しており、貝塚を形成させた人々の食糧が判明した。それとともに、土壙に埋葬された８体の人骨が発見されたが、１体（女性）を除き、西北頭位で埋葬されていること、抜歯や死者の頭部に赤色顔料をかける風習のあったことも判明した。

麻生（上ノ山）遺跡（80）は、二ツ井町内での「発掘」が確認できる最初のものである。秋田県庁から明治30年12月15日付で東京帝国大学あてに『秋田県北秋田郡七座村麻生遺跡調査報告』として照会書が提出されている。それによると「（前略）今ヲ距ル凡十年前ニ素面及騎馬土偶出テタリト云フ素面ノ分ハ今楢村人ニ保存シアルモ騎馬ノ分ハ所在不明ナリ（中略）然ルニ本年八月中人類学ニ志アル某ハ該地ニ至リ発掘ヲ試ミタル果シテ土器石器ノ類数点品ヲ発見セリ是レヨリ村人競フテ発掘ヲ試ミ（中略）其発見セル品類ハ殆ント千個ニ近シ（以下略）」と記載されている。また同年12月初めに実地踏査に赴いた、大野延太郎氏の『羽後国北秋田郡七座村大字麻生上ノ山遺跡取調報告（第１回）』には、その出土遺物の種類を

土器　土偶、土製仮面形、椀、皿、壺、高杯、鉢、急須形、香炉形、瓶、徳利形

石器　石剣、岩盤、石斧、（磨打）独鈷石、曲玉、臼玉、諸古形玉、石皿、石鏃、石匙、石錐

と述べ、「（略）帰京後モ来信ニヨレバ雪降ルニモ拘ハラズ盛ニ発掘セリトノ報アリ当分ハ無尽宝庫ト云ベシ此ノ遺物ヲ多ク所有セル人ハ（中略）等ノ諸氏ニシテ甚ダ珍蔵セリ亦タ諸方ヘモ幾分カ散乱セリ小笠原氏（小笠原為吉……筆者注）ヨリハ大学ヘ献納ヲ申出デラレ已ニ到着シタレバ学術上有益ノ材料ニシテ永ク教室ニ保存セラル亦同地方ノ名誉ト云ベシ（後略）」と当時の東京帝国大学の姿勢・考え方の一端を披露している。現在、麻生出土とされ、国の重要文化財に指定されている土製仮面は、この時に献納されたものの１つである。なお、この「麻生遺跡」については、「上ノ山遺跡」の別称もある。

明治時代末期から昭和時代初めにかけて、故鳥井竜蔵博士などとも親交があり、地元の遺跡を調査し、遺物を丹念に描写した故吉田吉助氏も「上ノ山遺跡」として記録を残している。

第４図　　周辺の遺跡

烏野遺跡（54）は、縄文時代前期から晩期にかけての遺跡であるが、麻生（上ノ山）遺跡同様「発掘」はされているが、学術的な調査は行われていなかった。

弥生時代の遺跡として、能代市の真壁地遺跡（98）・杉沢野（杉沢台）遺跡（21）・金山館（金山チャシ）（26）・トドメキ遺跡（25）・此掛沢Ⅱ遺跡（88）・寒川Ⅰ遺跡（92）、八竜町の家の上遺跡（95）があげられるが、いずれも土器片が出土しているにすぎない。

奈良・平安時代の所謂古代の遺跡として発掘調査されているのは、八森町の土井遺跡（3）、峰浜村の城土手遺跡（99）・中田表遺跡（11）、能代市の中台遺跡（30）・竹生遺跡（15）・重兵衛台Ⅰ遺跡（13）・重兵衛台Ⅱ遺跡（14）・トドメキ遺跡（25）・ユズリ葉遺跡（32）・腹鞍の沢遺跡（42）・真壁地遺跡（98）・金山館（金山チャシ）（26）・サシトリ台遺跡（22）・杉沢台遺跡（21）・大館遺跡（43）・上ノ山遺跡（89）・寒川Ⅰ遺跡（91）・寒川Ⅱ遺跡（92）・十二林遺跡（100）・福田遺跡（93）などである。

このうち、十二林遺跡（100）は須恵器窯・土器焼成遺構・製鉄炉・鍛冶関連遺構・炭窯などが竪穴住居跡・掘立柱建物跡と共に検出されている。福田遺跡（93）も竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出されている。十二林遺跡と福田遺跡は、集落あるいは集落の一部を区画する施設として機能する溝や柱列が遺構群の周囲に配置されており、板塀や柵列が想定されていることから、中世の集落あるいは城館の区画施設との関連で重要である。

竹生遺跡（15）・中台遺跡（30）・寒川Ⅱ遺跡（92）・十二林遺跡（100）では、製鉄炉が検出されている。鉄生産の最終目的はその製品化であり、製鉄炉を構築して鉄を生産し製品化しなければならない、あるいは製品化しても見合うだけの需要がこの地方にあったことを示している。古代律令体制下において出羽側最北の秋田郡率浦郡より更に北方にあり、郡郷制が設定されることのなかったこの地方に鉄生産技術が導入され、製鉄が操業していることは古代におけるこの地方の社会構造を究明する上で重要であろう。

また、発掘調査された遺跡のほとんどから竪穴住居跡が検出されているが、竪穴住居の出入口が確認されたのは、土井遺跡（3）の2軒のみである。

土井遺跡（3）と上ノ山Ⅱ遺跡（89）では、中国（中華人民共和国）と北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）との国境付近の白頭山を噴出源とする降下火山灰（白頭山・苫小牧火山灰）が竪穴住居跡内に堆積しているのが確認されている。この火山灰の噴出年代については、10世紀から12世紀まで諸説があるが広域に降下した火山灰は、遺跡相互の関係を把握する大きな手があるがかりとなる。

古代の『日本書紀』や『続日本紀』、『日本三代実録』などの文献に、米代川河口付近を指すと考えられる地名が記載されている。『日本書紀』斉明天皇四年四月の条の阿部比羅夫北航記録に見える「淳代」、『続日本紀』宝亀二年六月二七日の条の「野代湊」、『日本三代実録』

元慶二年四月二八日の条の「隘口野代営」などである。「隘口野代営」の位置について地元ではトドメキ遺跡（25）や桧山城（78）、大館遺跡（43）が有力な擬定地とされている。大館遺跡（43）では、空濠・柵列・土塁・竪穴住居跡等が検出されたが「野代営」跡であるとの結論は得られなかった。

鎌倉時代から室町時代にかけての所謂中世には、「館跡」と呼ばれる遺跡が多い。米代川右岸には、二ツ井町大川口館（62）、能代市白岩館（38）・下上野館（37）・久喜沢チャシ（31）・古館（29）・城山館（27）・金山館（金山チャシ）（26）が、左岸には二ツ井町竜毛沢館（63）・塚の岱館（53）・館の平館（51）・館の岱館（50）、能代市芹川館（49）・赤館（47）・比丘尼館（48）・谷地館（44）・大館（43・46）が築造されている。また、米代川支流にも多くの館跡が築造されている。阿仁川流域では、二ツ井町古館（81）、合川町杉館（83）・西根田館（84）などが、藤琴川流域では二ツ井町町館（69）・市館（70）、藤里町荒川館（71）・嘉平岱館（72）・院内岱館（73）・小比内館（74）・小高石館（75）・上湯の沢館（76）などが、種梅川流域では、二ツ井町チャクシ館（61）・小沼の館（59）・加代神館（60）・上樋口館（58）・筒ケ沢館（56）・御前坂館（57）が、常盤川流域では能代市上寂野館（36）・大館（33）・上寂野チャシ（35）・馬音館（34）が、桧山川流域では能代市二又館（87）・三岳館（86）・茶臼館（77）・桧山城（78）などが確認されている。この他、竹生川流域〔能代市平泉館（17）・外荒巻館（18）、峰浜村作館（19）・古館（20）〕、塙川流域〔峰浜村中館（８）・大館（９）・白山館（10）〕、水沢川流域〔峰浜村高間館（６）・下大台館（７）・黒平館（５）・蝦夷館（４）〕にも所在している。

二ツ井町の米白橋付近〔大川口館（62）あたり〕から能代市扇田付近〔大館（43）のあたり〕にかけての米代川左岸に館跡が多く築造されているのは、広い段丘面が連続し、前面に米代川の沖積地が広がることが一大要因であろう。また、元慶２（878）年に米代川流域等12カ村の住民が秋田城司の悪政に反抗・蜂起し、秋田城等を焼き、秋田川（雄物川）以北の独立を要求した所謂元慶の乱時に、鎮守府将軍小野春風らが陸奥側から鹿角に入り、米代川沿いに豪族を説得しながら南下していることから、古代には既に交通路が拓けていたと考えられる。この交通路が近世に整備されて羽州街道となったと思われるが、この交通路が館跡群のすぐ近くを通っていることにも留意する必要があろう。

米代川下流域・能代平野縁辺部に築造されている館跡は、桧山安東氏との関わりを重視する文献史学的研究が主に進められているが、考古学的成果も考慮する必要があろう。

館跡以外の中世遺跡として、峰浜村中田表遺跡（11）が注目される。古代から中世にかけての「村」の変遷をたどることができる農民集落遺跡で、掘立柱建物跡25軒・井戸跡10基が検出され、青磁・白磁・須恵器系中世陶器等が出土した。館跡などからも少量ではあるが須恵器系

中世陶器や陶磁器類が出土しており、能代市平泉館（17）付近から須恵器系中世陶器の浄瓶（陶製水瓶として県指定有形文化財）が、能代市白山遺跡（40）から須恵器系中世陶器の擂鉢が発見されている。二ツ井町大倉（65）でも須恵器系中世陶器の四耳壺が発見されている。

須恵器系中世陶器は、北陸地方などからの移入品が多数を占めるが、二ツ井町エヒバチ長根窯跡（55）は、現在のところ日本最北の須恵器系中世陶器焼成窯であり、片口鉢・四耳壺・壺・甕・浄瓶・小皿・椀・蓋などが生産されている。この窯跡を維持するためには、有力な支配者・経済基盤が存在したと思われる。ほぼ同時期に山岳仏教（真言密教）の盛地であった二ツ井町高岩山山麓の市館（70）付近から出土した片口鉢とした経甕（県指定有形文化財）や四耳壺・五輪塔などから、中世前期の状況をかいま見ることができる。

時代は不明であるが、米代川のシラス（軽石）を伴った大洪水のためシラスに埋没した建物があり、鷹巣町小勝田（82）は有名であるが二ツ井町天神（79）でも掘り出された記録がある。

天正19（1591）年の『出羽国秋田郡知行御朱印写』には、「一弐百弐拾七石九斗五升九合せり川村、里うけ沢村」「一百参拾六石参合龍毛村」と記載されているのがみえる。

竜毛沢館の経済基盤となった集落が両者か、あるいは一方か、またその位置がどこか比定できないが、竜毛沢館に一番近い切石集落には、「竜毛沢の奥から移り住んだ」との口承がある。竜毛沢の中に集落が営まれていたことを示しているが、これは米代川の沖積低地が繰り返される氾濫のため、定住・生産に不適であったことと、広く開析された沢内を開墾することにより水田を造成できたことがその理由であろう。

この「龍毛村」「里うけ沢村」の比定地、口承の切石集落の故地、竜毛沢出口両側に位置する竜毛沢館跡との関係は不詳である。

参考文献

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図』 1976（昭和51）年

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年

秋田県教育委員会　『北部羽州街道』　歴史の道調査報告書Ⅵ・秋田県文化財調査報告書第132集　1985（昭和60）年

秋田県教育委員会　『土井遺跡発掘調査報告書――山村基幹農道整備事業八森地区埋蔵文化財発掘調査――』秋田県文化財調査報告書第111集 1984（昭和59）年

秋田県教育委員会　『大内坂Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第51集　1978（昭和53）年

秋田県教育委員会　『中台遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第50集　1978（昭和53）年

秋田県教育委員会　『ユズリ葉遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第52集　1978（昭和53）年

秋田県教育委員会　『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第62集　1979（昭和54）年

秋田県教育委員会　『杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第83集　1981（昭和56）年

秋田県教育委員会　『中田表遺跡・重兵衛台Ⅰ遺跡・重兵衛台Ⅱ遺跡・根洗場遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第74集　1980（昭和55）年

秋田県教育委員会　『腹鞁の沢遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第97集　1982（昭和57）年

秋田県教育委員会　『城土手遺跡緊急発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第32集　1974（昭和49）年

秋田県教育委員会　『真壁地遺跡・蟻ノ台遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第102集　1983（昭和58）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第103集　1983（昭和58）年

秋田県教育委員会　『此掛沢Ⅱ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第114集　1984（昭和59）年

秋田県教育委員会　『上ノ山遺跡第２次発掘調査報告書――国営能代開拓建設事業埋蔵文化財発掘調査――』　秋田県文化財調査報告書第137集　1986（昭和61）年

秋田県教育委員会　『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書――寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡――』　秋田県文化財調査報告書第167集　1988（昭和63）年

能代市教育委員会　『大館遺跡発掘調査報告書』　1978（昭和53）年

秋田県立鷹巣農林高等学校郷土史研究部　『能代市金山チャシ発掘報告』　秋田県立鷹巣農林高等学校郷土史研究部報告第１冊　1957（昭和32）年

能代市教育委員会　『金山館発掘調査報告書』　1986（昭和61）年

大槻久馬　「能代市周辺の遺跡について」『秋田考古学』第32号　秋田考古学協会　1975（昭和50）年

八竜町教育委員会　『萱刈沢貝塚』　1979（昭和54）年

二ツ井町町史編さん委員会　『二ツ井町史』　1977（昭和52）年

大和久震平　『柏子所貝塚第２次・第３次発掘調査報告書』　秋田県教育委員会・能代市教育委員会　1966（昭和41）年

冨樫泰時　『秋田』　日本の古代遺跡24　保育社　1985（昭和60）年

秋田県　『秋田県史　　古代中世資料編』　1961（昭和36）年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

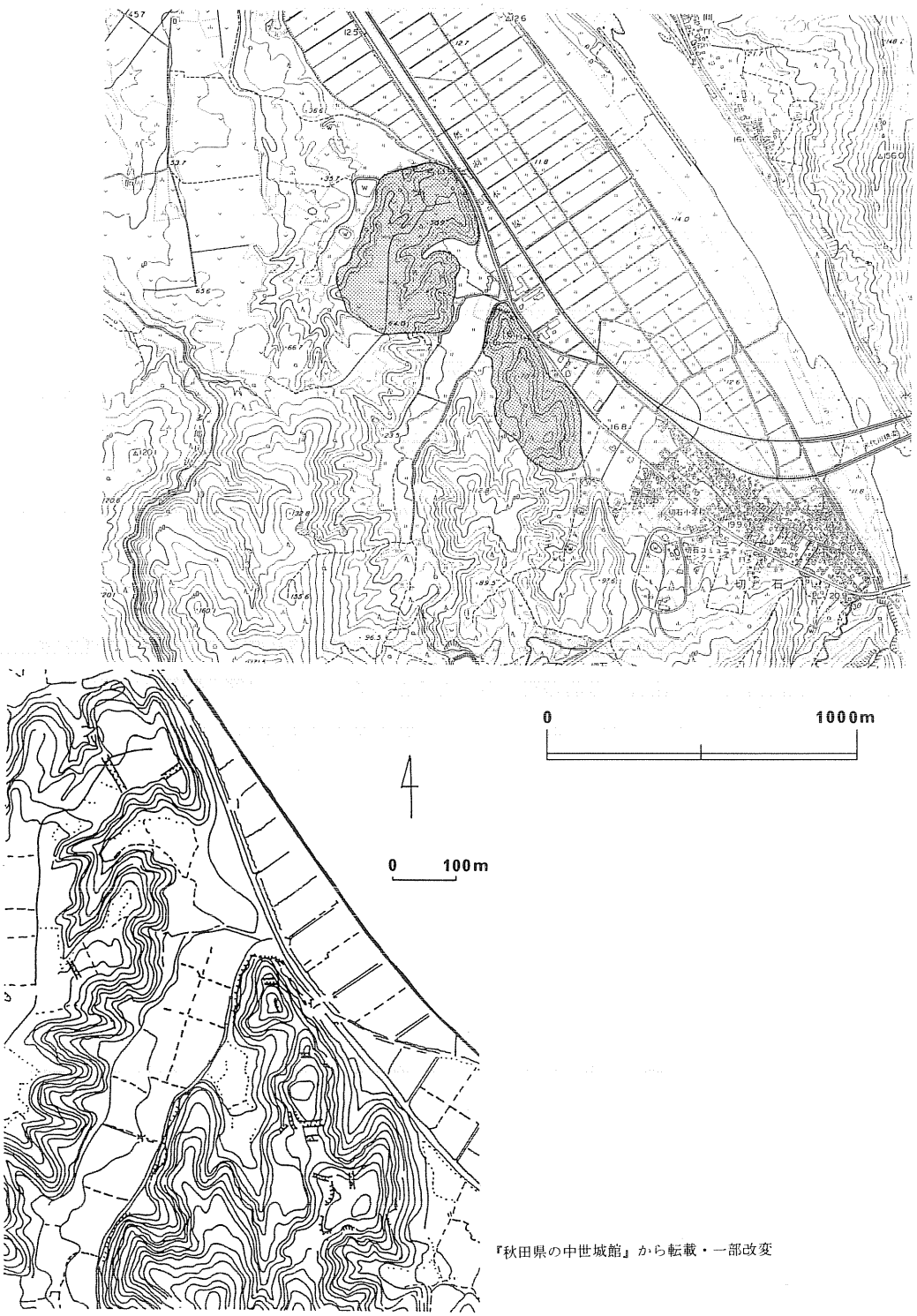
昭和61年度に実施した範囲確認調査の結果から、バイパス工事区域内における遺跡範囲は、12,000㎡となったが、『秋田県の中世城館』には、つぎのように説明されている。

「竜毛沢館　館西端からは藩政時代の羽州街道がそのまま残り、烏坂・烏野を通り駒形入口に及び、今も農道山道として利用されている。館は竜毛沢の狭い水田を挟み東部山頂と西部段丘台地部に認められ、東部は水田との比高58ｍ、西部は48ｍである。館の主な構築は空堀であり、東部に４条、西部に４条付設されている。東部付設の空堀は長さ12ｍ、10ｍ、27ｍ、10ｍを計り、ともに稜線を切り通している。西部は長さ９ｍ、32ｍ、60ｍ、33ｍを計り、掘り下げられた土が土塁状を呈している箇所もあり、平坦面を斜面から斜面にかけて切り通している。また所々に異形の掘り込みも見られる。館への通路とみられる。ところが頂部近くで落差をつけた掘り込みで終結している。東部館に太平山と高丘山の小祠があり珠洲陶片が表採されている。

館主はさだかでないが羽陰温故誌に、切石に額田淡路守が居住したことが記載されている。また切石の兜神社の御神体は、藤原泰衡の兜と伝承されている。」（第５図）

竜毛沢館跡は、水田となっている竜毛沢を挟んで南東側（『秋田県の中世城館』での東部）と北西側（同書の西部）にまたがっているとされ、『二ッ井町史』には、北西側は竜毛沢Ⅰ遺跡、南東側を竜毛沢Ⅱ遺跡として記載している。今回の調査対象区域は、竜毛沢Ⅰ遺跡として記載された地区である。地元民は、両台地の崩壊部分（露頭）の土色から、竜毛沢Ⅰ遺跡を「赤っぱげ」、竜毛沢Ⅱ遺跡を「白っぱげ」と呼んでいる。この土色の違いは、台地構成層の差異に起因すると思われる。

調査対象区域の台地上面は、視覚的には平坦であるが、南側から北側に緩やかに傾斜しており、これは現在も進行中の撓曲運動の影響であるという。調査区域内の現地形を観察すると、２ケ所に空堀があり、西側の空堀の両側には土塁状盛土が認められる。土地所有者の話では、西側の空堀は深く、両側の土塁状盛土も相当高かったが、終戦後（昭和27・28年頃）の開墾時に盛土を崩し、空堀を埋めたという。また、他の土地所有者は、畑として開墾中に多くの遺物が出土し、その中に卸し目があり半分に割れたエヒバチ（擂鉢）も２個分あったが、西側の傾斜地に捨てたとの事であった。後年、西側の傾斜地で山崩れが起こったため、捨てられた遺物は再び埋没してしまったとの事であった。東側（国道・米代川側）の２ケ所で、長さ30ｍ、下幅3.3ｍ、高さ1.7ｍの土塁状盛土が存在するが、この盛土は国道の雪崩防止用土堤であるとい



『秋田県の中世城館』から転載・一部改変

第５図　「竜毛沢館」の範囲と現況図

う教示を得た。国道側も大きく崩落して急傾斜である。

調査区域には、マツ・サクラ・ナラ・コハゼ・クリなどの自然植生樹、ススキ・ササなどの草木のほか、スギ・キリ・クリの人工林が観察された。腐葉土（腐植土）が主体の表土は戦後の一時期食糧増産のため耕作されたことがあり、人工林の培地は畑の畝がそのまま残っており、極めて軟質である。

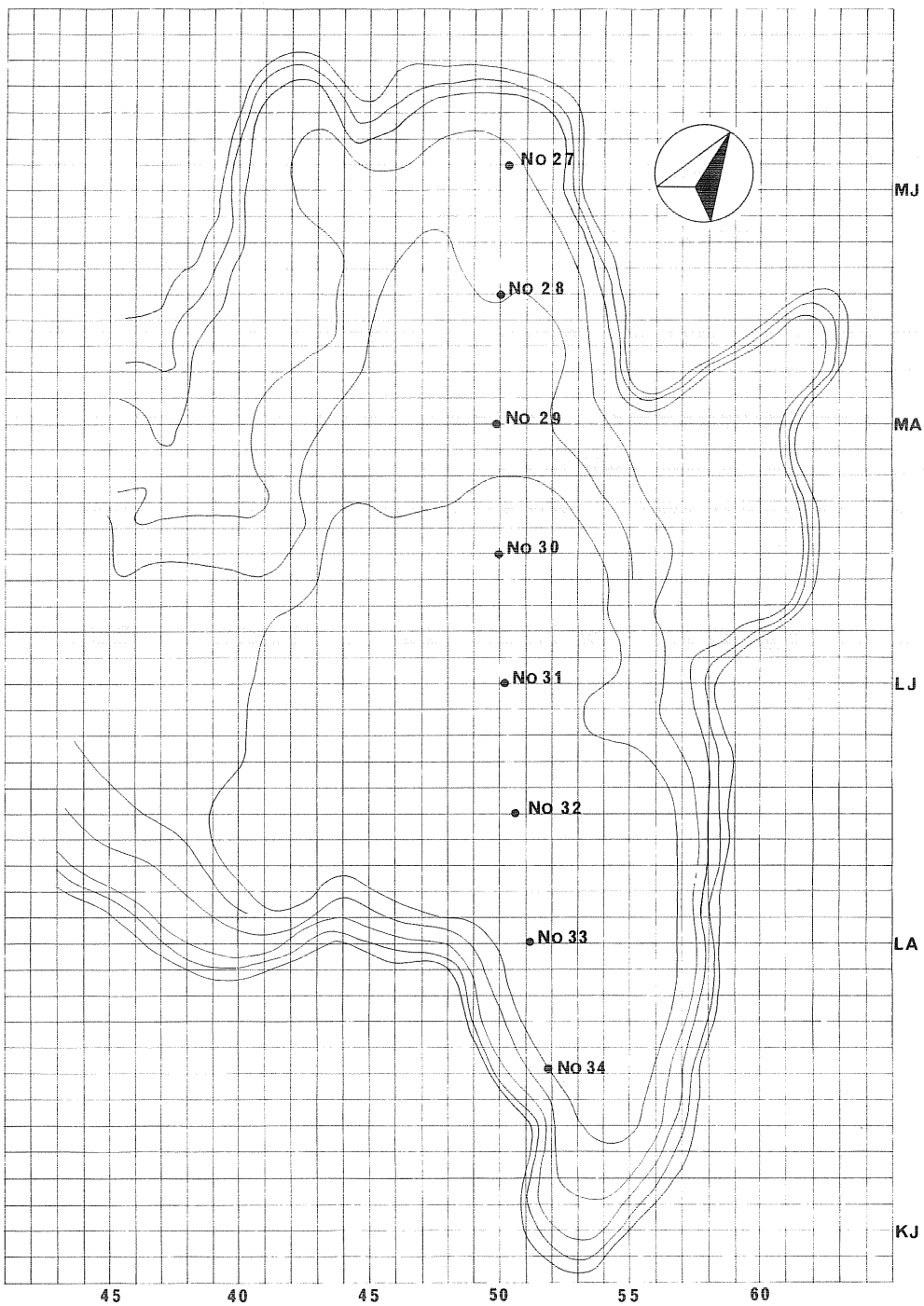
第２節　調査区の設定

昭和61年の範囲確認調査により、遺跡の範囲とその内容が明らかになったことから、遺跡内に建設省東北建設局能代工事事務所が20ｍ毎に打設した中心杭のうち、№29と№30の杭を活用し、これの杭を結ぶ線を基準線とし、№29杭を基点とする４ｍ×４ｍの方眼に杭を打設する計画を立てた。ところが№29杭を基準杭とすることが出来ないことがわかったため、急拠№28と№30の２本を結ぶ線を基準線とし、№30を基点とし４ｍ×４ｍの方眼に杭を調査対象区全域に打設した（第６図）。

№30杭から20ｍ毎に、方眼杭と共用する頭部を10㎝幅で赤色に塗色したレベル原点杭（規格９㎝×９㎝×90㎝）を打設し、水準点から標高を誘導した。この杭には、レベル数値とグリッド（方眼）名を併記した。他の方眼杭は、4.5㎝×4.5㎝×60㎝の規格の杭で、頭部を10㎝幅で白色に塗色し、グリッド（方眼）名を記入した。

グリッド（方眼）名は、№30の基準点をＭＡ50とし、みかけの南北方向にアルファベット、東西方向にアラビア数字を付すことにした。南北方向では、ＭＡ50より北側に順次ＭＢ・ＭＣ……ＭＮとし、南側には、ＴからＡまで逆順にＬを冠してＬＴ……ＬＡとし、ＬＡの南側は、Ｔから逆順に、Ｋを冠してＫＴ……ＫＩまで付した。東西方向では、ＭＡ50より東側には１ずつ加数し、西側は減数することにした。アルファベットとアラビア数字の組み合わせにより、各方眼杭の名称が付され、各グリッド（方眼）は、みかけの南東隅の杭に付された名称で呼称された。

この調査区の№28と№30を結ぶ基準線は、磁北から西側に32°4′57″偏している。


No 27
No 28
No 29
No 30
No 31
No 32
No 33
No 34
MJ
MA
LJ
LA
KJ
45
40
45
50
55
60

第６図　　グリッド配置図

第３節　調査の経過

発掘調査は５月９日からの予定であったが、その準備作業のため５月６日に現地入りした。

５月６日から11日まで駐車場・現場事務所・作業員休憩所・機材保管所・トイレなどを設置した。

５月11日午後に、二ツ井町福祉会館で作業員希望者に労働条件・作業上の注意・調査の方法等を説明する作業員説明会を開催した。

５月12日に、県埋蔵文化財センターから４トントラックで発掘資材・測量器材等を搬入した。発掘現場は、現水田面からの比高35ｍの台地上にあり、排土を調査区域外に移動することが不可能であることから、建設省が打設した中心杭№30を境界として南・北に分け、８月上旬までは北側区域（Ａ地区と呼称）を調査し、南側区域（Ｂ地区と呼称）に排土を運搬・盛土することにした。しかし、伐採木の枝葉等が大量に残されており、グリッド設定用杭の打設もままならない状況のため、Ａ・Ｂ両地区の枝葉の片づけを５月24日まで継続した。この過程で、Ａ地区だけで切口直径20～60㎝の切株が600本を越えることがわかった。

現場に、器材保管用プレハブを建設したが、現場で使用するトイレはバキュームカーが登れないことから、素掘り穴に小屋架けすることになった。二ツ井町教育委員会の雄鹿教育長、畠山社会教育課長、宮越社会教育係長が来跡した。

５月24日にようやくＡ地区のグリッド杭の打設を開始したが、当初建設省打設の中心杭№29と№30を結ぶ線を基準線とする計画であったが、№29杭が立木伐採時に折損し、移動されていたことが判明したので、№28に変更し、№28と№30を結ぶ線を基準線としてグリッドを設定することにし、５月27日まで打設作業を行い、レベル原点の移動も完了した。

５月25日から、Ａ地区東側にある雪崩防止用土堤の撤去作業を開始した。Ｂ地区の雪崩防止用土堤についても、夏季にスズメ蜂などの営巣が予想されることから、同時に撤去することにした。Ａ地区の土堤は、黒色土（腐葉土主体）の単層積みで、縄文土器片・石器・剝片が若干出土した。Ｂ地区の土堤は、黒色土（腐葉土主体）と黄橙色粘質土（地山ローム層）の互層積みになっており、黒色土中からは縄文土器片と石鏃・石匙・石錘などの縄文時代の石器・剝片が多く出土しているが、黄橙色粘質土中からは、粘質土が固く粘着した剝片が多く、石器も１点採集された。この石器と剝片は、旧石器時代の所産で、既に原位置を離れた状態での出土であるが、盛土用の土取り穴が土堤の西側に凹地として確認できることから、原位置のおよその位置は推定できた。

二ツ井町からは、旧石器時代ののナイフ形石器が１点採集されているが、遺跡から出土したのは初めてのことだった。

５月26日午後に県教育庁文化課冨樫泰時主任学芸主事と、池田学芸主事が来跡した。５月30日からＡ地区の表土（第Ⅰ層）除去（粗掘り）を行うが、北東側にある沢に東面する台地の縁辺部に浅く溝状の落ち込みが巡っていたが、用途と掘り込み時期等については、旧土地所有者もわからないとのことであった。作業は北西側から行うこととし、ベルトコンベアーを６台ずつ２連設置し、４台の８輪土砂運搬車でＢ地区に設けた排土集積場所まで運搬・盛土した。表土が比較的薄く、腐葉土主体の黒土であるため、スコップ等への粘着も少なく、作業は順調に進捗した。二ツ井町の七尾町長以下助役・総務課長らが来跡し、作業員を激励した。二ツ井町公民館では生涯学習の教材として使用するため、竜毛沢館跡の発掘調査の過程を順次ビデオ撮影したい旨連絡があった。船木学芸主事が27日で現場を離れた。

６月に入り、粗掘りした区域から石器・剝片、須恵器系中世陶器の破片が多く出土したが、戦後の開墾と耕作により原位置を離れているものが多いので、各グリッドの第Ⅰ層中出土として収納した。

また、米代川とその支流から水を運搬し、事務所棟１階の整理室で出土遺物の洗浄を開始した。

６月７日には、成田廣造県議会教育公安委員長及び二ツ井町議会議員が来跡した。成田委員長からは、鎌倉期に山岳仏教の盛地であった高岩山の遺跡等についてご教示いただいた。

この頃降雨多く、作業は停滞したが、作業員の中から選抜した実測要員の育成と実習を繰り返した。

６月中旬から第Ⅱ層（暗褐色腐葉土）を掘り下げて地山面直上での遺構プラン確認作業を開始した。北東側の雪崩防止用土堤を撤去後、埋没しきらない凹みを確認したので、土層観察用ベルトを２本設定し掘り下げた。薬研状を呈する空堀であるが、地山面が段状を呈することから、この部分について検討を要した。この凹みは、雪崩防止用の土堤の直下であり、かなり人工的に埋め戻されていることと、土堤築造の際の土取り穴と誤認しやすいことから『中世城館』の調査と範囲確認調査でも確認されなかった空堀である。ＳＤ01と遺構番号を付し、この空堀により小さな郭が形成されていることから、この空堀の北側の郭を第Ⅱ郭とした（調査区の大部分を占める郭を第Ⅰ郭、Ｂ地区の南東側に空堀で区画されている郭を第Ⅲ郭と呼称することにした）。

前半の連日降雨から一転して晴天と強風が続き、調査区全体が過乾燥と砂ぼこりのため、遺構プラン確認が困難を極めたが、土坑状落ち込みや、柱穴様落ち込みプランが検出され始めた。

現地形で北東側の沢に平行するように台地縁辺部を巡る浅い溝状落ち込みは、地山面直上でのプラン確認の結果、台地縁辺部の地形に沿うように途切れたり、あるいは二重（二列）になりながらも巡っていることが判明した。柵列（板塀）になるかどうかこの段階では判断できな

かった。

６月27日に二ツ井小学校６年全員が見学に来跡した。午前中久し振りに強風雨があり、遺構プランがかなり明確に認識できるようになり、竪穴住居跡らしい円形プランや円形土坑プラン・柱穴プラン等が次々に確認された。能代・山本地方の古代・中世史を研究し、中世城館にも詳しい古内龍夫県立能代高校教諭が来跡され、御教示いただいた。

洗浄中の遺物の中に、蓮弁文青磁碗破片・磨製石斧片・石錘・石匙等が見られ、青磁碗片の出土には、竜毛沢館の年代推定の１つの試料となるものであった。

ＳＤ01空堀と隣接する段状地形は、掘り下げが完了し、その土層体積状況を観察した結果、空堀の掘り替えではないか、つまり、ＳＤ01空堀は２時期にわたるもので、段状地形に見えるのが、古い空堀ではないかと思われた。

７月６日までに、一応プラン確認が済み、竪穴住居跡・竪穴建物跡９軒、土坑状落ち込み27基、空堀２条、溝状遺構・柵列（板塀）16条、柱穴多数が検出された。この柱穴は、掘立柱建物跡の柱穴と考えられるので、古建築の研究者から助言をいただくことにした。遺物の洗浄とともに遺物への註記も開始した。作業工程上の関係から、作業員の約半数で粗掘りを開始した。

７月11日から竪穴住居跡・竪穴建物跡の精査を開始した。ＳＩ02・03・08の３軒の竪穴住居跡は、いずれも上部が攪乱・削平されており、また木根による床面の破壊も大きく、遺存状態は不良であった。能登谷嘱託が本日より調査に加わった。７月12日から竪穴住居跡・土坑・柱穴等の精査（半截掘り下げ）を次々と開始する。

７月中旬には、Ａ地区の全域で遺構精査に入るが、柱穴等遺構数が予想以上であることと、実測要員の不足から、８月上旬にＡ地区の調査を完了することは不可能と判断し、遺構の1/20の縮尺の平面実測と５㎝コンターの地形測量は、測量業者に委託することにした。

第Ⅱ郭に検出されたＳＩ02竪穴住居跡には、２基のＴ-Pitが複合しているが、Ｔ-PitがＳＩ02竪穴住居跡の埋土を掘り込んでいることからＴ-Pitが新しいことがわかった。また、このＴ-Pit２基は、白色の粘質土（地山層）であたかも埋め戻された状況を呈していた。他の竪穴住居跡・土坑にも同様の埋没状況があり、館築造の際に埋没しきらない遺構に対し、平坦面創出のため削平と埋め戻しが行われたのではないかと思われた。

７月19日に切石小学校全校生徒が見学に来跡した。７月25日から遺構プランの再精査を行った。これは、地山面と同色の埋土を有する土坑・柱穴が多いので見落としの可能性があったためである。多くの柱穴が確認された。能代市在住の中世史研究者の若松鉄四郎・戸松勇治・村木悦也の３氏が見学に来跡した。村木氏からは、『秋田家文書』の中に「りうけ村」のあることなどを御教示いただき、後日関係資料もいただいた。

Ｐ440柱穴内から銅銭４枚が出土したが、錆のため銭名は不明であった。第Ⅲ郭の粗掘りを

開始した。

８月上旬に空中写真測量を実施することが決まり、７月27日に測量技術者と現場打ち合わせを行った。Ａ地区の柱穴（約2,500カ所）に柱穴番号を付し、その位置を1/20平面図に略記し、その出土遺物は、各柱穴毎に番号を付し、平面位置・レベル実測後に収納した。

ＭＢ41グリッド内・外で大量の鉄滓が出土しており、過乾燥のため、プランがよくわからず、大量に散水してプランの確認をしたところ製鉄炉であることが判明した。この製鉄炉の近くに炭化物が大量に堆積している土坑があり、製鉄炉で使用する炭を焼いた炭焼き窯の可能性も考えられた。

７月28日にＢ地区で第Ⅰ層の粗掘り中、トランシェ様石器が出土した。７月29日には、二ツ井町転入教員研修会と切石松寿会（老人クラブ）が見学に来跡した。

７月30日には、東北地方北半部の中世城館と中世陶磁器の研究者である工藤清泰青森県浪岡町歴史資料館主事と坂本洋一青森県埋蔵文化財調査センター主事が来跡され、中世の遺物の極めて僅少なのに首をかしげなげらも立地条件・館遺構に大いに注目されていた。

８月１日には、宮城学院女子大学の工藤雅樹教授が来跡され、東北・北海道の館とチャシの構造・立地条件等との比較も交え、米代川流域の中世城館について御教示いただいた。

竪穴住居跡・竪穴建物跡、土器埋設遺構、土坑、柵列（板塀）等の写真撮影・実測などを行った。

８月３日に空中写真測量用の対空標識を打設し、８月４日から８月７日までバルーンによる写真測量を行った。

８月８日には、二ツ井町教育委員会による遺跡見学会が午前９時から11時すぎまであり、午後１時から３時まで山本郡山本町公民館による中学１年主体の見学会が行われた。

８月10日に古建築を研究している八戸工業大学の高島成侑助教授が来跡され、掘立柱建物跡について御教示いただいた。

８月23日から31日まで業者に委託して、Ｂ地区に盛り上げた排土の移動作業が行われた。

８月24日には、秋田県内の古代製鉄炉を研究している熊谷太郎秋田商業高校教諭が来跡され、製鉄炉と炭焼き窯、出土遺物について御教示いただいた。

９月１日からＢ地区の本格的な粗掘り作業を行うが、南側斜面の刈り払いと枝葉の移動も伴った。既に、粗掘りの終了している地区では、プラン確認作業・遺構精査を進めた。

９月５日から11日までＢ地区全域にグリッド杭を打設し、レベル原点も設置した。９月５日には、県教育長文化課の課長補佐らが来跡した。この頃から降雨が多くなり、現場作業が停滞するが、プレハブ内にて遺物の接合・分類などの整理作業を開始する。９月９日には第Ⅰ層の粗掘りがほぼ終了した。岩手県立博物館の佐々木清文氏らが来跡し、製鉄炉について御教示い

ただいた。

９月14日には、第Ⅰ郭東側のＳＤ03空堀に平行して調査区域内にＳＤ03空堀より古い空堀が存在することがわかり、ＳＤ04と命名する。Ｂ地区全域で遺構プラン確認、遺物収納等が進捗した。

９月19日に隣町の合川町で石油試掘している通産省工業技術院地質調査所燃料部石油課と技術部化学課の技官が来跡され、このあたりの地形・地質構造等について御教示いただいた。

９月26日には、ＳＤ04空堀の東側に平行し、粘質土で埋められた溝〔柵列（板塀）〕を検出した。また、ＳＤ04空堀には土橋が存在することが確認され、ＳＤ04空堀の西側、ＳＤ03空堀との間にも柵列（板塀）が存在することがわかった。土層の堆積状況の観察から、２列の柵列が廃棄されたあと、ＳＤ04空堀が掘られ、その後ＳＤ03空堀が掘られていることがわかった。２列の柵列は、ＳＤ03とＳＤ04空堀との間に存在する柵列の方が古いことがわかった。この頃また降雨が続き、作業が停滞した。

10月３日には、火災にあったＳＩ103竪穴住居跡の張り出し部から炭化した穀類（主としてそばの実）が大量に出土した。床面に横たわって３枚検出された炭化板は、幅40cm程あるが、直径30cm位の穴があけられていた。

Ｂ地区も、Ａ地区同様遺構の多いことと、地形測量を行うための人員・期間が不足なため、空中写真測量を実施する準備を進めた。

10月11日に対空標識等を設置し、10月15日までヘリコプターによる空中写真測量を行った。

10月13日に製鉄遺跡を研究している千葉県の穴澤義功氏が来跡され、本遺跡の製鉄炉が精錬と鍛冶を行った可能性があることや、鉄滓等出土遺物の分類方法等を御教示いただいた。この日は秋一番の寒さと強風で、白神山地には冠雪が、また現場にはあられが降り続いた。

10月15日の午前中で空中測量が終了し、午後２時から県埋蔵文化財センター主催の現地説明会を開催し、130名の参加を得た。説明会のあと、村越潔弘前大学教育学部教授、中川重紀岩手県埋蔵文化財センター専門調査員らと館跡その他について意見交換することができた。

10月21日には、三辻利一奈良教育大学教授が来跡され、須恵器系中世陶器の胎土分析による産地同定について御教示いただいた。

10月24日から、第Ⅲ郭の旧石器時代遺物の出土した地区を中心に確認作業を開始した。しかし、11月５日まで、旧石器時代の遺物の探査を行ったが、遺物・遺構とも確認できなかった。能登谷嘱託現場を離れる。11月７日から図面のチェックと補足作業等の他、器材の洗浄・梱包を行った。11月10・11日吹雪の中、発掘器材と遺物を大型トラックで県埋蔵文化財センターへ搬出した。11月14日にプレハブなどを解体し、11月15日みぞれの中、国道から駐車道へ至る取り付け道路を撤去し、発掘調査を終了した。

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構と遺物

１　旧石器時代

旧石器時代の遺物は第Ⅲ郭のほぼ中央に昭和30年代に築造した国道７号の雪崩防止用土堤を撤去中に土堤盛土中から出土した。土堤の盛土は、南北30ｍ、基底幅3.5ｍ、高さ1.7ｍで地山土と黒色土の互層積みとなっており、旧石器時代の遺物は、地山土中からの出土である。いずれも硬質頁岩製である。石器は１点のみで、他の11点は剥片である(第７・８図、図版22・23)。

１は比較的幅広・厚手の縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。先端部両側縁に微細な刃こぼれがあり、また先端部両側縁と主要剥離面のリングの高い部分にわずかながら光沢が視認される。長さ6.4cm、幅3.2cm、厚さ1.1cm。

剥片は縦長の剥片が主で、原礫の自然面が残るものもある。

２　縄文時代

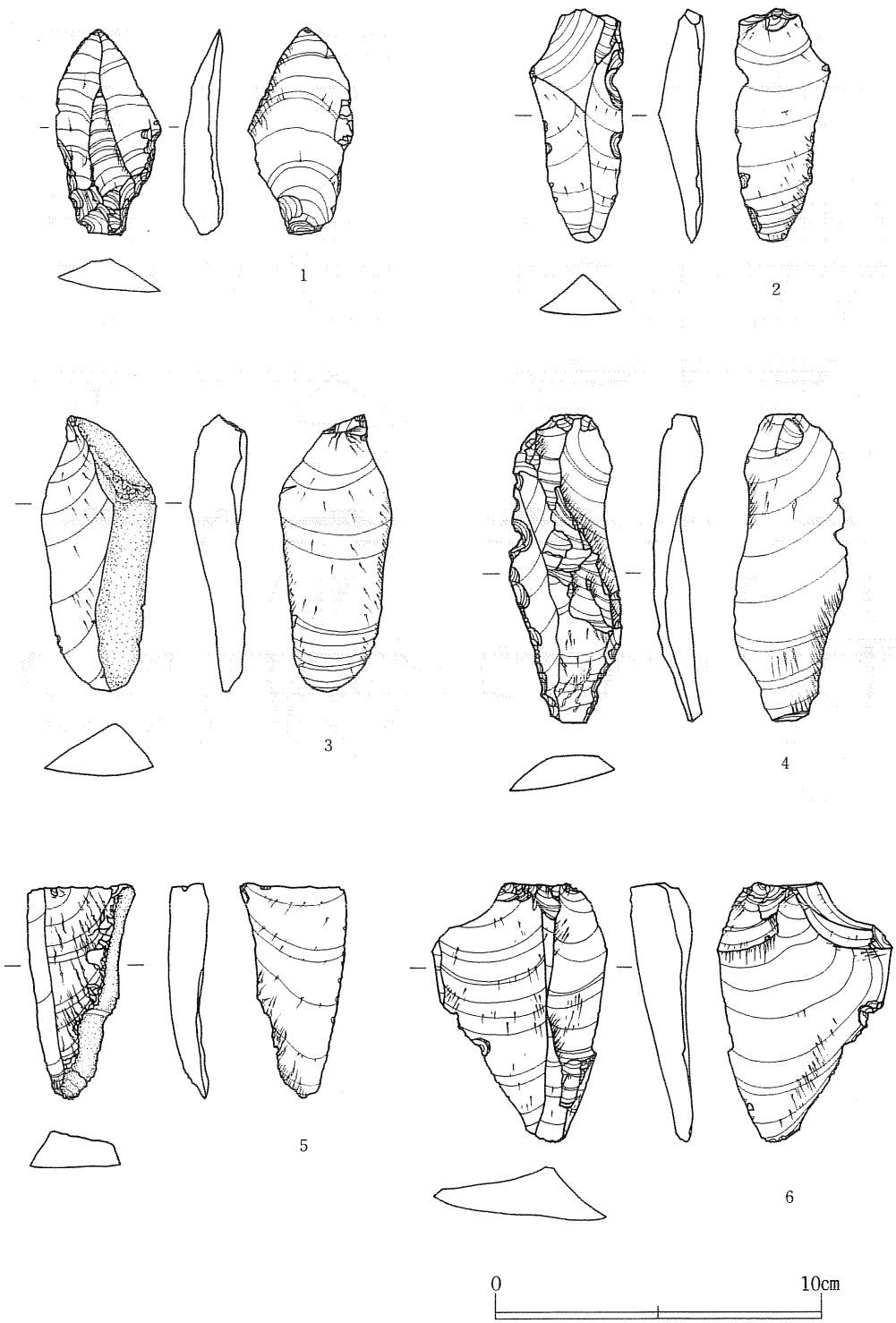
（１）遺構・遺物の概観

縄文時代の遺構として竪穴住居跡11軒、フラスコ状土坑１基、Ｔ－ｐｉｔ３基、土壙墓３基、土坑49基、土器埋設遺構10基、配石遺構１基を検出した。

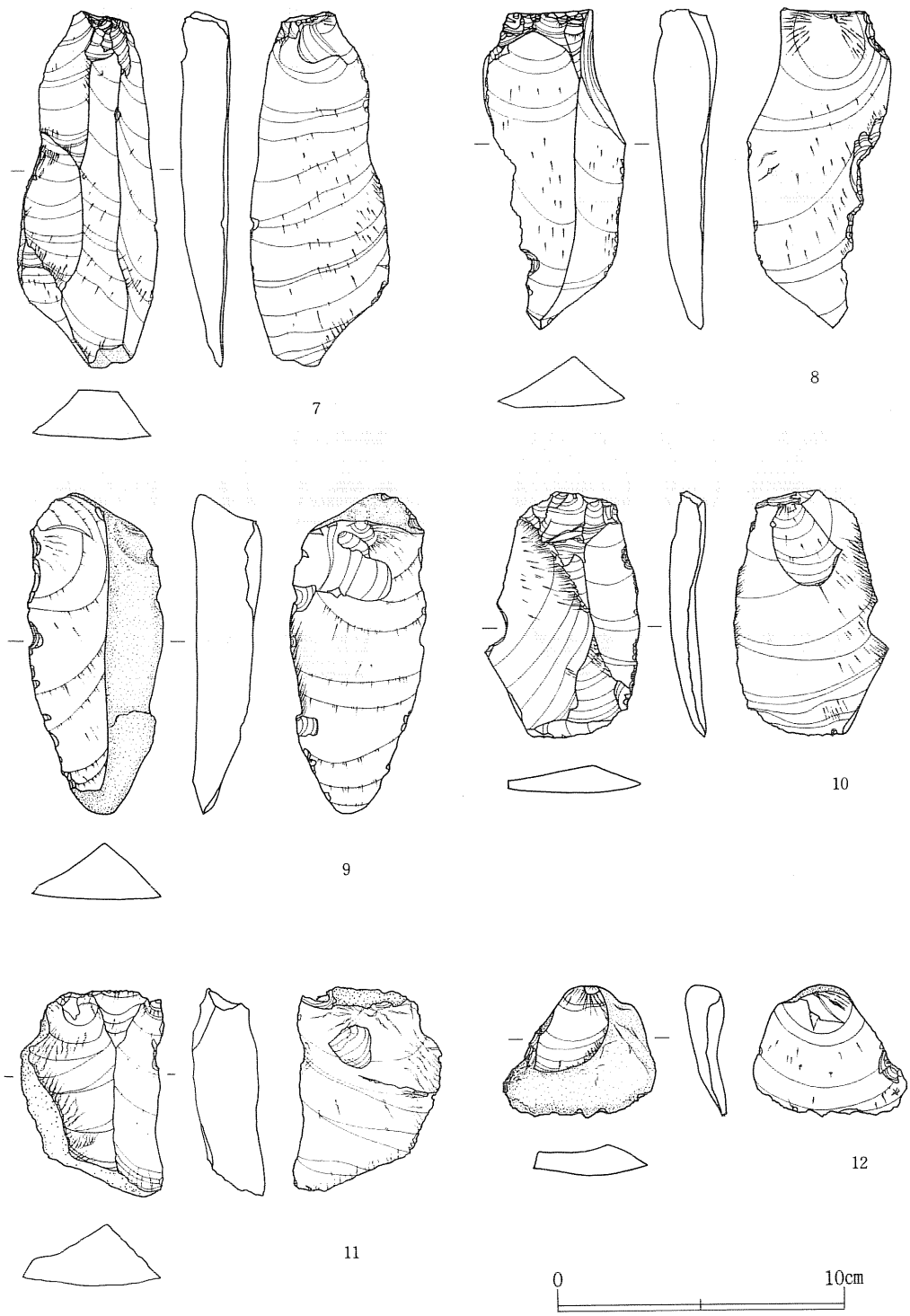
竪穴住居跡11軒のうち、平面プランが円形を呈するもの８軒、方形１軒、楕円形１軒、不明１軒である。規模は、円形を呈する竪穴住居跡では直径４ｍ台が２軒（ＳＩ101・102）、３ｍ台が５軒（ＳＩ04・07・10・13・105）であるが、他に円形を呈する１軒で掘り込みの範囲が直径1.7ｍと小規模な竪穴住居跡が存在する。方形の竪穴住居跡（ＳＩ02）は１辺3.3ｍで凡そ直径３ｍ台と同規模である。楕円形を呈する竪穴住居跡（ＳＩ08）は長軸4.2ｍで凡そ直径４ｍ台と同規模である。

竪穴住居跡内に付設された炉の形態を観察すると四囲に河原石を配した石囲炉、長大な河原石を「コ」の字状に配した石組炉、小さな河原石を馬蹄形に配した石組炉、炉の１方に扁平な河原石を立てた炉、扁平な河原石を立て、焼土を挟さんでその対面に土器を埋設した土器埋設炉等がある。柱穴配置には、規則性を認めることができなかったが、主要な柱穴が掘り込み内の床面上に予想される竪穴住居跡が多い中で、掘り込みが小規模なため、主要な柱穴を掘り込み外に求めざるを得ない竪穴住居跡がある。

11軒の竪穴住居跡の営まれた時期はその出土遺物から中期末葉から後期初頭と考えられる。



第７図　旧石器時代の遺物実測図(1)



第８図　　旧石器時代の遺物実測図(2)

フラスコ状土坑（ＳＫＦ116）は１基のみの検出であったが、竪穴住居跡（ＳＩ102）が廃棄・埋没後に掘り込まれたものである。土坑の廃棄とともに土器・石器類が投・廃棄された状況であった。

Ｔ－ｐｉｔは３基（ＳＫＴ01・02・03）検出したが、２基（ＳＫＴ01・02）は竪穴住居跡（ＳＩ02）の廃棄・埋没後にあたかも１対となるように掘り込まれているが、Ｔ－ｐｉｔ内の埋土の堆積状況から掘り込み時の排土がすぐ近くに堆積され、Ｔ－ｐｉｔの廃棄時にその堆積土を埋め戻した状況が推測された。

土壙墓は３基（ＳＫ31・103・104）検出したが、２基（ＳＫ103・104）は、現地形の縁辺部に長軸が等高線と平行するように（東西方向）２基が掘り込まれていた。掘り方もていねいな長方形プランを呈する土壙墓であるが、人骨・副葬遺物は出土しなかった。ＳＫ31の土壙墓は、略東西に長軸方向をもつ楕円形プランを呈する。西側の壁面近くの底面に川原石・深鉢形土器などが出土した。（ＳＫ31については、規模が極小であるものの竪穴住居跡である可能性も指摘される。）

土坑は49基検出したが、平面の形状・規模、深さ、断面の形状など多様である。遺物が出土した土坑は少ない。

土器埋設遺構は10基検出したが、直立（正立・倒立）状態と横倒状態での２形態が認められたものの、直立状態での土器埋設遺構が８基を占め、そのほとんどが遺跡中央部の竪穴住居跡群に囲まれるように検出された。

配石遺構は１基のみ検出したが、直下あるいはその周辺に土坑は検出できなかった。

遺物は、土器・石器・土偶・円盤状土製品などであるが、遺構内からの出土は僅少である。第Ⅰ郭と第Ⅱ郭の間の沢目にも遺物が多く出土した。時期的には縄文時代前期初頭～前葉、前期中葉～中期初頭、中期・中期末葉～後期初頭とすることができる。主体をなすのは中期末葉～後期初頭の遺物である。

（２）竪穴住居跡とその出土遺物

ＳＩ02　　（第９図、図版24）

第Ⅱ郭のＭＢ60・61のグリッドでＳＫＴ01・02のＴ－ｐｉｔと重複して検出した。平面的なプラン観察と土層断面的観察により、本竪穴住居跡が廃棄・埋没後にＴ－ｐｉｔ２基が掘り込まれたことが判明した。１辺320～330㎝の隅丸方形プランを呈する。上部が削平・整地されたためか、壁の高さは14～19㎝である。床は平坦である。南側壁中央の床面に64×68㎝の不正円形に５～７㎝の深さの凹みがある。この凹みには焼土・炭化物・灰が多く堆積していた。柱穴と考えられるｐｉｔは内・外とも検出できなかった。

土層註記			
番号	土色		混入物
1	浅黄橙	10YR8/4	粘質土
2	黒褐色	10YR3/2	地山粒多量
3	明黄褐	10YR6/6	地山粒多量
4	暗褐	10YR3/3	炭化物若干
5	黒褐	10YR3/3	浅黄橙色地山ブロック
6	黒	10YR2/1	地山粒若干
7	黄褐	10YR5/6	
8	黒褐	10YR3/2	地山粒多量
9	暗褐	10YR3/4	地山粒多量
10	明黄褐	10YR6/6	
11	暗褐	10YR3/4	炭化物・地山粒若干
12	黒褐	10YR3/2	炭化物・地山粒若干
13	黄褐	10YR5/6	炭化物・地山粒若干
14	黒褐	10YR3/2	炭化物・地山粒若干
15	浅黄橙	10YR8/3	粘質土
16	灰白	10YR7/1	焼土・灰・炭化物多量
17	黒褐	10YR3/2	炭化物・地山粒若干

第９図　SI02竪穴住居跡とその出土遺物

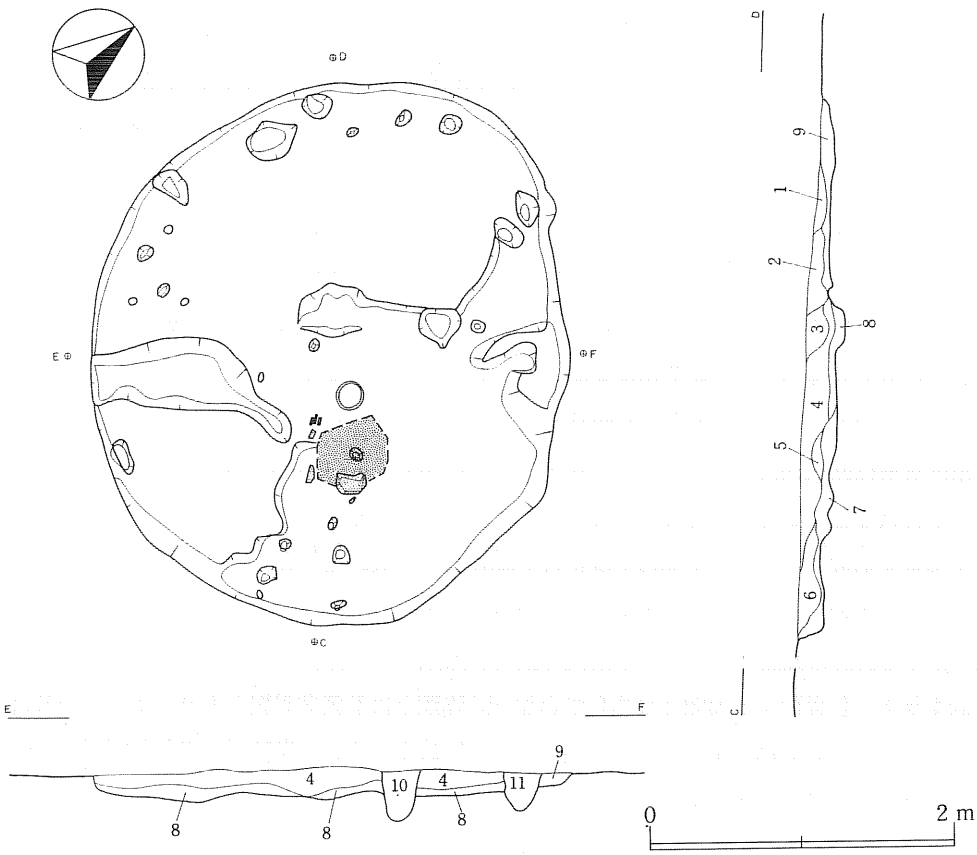
遺物は、埋土中から土器片が293点出土したが、復原し形態を知り得るものはない。すべて破片である。１は山形口縁の口唇部に沿って２本の直線的な平行沈線と頂部に対応して弧状沈線がいずれも太い棒状工具によって描かれている。沈線はＲＬ原体を斜位回転施文した後に描かれたものである。口縁部は粘土紐を貼り付け、胴部よりも若干厚味を持たせ、地文を施していない。２の口縁部は肥厚し強く外反する部分と胴部と同じ厚さでほぼ直立する部分とがある。肥厚し外反する部分は片口、ないしは注ぎ口と推測することも可能である。胴部に雑な沈線文を施した後、器面が磨かれている。３は口唇部から隆線を半円状に貼付け、その上に刻みを施している。Ｌ原体を縦位回転施文した後、口縁部は丁寧に磨かれている。４は網目状撚糸文を施文している。２種類のＲ撚紐を軸に交差して巻きつけたものである。９・10・12・13は撚糸文を施文しているが、いずれもＲの撚紐を使用している。８はＬ原体を縦位回転施文し、11はＬＲ原体を縦位回転施文している。４・８～12は口縁部に１～1.5cm幅で無文帯をもつ。口縁が８は小波状を呈し、他は平縁を呈する。５は胴部上端に隆線を横走させ、その隆線を境に上下に文様帯を形成している。上部の文様帯は２本の細い沈線が頸部を平行して横走するが、その内、上位の沈線は頸部を一周するものと思われる。下位の沈線は小波状を呈する口縁の波頂部に対応する位置に横長の「Ｊ」字区画文を描く。地文のＬＲ原体の縦位回転を施した後に沈線を施文する。口縁部・沈線間には施していない。隆線上にも縄文が施文されるが、この場合は、斜位回転によるものである。６は沈線より方形区画文を描き、区画内に縄文を施している。７は橋状把手の破片である。板状の粘土に円盤状の粘土を貼り付けその上に装飾を施している。装飾は、棒状工具で縁辺に側面圧痕と尖端刺突を施している。20は２枚の粘土板を貼り合わせて作り出した把手ですぐ下に楕円形の穴があったものと考えられる。14～16・21は地文のみの胴部破片である。14はＬＲの前々段多条原体を横位回転、15は結節のＲＬ原体を縦位回転、21は結節のＬＲ原体を横位回転、16はＲの反撚原体を縦位回転してそれぞれ施文している。17・18はＬＲ原体を縦位及び斜位に回転施文した後、器面を軽く磨き、数本の直線的な平行沈線を縦位あるいは斜位に引いている。沈線は浅めである。19は底部である。本住居跡から出土した土器は他の時期のものが若干混入しているが、縄文時代後期初頭から前葉のものが主体をなす。

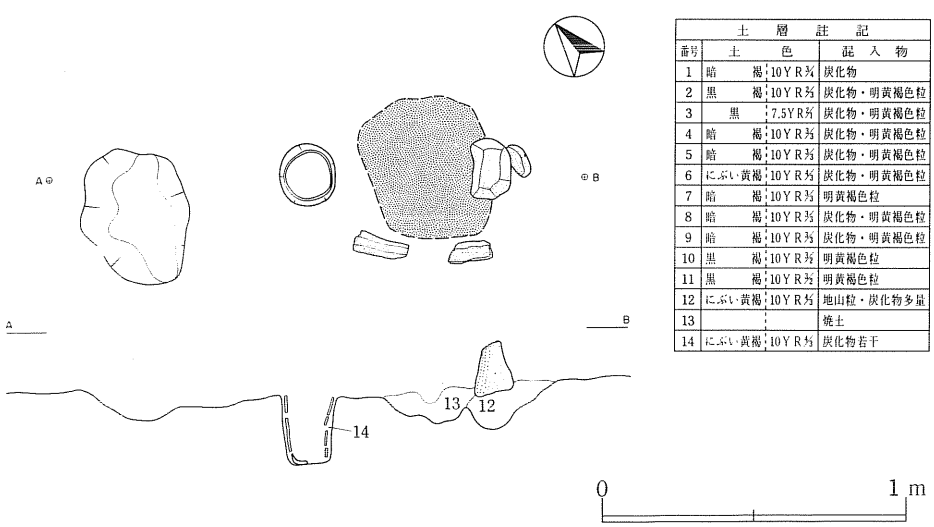
また、33片のフレイクも出土している。

ＳＩ04　　（第10図・第11図、図版５・６・24・25）

ＭＡ48・49、ＬＴ48・49のグリッドで検出した。略南―北方向に長軸方向をもつ楕円形プランを呈する。長軸365cm、短軸320cm、プラン確認面から床面までの深さは８～22cmである。床面は木根による攪乱等もあり凹凸が激しい。床面の中央からやや南東側に炉が付設されている。

炉は、１個の大きな河原石を南東側に、５個の板状剝離した河原石を西側に、床面を掘り凹めて立たせてＬ字形に石組し、その内部の40×50cmの範囲で床面が赤色に熱変・硬化していた。





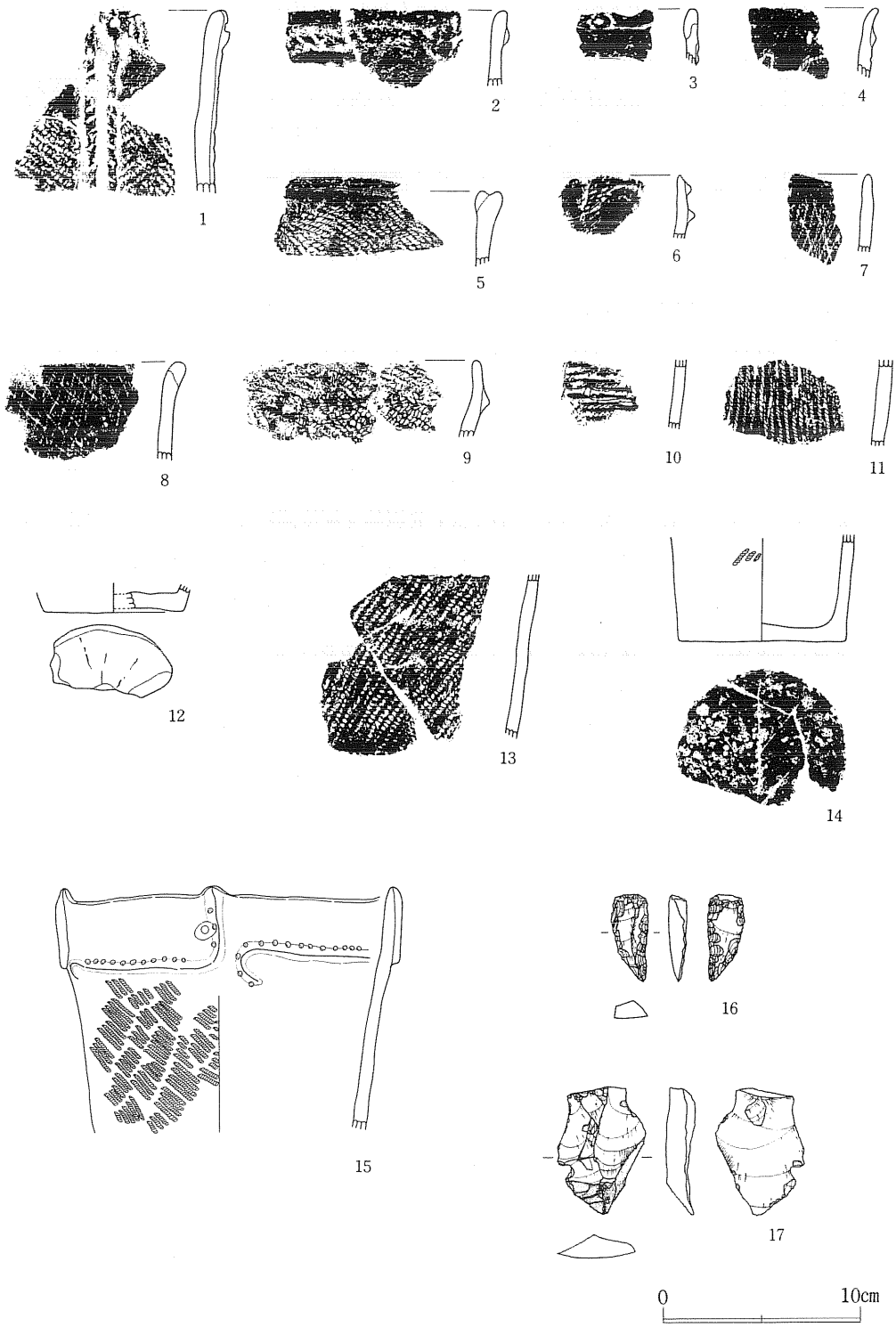
土層註記			
番号	土色		混入物
1	暗褐	10YR3/4	炭化物
2	黒褐	10YR3/3	炭化物・明黄褐色粒
3	黒	7.5YR2/1	炭化物・明黄褐色粒
4	暗褐	10YR3/3	炭化物・明黄褐色粒
5	暗褐	10YR3/3	炭化物・明黄褐色粒
6	にぶい黄褐	10YR3/3	炭化物・明黄褐色粒
7	暗褐	10YR3/3	明黄褐色粒
8	暗褐	10YR3/3	炭化物・明黄褐色粒
9	暗褐	10YR3/3	炭化物・明黄褐色粒
10	黒褐	10YR3/3	明黄褐色粒
11	黒褐	10YR3/3	明黄褐色粒
12	にぶい黄褐	10YR4/3	地山粒・炭化物多量
13			焼土
14	にぶい黄褐	10YR4/3	炭化物若干

第10図　SI04竪穴住居跡

この焼土に隣接して西側に焼土・炭化物混入土が入った深鉢形土器が埋設されていた。立石から深鉢形土器までが一連の機能を持つ「炉」として考えられる。床面のＰｉｔは多いが、壁の近くに検出できたＰｉｔが本竪穴住居跡の柱穴と考えられる。ただし、住居跡の外に検出されている柱穴に規則性を見出すこともできるので、壁外部に主要な柱穴が存在する可能性がある。炉の西側にＬ字形に掘り凹められた浅いピット中から深鉢形土器１個体分（15）が出土した。

遺物は、前記の他に埋土中から土器片18点と石器２点が出土した。10・11が炉に埋設された深鉢形土器の胴部破片である。埋設され強い火熱を受けたためか、全体がもろく、復原・図化は不可能であった。Ｒ撚糸文が施文されている。１～９・12～14は埋土中の土器である。

１・２は同一個体であり、隆線を口縁に平行及び口唇部から垂下させている。隆線上には断面「Ｖ」字状の刻みが施され、口縁に平行する隆線と口唇部から垂下する隆線の接点には中央に円形の刺突をもつボタン状貼付文が付されている。口縁部はボタン状貼付文に対応する位置で小波状ないし小突起状を呈し、胴部にはおそらく方形区画文の沈線を引き、無文部と縄文部とを対置させている。区画内に施文された縄文はＬＲ原体を縦位回転したもので、沈線施文後に施されている。口縁部・胴部無文部とも丁寧に磨かれている。３・４は口唇部に平行する隆線を持ち、３は隆線中央に円形刺突を施したボタン状貼付文を貼付し、４は隆線上に２個１対の刻みを施している。３の口縁部は小突起状を呈す。両方とも隆線上も含めて丁寧に磨かれている。５は口唇部に太い溝が走る。それは口縁部内側に粘土紐を貼り付け、丁寧に調整し、外位口唇と内位口唇の間を太い棒状工具で凹線状を呈している。胴部にはＬ原体が縦位回転施文されている。６は口縁部に「Ｓ」字状隆線を貼付し、無文部と縄文部とを対置させている。この土器はＲＬ原体を縦位回転施文した後、「Ｓ」字状隆線を貼付し、磨り消しによって無文部を作り出している。７・８は２本のＲ撚紐を交差させた網目状撚糸文を施文し、口縁部を磨り消しによって無文部としている（７）。９は口唇部に平行する隆線、ボタン状貼付文等、１・２と近似した特徴を持っているが、それらとは別個体であろう。隆線上には刻みが施され、中央に円形刺突を持つボタン状貼付文は２本の垂下する隆線と横走する隆線の接点に貼付される。１・２のボタン状貼付文が垂下する２本の隆線の内、一方と横走する隆線の接点に貼付されるのに対し、９は垂下する２本の隆線間に貼付される。13・14は小型深鉢形土器である。胴部にＲＬ原体を縦位回転施文している。12・14は底部の破片で木葉痕が見られる。15は床面小ピットより出土した深鉢形土器で、推定口径16.7㎝、現高12.7㎝である。口縁は平で４個の小突起をもつ。口縁部には無文帯があり、それが小突起から垂下された隆線によって４区画されている。垂下された隆線は頸部で横走し、胴部と区画する役割をしている。そして、この横走する隆線は隣の小突起から垂下された隆線とは接続せず、その手前で弧状に曲がる。各隆線に沿って円形竹管による刺突文が施されている。胎土に径２～５㎜の小石が多く混入している。



第11図　　SI04竪穴住居跡出土遺物

以上の土器は縄文時代後期初頭に帰属するものと思われる。

16は縦長剥片を利用した石錐である。基部には打面が、背面には第１次剥離による縦方向の稜が残存する。２次調整は両側縁にのみ施される。石質は頁岩である。17は縦長剥片を利用したスクレイパーである。基部には打面が、背面には礫面、第１次剥離による縦方向の稜が残存する。一端が尖頭状を呈することにより、本遺跡分類「スクレイパーＡ類」に属する。基部の両側縁には主要剥離面からの加撃調整と刃潰しによる抉りが入る。

ＳＩ07　　（第12図、図版６・25）

ＬＴ50・51、ＭＡ50・51のグリッドで検出した。前年度の試掘調査時に確認されていた竪穴住居跡であるが、木根等による攪乱が多く、遺存状態は不良である。直径330㎝の不整円形プランを呈し、プラン確認面から床面までの深さは15〜22㎝である。床面には木根による攪乱穴が多い。炉・焼土は検出されなかった。柱穴は、壁の近くに穿たれたｐｉｔを考えることができるが、竪穴住居掘り込み外部の柱穴・柱穴様ｐｉｔも考慮する必要があろう。

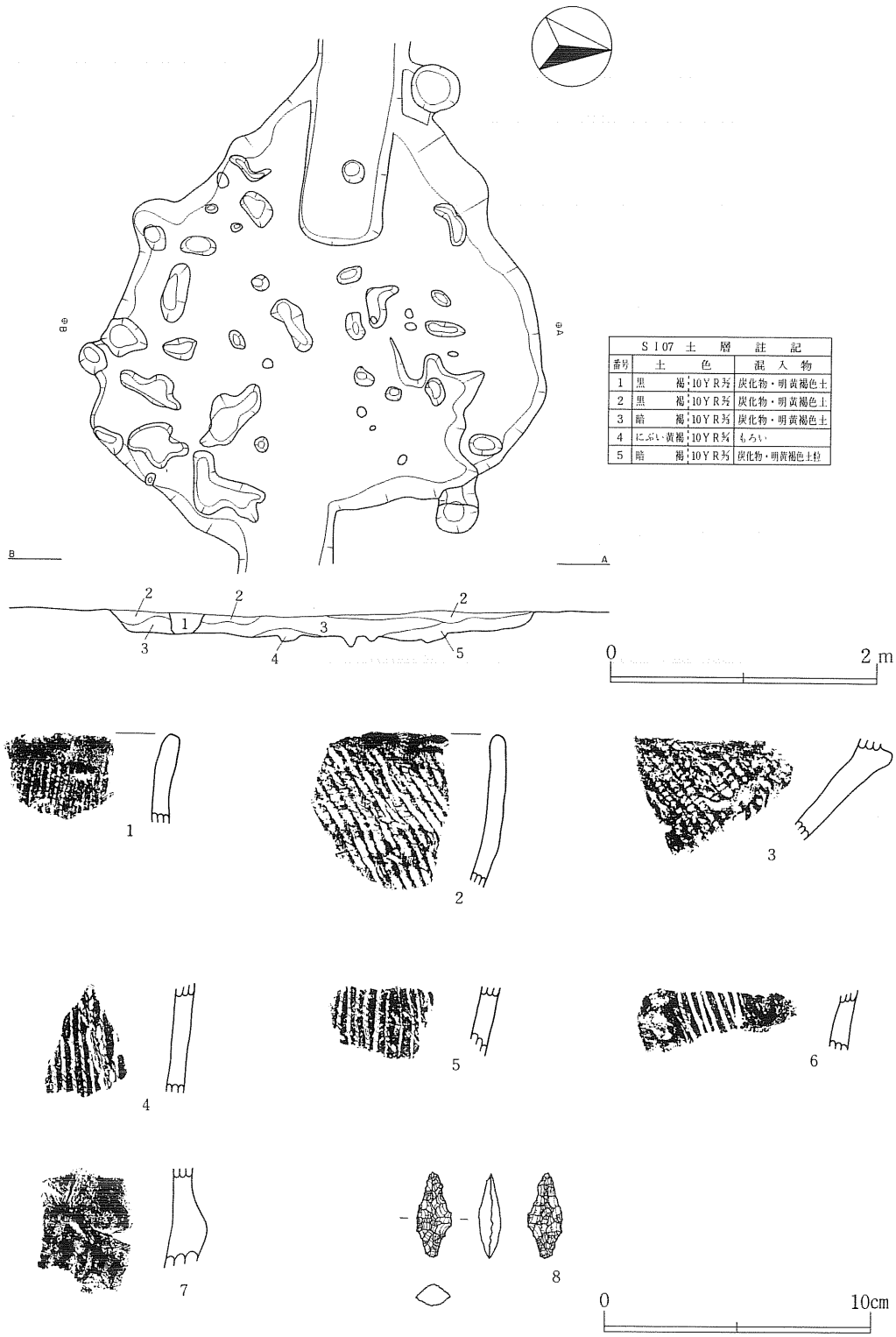
遺物は、埋土中から少量の土器片と石鏃１点、頁岩のフレイクが３点出土した。

１・４〜６は撚糸文を施文したものであるが、いずれもＲの撚紐を使用している。２は口縁部に口唇部直下からＬ原体を縦位回転施文している。３は浅鉢の口縁部の破片であるが、口縁を欠損する。外側に強く張り出した下位口縁の波頂部に対応する胴部を２条の太い沈線が垂下する。沈線施文後に、ＬＲ原体を縦位回転施文している。７は橋状把手の破片である。板状の粘土に弧状の粘土紐を貼付し、断面三角形の隆線を持つ把手に仕上げている。以上の土器は縄文時代後期初頭に属するものと思われる。

８は頁岩を加工した有茎石鏃で、両面とも細かい調整を施している。

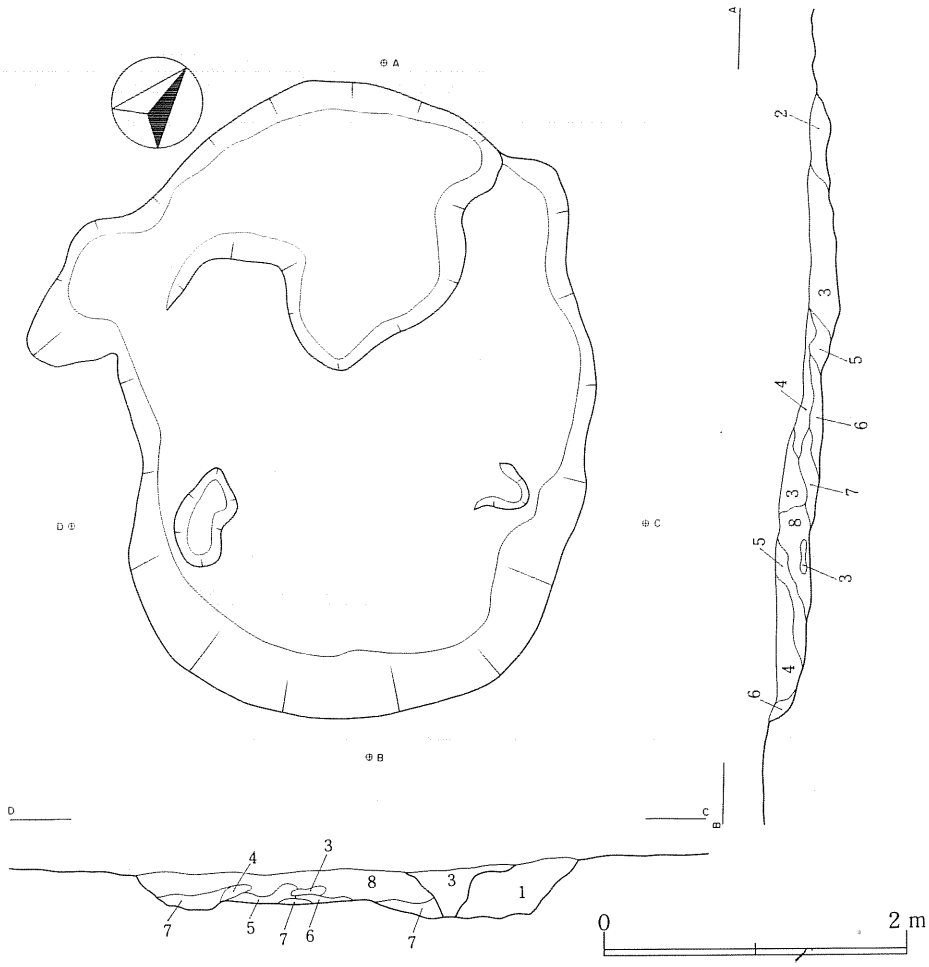
ＳＩ08　　（第13図、図版26）

ＬＭ58・59、ＬＮ58・59グリッドで検出したが、昭和30年代に遺跡東側下方を走る国道７号の雪崩防止用土堤の築造時に竪穴住居跡上部を削平・破壊されている。北西―南東に長軸方向をもち、長軸420ｍ、短軸316㎝の楕円形プランを呈する。プラン確認面から床面までの深さは10〜36㎝である。床面は木根及び攪乱のため凹凸が激しいが北西側の床面が120×170㎝の範囲で５〜10㎝くぼんでいる。また、床面の南西側にも１カ所凹部がある。炉・焼土は検出されなかった。土層観察用ベルトにおける埋土の観察では、北側から南側に流入している状況を示すが、ほとんどが所謂「黒ボク土」と地山土の混合土で隙間が多い土性であった。このことから、ほとんど床面近くまであるいは床面を掘り抜いて雪崩防止用土堤築造が行われたと考えられ、住居跡内に堆積する「埋土」は、大部分が新しい人工的なものと判断された。柱穴は住居跡内・外とも検出されなかった。

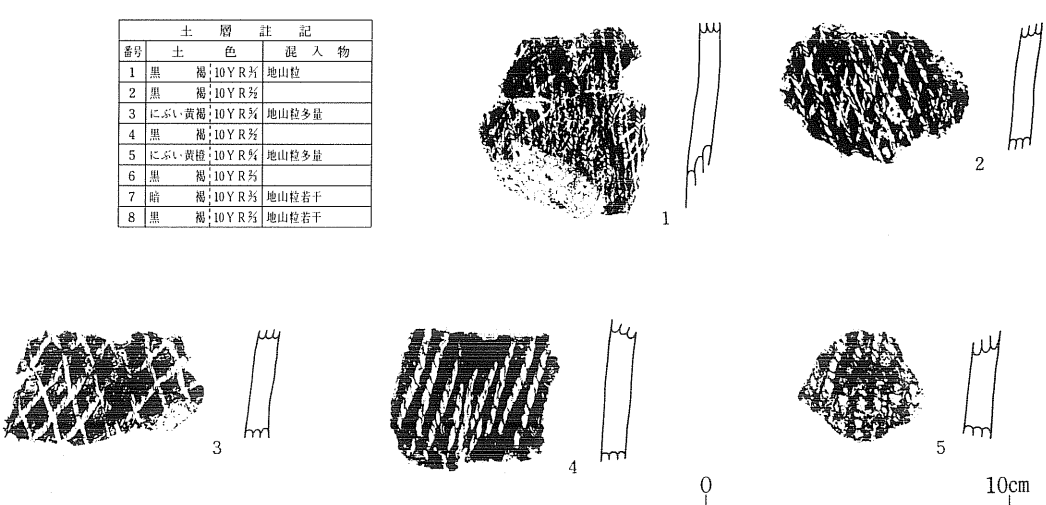


ＳＩ07　土　層　註　記		
番号	土　色	混　入　物
1	黒　褐　10ＹＲ3/2	炭化物・明黄褐色土
2	黒　褐　10ＹＲ3/2	炭化物・明黄褐色土
3	暗　褐　10ＹＲ3/3	炭化物・明黄褐色土
4	にぶい黄褐　10ＹＲ5/4	もろい
5	暗　褐　10ＹＲ3/3	炭化物・明黄褐色土粒

第12図　　SI07竪穴住居跡と出土遺物



土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	黒　褐	10ＹＲ3/1	地山粒
2	黒　褐	10ＹＲ3/2	
3	にぶい黄褐	10ＹＲ5/4	地山粒多量
4	黒　褐	10ＹＲ3/2	
5	にぶい黄橙	10ＹＲ6/4	地山粒多量
6	黒　褐	10ＹＲ3/1	
7	暗　褐	10ＹＲ3/3	地山粒若干
8	黒　褐	10ＹＲ3/1	地山粒若干



第13図　　SI08竪穴住居跡と出土遺物

遺物は埋土中から少量の土器片とフレイクが出土した。

１～３はＲ撚紐を交差させた網目状撚糸文を施文している。１はＲ撚糸文施文後に網目状撚糸文を重ねて施文している。４はＲ撚糸文、５はＬＲ原体の縦位回転による斜行縄文をそれぞれ施文している。以上の土器は縄文時代後期に属するものと思われる。

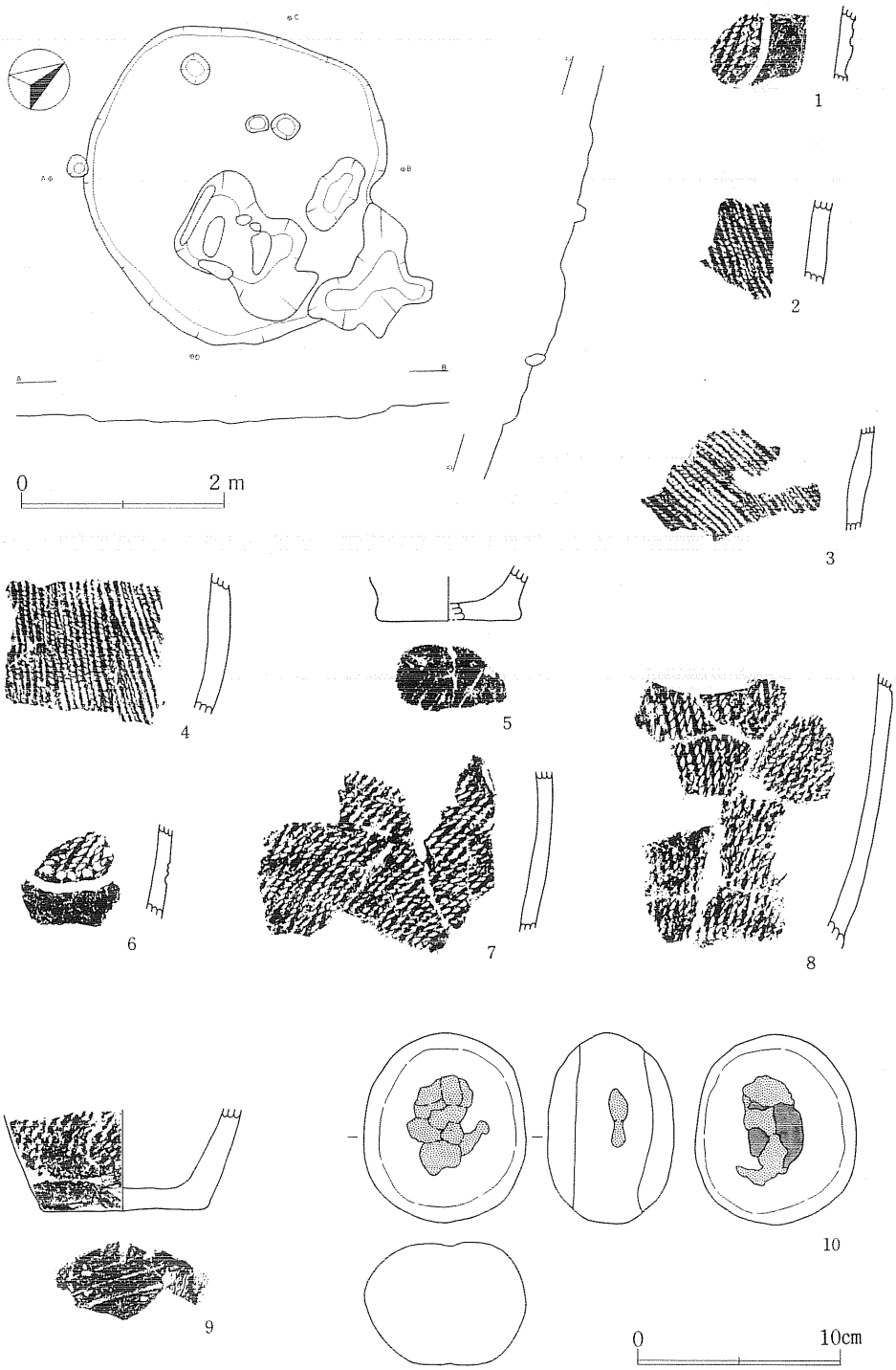
ＳＩ10　　（第14図、図版７・26）

ＬＭ59、ＬＮ59グリッドで、ＳＩ09の南東側に隣接して検出した。表土除去後のプラン確認時に晴天・強風が続き、過乾燥状態となったため、露出した石囲炉の一部を確認できたものの、竪穴住居跡のプランが容易に把むことができず、プラン確認面が他に比べ若干低くなった。東側壁に木根による攪乱があるが、直径300cmの略円形を呈し、プラン確認面から床面までの深さは５～10cmである。床面は凹凸があるが堅くしまっていた。住居跡床面中央からやや南東側の床面が東西140cm、南北100cmの略長方形に12～15cmの深さで掘り込まれ、この掘り込みの西寄りに長大な河原石を配した東西85cm、南北70cmの石囲炉が付設されていた。炉内部には焼土が厚く堆積し、各河原石の内側表面は火熱による赤変が見られた。床面には柱穴が３カ所、溝状のくぼみ１カ所が検出されたが上部構造を推定するには至らない。

遺物は石囲炉中から深鉢形土器が潰れた状態で出土したが、全体の形態を知り得る程に復原はできなかった。その他、埋土中から少量の土器片と石器１点、フレイク１点が出土した。１・６～９は石囲い炉の中より出土したものである。口縁部の様子を知ることはできないが、口縁部から胴部上半にかけて文様帯が形成される深鉢形土器であろう。文様帯を構成する文様は太めの沈線によって描かれ、１・６は円形もしくは楕円区画文であろう。区画内には胴部下半（７～９）と同じＬ撚糸文を充填し、区画沈線に沿って竹管を垂直に刺突している。さらに区画外に磨いて無文部とし区画内の縄文部と対置させている。２～５は覆土中より出土した土器片である。２～４は同一個体と思われるもので、Ｒ撚糸文を施文している。５は底部端が張り出す小形の深鉢形土器の底部である。以上の土器は縄文時代中期末葉に属するものと思われる。10は安山岩を利用した所謂「凹み石」であるが、本遺跡分類では「敲磨器Ⅲ類」に属する。両面に敲きによる小さな凹みが多く存在し、凹みの集約化ははかられていない。片面のみに磨き面を持つ。

ＳＩ13　　（第15図、図版８・９・27～31）

第Ⅰ郭と第Ⅱ郭の間に存する沢目の西側縁辺部のＬＳ54・55、ＬＴ54・55のグリッドで検出した。縁辺部での厚い黒色土（腐植土）に覆われていたことと、上部に中世の柵列跡であるＳＡ05が存在することからプラン確認が遅れ、東側の壁面の上半を一部欠失する。長軸336cm、短軸250cmで北東―南西に長軸方向をもつ楕円形プランを呈し、プラン確認面から床面までの深さは20～70cmである。床面は凹凸が激しく、南西側壁面下方に長さ154cm、幅32～62cm、

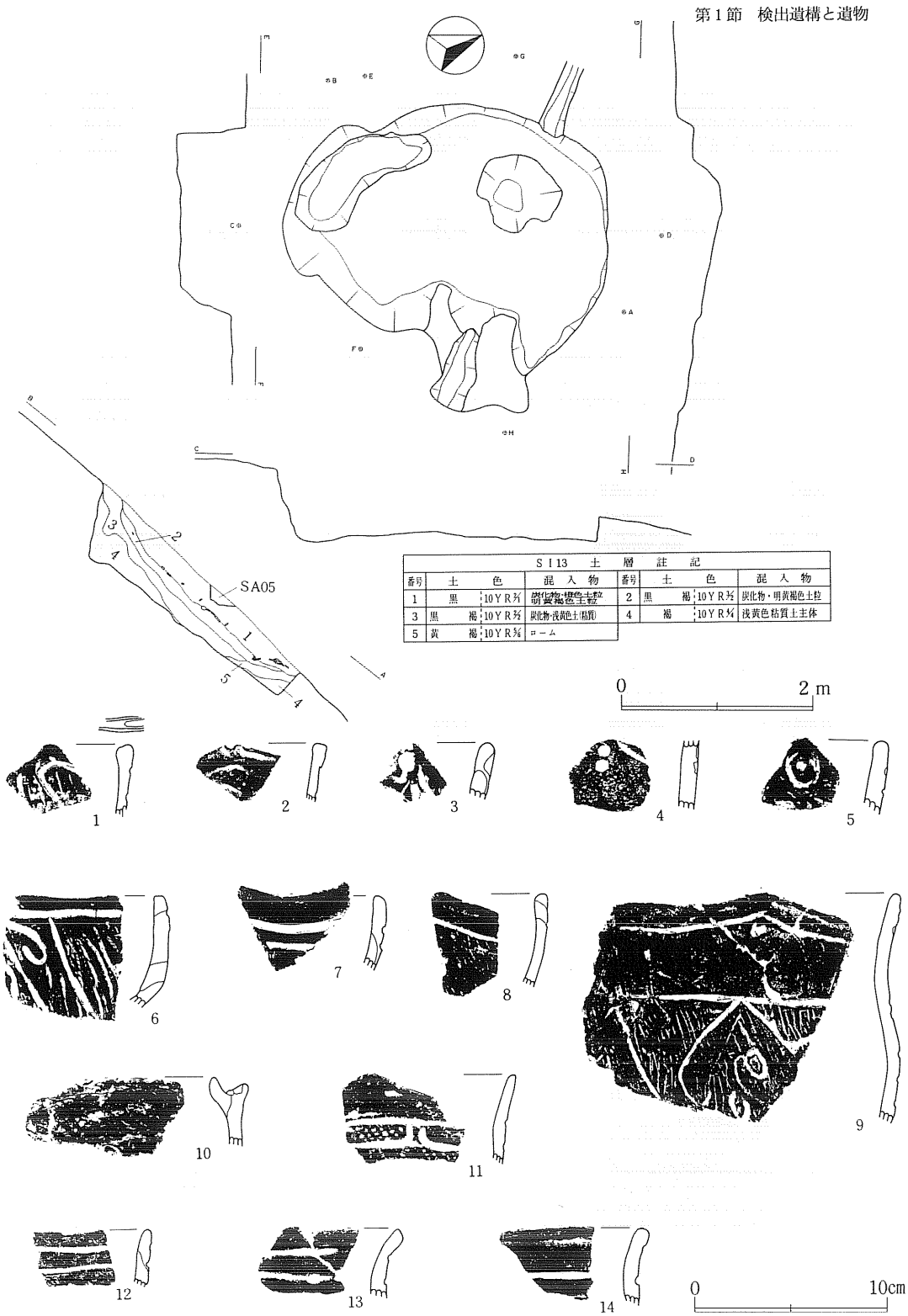


第14図　　SI10竪穴住居跡と出土遺物

深さ５～６㎝の掘り込みを、また、床面中央からやや北寄りに80×86㎝の不整なプランをもつ深さ４～６㎝の掘り込みを確認した。黒色～黒褐色を呈する埋土中に微細な炭化材片と、地山粒が混入している。

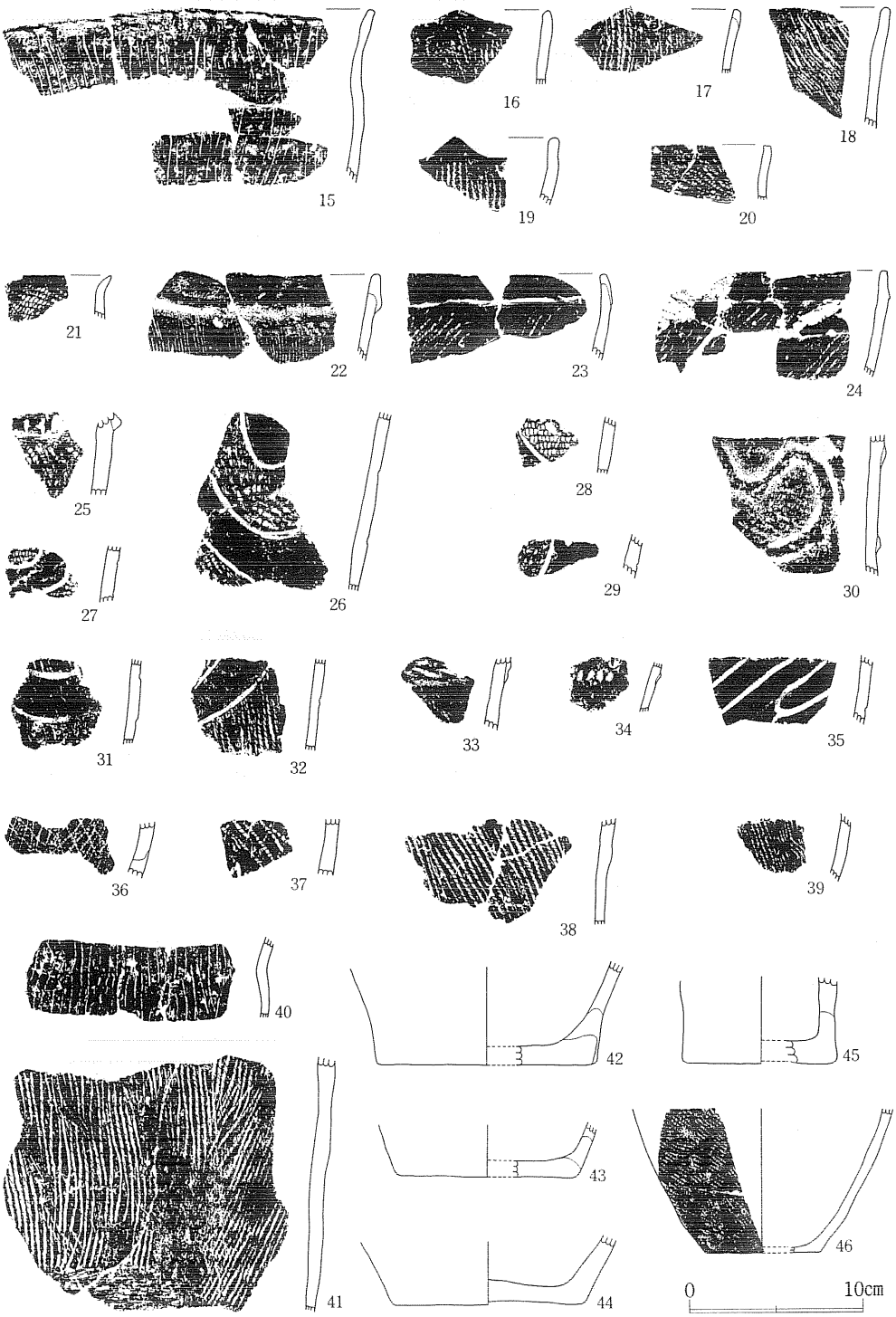
竪穴住居跡中央から東側の床面上と埋土中に、ほぼ完形の縄文土器が５個体と多量の縄文土器片、土偶１点、石器７点、多量のフレイクとコアが出土した。１～14は沈線・隆線・刺突による文様構成を持つ口縁部の土器である。１は口縁部で小突起状を呈し、小突起の口唇の内、一方の口唇上には沈線が施される。器面には細いＲ撚糸文を地文とした上に曲線的な沈線文が描かれている。２は口縁が複合口縁で、波頂部の口唇に口唇と直角に棒状工具の側面圧痕を２箇所施している。３は口縁部の山形突起に径12㎜程の盲孔を持ち、それを中心に沈線による文様が展開される。４・５は口縁部の山形突起に径５～６㎜の円形刺突文を持つ。４は円形刺突文を縦位に２個配し、口縁に沿って沈線を引いている。５は円形刺突文を取り囲むように、上に開口する「Ｕ」字状の沈線を施している。地文にＬ原体を縦位回転施文した後、器面を丁寧に磨いている。６は口縁部が平縁で、胴部上半において強く屈曲し内湾する深鉢形ないし鉢形土器の口縁部の土器である。直線的な沈線が口縁と平行ないし胴部を斜行し、その沈線間には鉤状沈線が描かれる。地文にはＲ撚糸文を施しているが、磨り消し等により無文部と地文部とを対置させるという文様構成はしていない。７・８は波状を呈す口縁部に口縁と平行に沈線を施し、下位に撚糸文を施文している。９は頸部に直線的な沈線を巡らせ、口縁部文様帯と胴部文様帯とを区画している。口縁は波状を呈し、口縁に平行して１条の沈線が巡り、その沈線の波頂部の下には上に開口した小「Ｕ」字状沈線文が配される。以上のように口縁部文様帯の文様構成は単調なものである。器面は丁寧に磨かれている。胴部文様帯は細いＲ撚糸文を施文した後、口縁部の波頂部に対応した位置及び波頂間の中間に対応した位置に鉤状沈線区画文を描画している。区画内は磨り消されず、地文が残っている。器面には２次加熱による煤状炭化物が多く付着している。10は口縁の内側に粘土板を貼り付けて二重の口縁を作っている。外位口縁の上面には中央に円形の刺突を持つボタン状貼付文が付されている。外面にはＬ原体の縦位回転施文を施している。11は口縁に山形突起を持ち、口頸部には２本の平行沈線が横走し、弧状沈線より各々は連結（連絡）する。平行沈線間には斜行縄文を施している。12は口縁と平行する沈線が３条引かれている。13・14は頸部に平行沈線を持つ壺形土器であり、口縁部は上位沈線から外反する。内外面とも丁寧に磨かれている。

15～24は粗製土器の口縁部の土器である。15の口縁は小波状を呈し、口唇部には面取りが施されている。器形は内湾気味に胴部からくびれる頸部へさらに直線的に外傾する口縁部へ立ち上がるもので、器面には細いＲ撚糸文が施文されている。16～19（16・17は同一個体）は山形突起を口縁部に持ち、地文にＲ撚糸文を施文したものである。19は口縁端を磨り消して無文帯



SI13　土　層　註　記							
番号	土　色		混入物	番号	土　色		混入物
1	黒	10YR3/1	炭化物・壁色土粒	2	黒　褐	10YR3/2	炭化物・明黄褐色土粒
3	黒　褐	10YR3/2	炭化物・浅黄色土(粘質)	4	褐	10YR4/4	浅黄色粘質土主体
5	黄　褐	10YR5/6	ローム				

第15図　　SI13竪穴住居跡出土遺物(1)



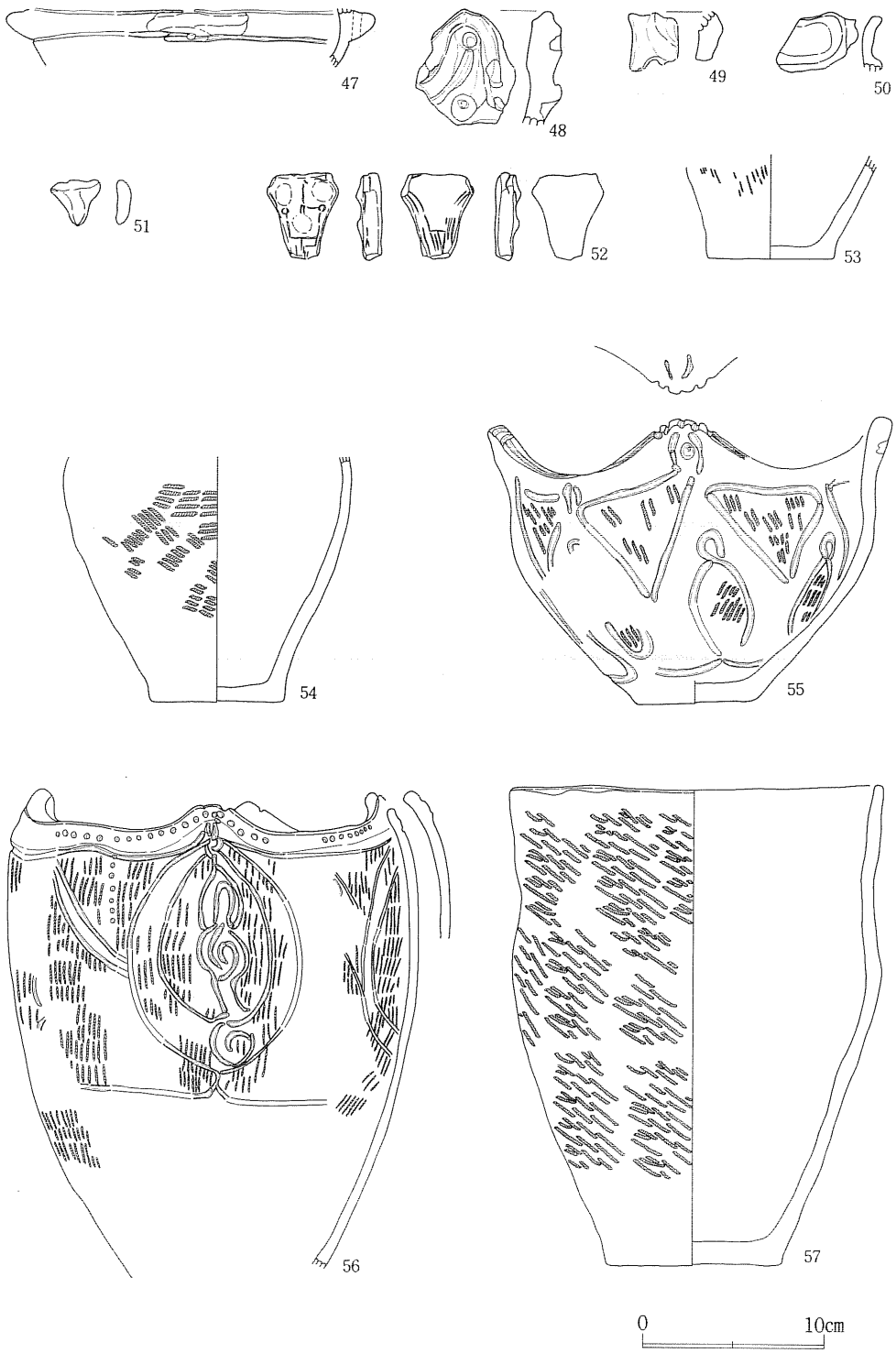
第16図　　SI13竪穴住居跡出土遺物(2)

を設けている。20・21の口縁は平縁であり、地文に斜行縄文を施文している。20はＬ原体を縦位回転施文し、21はＬＲ原体を縦位回転施文し、口縁部を外反させている。22～24（23・24は同一個体）は折り返し口縁風のもので、肥厚した口縁部は丁寧に磨いて無文とし、胴部には撚糸文（22）、無節の斜行縄文（23・24）が施文される。

25～41は胴部の土器である。25は口頸部を横走する隆線上に断面「Ｖ」字状の刻みを施し、胴部には斜行縄文を施文している。26～29は沈線により縦長の楕円形を二重、三重に描画し、無文部と地文部とを対置させている。地文部に施された縄文の原体の判読は磨滅により困難を窮めるが、おそらく、ＬＲ原体を縦位回転施文したものであろう。無文部は丁寧に磨かれている。30は弧状の隆線により区画文を描き、区画内に斜行縄文を施文し、区画外を無文部としている。本遺跡の土器は胎土に砂粒を多く含有するのが一般的であるが、この土器の砂粒含有量は特に多い。31・32はＲ撚糸文を地文とし、沈線により区画文を描いた後、区画内を磨り消し無文部としている。33は隆線上に隆線に対して斜位に短沈線を施している。34は器面に対して横方向からの刺突列を持つ。刺突は左右両方から行われ、指先でつまんだ様相を呈す。35は器面を丁寧に磨き、沈線により文様区画された壺形土器である。右上から左下へ斜行する沈線が引かれている。36・37は２本のＲ撚紐を軸に交差させながら巻き付けて施文した網目状撚糸文を施文し、38～41はＲ撚糸文を施文している。39・40は細い撚紐を使用しており、40は15と同一個体である。胴部下半部（41）においては、胴部下半部（41）においては、撚糸文は縦位の他斜位にも施され、一部、縦位と斜位の撚糸文は交差する。底縁部には横位の調整が施してある。

42～45・53は底部である。底部からすぐに外傾するものが主体をなすが、底部端が張り出すもの（45）もある。底縁部はいずれも横位に磨いて調整しているが、53の磨かれた底縁部の上位には磨り消されかかったＲ撚糸文が観察される。また、42・43・45・53には２次加熱の痕跡として器面の赤色変化（45・53）、火跳ね（53）、煮こぼれ（42）、煤状炭化物の付着（43の両面・53の内面）等が認められる。

47～52は把手・突起・土製品・土偶である。47は胴部に直線的な平行沈線を巡らし、沈線間に大きなコブを貼付し、調整した後、そのコブに上下に貫通する孔を施す。48は口縁部の山形突起である。３枚の粘土板を貼り合わせて作り出したもので、外から１枚目と２枚目の粘土板は完全に密着せず、両粘土板間に空間を作り出している。上下２箇所に径８㎜、12㎜の円形刺突文を施し、上位刺突文からは曲線的な太い沈線が垂下する。49は橋状把手の外位部であるが、１枚の粘土板に弧状隆線を貼付し、上下２箇所に円形の貫通孔を施す。50は口唇部の小突起から「ノ」字状の隆線を垂下させ、口縁部には口縁と平行する隆線を横走させている。51は「三角土製品」で正三角形を基調とし、各辺を抉り気味にしている。砂粒を含むものの比較的精選



第17図　　SI13竪穴住居跡出土遺物(3)

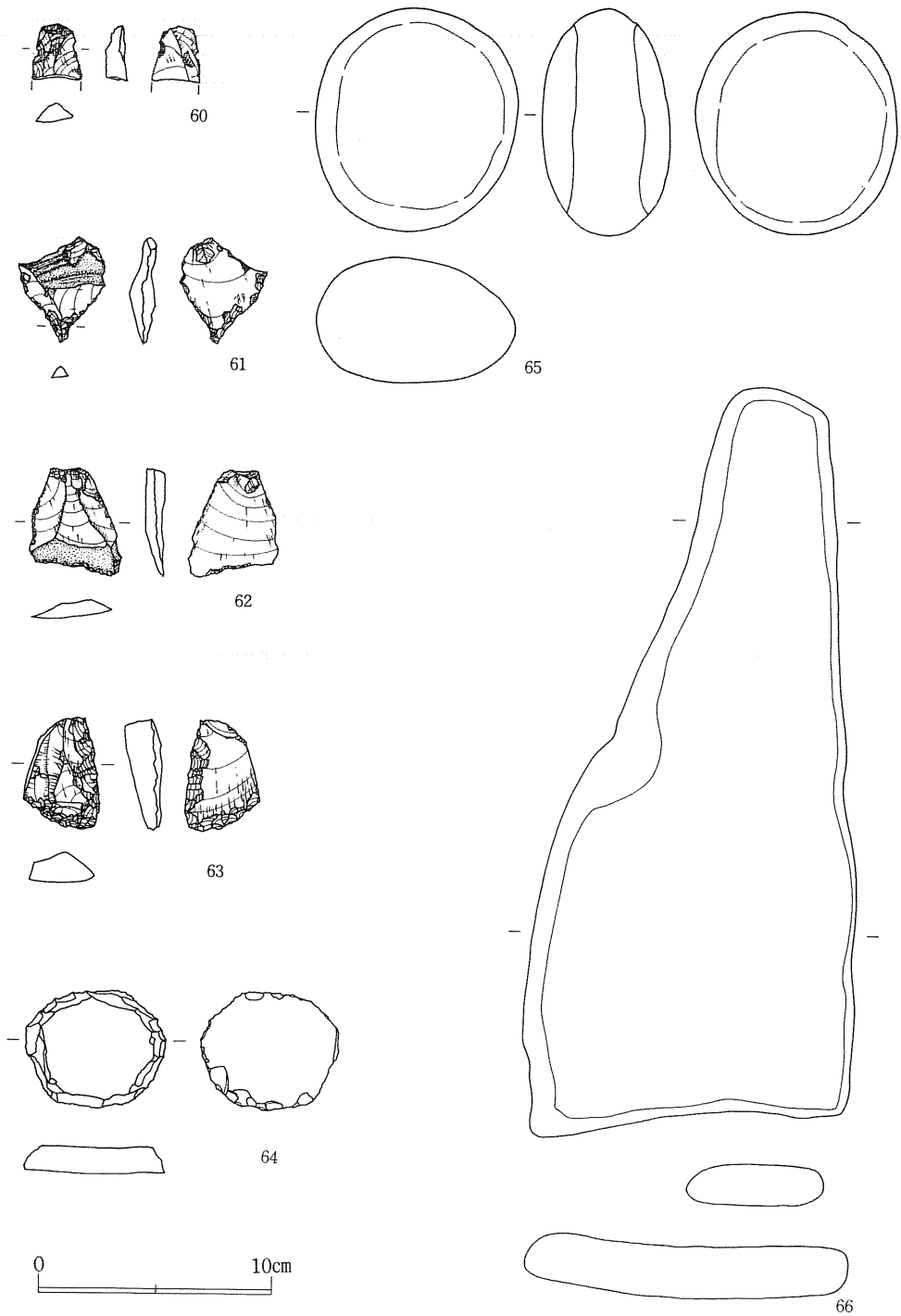
された胎土である。52は土偶で逆二等辺三角形を呈する。肩部及び足部の一部が欠失するが当初の形態は十分に知り得るものである。ほぼ中央部で折れており、上半部は遺構内より、下半部は遺構外より出土した。頭部は折損している。正面には上位に２個、下位に１個の円形の微隆起文（ないしは瘤）が貼付されるが、上位は胸部を表現したものであろう。また、両面及び肩部の側面には細沈線により文様が描かれている。胎土は砂粒を多く含む。

46・54〜59は個体がほぼ完形あるいは潰れた状態で検出されたもので、全体の形状を知ることができる。46は、薄手の比較的小型の深鉢形土器ないし鉢形土器であろう。胴部に細いＬＲ原体を縦位及び斜位回転させ斜行する縄文を施文し、底縁部は横位に丁寧に磨いている。胎土には砂粒をそれほど含有しない。54は胴部が緩く内湾する深鉢形土器であろう。器面に条が斜走及び横走する縄文を施文している。斜行縄文はＬＲ原体を縦位回転施文したものであり、横行縄文は同一原体を左上から右下へ斜位回転施文したものである。底縁部及び内面は丁寧に磨かれるが、器面は２次加熱により赤色に変化し、所々に煤状炭化物が付着している。胎土には細砂粒が多く含有されている。現高13.7㎝、底径7.3㎝である。55は口縁部に４単位の山形突起を有す鉢形土器である。山形突起の頂部には口唇と垂直に棒状工具の側面圧痕による５本の刻みを施し、その刻みを起点（あるいは終点）とする沈線が山形突起間の口唇上に引かれている。また、山形突起の外面には径７㎜程の円形刺突文とそれを挟むように対峙する弧状の２本の沈線文が配され、内面には対峙する２本の弧状沈線文のみが施される。胴部上半に逆三角形を基調とした沈線区画文を山形突起間に２単位、計８単位配し、区画内にはＲＬ原体を左上から右下へ斜位回転させて、条が縦走する縄文を充填施文している。また、山形突起間の２単位の区画文間には山形突起に施されたものと同様の１対の対峙する弧状沈線文が配される。胴部下半には山形突起の頂部に対応した位置及び２つの山形突起間に対応した位置に下半が大きい「８」字状沈線区画文（大小の楕円文を上下に配した感じを呈すが、文様施文にあたり、一連の沈線によって文様区画される。）を８単位配し、下位区画内にＲＬ原体で斜行縄文を充填施文している。さらに、各「８」字状沈線区画文の下位すなわち胴部下半を波状沈線が巡っている。縄文が施文されるのは区画内のみであり、区画外は丁寧に磨かれている。胎土には粗い砂粒ないしは小石が多く含有される。56は全体的に内湾する深鉢形土器で、口縁部は内傾する。口縁部には４単位の山形突起を有し、突起の頂部は棒状工具の側面圧痕による２本の刻みが施されている。口縁部は複合口縁を呈し、丁寧に磨かれた後に円形竹管により刺突列がめぐる。胴部の文様は地文にＲ撚糸文が全体に施され、その上に沈線で文様が描かれている。まず、複合口縁直下と胴部下半に沈線を一条めぐらし、この上下沈線間に次の文様が描かれている。山形突起の下に大きく二重の楕円文が施され、その中に鎖状になりきっていない「Ｓ」字状の沈線が広く施され、さらにその中を沈線で埋めている。この文様が各山形突起の下に施されている。

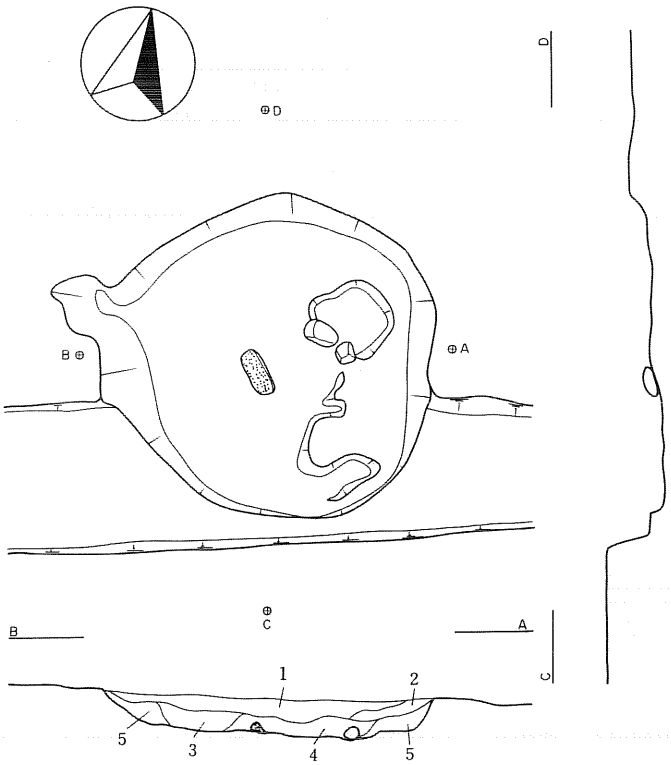
第18図　SI13竪穴住居跡出土遺物(4)

また、各楕円文の間のすき間に二本一組の沈線が山形に描かれ、その頂部から「Ｓ」字状入組文が縦に施されている。胎土は比較的精選された粘土を使用している。煤状炭化物が多く付着している。口径18.2cm、現高27.5cmである。57は、底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、胴部上半でくびれ、再び直立気味に立ち上がる深鉢形土器である。ほぼ全面に直前段反撚の原体を縦位回転施文し、胴部下半にはヘラ状工具による縦位の磨きが施されている。底縁部には棒状工具による斜位の調整が観察される。２次加熱の痕跡として、①器面の赤色変化、②煮こぼれ痕、③煤状炭化物の付着等が認められる。胎土は比較的精選された粘土を使用している。口径20.3cm、現高27.5cmである。58は底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、頸部がくびれた後、再び直線的に外傾しながら口縁部に至る深鉢形土器である。口縁部は内側に「く」の字状に屈曲し、７単位の山形突起を有す。突起の頂部には２個１対の円形竹管文が施され、頂部下には中に円形刺突文を持つ円形沈線文を施し、口縁には、各突起間を連絡するように沈線を巡らしている。頸部は広い無文帯を有し、胴部との境には沈線を横位に施している。胴部の文様は地文にＬ原体を縦位回転した縄文が施され、その上に口縁の山形突起と対応する位置に二重の「Ｕ」字状区画文（中は磨り消し）が７回施される。そして、山形突起の直下から頸部を経て、「Ｕ」字状区画文の中央に連鎖状「Ｓ」字状沈線文が縦に施される。７個の区画文のうち、一個は割付がうまくなかったらしく、「Ｕ」字が狭いため連鎖状「Ｓ」字状沈線文は頸部まででとまっている。口径26.1cm、器高38.5cm、底径10.7cmである。59は胴部上半が張り、口縁部がほぼ直立する形態の大型の粗製深鉢形土器である。口縁には、数単位の山形突起が付されるものと思われ、胴部にはＲＬ原体を縦位回転施文している。器面（内外面とも）には①煤状炭化物の付着（外面が顕著）、②火跳ね（外面底縁部及び内面に顕著）等の２次加熱の痕跡が観察される。胎土には粗い砂粒がやや多く含まれている。口径31.8cm、器高51.5cm、底径10.8cmである。以上の土器は縄文時代中期末葉から後期初頭に属するものと思われる。

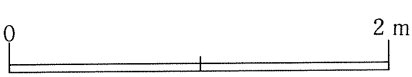
60～66は石器である。60は頁岩の縦長剝片を利用した石匙であろう。61は頁岩の縦長剝片の一端を利用した石錐である。基部には打面が、背面には自然面（礫面）が残存する。62・63は頁岩の縦長剝片を利用したスクレイパーである。63は縁辺を両面から加撃して側縁を調整している。64は凝灰岩製の円盤状石製品である。主に片面から縁辺に加撃して周縁を作り出している。65は所謂「すり石」である。すり面の広がりは把握し難いが平坦面の中央部は特にツルツルしている。石質は安山岩である。66は砂岩質の台石（石皿）と考えられる。片面は使用によるものかやや凹んでいる。

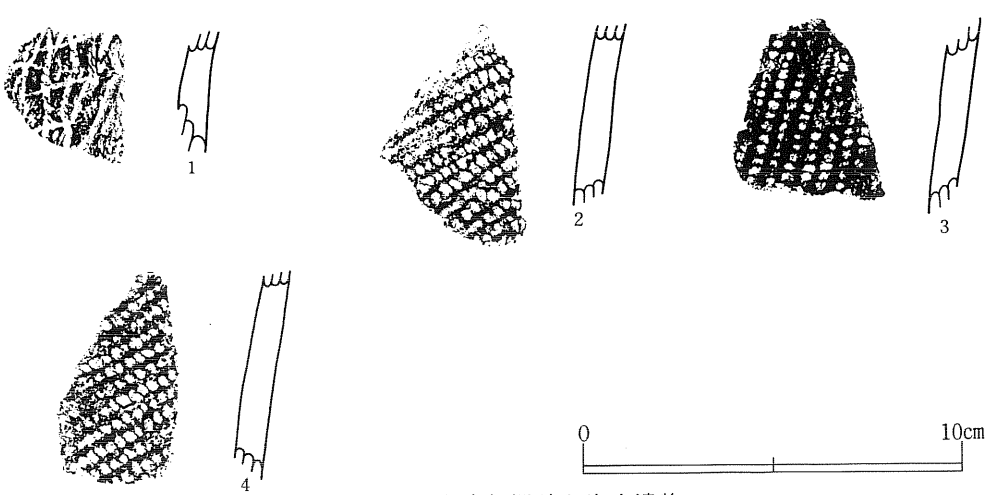


第19図　SI13竪穴住居跡出土遺物(5)



土層註記					
番号	土色	混入物	番号	土色	混入物
1	黒褐 10YR3/2	炭化物・明黄褐色土	2	にぶい黄褐 10YR5/3	炭化物・明黄褐色土
3	にぶい黄褐 10YR5/3	炭化物・5mm～2cm明黄褐色土	4	黒褐 10YR3/2	炭化物・明黄褐色土
5	にぶい黄褐 10YR5/4	炭化物・明黄褐色土			





第20図　SI19竪穴住居跡と出土遺物

ＳＩ19　　（第20図、図版32）

ＭＧ52・ＭＨ52のグリッドで検出した。南半分は試掘時のトレンチにより上部を20～22cm削平されている。プラン確認時にその規模と平面形から土坑と判断しＳＫ19と命名したが、底面に検出した３個の河原石の配置状況とその範囲内の底面の状況などから竪穴住居跡と判断した。西側壁の一部が木根による攪乱・破壊を受けているが、直径170cmの略円形を呈する。プラン確認面から床面までの深さは10～22cmである。床面は堅くよく締まっているが、起伏がある。

床面のほぼ中央に河原石３個を配した石囲炉を検出したが、炉内に焼土・灰等の堆積は確認されず、床面がわずかに赤変・硬化していた。炉の北東側に深さ３～５cm、１辺40cmの方形の掘り込みを検出できたが、床面に柱穴らしいＰｉｔは検出できなかった。また、住居掘り込み外の地山面にも本住居跡に伴う柱穴は確認できなかった。

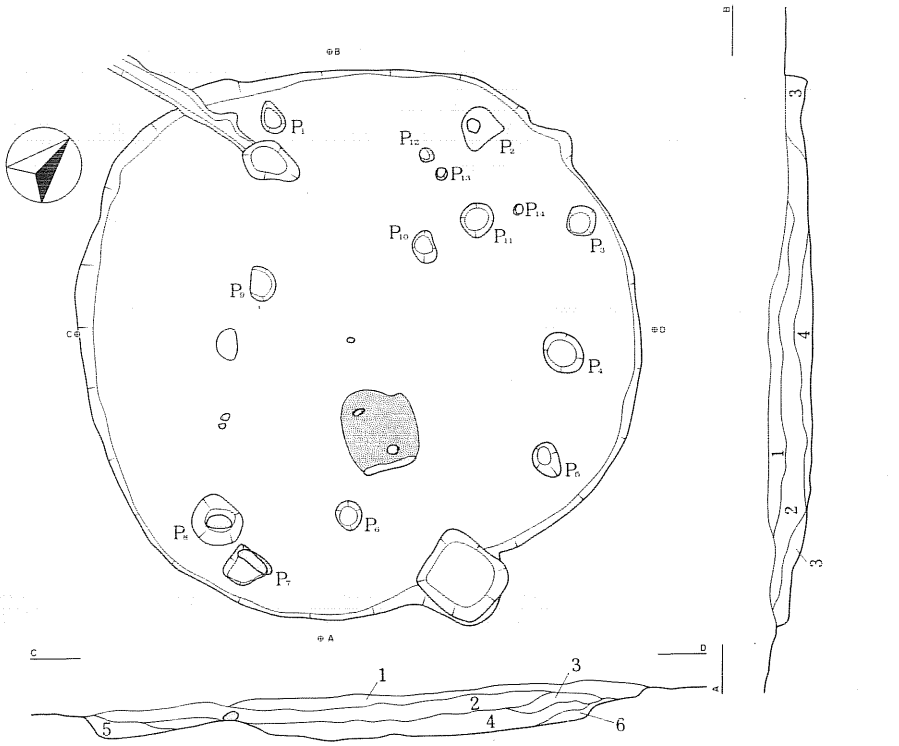
埋土中から縄文土器片５点フレイク１点が出土した。１は２本のＲ撚紐を軸に交差させた網目状撚糸文を施文している。２～４はＲＬ原体を縦位回転施文したものである。これらの土器片は縄文時代後期に属するものと思われる。

ＳＩ101　　（第21図・第22図、図版10・32）

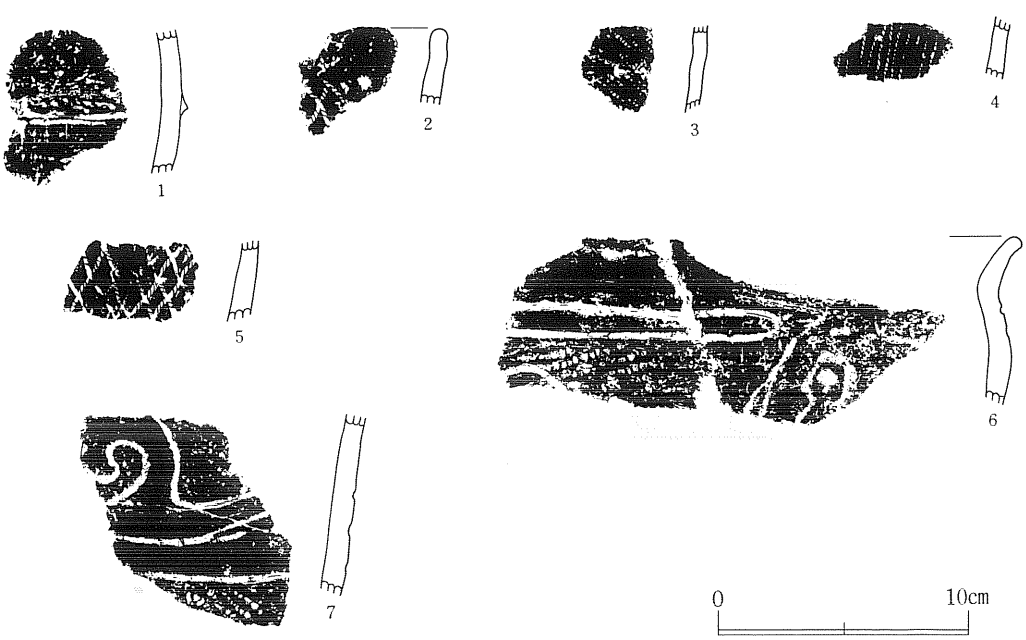
第Ｉ郭の南端に近いＬＣ39、ＬＤ38・39、ＬＥ39のグリッドで中世の柵列跡であるＳＡ117と重複した状況で検出し、微細な炭化材片を多量に混入するにぶい褐色土の範囲を拡大するようにしてプラン確認を行った。長径456cm、短径442cmの略円形プランを呈し、プラン確認面から床面までの深さは８～30cmである。床面は壁面が幅30～100cmの帯状に、中央床面より10～20cm高く残されていたが、全体的に凹凸が多い。炉は中央からやや南東寄りに、扁平な河原石を立てた地床炉である。焼土・灰等の堆積は確認できなかったが、河原石の北西側床面が、直径40cmの範囲で赤変・硬化していた。柱穴様ピットが床面上に14カ所（P_1～P_{14}）検出されたが、そのうち直径20cm以上の11カ所（P_1～P_{11}）が柱穴と考えられる。このうち３カ所の柱穴内（P_2・P_7・P_8）には、扁平な河原石が検出された。

埋土中から少量の縄文土器片と石器６点・フレイク７点が出土した。

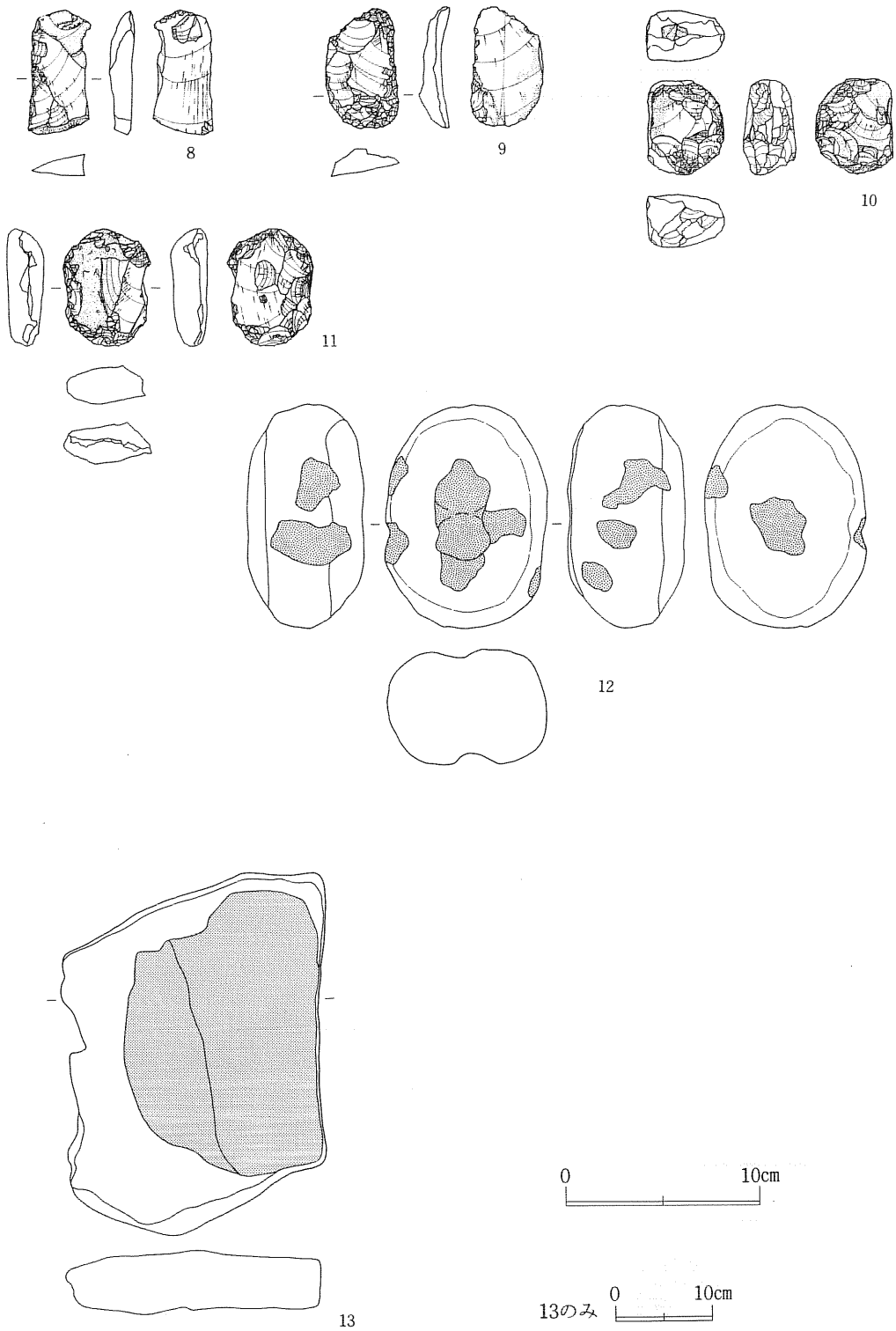
１は口縁に平行に口縁部と胴部を区切る隆線を横走させ、隆線上に刻みを施している。口縁部は無文とし胴部には撚糸文を施している。比較的もろい土器である。２・５は２本のＲ撚紐を軸に交差させた網目状撚糸文を施文している。４はＲ撚糸文を施している。３は細いＬ原体を縦位回転施文している。６・７は沈線で区画文を描き、無文部と縄文部を対置している。２点とも区画内を磨いて無文としている。６は口縁部が外反する深鉢形の土器と思われる。口縁部は無文で丁寧に磨かれている。また、６の胴部には中央に円形の刺突を持つ直径約1.7cmのボタン状貼付文が施されている。６の地文はＬＲ原体の斜位回転で施文し、７は同一原体の縦位回転で施文している。６と７は同一個体であろう。以上の土器は縄文時代後期初頭に属する



土層註記							
番号	土色		混入物	番号	土色		混入物
1	にぶい褐	7.5YR5/4		2	褐	10YR4/4	
3	褐	10YR5/4		4	明黄褐	7.5YR6/6	
5	褐	10YR5/4		6	にぶい橙	7.5YR7/4	



第21図　　SI101竪穴住居跡出土遺物(1)



第22図　　SI101竪穴住居跡出土遺物(2)

ものと思われる。

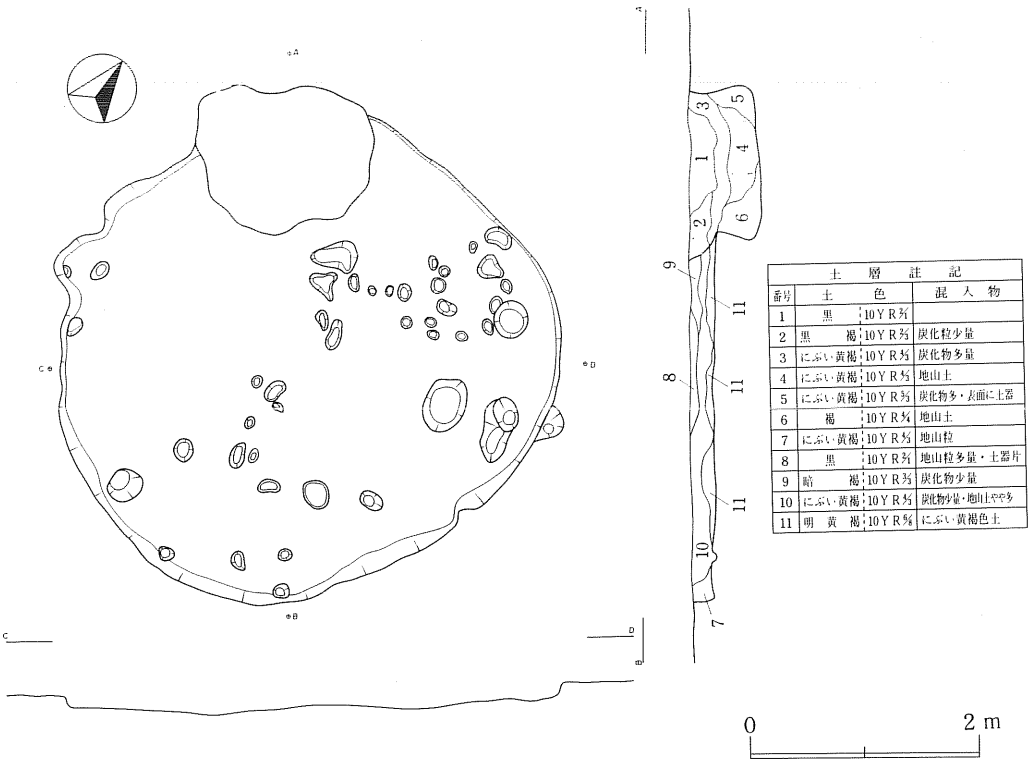
８は縦長剝片を利用し、一側縁に刃部を設けたスクレイパーである。刃部調整は主要剝離面からのみ加撃して行ない、背面には礫面を留めている。石質は玄武岩である。９は縦長剝片を利用し両端と一側縁に細かい調整を施したスクレイパーである。調整は主要剝離面からのみ加撃して、両端を弧状に一側縁を直線に作り出している。石質はメノウである。10・11は周縁に敲打痕・敲打による剝離痕・刃潰れを持つ石器である。主要剝離面を広く留め、背面には礫面が広く残存する。これ自体、石器として作り出されたかどうか疑問であるが、石器を製作する際の道具とは考えられないだろうか。石質は頁岩である。12は所謂「凹み石」であるが、本遺跡分類では「敲磨器ⅠＡ類－ａ」に属する。平坦面の他、両側面にも凹みを持つ。石質は安山岩である。13は床面に備え付けてあった台石である。本遺跡分類では「敲磨器Ⅶ類」に属する。作業面は磨りの作業のみを行なったらしくかなり摩耗している。石質は砂岩である。

ＳＩ102　　（第23図、図版10・32）

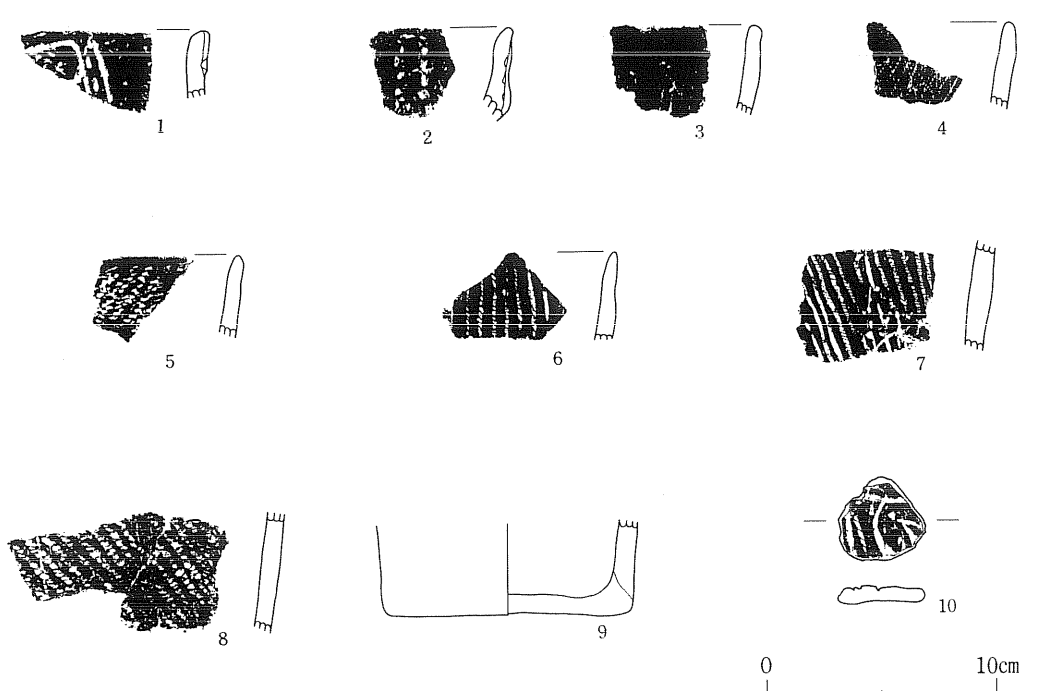
ＬＫ51、ＬＬ51・52のグリッドでＳＫＦ116フラスコ状土坑・ＳＲ106土器埋設遺構・中世掘立柱建物跡と重複した状況で検出した。本住居跡とＳＫＦ116フラスコ状土坑及びＳＲ106土器埋設遺構との新旧関係は、他の２遺構がいずれも本住居跡の廃棄・埋没後に掘り込まれていることが土層観察などで判明したので本住居跡が古い。しかし、ＳＫＦ116とＳＲ106の新旧関係は不明である。長径430㎝、短径400㎝の略円形プランを呈し、プラン確認面から床面までの深さは12～20㎝である。黄褐色～明黄褐色を呈する埋土中には微細な炭化材片が混入していた。床面は大きな起伏をもっているが、中世の掘立柱建物跡に関係すると考えられる柱穴や木根による攪乱・破壊もみられた。炉は明確に確認できなかったが、ＳＲ106土器埋設遺構の北西側埋土中に焼土の堆積が確認されている。柱穴様ピットは多数検出されたが、本住居跡に伴う柱穴かどうか明確にできなかった。

埋土中から少量の縄文土器片とフレイク３点が出土した。

１・２は口唇部から隆線を垂下させ、隆線上（１）ないし隆線に沿って（２）刺突を施している。１は隆線によって無文部と縄文部とを対置させ、無文部を丁寧に磨いている。３・４は２本のＲ撚紐を交差させた網目状撚糸文を施文している。３には撚紐を巻き付けた軸棒の痕跡が施文方向と直交して認められるが、その素材は特定できない。５はＲＬＲ原体を縦位回転施文した後、沈線を引いている。６・７はＲ撚糸文を施文している。３は口縁部に無文帯を設けているが、６には見られない。８・９は同一個体と思われる土器で胴部にＬＲ原体を縦位回転施文している。10は土器片再利用の円盤状土製品である。断面「Ｖ」字状の弧状ないし直線的な沈線が描かれている。以上の土器は縄文時代後期初頭から前葉に属するものと思われる。



土層註記			
番号	土色		混入物
1	黒	10YR2/1	
2	黒褐	10YR3/3	炭化粒少量
3	にぶい黄褐	10YR4/3	炭化物多量
4	にぶい黄褐	10YR5/3	地山土
5	にぶい黄褐	10YR5/3	炭化物多・表面に土器
6	褐	10YR4/4	地山土
7	にぶい黄褐	10YR5/3	地山粒
8	黒	10YR2/1	地山粒多量・土器片
9	暗褐	10YR3/3	炭化物少量
10	にぶい黄褐	10YR5/3	炭化物少量・地山土やや多
11	明黄褐	10YR6/6	にぶい黄褐色土



第23図　SI102竪穴住居跡と出土遺物

ＳＩ105　（第24図、図版11・34）

第Ⅲ郭の南東端部のＫＭ56・57、ＫＬ57のグリッドで検出したが、東側壁の一部は中世以後の崩落により欠失していた。直径320cmの略円形プランを呈し、プラン確認面から床面までの深さは16～22cmである。埋土中には微細な炭化材片が多量に混入していた。床面は平坦で堅緻であった。床面中央から西寄りに長大な３本の河原石を組合せた、開口部を西側（壁側）にもつ「コ」の字形の石組炉を検出した。石組内に焼土・灰等の堆積や炉床の赤変・硬化を確認できなかったが、この付近の埋土中には炭化材片・焼土の混入する極暗赤褐色土が堆積しているのが土層観察で確認された。柱穴様ピットは５カ所検出した。埋土中からほぼ１個体分の深鉢形土器の破片が出土したが、接合が困難で図化できなかった。１～５はＬ原体を縦位回転施文したものである。５は土器片を再利用した円盤状土製品である。縄文時代後期に属する土器であろう。

ＳＩ106　（第24図、図版11）

ＬＣ44・45、ＬＤ44・45のグリッドの明黄褐色を呈する地山面に微細な炭化材片が極少量混入し、周囲より水分量の多いにぶい黄褐色土の「シミ」が確認された。平面的にそのプランを把握することに努めたが検出できず、断面観察でその範囲を不明確ながら検出し、「シミ」状の範囲を掘り下げると扁平な小さい河原石を馬蹄形に配置した石組炉が検出され、その周囲にも河原石が出土した。炉は長さ80cm、開口部幅40cmである。炉床は若干赤変・硬化しており、その中からボロボロになった縄文土器片１点が出土した。他に遺物は出土しなかった。

（３）土坑とその出土遺物

①　フラスコ状土坑

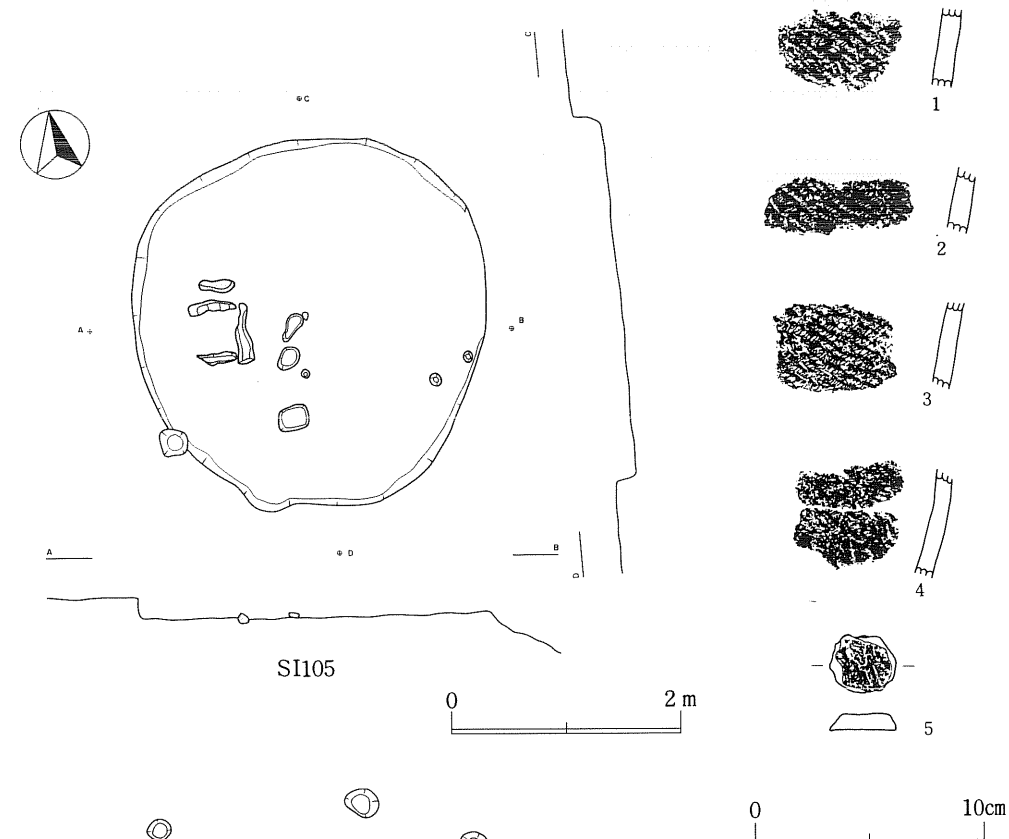
ＳＫＦ116　（第25図・第26図１～10、図版13・34・35）

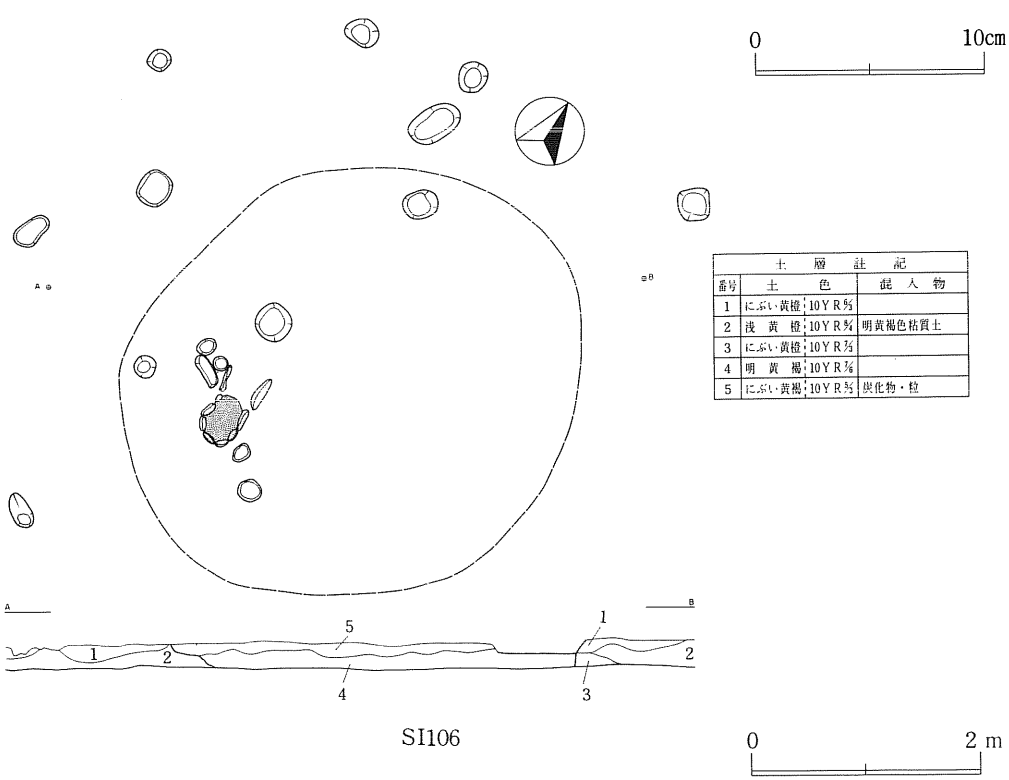
ＬＬ51グリッドでＳＩ102竪穴住居跡と重複する状態で検出したが、本土坑がＳＩ102の埋土を掘り込んでいることから本土坑の方が新しい。

開口部は長軸154cm、短軸116cmの不整な楕円形を呈する。60～65cmの深さで底面に達するが、底面のプランは長軸170cm、短軸138cmの楕円形を呈し、平坦である。開口部から約25cmの深さでくびれをもっている。埋土には微細な炭化材片が多く混入しているが、壁面の崩落と思われる地山土の堆積も認められる。埋土中から復原・図化の可能な壺形土器１点、深鉢形土器２点の他、少量の土器片、石器２点、フレイク５点が出土し、底面からも復原・図化の可能な深鉢形土器が５点と少量の土器片が出土した。

１～５が坑底面より出土した土器である。２と３は重なって、１はその隣より検出された。

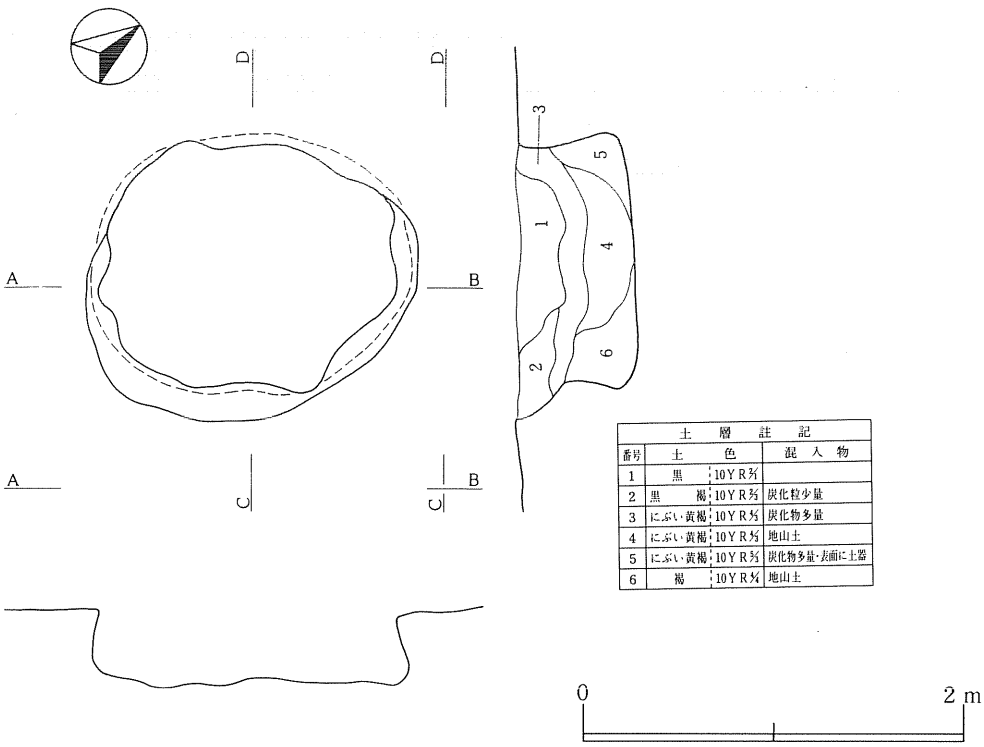
１は胴部全面に刺突を施した台付鉢形土器である。刺突は棒状工具により、器面に対し横方



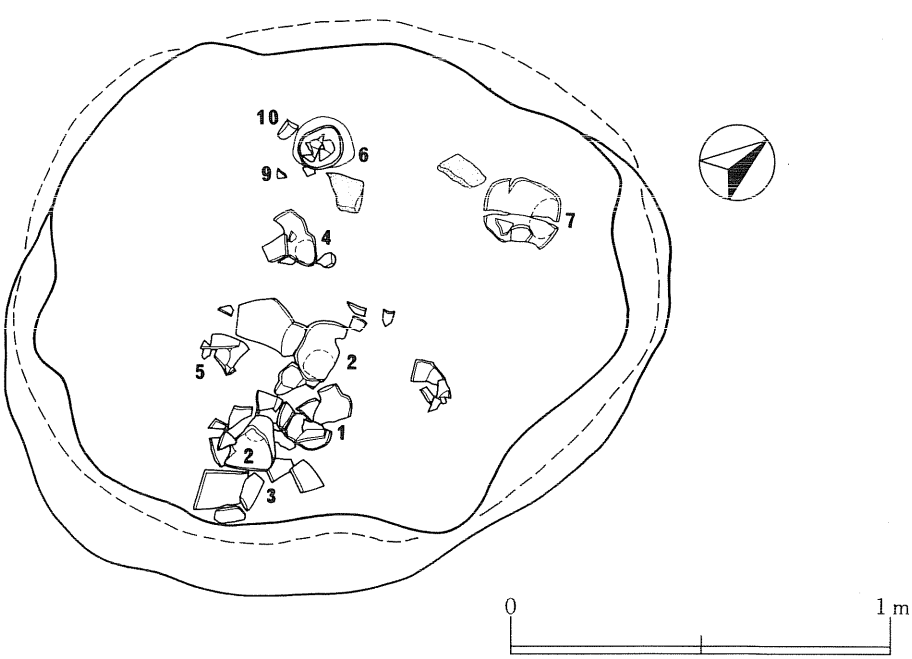


土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	にぶい・黄橙	10YR6/3	
2	浅　黄　橙	10YR8/4	明黄褐色粘質土
3	にぶい・黄橙	10YR7/3	
4	明　黄　褐	10YR7/6	
5	にぶい・黄褐	10YR5/3	炭化物・粒

第24図　SI105竪穴住居跡と出土遺物及びSI106竪穴住居跡



土層註記			
番号	土色		混入物
1	黒	10YR2/1	
2	黒褐	10YR3/2	炭化粒少量
3	にぶい黄褐	10YR5/3	炭化物多量
4	にぶい黄褐	10YR5/3	地山土
5	にぶい黄褐	10YR5/3	炭化物多量・表面に土器
6	褐	10YR4/4	地山土



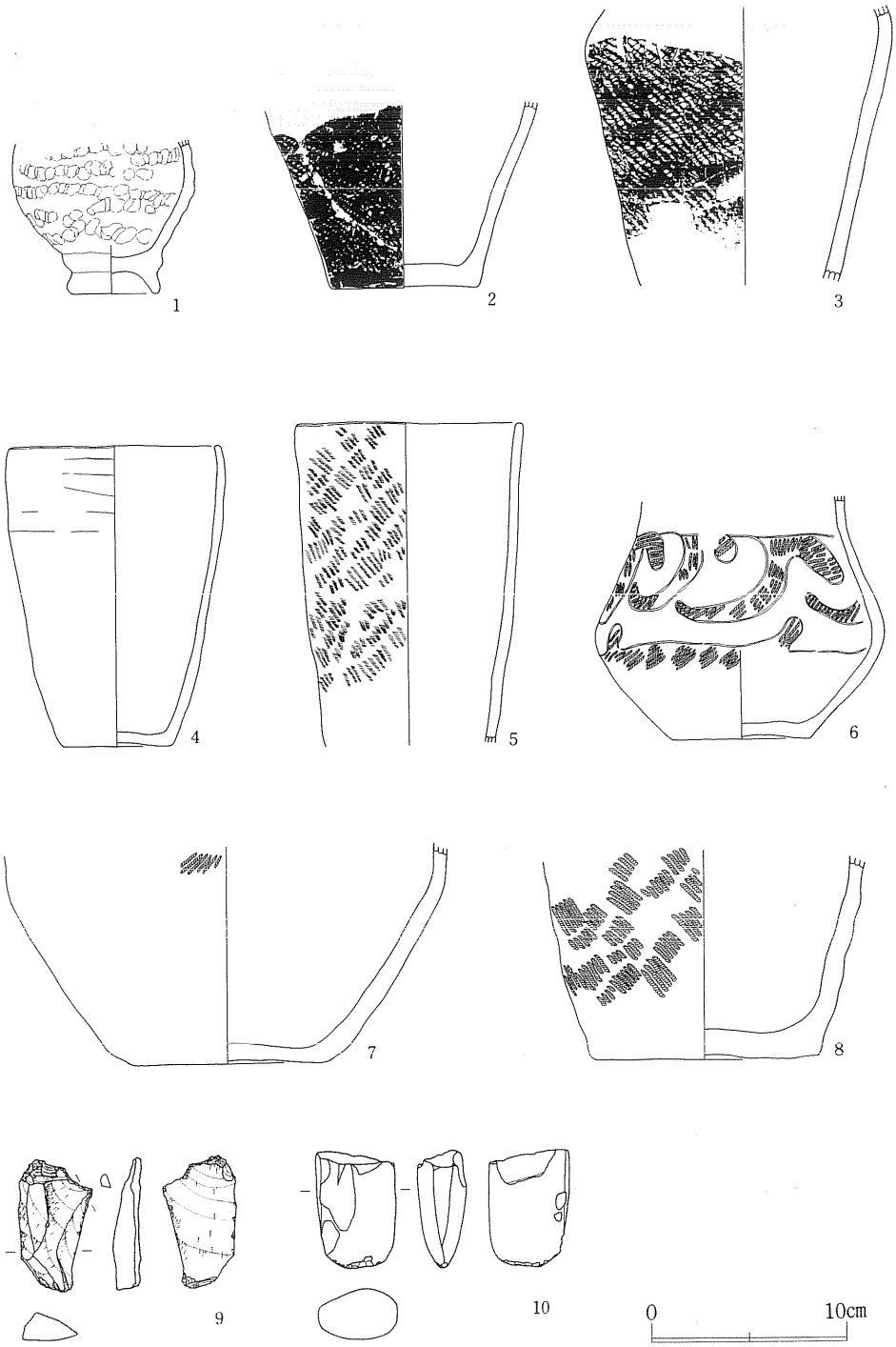
第25図　　SKF116フラスコ状土坑

向に、器面の粘土を抉り取る感じで行っている。刺突文の一端には抉り取られずに押し寄せられた粘土が鰭状に盛り上がるものもある。刺突文は整然とではないが横走刺突列をなしている。台部と胴部の境には微隆線が一周し、胴部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は欠損する。内面には煤状炭化物が付着し、胎土には砂粒を非常に多く含む。現高7.9cm、底径4.5cmである。2は胴部上半を欠損する深鉢形土器である。胴部にはL原体を縦位回転施文し、底縁部を丁寧に磨いている。底部には置き台の痕跡が認められる。胎土に含まれる砂粒は比較的少なく、内面は丁寧に磨かれ光沢を帯びている。現高9.5cm、底径7.6cmである。3は口縁部と底部を欠損する深鉢形土器である。下半において直線的に外傾していた胴部が上半において急に内湾し肩を形成する。全面にL原体の縦位回転施文が施される。胎土は2と同様で、砂粒の含有が少なく、内面も丁寧に磨かれている。4・5は小形の深鉢形土器である。現高14.2cm、最大胴径15.7cmである。4は胴部上半に、粘土紐積み上げ痕が明瞭に認められる。つまり、胴部上半には器面調整が施されていない。全面無文である。また、外面は2次加熱を受けている。5は全面にL原体を縦位回転施文したほぼ直線的に立ち上がる胴部を持ち、底縁部は丁寧に磨かれている深鉢形の土器である。内面の口縁部付近と底部付近は横位に、胴部は縦位に丁寧に磨かれている。胎土に2～4㎜の小石が若干混入する。口径11.3cm、現高16.7cmである。

6～8は覆土中より出土した。6は胴部ほぼ中央に最大径を持つ壺形土器である。頸部に直線的な細沈線を一周させ、最大径を持つ部位付近に5単位の波頭文を持つ細沈線を巡らす。この両沈線間に波頭文に対応して、細沈線による横位の「S」字状区画文を5単位、さらに空白部にもう1単位の横位「S」字状区画文を描いている。この横位「S」字状区画文は頸部の直線的な沈線に規制を受け、上位がやや変形している。区画文内、波頭文下には縄文が施文され、無文部と対置される。波頭文下（胴部下半）の原体回転方向は横位のみであるのに対し、区画文内は、横位の他、左上から右下へ斜位、右下から左上への斜位の3方向から施文している。使用原体は細いLR原体である。内外面ともに赤色塗彩の名残があり、胎土には砂粒が比較的多く含む。現高12.5cm、最大径14.9cm、底径7.0cmである。7は、6よりも大形の壺形土器であろう。部分的に観察できる縄文は細いLR原体を回転施文したものである。内面も丁寧に磨かれている。底面には網代痕が、内外面には赤色塗彩の名残が認められる。現高11.3cm、底径10.0cmである。8は胴部にLR原体を縦位回転施文し、底縁部を丁寧に磨いた比較的厚手の深鉢形土器である。現高10.9cm、底径11.8cmである。

以上の土器は縄文時代中期末葉から後期初頭に属するものと思われる。

9は縦長剝片の縁辺に調整を施し、一側縁に石錐の錐部様の部分を持つ石器である。石錐の可能性が強い。石質は頁岩である。10は基部を欠損する磨製石斧で、刃縁部分をは使用により刃潰れを生じている。石質は安山岩である。



第26図　SKF116フラスコ状土坑出土遺物

② 土坑・土壙墓

ＳＫ02　（第27図）

ＬＴ49、ＭＡ59のグリッドで検出した。平面形は直径80cmの略円形を呈する。プラン確認面から凹凸のある底面までの深さは14～16cmである。埋土は、微細な炭化材を少量混入する暗褐色土である。遺物は埋土中からフレイクが１点出土したのみである。

ＳＫ03　（第27図）

ＬＲ61・62、ＬＳ60・61のグリッドで検出した。平面形は、長径70cm、短径65cmの略円形を呈する。プラン確認面からほぼ平坦な底面までの深さは20cmである。埋土は、微細な炭化材を少量混入する黒褐色土である。遺物は埋土中から縄文土器片が２点出土した。図示できたのは１点のみであるが、２本のＲ撚紐を軸に交差させた網目状撚糸文を施している。縄文時代後期に属するものである。

ＳＫ07　（第27図、図版12・36）

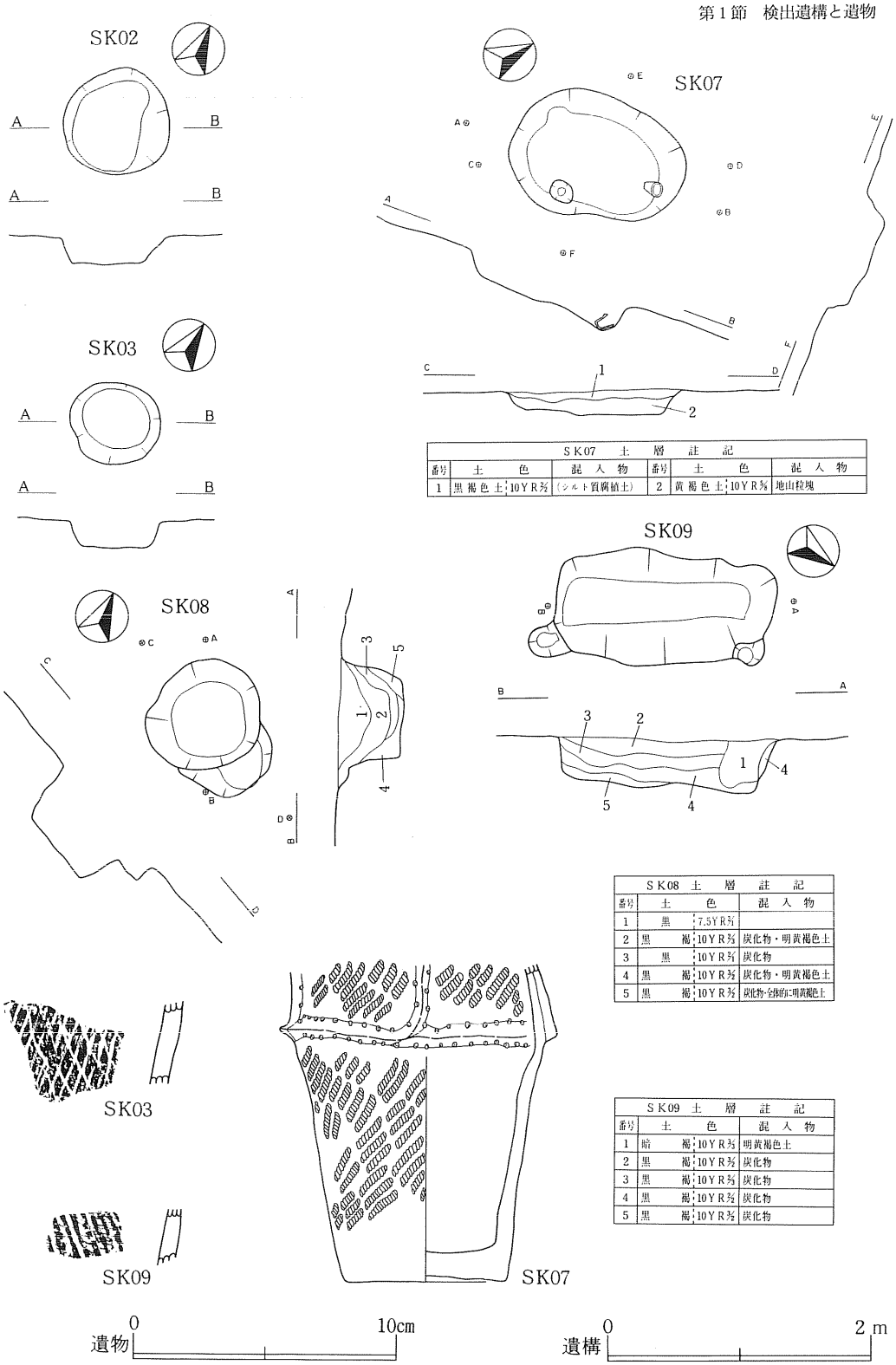
ＭＬ43・44グリッドで検出した。平面形は北東―南西に長軸方向をとり、長軸135cm、短軸84～96cmである。北東側壁下方の底面上に傾斜した状態で小型の深鉢形土器が１個体出土した。この土器内の土壌を密封し、花粉分析用試料とした。胴部は直線的に横走する隆線に、おそらく口唇部から垂下すると思われる４本の隆線が接するものである。隆線の両脇に円形竹管による刺突列を施す。横走する隆線を境にして、底部からの立ち上がり角度と口縁部（口唇部に至る胴部上半）の立ち上がり角度は変化する。全面にＲＬ原体を縦位回転施文した地文を施している。現高12.3cm、底径6.0cmを計測である。縄文時代後期初頭に属するものと思われる。

ＳＫ08　（第27図）

ＭＪ47グリッドで検出した。プラン確認時には２基の土坑が重複しているように判断したが、埋土の堆積状況の観察により、単一の土坑であることがわかった。平面形は長径90cm、短径80cmの略円形を呈し、プラン確認面から平坦な底面まで46cmの深さを有する土坑の南東側に幅70cm、奥行20cm、深さ17cmの張り出し部が付設されていた。埋土中に微細な炭化物が少量混入していた。遺物は埋土中から縄文土器片３点とフレイク５点が出土した。

ＳＫ09　（第27図）

ＭＫ50グリッドで検出した。プラン確認時にＴ－Pitと判断したが、断面形状から土坑と判断した。平面形は北西―南東に長軸方向をもち、長さ167cm、幅85cmの長方形プランを呈する。プラン確認面から凹凸の激しい底面までの深さは35～42cmである。埋土中に微細な炭化材片を多く混入していた。遺物は埋土中からＲ撚糸文を施文した縄文土器片が１点出土した。



ＳＫ07　土　層　註　記							
番号	土	色	混入物	番号	土	色	混入物
1	黒褐色土	10ＹＲ3/2	(シルト質腐植土)	2	黄褐色土	10ＹＲ5/6	地山粒塊

ＳＫ08　土　層　註　記			
番号	土	色	混入物
1	黒	7.5ＹＲ3/1	
2	黒褐	10ＹＲ3/2	炭化物・明黄褐色土
3	黒	10ＹＲ3/1	炭化物
4	黒褐	10ＹＲ3/2	炭化物・明黄褐色土
5	黒褐	10ＹＲ3/2	炭化物・全体的に明黄褐色土

ＳＫ09　土　層　註　記			
番号	土	色	混入物
1	暗褐	10ＹＲ3/3	明黄褐色土
2	黒褐	10ＹＲ3/2	炭化物
3	黒褐	10ＹＲ3/3	炭化物
4	黒褐	10ＹＲ3/2	炭化物
5	黒褐	10ＹＲ3/2	炭化物

第27図　SK02・03・07～09土坑と出土遺物

ＳＫ10　（第28図）

ＭＫ51・52グリッドで検出した。平面形は一辺106～112cmの隅丸方形を呈し、プラン確認面から凹凸の大きい底面までは20～36cmである。埋土中に微細な炭化材片を多く混入していた。遺物は埋土中からフレイクが１点出土した。

ＳＫ11　（第28図）

ＭＫ49グリッドで検出した。平面形は、長径90cm、短径80cmの略円形を呈し、プラン確認面から凹凸のある底面までの深さは12～18cmである。埋土は、微細な炭化材片を少量混入する暗褐色土である。埋土中からスクレイパーが１点、フレイクが１点出土した。スクレイパーは端が尖頭状を呈することにより「スクレイパーＩＡ類」に属する。基部に打面が残存し、尖端部を除く縁辺は主要剥離面からのみ加撃して調整を施している。尖端部は両面からの加撃調整により石錐の錐部に近似する。石質は頁岩である。

ＳＫ14　（第28図）

ＬＱ43・ＬＲ43グリッドで検出した。平面形は北西―南東に長軸方向をとり、長径182cm、短径140cmの不整な楕円形を呈し、プラン確認面からほぼ平坦な底面までの深さは20～25cmである。西側に若干の張り出しが認められる。埋土を４層に分層したが、中位に焼土を若干混入する層や微細な炭化材片を多量に混入する層が堆積していた。遺物は埋土中から微細な縄文土器片が１点出土した。

ＳＫ20　（第28図）

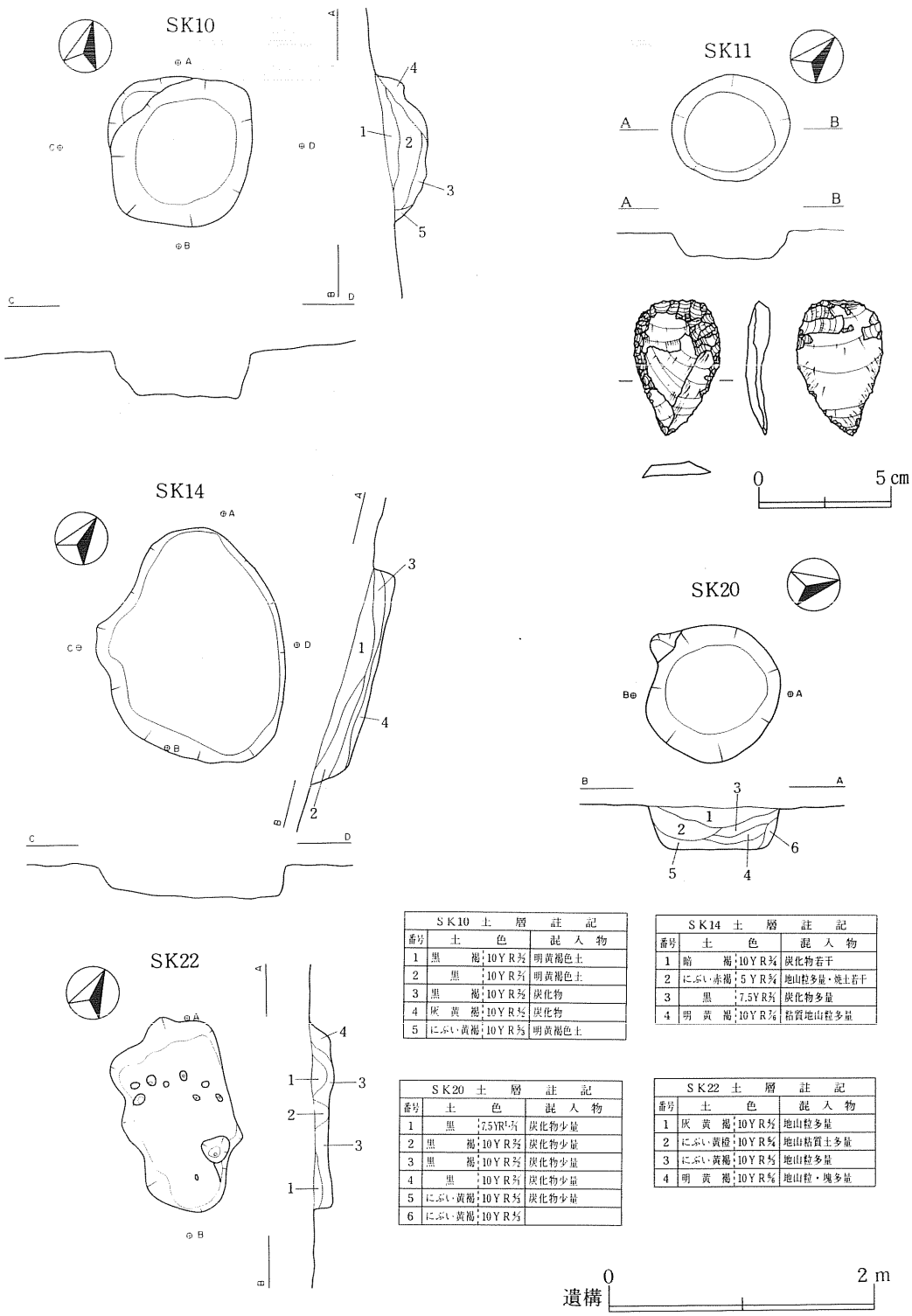
ＭＤ48グリッドで検出した。平面形は長径104cm、短径95cmの略円形を呈し、プラン確認面から平坦な底面までの深さは30cmである。埋土中に微細な炭化材片が少量混入していた。遺物は埋土中から縄文土器片が１点出土したにとどまった。

ＳＫ22　（第28図）

ＭＤ47グリッドで検出した。平面形は北西―南東に長軸方向をとり、長さ150cm、幅82cmの不整な長方形を呈し、プラン確認面から凹凸があり、木根による攪乱のある底面までの深さは12～19cmである。埋土に地山粒・塊が多量に混入し、腐植土がほとんど確認できないことから埋め戻されたのではないかと推測された。遺物は埋土中からフレイクが１点出土したにとどまった。

ＳＫ23　（第29図）

ＭＣ47・48、ＭＤ47・48のグリッドで検出した。平面形は略南―北に長軸方向をとり、長さ120cm、幅85cmの不整な隅丸長方形プランを呈し、プラン確認面から凹凸の大きい底面までの深さは13～28cmである。埋土には黄橙色を呈する地山粒・塊の混入が多い。遺物は埋土中から細いＲＬ原体が縦位回転施文された縄文土器片１点とフレイク１点が出土した。



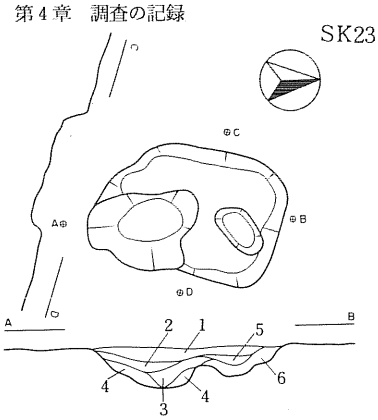
SK10 土層註記			
番号	土色		混入物
1	黒褐	10YR3/2	明黄褐色土
2	黒	10YR2/1	明黄褐色土
3	黒褐	10YR3/2	炭化物
4	灰黄褐	10YR4/2	炭化物
5	にぶい黄褐	10YR5/3	明黄褐色土

SK14 土層註記			
番号	土色		混入物
1	暗褐	10YR3/4	炭化物若干
2	にぶい赤褐	5YR3/4	地山粒多量・焼土若干
3	黒	7.5YR3/1	炭化物多量
4	明黄褐	10YR7/6	粘質地山粒多量

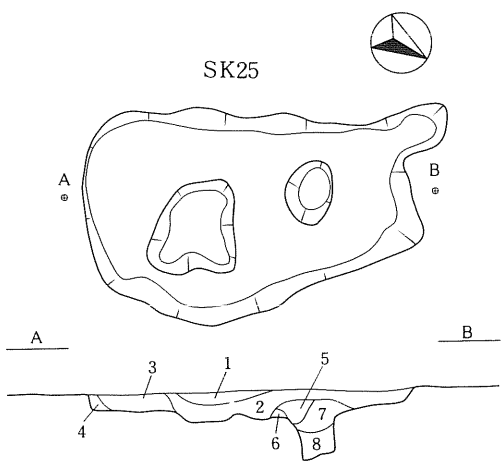
SK20 土層註記			
番号	土色		混入物
1	黒	7.5YR1.7/1	炭化物少量
2	黒褐	10YR3/2	炭化物少量
3	黒褐	10YR3/2	炭化物少量
4	黒	10YR2/1	炭化物少量
5	にぶい黄褐	10YR4/3	炭化物少量
6	にぶい黄褐	10YR4/3	

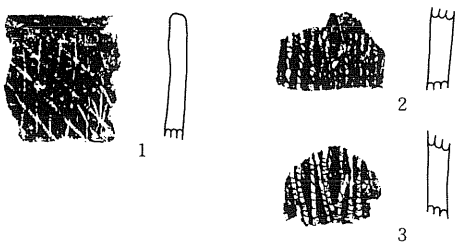
SK22 土層註記			
番号	土色		混入物
1	灰黄褐	10YR3/2	地山粒多量
2	にぶい黄橙	10YR6/4	地山粘質土多量
3	にぶい黄褐	10YR5/3	地山粒多量
4	明黄褐	10YR6/6	地山粒・塊多量

第28図　SK10・11・14・20・22土坑と出土遺物

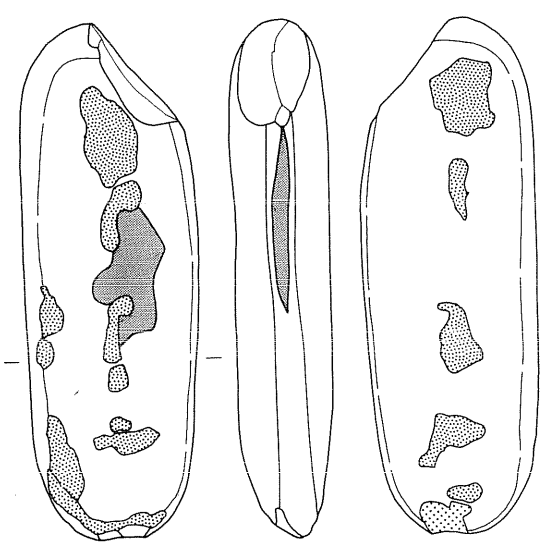


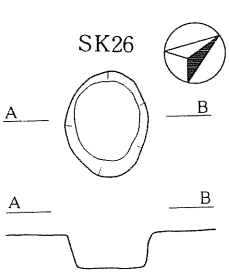
SK23 土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	黒	10YR1/2	(シルト質)
2	にぶい・黄褐	10YR5/3	地山粒多量
3	暗　褐	10YR3/3	地山粒・炭化物
4	黄　褐	10YR5/6	地山粒多量
5	黒　褐	10YR3/2	地山粒
6	黄　褐	10YR5/6	地山粒・塊

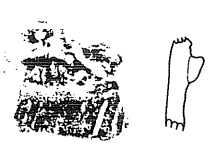




SK25 土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	黒　褐	10YR3/2	炭化物
2	黒　褐	10YR3/2	炭化物
3	にぶい・黄褐	10YR5/3	炭化物
4	にぶい・黄褐	10YR5/3	黄褐色土
5	にぶい・黄褐	10YR5/3	炭化物
6	にぶい・黄褐	10YR5/3	明黄褐土
7	にぶい・黄褐	10YR5/3	炭化物
8	にぶい・黄褐	10YR5/3	炭化物







遺物 0　5 cm

遺構 0　2 m

第29図　SK23・25・26土坑と出土遺物

ＳＫ25　（第29図）

ＭＡ51、ＭＢ51グリッドで検出したが、他遺構の柱穴と重複していた。平面形は、北西―南東に長軸方向をとり、長さ215cm、幅82～136cmの不整な隅丸長方形を呈し、プラン確認面から凹凸の大きな底面まで９～20cmの深さである。埋土中には微細な炭化材片が多く混入していた。遺物は埋土中から縄文土器片が６点、石器が１点、フレイクが１点出土した。

１は２本のＲの撚紐を軸に交差させた網目状撚糸文を施文し、２・３はＲ撚糸文を施文している。いずれも縄文時代後期に属するものと思われる。４は本遺跡分類「敲磨器Ⅲ類」に属する石器である。しかし、長軸端に敲打による剥離が見られることより「敲磨器ⅣＢ類－ａ」に近似している。両平坦面の凹みは比較的浅く、散在的である。側縁の内、鋭角的な断面を有する側縁には磨りの痕跡が認められる。石質は安山岩である。

ＳＫ26　（第29図）

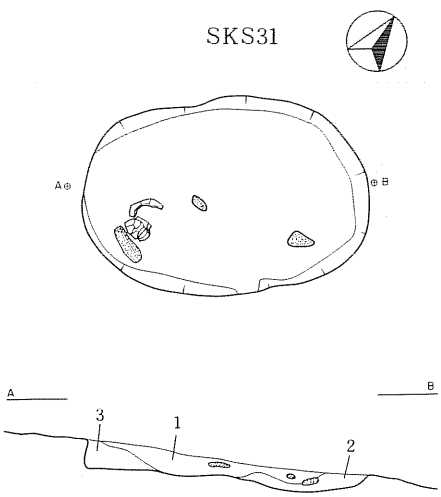
ＭＦ53グリッドで検出した。平面形は、北西―南東に長軸方向をもち長軸70cm、短軸55cmの楕円形を呈する。プラン確認面から凹凸のある床面までの深さは15～20cmである。埋土は黄橙色地山粒を混入する暗褐色土である。埋土中から縄文土器片１点とフレイク１点が出土した。

縄文土器片は、口頸部に上面に爪形刺突を施した隆線を横走させ、隆線の上位には円形竹管による刺突を沿わせている。胴部にはＲ撚糸文が施文されている。この土器は縄文時代後期初頭に属すると思われる。

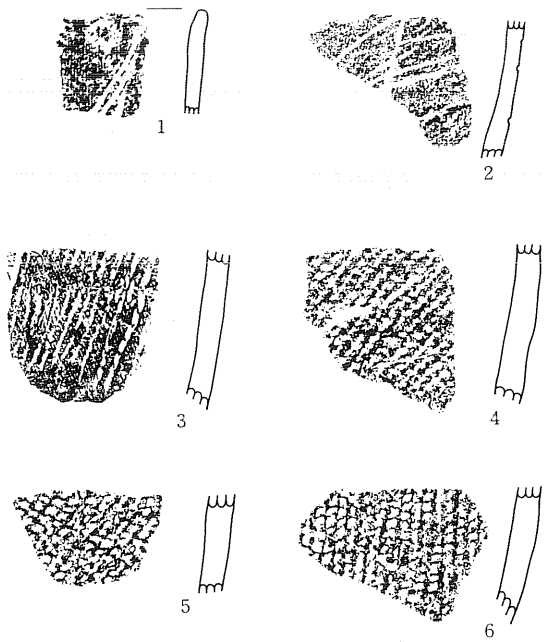
ＳＫＳ31　（第30図、図版12・36）

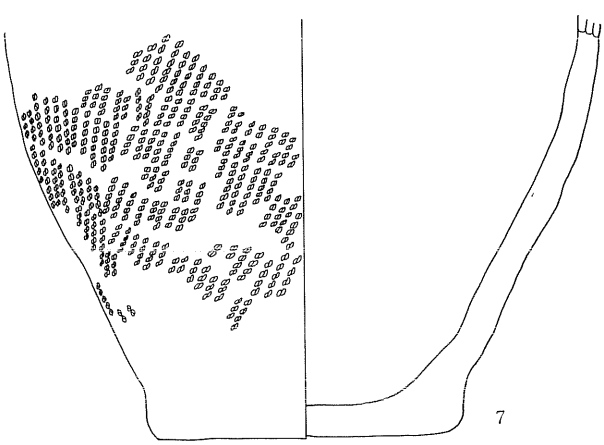
東向き緩斜面のＭＥ53グリッドで検出した。平面形は北東―南西に長軸方向をもち、長軸190cm、短軸130cmの楕円形を呈する。プラン確認面から底面までの深さは12～20cmである。埋土には微細な炭化材片が多量に混入していた。底面は起伏があるが、堅く締まっていた。南側底面上に正立のまま押し潰された状態で上半を欠失した深鉢形土器が出土した。この他埋土中からは、底面上の土器とは別個体の縄文土器片３点とフレイク１点が出土した。

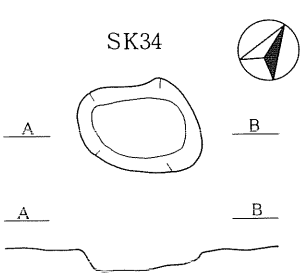
１～３は埋土中から出土した。１は小波状を呈する口縁から直線的な隆線が垂下し、隆線に沿って断面「Ｖ」字状の細い沈線が引かれている。口縁に沿って隆線を貼付していたと思われる痕跡を観察することができる。２は細沈線文が施され、器面を丁寧に磨いている。器面に赤色塗彩が施されていたと思われ、沈線中には赤色顔料が残っている。胎土に非常に多くの砂粒が含まれている割には比較的薄手に作られている。３はＲ撚糸文を施文している。４～７が坑底面より出土した深鉢形土器である。７は胴部が内湾気味に立ち上がり、ＲＬＲ原体を縦位回転施文している。内面には煤状炭化物が薄く付着している。現高14.0cm、底径9.8cmである。

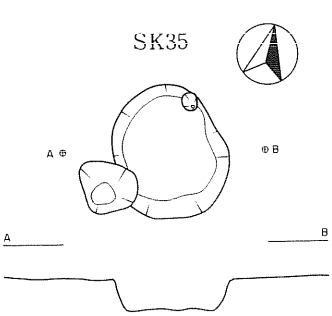


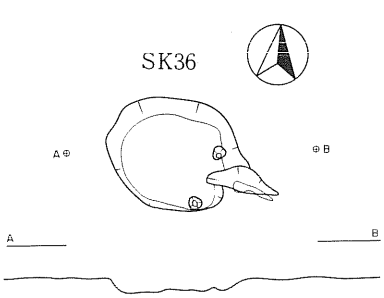
SKS31 土層註記			
番号	土色		混入物
1	黒褐	10YR3/2	炭化物
2	にぶい黄褐	10YR5/3	炭化物
3	オリーブ褐	2.5Y4/6	炭化物











遺物 0 5 cm　　遺構 0 2 m

第30図　SKS31土壙墓・SK34～36土坑と出土遺物

ＳＫ34　（第30図、図版36）

ＭＩ48グリッドで検出した。平面形は北東―南西に長軸方向をもち、長軸80cm、短軸56cmの不整な楕円形を呈する。プラン確認面から底面までの深さは９～14cmである。底面は北東から南西側に傾斜していた。暗褐色土を呈し、微細な炭化材片を少し混入する埋土中からフレイク１点が出土した。

ＳＫ35　（第30図、図版36）

ＭＫ44グリッドで南西側に中世の建物跡の柱穴と重複する状況で検出した。平面形は北西―南東に長軸方向をもち、長軸90cm、短軸70cmの楕円形を呈する。プラン確認面から若干凹凸のある底面までの深さは16～20cmである。埋土は微細な炭化材片を少し混入する黄褐色土である。

遺物は埋土中から文様の磨滅した縄文土器片が１点出土した。

ＳＫ36　（第30図、図版36）

ＭＫ44グリッドで検出した。木根による攪乱が底面にまで及んでいたが、平面形は東―西に長軸方向をもち、長軸90cm、短軸74cmの略円形を呈する。プラン確認面から底面までは非常に浅く、５～８cmである。暗褐色土を呈する埋土中と、底面上から微細な縄文土器片が１点出土した。

ＳＫ37　（第31図、図版36）

ＭＩ42グリッドで検出した。平面形は長軸方向を北西―南東にとり、長軸250cm、短軸100cmの不整な長楕円形を呈する。プラン確認面から平坦な底面までの深さは15～25cmである。黒褐色を呈する埋土中には微細な炭化材片が少量混入していた。遺物は埋土中から縄文土器片２点とフレイク１点が出土した。

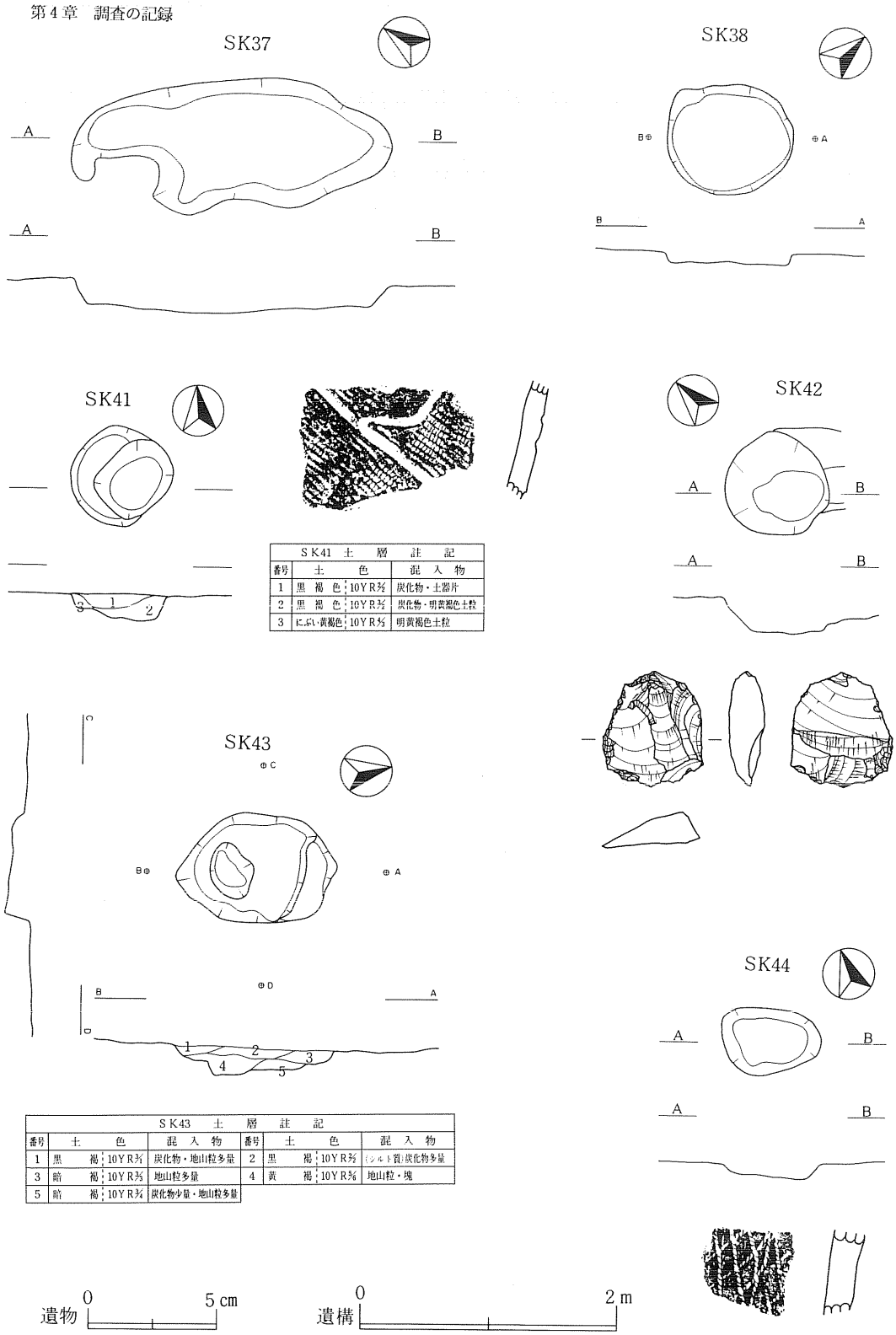
ＳＫ38　（第31図、図版36）

ＭＥ41、ＭＦ41グリッドで検出した。平面形は長径100cm、短径90cmの略円形を呈する。プラン確認面から底面までの深さは６～８cmと浅い。黒褐色を呈する埋土には微細な炭化材片が少量混入していた。遺物は埋土中から微細な縄文土器片１点と礫１点が出土した。

ＳＫ41　（第31図、図版36）

ＬＳ49グリッドで検出した。平面プラン確認時に重複がないと判断したが、精査するにつれ直径80cmの円形を呈し、深さ８～12cmの土坑の埋没後にこの土坑の中央から東側に長さ64cm、幅50cmの隅丸方形を呈する土坑が、12～23cmの深さで掘り込まれたものではないかという疑問がもたれた。土坑内に堆積する埋土の観察でも、重複と判断することが妥当のように思われた。遺物は埋土中から縄文土器片が11片出土した。

ＬＲ原体を縦位回転施文した後、太い沈線文を施しているが、区画内を磨り消すという手法は用いられていない。縄文時代後期に属するものと思われる。



SK41 土層註記			
番号	土色		混入物
1	黒褐色	10YR3/2	炭化物・土器片
2	黒褐色	10YR3/2	炭化物・明黄褐色土粒
3	にぶい黄褐色	10YR5/3	明黄褐色土粒

SK43 土層註記							
番号	土色		混入物	番号	土色		混入物
1	黒褐	10YR3/1	炭化物・地山粒多量	2	黒褐	10YR3/2	シルト質・炭化物多量
3	暗褐	10YR3/3	地山粒多量	4	黄褐	10YR5/6	地山粒・塊
5	暗褐	10YR3/4	炭化物少量・地山粒多量				

第31図　SK37・38・41～44土坑と出土遺物

ＳＫ42　（第31図、図版36）

ＬＳ49グリッドで検出した。平面形は直径80cmの略円形を呈する。プラン確認面から凹凸のある底面までの深さは20～25cmである。埋土は黄橙色地山粒・塊を混入する暗褐色土である。埋土中から縄文土器片が３点、石器が１点出土した。

本遺跡分類「スクレーパーⅡＢ類」に属する石器である。一側縁のみに２次調整が施され、基部には自然面（打面）が残る。素材剝片を取り出した際の打瘤が残る。石質は頁岩である。

ＳＫ43　（第31図、図版36）

ＬＱ52グリッドで検出した。平面形はほぼ南―北に長軸方向をもち、長軸127cm、短軸85cmの不整な楕円形を呈する。プラン確認面から、凹凸の大きい底面までの深さは10～22cmである。埋土には微細な炭化材片のほか黄橙色を呈する地山粒・塊が多量に混入していた。遺物は埋土中から微細な縄文土器片１点とフレイク１点が出土した。

ＳＫ44　（第31図、図版36）

ＬＰ51グリッドで検出した。平面形は略東―西に長軸方向をもち、長軸80cm、短軸53cmの不整な楕円形を呈する。プラン確認面から底面までの深さは７～12cmである。黒褐色を呈する埋土には微細な炭化材が少量混入していた。遺物は、埋土中から縄文土器片４点が出土した。そのうち図示できたのは、２本のＲ撚紐を軸に交差させた網目状撚糸文が施文された土器片１点で縄文時代後期に属する。

ＳＫ45　（第32図、図版37）

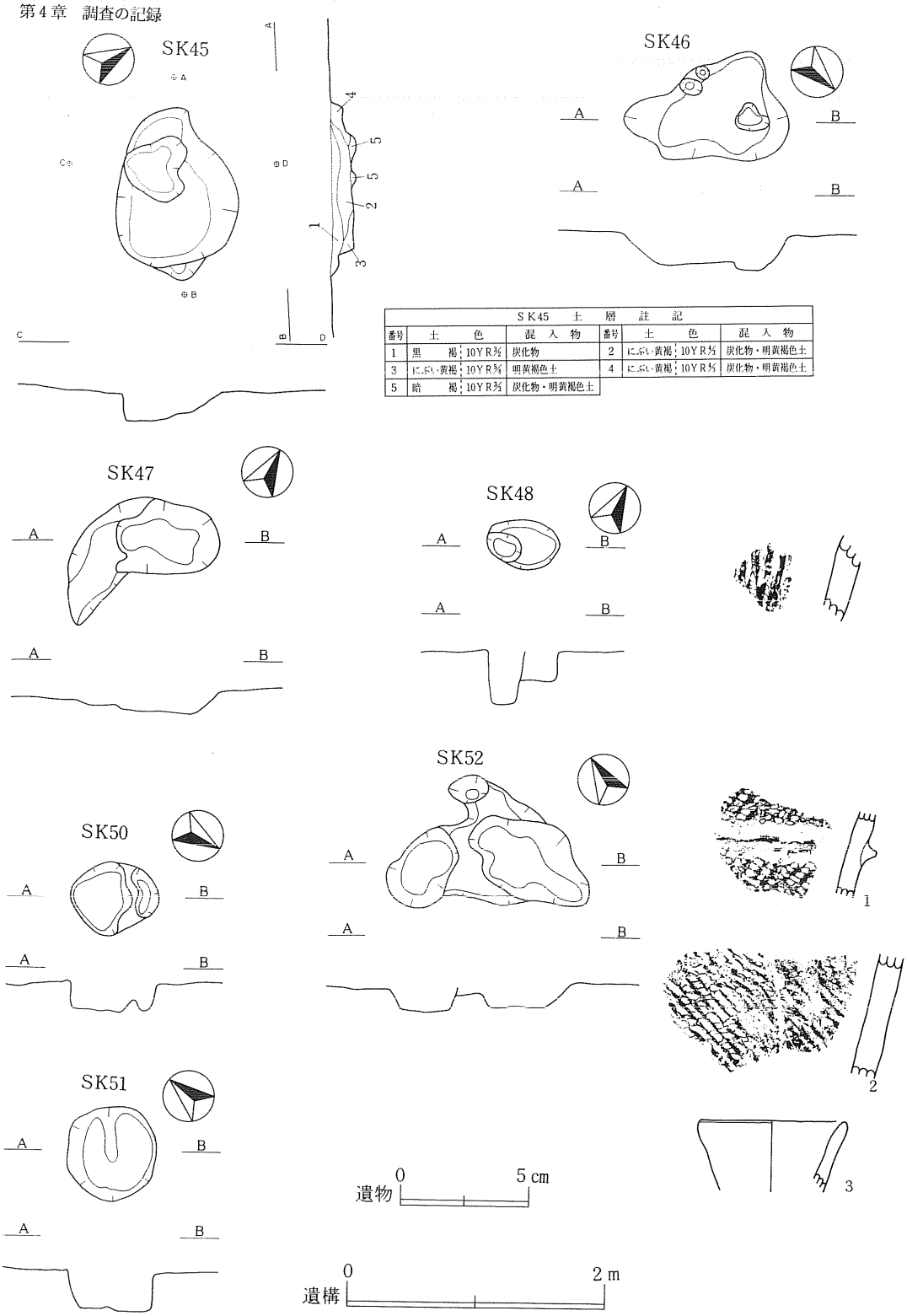
ＬＲ50グリッドで検出した。平面形は北西―南東に長軸方向をもち、長軸120cm、短軸95cmの不整な楕円 形を呈する。プラン確認面から凹凸の大きな底面までの深さは16cm～22cmである。底面の中央から西寄りに大きなくぼみが認められる。埋土に微細な炭化材片と黄橙色地山粒・塊が多量に混入していた。遺物は埋土に中から縄文土器片１点とフレイク２点が出土した。

ＳＫ46　（第32図、図版37）

ＬＰ55グリッドで検出した。平面形は北西―南東に長軸方向をもち、長軸130cm、短軸80cmの不整形を呈する。プラン確認面から底面までの深さは21～27cmである。底面１カ所と壁面２カ所の柱穴様ピットは、本土坑より後世の所産である。埋土は黒褐色を呈し、微細な炭化材片を少量混入していた。遺物は埋土中から縄文土器片１点とフレイク１点が出土した。

ＳＫ47　（第32図、図版37）

ＬＰ55グリッドで検出した。本土坑より古い時期の浅い土坑様落ち込みと重複していた。平面形は南西―北東に長軸方向をもち、長軸90cm、短軸60cmの楕円形を呈する。プラン確認面から底面までの深さは９～16cmである。埋土は黄橙色粒地山粒が少量混入する暗褐色土である。遺物は埋土中から縄文土器片が３点出土した。



ＳＫ45　土　層　註　記							
番号	土　色		混　入　物	番号	土　色		混　入　物
1	黒　褐	10ＹＲ3/4	炭化物	2	にぶい黄褐	10ＹＲ5/4	炭化物・明黄褐色土
3	にぶい黄褐	10ＹＲ5/4	明黄褐色土	4	にぶい黄褐	10ＹＲ5/4	炭化物・明黄褐色土
5	暗　褐	10ＹＲ3/4	炭化物・明黄褐色土				

第32図　　SK45～48・50～52土坑と出土遺物

ＳＫ48　（第32図、図版37）

ＬＯ55、ＬＰ55のグリッドで後世の柱穴様ピットと重複して検出した。平面形は北東－南西に長軸方向をもち、長軸56cm、短軸40cmの楕円形を呈し、プラン確認面から底面までの深さは22cmである。埋土は黄橙色地山粒・塊が多く混入する暗褐色土である。遺物は埋土中からＲ撚糸文を施文した縄文土器片が１点出土した。

ＳＫ50　（第32図、図版37）

ＬＲ52グリッドで検出した。平面プランは北西－南東に長軸方向をもち、長軸68cm、短軸56cmの略円形を呈する。プラン確認面から底面までの深さは20～30cmである。北西側壁下方の底面には溝状のくぼみが認められた。暗褐色を呈する埋土には黄橙色地山粒が多量に混入していた。遺物は埋土中から縄文土器片が１点出土した。

ＳＫ51　（第32図、図版37）

ＬＴ51グリッドで検出した。平面プラン確認面から底面までの深さは25～30cmである。埋土は暗褐色を呈し、黄橙色の地山粒が少量混入していた。遺物は埋土中から縄文土器片が１点出土した。

ＳＫ52　（第32図、図版37）

ＭＡ50、ＭＢ50グリッドで検出した。西側と北側に後世の柱穴様ピットがあり、原形を知ることは不可能であるが、現状では平面形が三角形を呈しており、その規模を底辺150cm、高さ93cmと表現するのが妥当と思われる。プラン確認面から底面までの深さは５～18cmである。埋土は黄橙色地山粒・塊を多く混入した黒褐色土である。遺物は埋土中から縄文土器片が６点出土した。

１は胴部に横走する隆線を貼付した後、ＲＬ原体を縦位回転施文している。２はＬ原体を縦位回転施文した胴部破片である。３は無文のミニチュア土器である。

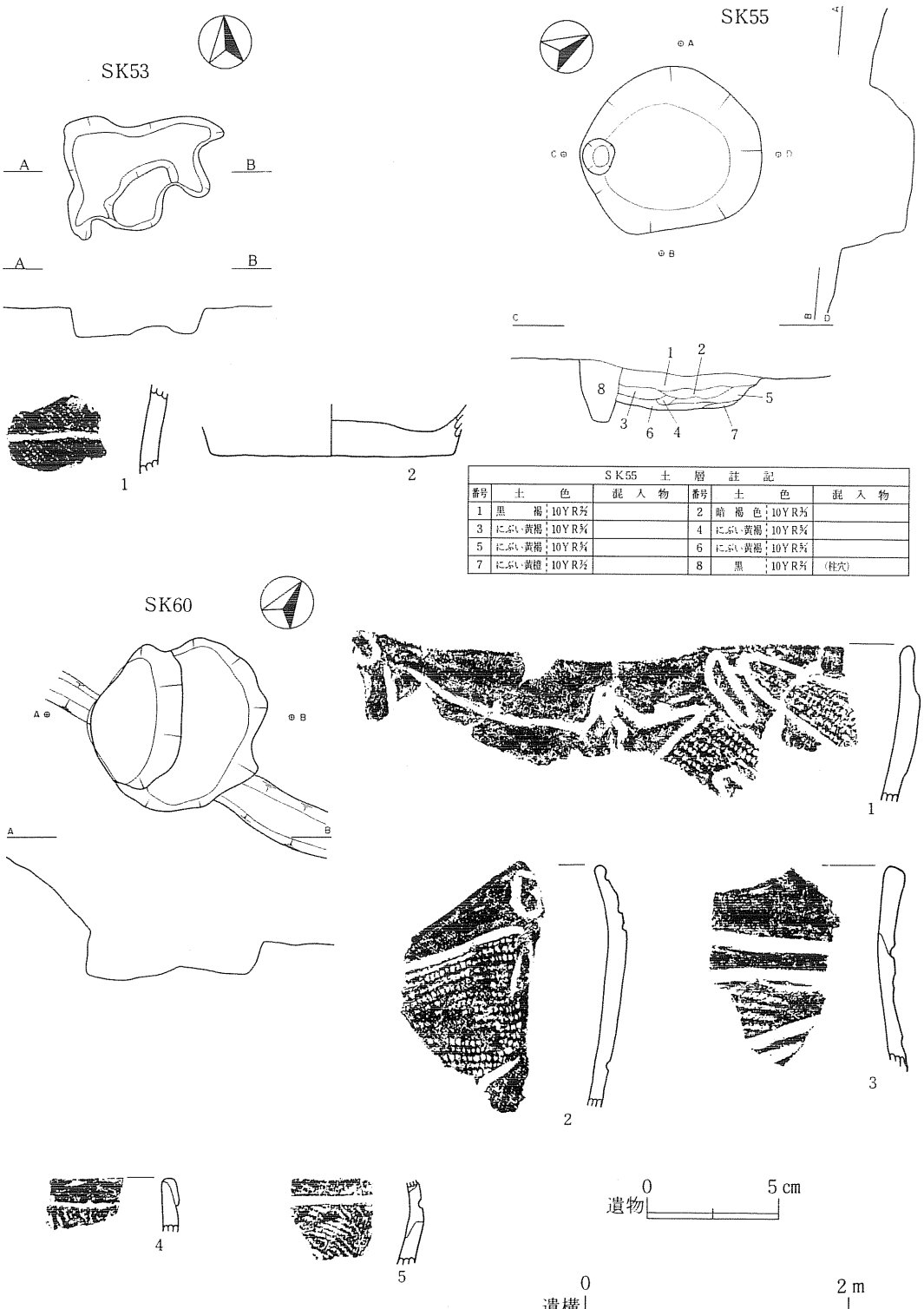
ＳＫ53　（第33図、図版37）

ＭＢ51・52グリッドで検出した不整な土坑である。平面形は不整ながらも長方形を意図したと推定され長辺120cm、短辺60～85cmである。南側の底面は掘り残しにより３～５cm盛り上がっているがプラン確認面からの深さは18～22cmである。埋土は黄橙色地山粒を多く混入した暗褐色土である。埋土中から縄文土器片が３点、フレイクが１点出土した。

１はＲＬ原体を横位回転施文した後浅い沈線を引いている。

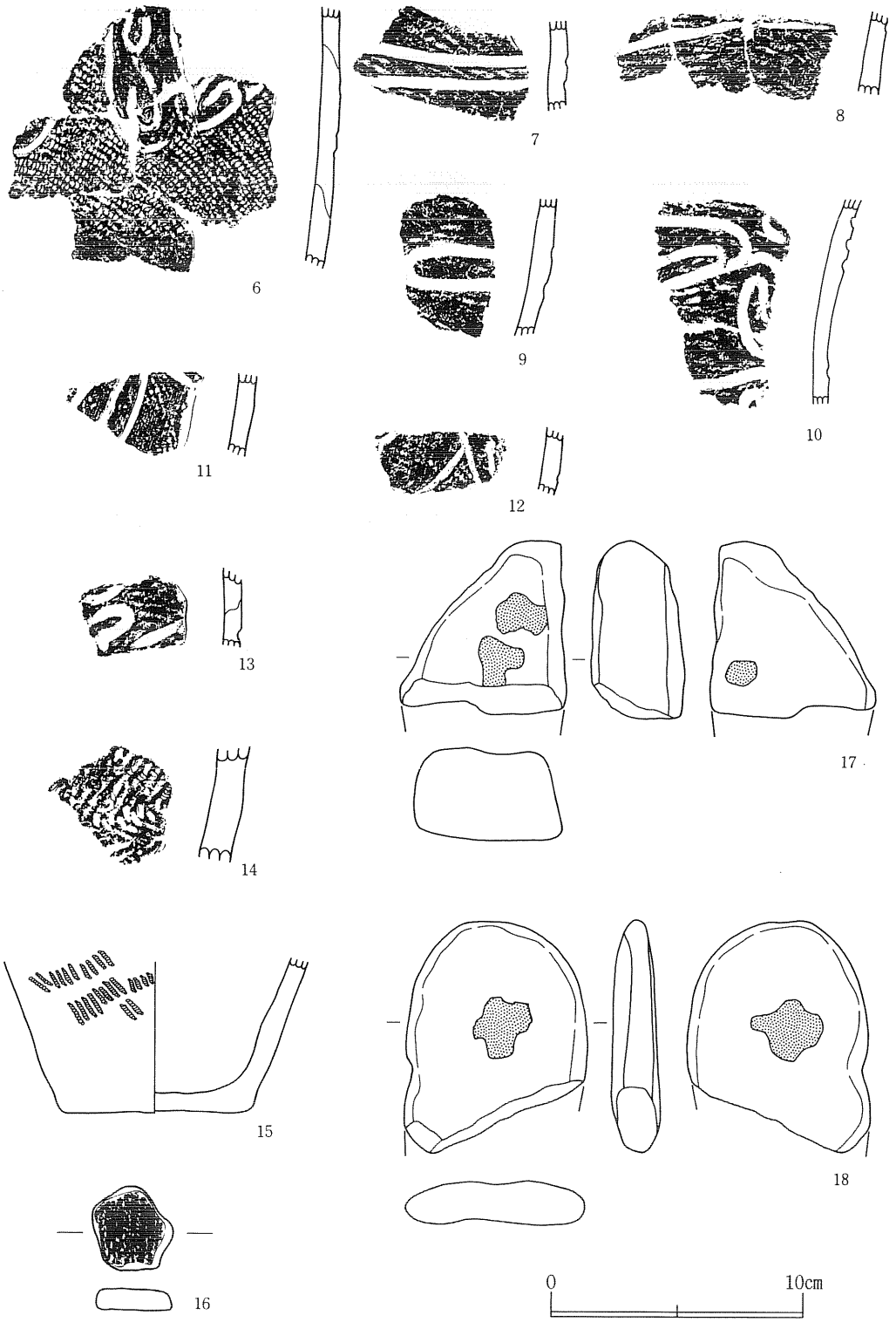
ＳＫ55　（第33図、図版37）

ＬＱ58・59グリッドで南西側に後世の柱穴が重複して検出した。平面プランは南－北方向にやや長い長径140cm、短径124cmの不整な円形を呈する。プラン確認面から、ほぼ平坦な底面までの深さは25～30cmである。埋土の下半には黄橙色地山粒が多く混入したにぶい黄褐色土が堆



SK55　土　層　註　記							
番号	土　色		混入物	番号	土　色		混入物
1	黒　褐	10YR2/2		2	暗褐色	10YR3/3	
3	にぶい・黄褐	10YR5/4		4	にぶい・黄褐	10YR5/4	
5	にぶい・黄褐	10YR5/4		6	にぶい・黄褐	10YR5/4	
7	にぶい・黄橙	10YR7/2		8	黒	10YR2/1	(柱穴)

第33図　SK53・55・60土坑と出土遺物



第34図　　SK60土坑出土遺物

積し、上半には腐植土層が堆積していた。遺物は埋土中から微細な縄文土器片１点とフレイク１点が出土した。

ＳＫ60　（第33図・第34図、図版13・37）

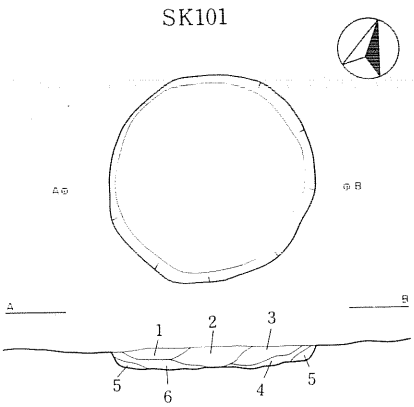
ＭＬ50グリッドの北向き斜面で、中世の柵列跡であるＳＡ06の下部に検出した。平面プランは南－北方向にやや長い略円形を呈し、長径135cm、短径120cmである。底面は、東側より西側が約10cm低くなっており、２時期かとも思われたが、埋土堆積状況・遺物の出土状況からは２期区分できなかった。プラン確認面から底面までの深さは20～35cmである。埋土は微細な炭化材片を多く混入する黒褐色土である。遺物は埋土中から縄文土器片118点、石器２点、フレイク６点、コア１点、赤色塗彩礫１点の128点が出土した。

１・２・６は同一個体である。平縁の口唇部に小突起を配し、その下位に鉤状の沈線文を縦位に施す。小突起間の胴部には三角形を基調とした沈線文を描き、両突起の中間部をわらび状の沈線文が縦位に展開される。口縁部及び小突起下の文様部は磨り消しによって無文とし、他にはＬＲ原体を回転施文している。三角形を基調とした沈線文内には原体の斜位回転による条の横走ないし、縦位回転による条の斜走が認められ、胴部には原体の縦位回転による条の斜走のみが見られる。３・７～10・13は沈線を主体とする土器であるが、それぞれ別個体である。山形口縁を呈し、胴部には太い直線的ないし非直線的な沈線による文様を横位に展開させている。口縁部は丁寧に磨かれ無文部となるが、胴部に描かれた沈線間にはＬ原体を斜位回転させた条が横走する地文を認めることができる。５・11・12も前記土器と同様、沈線文が描かれる土器であるが、各々別個体である。４は口縁部を折り返し口縁状に作り出したもので、肥厚した口縁部上面は丁寧に磨かれている。胴部にはＲ撚糸文が施文されている。14は胎土に砂粒をほとんど含有せず、植物繊維を多く含有し、比較的軽量感である。器面にはＲＬ原体（上位）とＬＲ原体（下位）を結束させ横位回転した羽状縄文が施文されている。15は底部から立ち上がる胴部に、ＬＲ原体の縦位回転施文が施されている。底径７cm、現高6.2cmを計測する。16は土器片再利用の円盤状土製品である。表面にＲ撚糸文が施文されている。以上の土器の内、14のみが縄文時代前期初頭、他は全て縄文時代後期初頭に属するものと思われる。17・18は、本遺跡分類「敲磨器Ｉ類」に属する石器である。両方とも風化した石材を使用しており、17は凝灰岩、18は砂岩である。

ＳＫ101　（第35図、図版38）

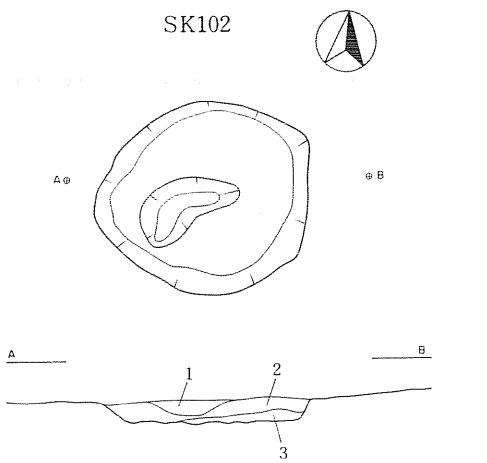
Ｌ39・40グリッドでＳＩ101竪穴住居跡の南西隣りに検出した。平面形は略円形を呈するが、北東－南西 に長軸方向をもち、長径145cm、短径135cmである。プラン確認面から凹凸のある底面までの深さは９～13cmである。埋土は、初期堆積土中に炭化材・焼土を混入し、その上位の堆積土中にも微細な炭化材片が多く混入する。遺物は埋土中から縄文土器片が１点出土した。

SK101



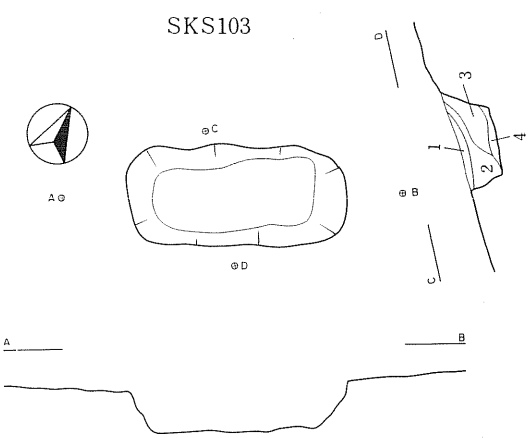
SK101 土層註記					
番号	土色	混入物	番号	土色	混入物
1	明黄褐 10YR6/6		2	にぶい黄褐 10YR5/3	炭化物
3	にぶい黄褐 10YR5/4		4	黒褐 10YR3/2	
5	暗褐 10YR3/4		6	黒 10YR2/1	炭化物・焼土

SK102

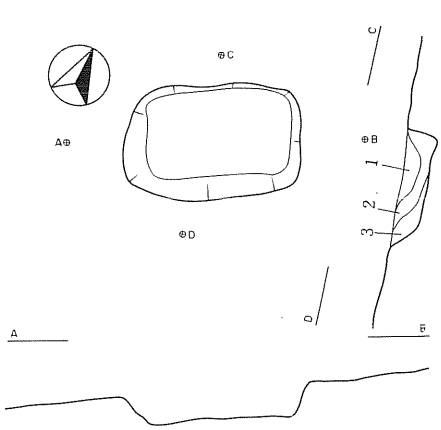


SK102 土層註記		
番号	土色	混入物
1	黒褐 10YR3/2	
2	黒褐 10YR3/2	地山粒
3	暗褐 10YR3/4	地山粒

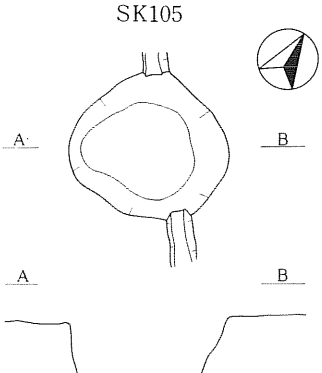
SKS103



SKS104



SK105



SK103 土層註記		
番号	土色	混入物
1	黒 10YR1/1	
2	黒褐 10YR3/2	
3	黒褐 10YR3/2	
4	黒褐 10YR3/3	地山粒

SK104 土層註記		
番号	土色	混入物
1	黒褐 10YR3/2	
2	黒褐 10YR3/2	
3	黄褐 10YR5/6	

遺物 0 5cm

遺構 0 2m

第35図　SK101・102・105土坑、SKS103・104土壙墓と出土遺物

ＳＫ102　（第35図、図版38）

ＬＡ40グリッドで検出した。平面形は、北東－南西に長軸方向をもち、長径146cm、短径130cmの略円形を呈する。プラン確認面からほぼ中央に大きな凹みをもつ底面までの深さは10～15cmである。埋土は、黄橙色地山粒を混入する暗褐色土である。遺物は埋土中から細かいＲ撚糸文を施文した縄文土器片が１点出土した。

ＳＫＳ103　（第35図、図版38）

Ｉ郭南側縁辺部のＬＡ49グリッドで検出した。平面形は、等高線に平行するように北東－南西に長軸方向をもち、長軸146cm、短軸70cmの隅丸長方形を呈する。プラン確認面からやや凹凸のある底面までの深さは28～30cmである。埋土は黒褐色土が主体である。遺物は埋土中から文様の磨滅した縄文土器片が１点出土した。形状から土壙墓と推定した。

ＳＫＳ104　（第35図、図版38）

ＳＫＳ103から380cm東側のＬＡ50・51グリッドで検出した。平面形は、等高線に平行するように北東－南西に長軸方向をもち、長軸120cm、短軸75cmのやや胴張りな隅丸長方形を呈する。プラン確認面からほぼ平坦な底面までの深さは22cmである。埋土は黒褐色土が主体である。遺物は埋土中から微細な縄文土器片１点と礫１点が出土した。形状から土壙墓と推定した。

ＳＫ105　（第35図、図版38）

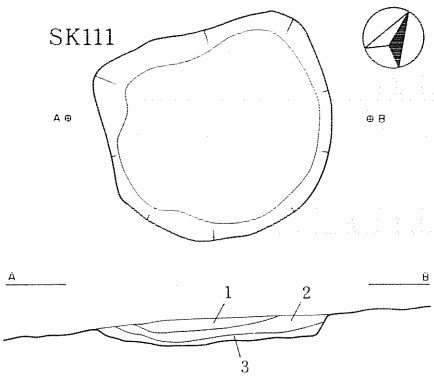
ＬＲ36グリッドで、中世の柵列跡であるＳＡ125の下方に検出した。平面形は北東－南西に長軸方向をもち、長軸110cm、短軸100cmで略円形を呈する。プラン確認面からやや凹凸のある底面までの深さは40～45cmである。埋土は黄橙色地山粒・塊を多量に混入する暗褐色土である。遺物は埋土中から微細な縄文土器片が１点出土した。

ＳＫ111　（第36図、図版38）

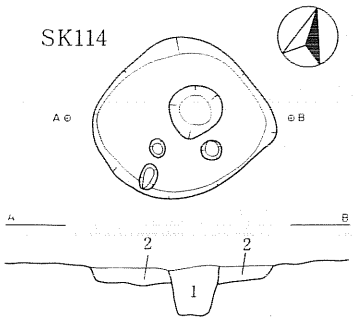
ＫＮ54、ＫＯ54グリッドで検出した。平面形は「Ｄ」字形のように南東側に強く張り出す隅丸方形を呈し、長辺150cm、短辺90～100cmである。プラン確認面からやや凹凸のある底面までの深さは８～13cmである。埋土は、黄橙色地山粒・塊が多量に混入した黒褐色土が主体である。遺物は埋土中から微細な縄文土器片１点とフレイク１点が出土した。

ＳＫ114　（第36図、図版38）

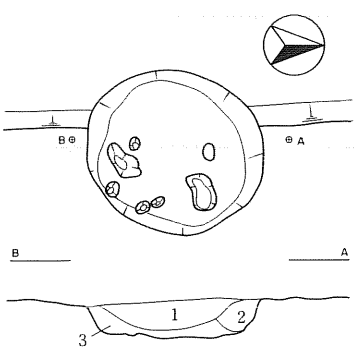
ＬＨ51グリッドで後世の建物跡の柱穴と重複して検出した。平面形は北東－南西に長軸方向をもち、長辺107cm、短辺100cmの隅丸方形を呈する。プラン確認面から木根の攪乱による凹凸のみられる底面までの深さは８～13cmである。埋土は、黄橙色地山粒が混入する黄褐色土である。遺物は埋土中から文様の磨滅した縄文土器片が１点出土した。



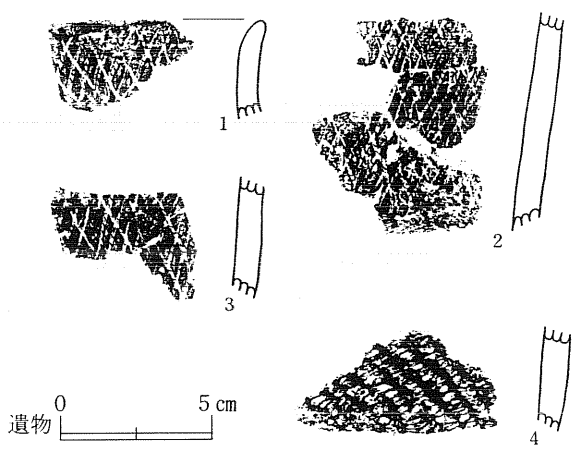
ＳＫ111 土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	黒	10ＹＲ3/1	地山粒
2	黒	10ＹＲ3/1	
3	黒　褐	10ＹＲ3/3	地山粒

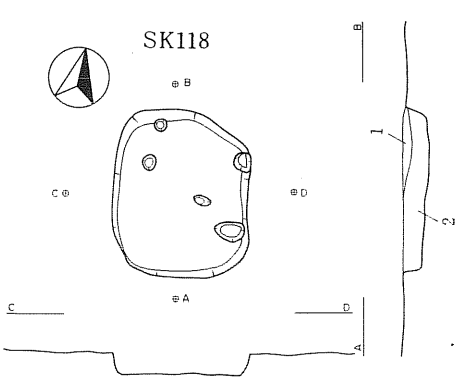


ＳＫ114 土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	黒　褐	10ＹＲ3/2	
2	にぶい黄橙	10ＹＲ6/3	

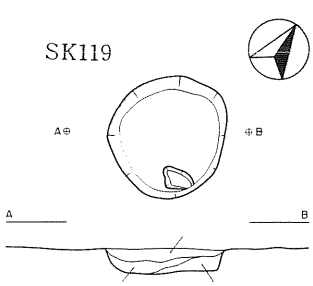


ＳＫ115 土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	黒　褐	10ＹＲ3/2	
2	黒　褐	10ＹＲ3/2	地山粒
3	にぶい黄褐	10ＹＲ5/3	地山粒





ＳＫ118 土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	黒　褐	10ＹＲ3/2	
2	にぶい黄橙	10ＹＲ6/4	地山粒



ＳＫ119 土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	黒	10ＹＲ2/1	
2	黒　褐	10ＹＲ3/2	
3	暗　褐	10ＹＲ3/3	

遺構　0　2 m

第36図　SK111・114・115・118・119土坑と出土遺物

ＳＫ115　（第36図）

ＬＬ59グリッドで検出した。前年度の試掘トレンチで確認されていたものである。平面形は北－南に長軸方向をもち、長軸121cm、短軸106cmの略円形を呈する。プラン確認面から木根の攪乱による凹凸のみられる底面までの深さは16～25cmである。埋土は黄橙色地山粒の多く混入する黒褐色土である。遺物は埋土中から縄文土器片２点が出土した。

ＳＫ118　（第36図）

ＬＪ44グリッドで検出した。平面形は北－南に長辺方向をもち、長辺110cm、短辺90cmの隅丸長方形を呈する。プラン確認面から木根の攪乱による凹凸の多い底面までの深さは12～15cmである。埋土は微細な炭化材片を少量混入する明黄褐色土が主体をなす。遺物は微細な縄文土器片が１点出土した。

ＳＫ119　（第36図、図版38）

ＬＩ44グリッドで検出した。平面形は直径80cmの略円形を呈する。プラン確認面からほぼ平坦な底面までの深さは12～16cmである。埋土は暗褐色～黒褐色土である。遺物は埋土中から微細な縄文土器片１点が出土した。

ＳＫ121　（第37図）

ＬＩ43グリッドで検出した。平面形は直径70cmの略円形を呈する。プラン確認面からほぼ平坦な底面までの深さは５～８cmである。埋土には黄橙色地山粒の混入もみられる。遺物は磨滅し文様の識別困難な縄文土器片１点が出土した。

ＳＫ123　（第37図）

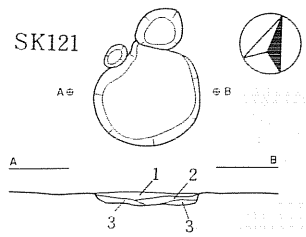
ＬＥ45グリッドで検出した。平面形は直径125cmの略円形を呈する。南側底面に後世の柱穴様ピットが２箇所穿たれている。また北西側底面には木根による攪乱がみられる。プラン確認面から凹凸のある底面までの深さは９～15cmである。埋土はにぶい黄褐色～褐色を呈するが黄橙色地山粒の混入がみられる。遺物は微細な縄文土器片が１点出土した。

ＳＫ124　（第37図）

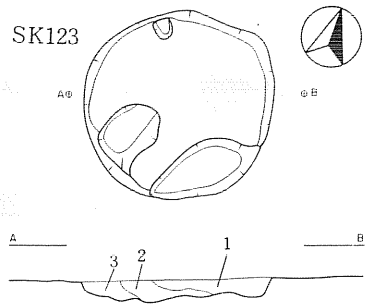
ＬＬ48グリッドで中世のＳＢ10掘立柱建物跡の柱穴など重複して検出した。平面形はほぼ東一面に長軸方向 をもち、長軸120cm、短軸110cmの不整な楕円形を呈する。プラン確認面から凹凸の激しい底面までの深さは14～21cmである。埋土は黄橙色地山粒を混入するにぶい黄褐色土と暗褐色土である。遺物は微細な縄文土器片が１点出土した。

ＳＫ126　（第37図・第38図、図版38）

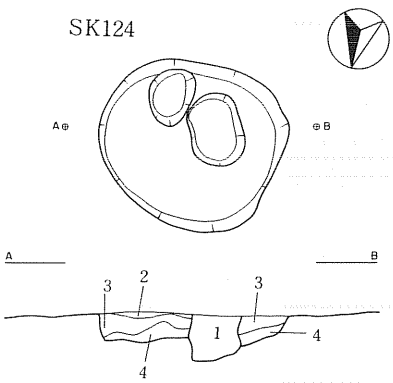
ＬＥ49グリッドで検出した。北西－南東に長軸方向をもち、長軸170cm、短軸126cmの北東側に張り出し部をもつ不整な土坑である。プラン確認面からほぼ平坦な底面までの深さは10～28cmである。埋土は暗褐色を呈し、微細な炭化材片を少量混入していた。遺物は埋土中から縄文



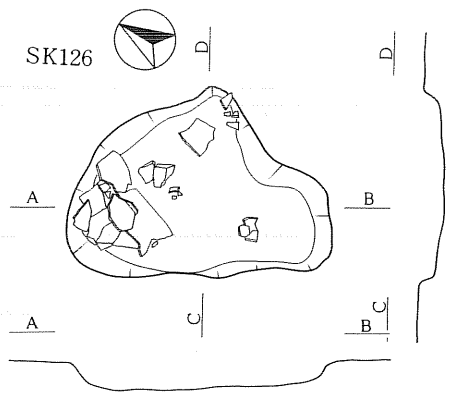
SK121 土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	黒　褐	10YR3/2	地山粒
2	暗　褐	10YR3/3	
3	黄　褐	10YR5/6	

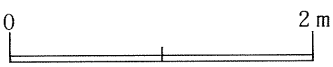


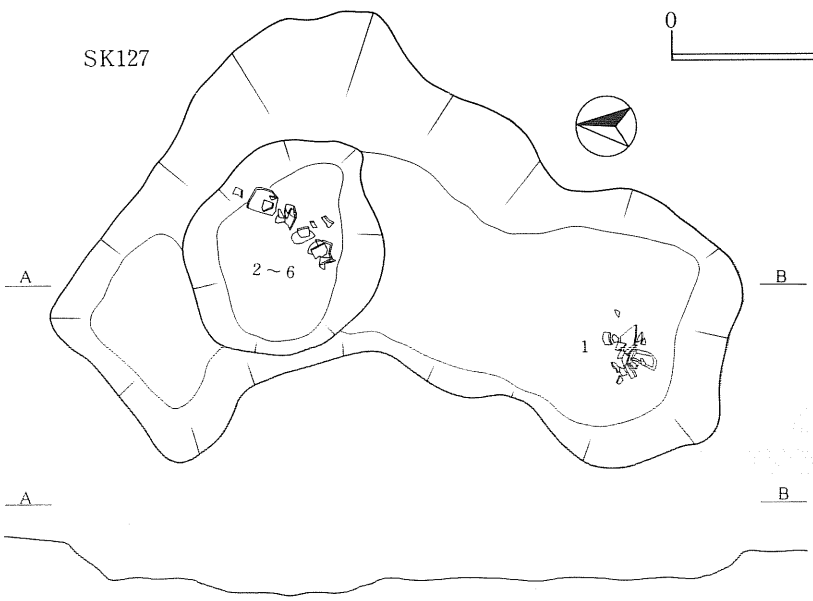
SK123 土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	にぶい黄褐	10YR5/3	地山粒
2	にぶい黄褐	10YR5/4	地山粒
3	褐	10YR4/4	



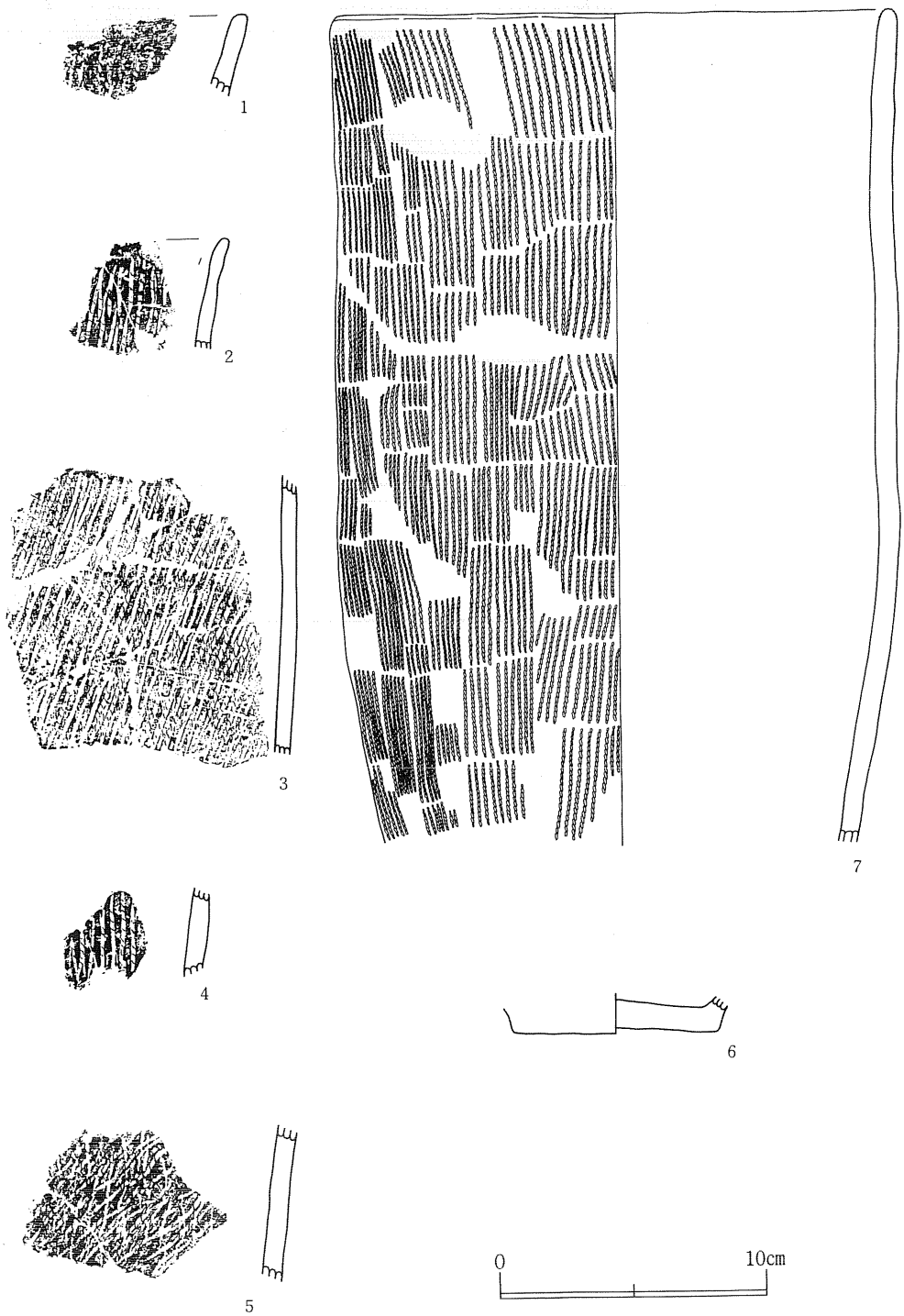
SK124 土　層　註　記						
番号	土　色		混　入　物	番号	土　色		混　入　物
1	黒　褐	10YR3/2	(柱痕)	2	暗　褐	10YR3/3	
3	にぶい黄褐	10YR5/3	地山土少量	4	にぶい黄褐	10YR5/3	地山土多量







第37図　　SK121・123・124・126・127土坑

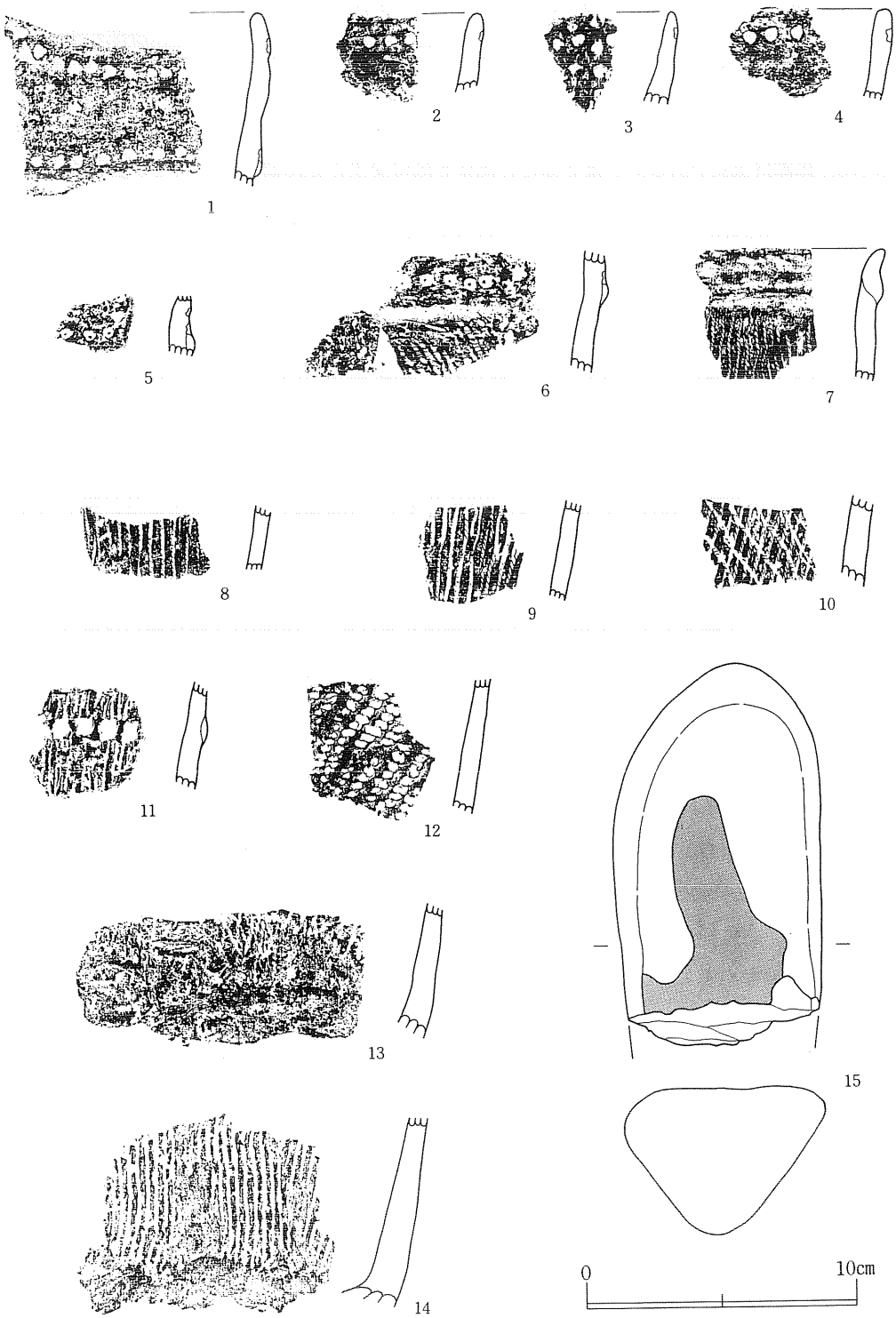


第38図　　SK126土坑出土遺物

土器が１個体分のほか、縄文土器片17点とフレイク１点が出土した。１～４・７は全面にＲ撚糸文施文するものであるが、この内２～４は同１個体である。撚糸文施文後に口縁部を横位に磨いて無文部とするもの（１）としないもの（７）がある。７は胎土に径２～５㎜の小石をやや多く含有し、口唇部及び内面は丁寧に磨いている。外面には煤状炭化物が多く付着する。口径20.7㎝、現高31.8㎝である。５は２本のＲ撚紐を軸に交差させた網目状撚糸文を施文する。６は比較的小形な深鉢形土器の底部資料である。以上の土器は縄文時代後期に属するものと思われる。

ＳＫ127　（第37図・第39図、図版39）

ＬＦ49グリッドで検出した。平面形は、ほぼ南－北に長軸方向をもつが、北西側につま先、南側に開口部をもつ長靴形を呈している。長軸412㎝、短軸300㎝である。プラン確認面から凹凸の大きな底面までの深さは８～14㎝である。また底面の中央からやや北寄りに長軸79㎝、短軸62㎝、深さ５～10㎝のくぼみが検出された。埋土は黄褐色地山粒を混入する。暗褐色土である。埋土中から51点の縄文土器片と石器１点およびフレイク１点が出土した。１～６は口縁が大波状を呈す深鉢形土器であろう。頸部に直線的な隆線を横走させ、波頂部から直線的に垂下する隆線がそれに連結する。波頂部より垂下する隆線の両脇、頸部を横走する隆線の上位、さらに口唇部に沿って、竹管を垂直に刺突した円形刺突列が連なり、口縁部は丁寧に磨いて無文としている。外面に煤状炭化物が多く付着するが、胴部には施文された縄文の斜走する条が認められる。７は口縁部を口唇部と平行して隆線が横走するが、これは粘土紐を貼付して作り出したものではなく、口縁部形成時においてやや厚目の粘土板（紐）を用い肥厚する縁部を作り出し、さらに、その肥厚する口縁部を強くつまみながら横位に調整した結果、残存したものと思われる。胴部にはＲ撚糸文が施文される。８、９はＲ撚糸文を施文した薄手の胴部破片であるが、ＳＫ126の２～４と接合関係はないものの酷似している。10・13は２本のＲ撚紐を軸に交差させた網目状撚糸文を施文し、底縁部（13）は丁寧に磨いている。12はＲＬ原体を縦位回転施文し、14はＲ撚糸文をする。14の底縁部は丁寧に磨かれ、内面には煤状炭化物が多く付着する。11はＲ撚糸文を地文とし、横走する刺突列を施す。刺突は横方面から、一端に粘土を押し寄せる感じに施され、刺突文の一端には粘土が盛り上がっている。ＳＫ11の台付浅鉢形土器（１）、遺構外出土土器第Ⅳ群22類と同類の土器である。以上の土器は縄文時代後期初頭に属するものと思われる。15は三角柱状の石材の一平担面に縦方向の擦った痕跡を持つことにより、本遺跡分類「敲磨器ＶＢ類」に属する石器である。



第39図　　SK127土坑出土遺物

ＳＫ131　（第40図）

ＬＩ44、ＬＪ44グリッドで検出した。平面形は北東－南西に長軸方向をもち、長軸95cm、短軸80cmの不整な楕円形を呈する。プラン確認面から木根による攪乱穴のある底面までの深さは５～10cmである。埋土は暗褐色を呈し、黄橙色地山粒を多く混入していた。遺物は、埋土中からＲ撚糸文が施文された微細な土器片１点が出土した。

ＳＫ132　（第40図）

ＬＢ46、ＬＣ46グリッドで中世のＳＢ18掘立柱建物跡の柱穴等と重複して平面形は、ほぼ南－北に長軸方向をもち、長軸175cm、短軸112cmの不整な楕円形を呈する。プラン確認面から凹凸のある底面までの深さは８～15cmである。埋土は黄橙色地山粒と微細な炭化材片を少量に混入する。遺物は微細な縄文土器片１点が出土した。

ＳＫ135　（第40図）

ＬＫ47グリッドで検出した。平面形は、ほぼ東－西に長軸方向をもち、長軸108cm、短軸98cmの楕円形を呈する。底面の中央から南東にかけて長軸92cm、短軸47cmのくぼみが認められる。プラン確認面から凹凸の大きな底面までの深さは21～30cmである。埋土は黒褐色土が主体をなしている。遺物は埋土中から縄文土器片が３点出土した。

③　Ｔ－Ｐｉｔ

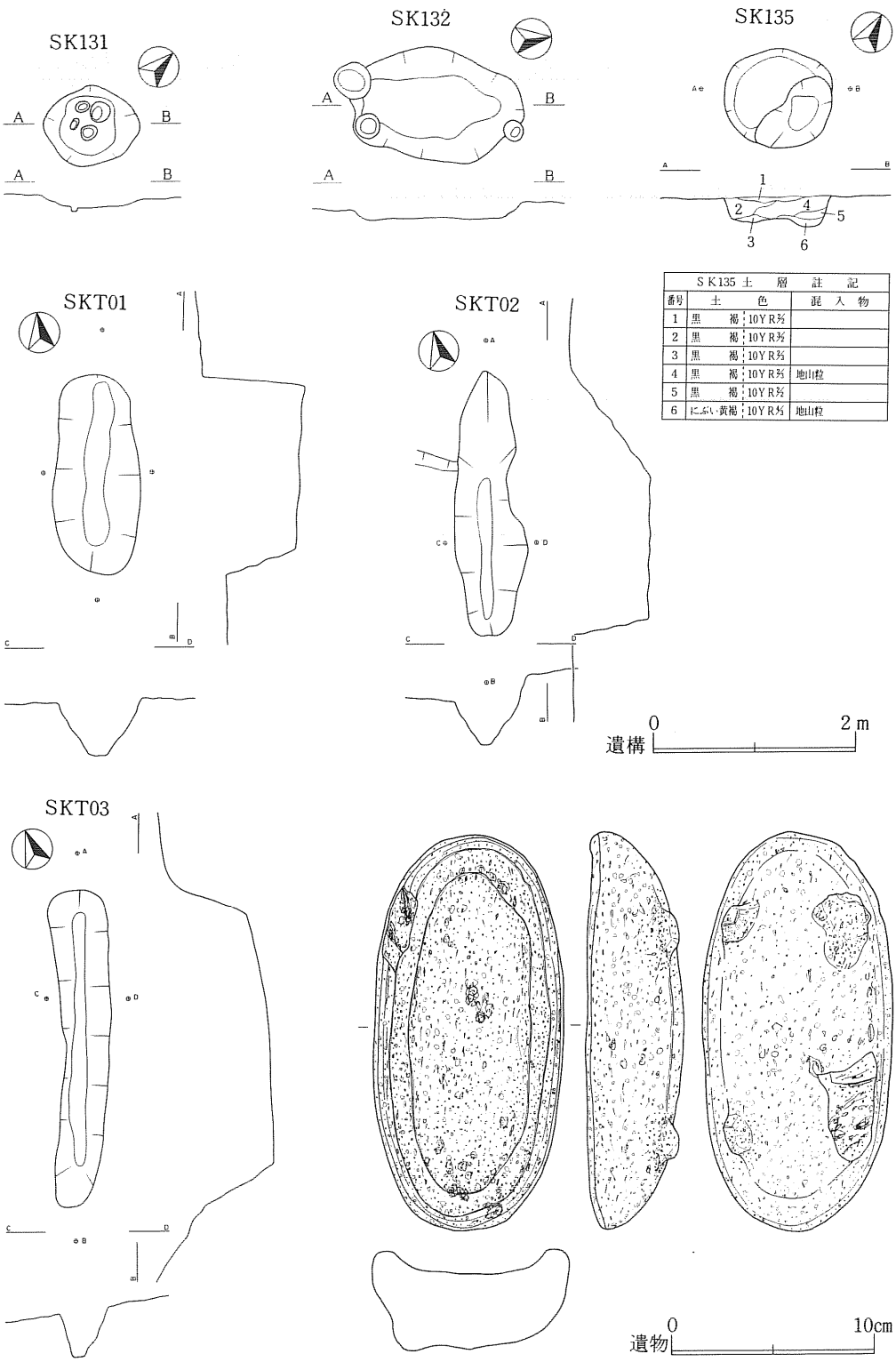
ＳＫＴ01　（第40図、図版14）

ＭＢ61グリッドでＳＩ02竪穴住居跡と重複して検出したが、ＳＩ02竪穴住居跡の廃棄・埋没後に掘り込まれたことを土層観察により確認している。（ＳＩ02竪穴住居跡実測図参照）。長軸方位はＮ－８°－Ｅとわずかに東偏する。開口部は長さ197cm、幅86cmの長楕円形プランを呈し、100cmの深さで掘り込まれている。横断面は逆台形を呈する。下底は長さ161cm、幅16～24cmで、平坦である。埋土の観察では、上半に地山と同じ土層が堆積していることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＴ02　（第40図、図版14）

ＳＫＴ01と約140cmの間隔で平行するように西側に位置するが、長軸方位はＮ－15°30′－Ｅである。開口部は長さ264cm、幅45～70cmの不整な長楕円形を呈し、約80cmの深さで掘り込まれている。横断面は逆台形を呈する。下底には凹凸があるが、長さ140cm、幅10～15cmである。埋土の状態からは、ＳＫＴ01と同じ状況が考えられる。遺物は石皿が１点底面から出土した。

石皿は、平面形状が長楕円形、横断面が舟底形を呈する。上面は周縁に高まりを残して内側を凹めている。しかし、一方の長軸端の周縁部高まりは他よりも低く、掻き出し部あるいは注ぎ口部と思われる。下部には４個の脚（２脚欠損）が削り出されているが、脚底面が体部底面よりも高位にあることから、所謂「腹のついた状態」を呈する。石質は多孔質安山岩である。



SK135 土層註記			
番号	土色		混入物
1	黒褐	10YR3/2	
2	黒褐	10YR3/2	
3	黒褐	10YR3/3	
4	黒褐	10YR3/3	地山粒
5	黒褐	10YR3/2	
6	にぶい黄褐	10YR4/3	地山粒

第40図　SK131・132・135土坑、SKT01～03T-Pitと出土遺物

ＳＫＴ03　（第40図、図版14）

ＬＳ39グリッドの埋没した沢部を横断するように堀り込まれていた。長軸方位はＮ－22°30′－Ｅである。開口部は長さ314cm、幅42～58cmの長楕円形プランを呈し、80～105cmの深さで堀り込まれている。横断面は逆台形を呈する。下底は、長さ251cm、幅９～18cmを計測する。人為的に埋め戻された状況もみられず、遺物は出土しなかった。

（４）土器埋設遺構

ＳＲ01　（第41図、図版15・39）

ＬＮ53グリッドで検出した。平面形が長軸36cm、短軸31cmの卵形を呈し、深さ23cmの擂鉢状の掘り込み中に、底面から約６cm浮いた正立状態で土器が埋設されていた。土器を安定させるために掘り込み内に充填された土は、にぶい黄褐色～黄褐色を呈し、しまりの強いものである。土器の上半部及び底部は欠損する。最大胴径21.2cm、現高22cm、器厚0.6～0.9cmである。

埋設された土器の器面には撚紐を軸に雑然と巻き付けたＲ撚糸文が施文され、底縁部は丁寧に磨いている。また、内外面には２次火熱の痕跡として、①器面の赤色変化、②煤状炭化物の付着、③火跳ね等が観察される。胎土には粗い砂粒が比較的多く含有される。縄文時代後期初頭に属するものと思われる。

ＳＲ02　（第41図、図版16・40）

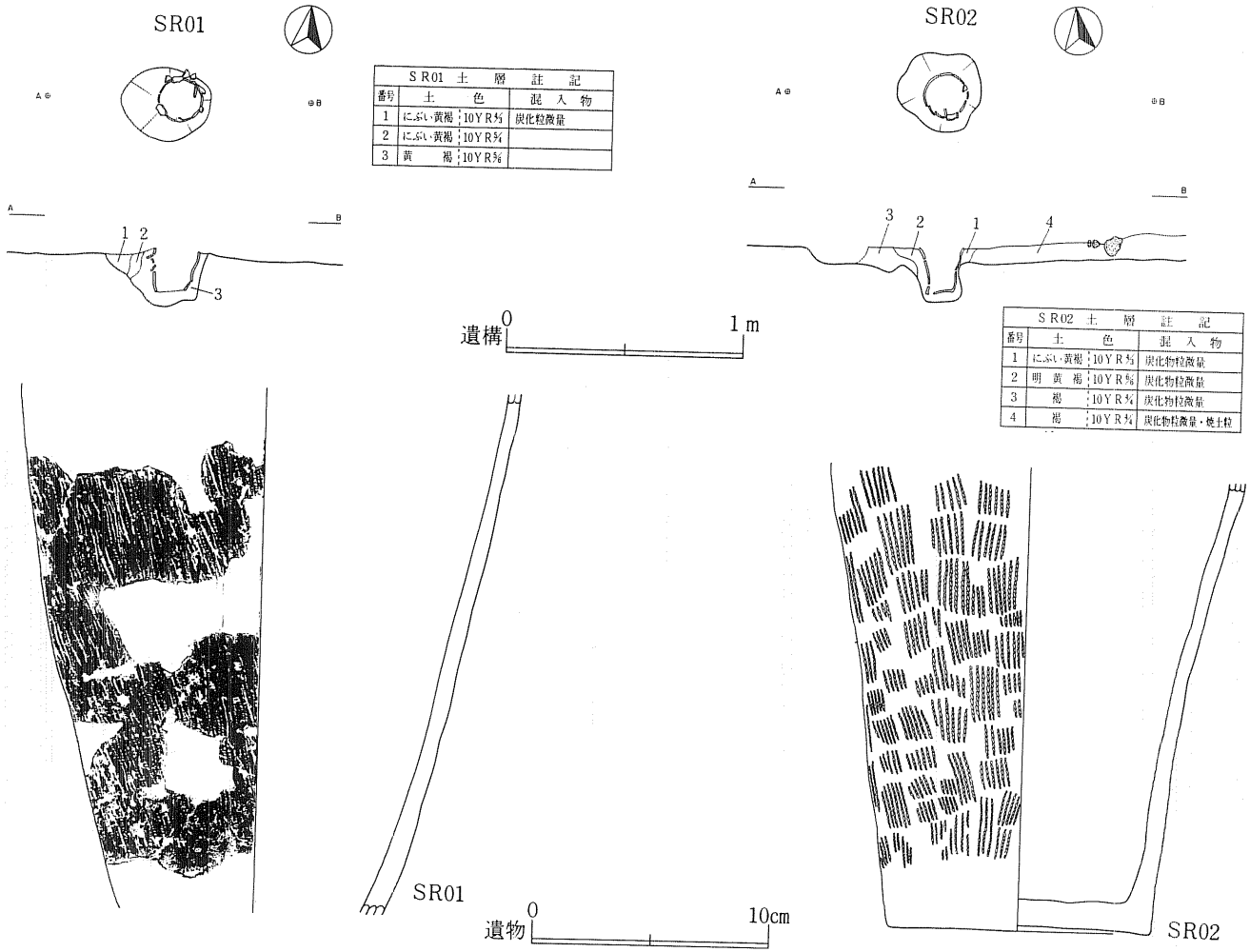
ＬＱ48グリッドで検出した。平面形が直径35cmの不整円形を呈し、深さ21cmで上部が開き気味の円筒状堀り込み中に、底面から約５cm浮いた正立状態で土器が埋設されていた。土器と掘り方の間を埋める土には炭化物粒が微量混入し、にぶい黄褐色～明黄褐色を呈し、しまりの弱いものである。

埋設された土器は上半部を欠損し、胴下半部及び底部はほぼ完形に近い状態で残存していた。最大胴径17.5cm、現高19.4cm、器厚0.5～0.8cm、底部厚1.0～1.2cm。底部から外反気味に立ち上がり、胴部には撚紐を軸に整然と巻き付けたR撚糸文が施文され、底縁部は横位に丁寧に磨いている。この底縁部は光沢を持つ。内面には２次火熱による火跳ねが観察される。胎土は経３～５mmの小石を若干含有するものの比較的精選されたものと言える。縄文時代後期初頭に属するものと思われる。

ＳＲ04　（第42図、図版17・40）

ＭＥ47グリッドで検出した。試掘時のトレンチにより南東側が破壊されているが、平面形が長軸73cm、短軸45cm（推定）の楕円形を呈し、深さ16cmの鍋底状を呈する。掘り込み中に、口縁を下方に向けて傾斜した状態で土器が出土した。

胴部下半が内湾し、胴部上半が直線的に大きく開く、平口縁の深鉢形土器であり、底部は損



SR01 土層註記			
番号	土色		混入物
1	にぶい・黄褐	10YR4/3	炭化粒微量
2	にぶい・黄褐	10YR5/4	
3	黄褐	10YR5/6	

SR02 土層註記			
番号	土色		混入物
1	にぶい・黄褐	10YR4/3	炭化物粒微量
2	明黄褐	10YR6/6	炭化物粒微量
3	褐	10YR4/4	炭化物粒微量
4	褐	10YR4/4	炭化物粒微量・焼土粒

第41図　SR01・02土器埋設遺構と出土遺物

している。口径23.3cm、現高19.1cm、器厚0.5〜0.6cm。全面に地文は施されず、丁寧に磨いている。内湾する胴部下半に左右２個の頭部を有す貼瘤文が数単位配されるのみで、他の文様要素は存在しない。２次加熱により、内面はもろくなっており、外面には①の器面の赤色変化、②煤状炭化物の付着等が認められる。胎土には粗い砂粒を多く含む。

ＳＲ101　（第42図、図版17・18・41）

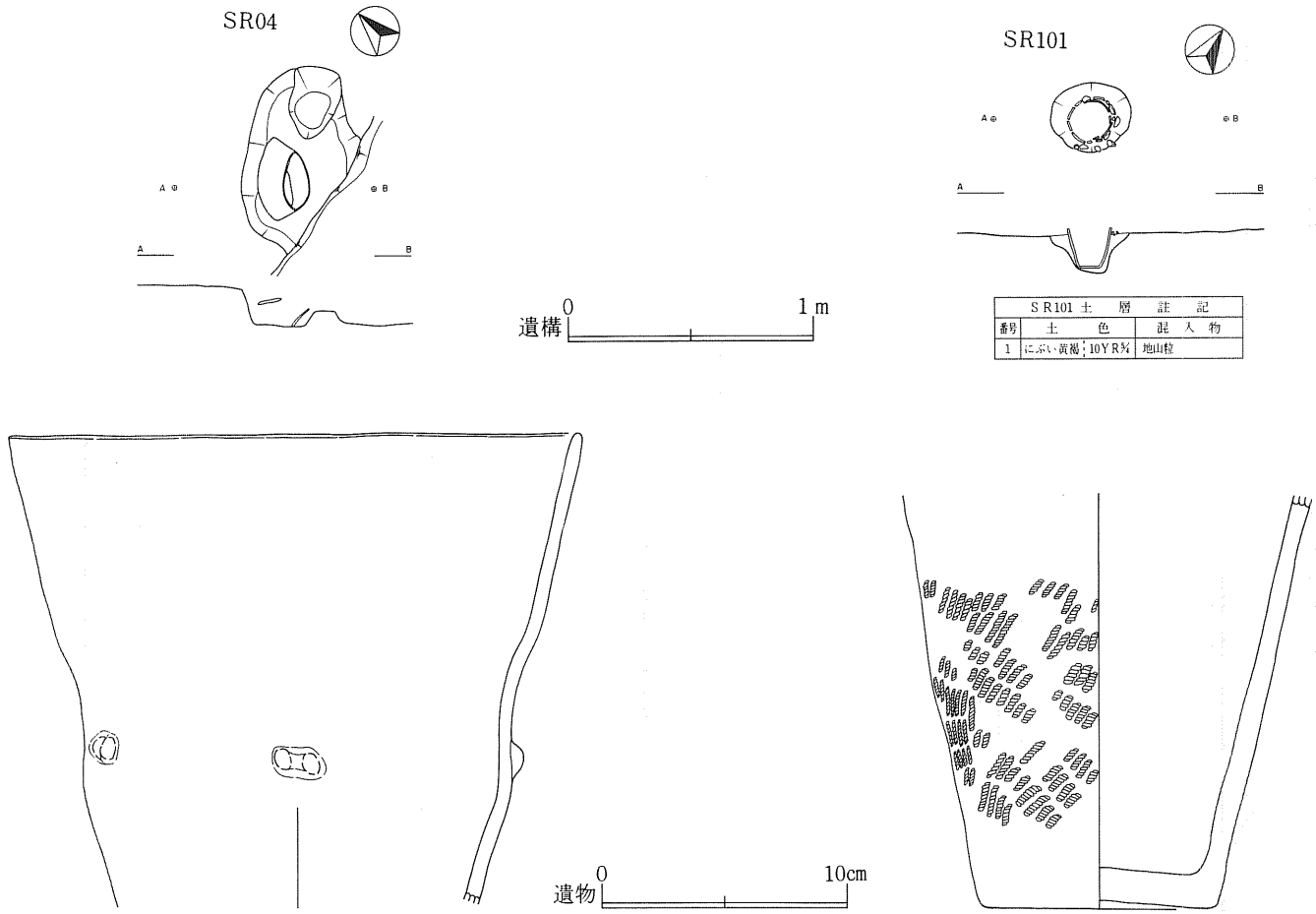
ＬＫ53クリッドで検出した。平面形が長径33cm、短径28cmの略円形を呈し、深さ16cmの擂鉢状あるいは鍋底状を呈する掘り込み中に土器が正立状態で埋設されていた。土器と掘り方の間を埋める土はにぶい黄褐色を呈し、かたくしまったものである。

埋設された土器は胴部上半を欠損し、胴部下半及び底部がほぼ完形に近い状態で残存していた深鉢形土器である。最大胴径16.7cm、現高16.7cm、器厚0.6〜0.9cm、底部厚1.4cm。底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、胴部にはRL原体が縦位回転施文され、底縁部は横位に磨いて調整している。外面は２次加熱による赤色変化が顕著である。胎土には粗砂粒が多く含まる。

ＳＲ102　（第43図、図版18・19・41・42）

ＬＮ47グリッドで検出した。平面形が長軸55cm、短軸37cmの不整楕円形を呈し、深さ12cmの鍋底状の掘り込み中に土器が正立状態で埋設されていた。土器を掘り込みの底面に接して埋設し、掘り方との間には黒褐色土を充填している。

埋設された土器は、胴部下半を欠損する深鉢形土器である。口径24.8cm、現高27.6cm、器厚0.7〜1.0cm。ほぼ直線的に外傾（直立気味に）しながら立ち上がる形態を有し、隆線文・ボタン状貼付文・沈線文により文様構成される。主文様は、隆線による方形区画文とその中に施される沈線による「C」字状区画文ないし「E」字状（もしくは「ヒ」字状）区画文である。（口縁部が一部しか残存しないので断定はできないが、）隆線による方形区画文の４隅には中央に円形刺突を持つボタン状貼付文が付され、隆線上には尖端を持つ棒状工具による刺突列を施している。ただし、胴部中央を横走る隆線上には必ずしも刺突列が施されるわけではなく、２個１対の刻みを１〜３単位施すものも見られる。また、胴部中央に付された方形区画文の２個のボタン状貼付文の一方からは隆線がさらに胴部下半に垂下している。隆線による方形区画文の中には沈線による「C」字状ないし「E」字状（「ヒ」字状）区画文が描画されるが、区画内には２本のR撚紐を軸に交差させて巻き付けた網目状撚糸文が充填施文されている。この区画外はすべて丁寧に磨かれている。また胎土に粗い砂粒を多く含み、２次加熱も受けていることから、全体的にもろくなっている。縄文時代後期初頭に属するものと思われる。



SR101 土　層　註　記		
番号	土　色	混　入　物
1	にぶい黄褐 10YR5/4	地山粒

第42図　　SR04・101土器埋設遺構と出土遺物

ＳＲ103　（第43図、図版18・19・42）

ＬＭ47グリッドで検出した。平面形が長径48cm、短径42cmの不整円形を呈し、深さ18cmの鍋底状の掘り込み中に土器が正立状態で埋設されていた。土器の底部が一部、掘り込みの底面に接しており、土器と掘り方の間には灰黄褐色土を充填している。

埋設された土器は、非常にもろく、復元作業において困難を窮めたが、胴部上半を欠損する深鉢形土器であろう。底部は形態を知り得る程に復元された。直径約15cm程の大きなもので、底面には木葉痕が付されている。胴部にはL原体を縦位回転施文している。胎土に粗い砂粒を多く含む事と焼成があまい事とがこの土器を非常にもろいものとしていると言えよう。現高7.7cm、底径14.3cm、器厚0.7～1.2cm、底部厚1.6～1.9cm。

ＳＲ104　（第44図、図版20・42）

ＬＯ49グリッドで検出した。平面形は長軸51cm、短軸40cm、の不整楕円形を呈し、深さ27cmの擂鉢状の掘り込み中に、土器が底面から約10cm浮上した正立状態で埋設されていた。土器内の土は黒褐色を呈し、炭化物を少量混入しており、土器と掘り方の間を埋める土はにぶい黄褐色土である。

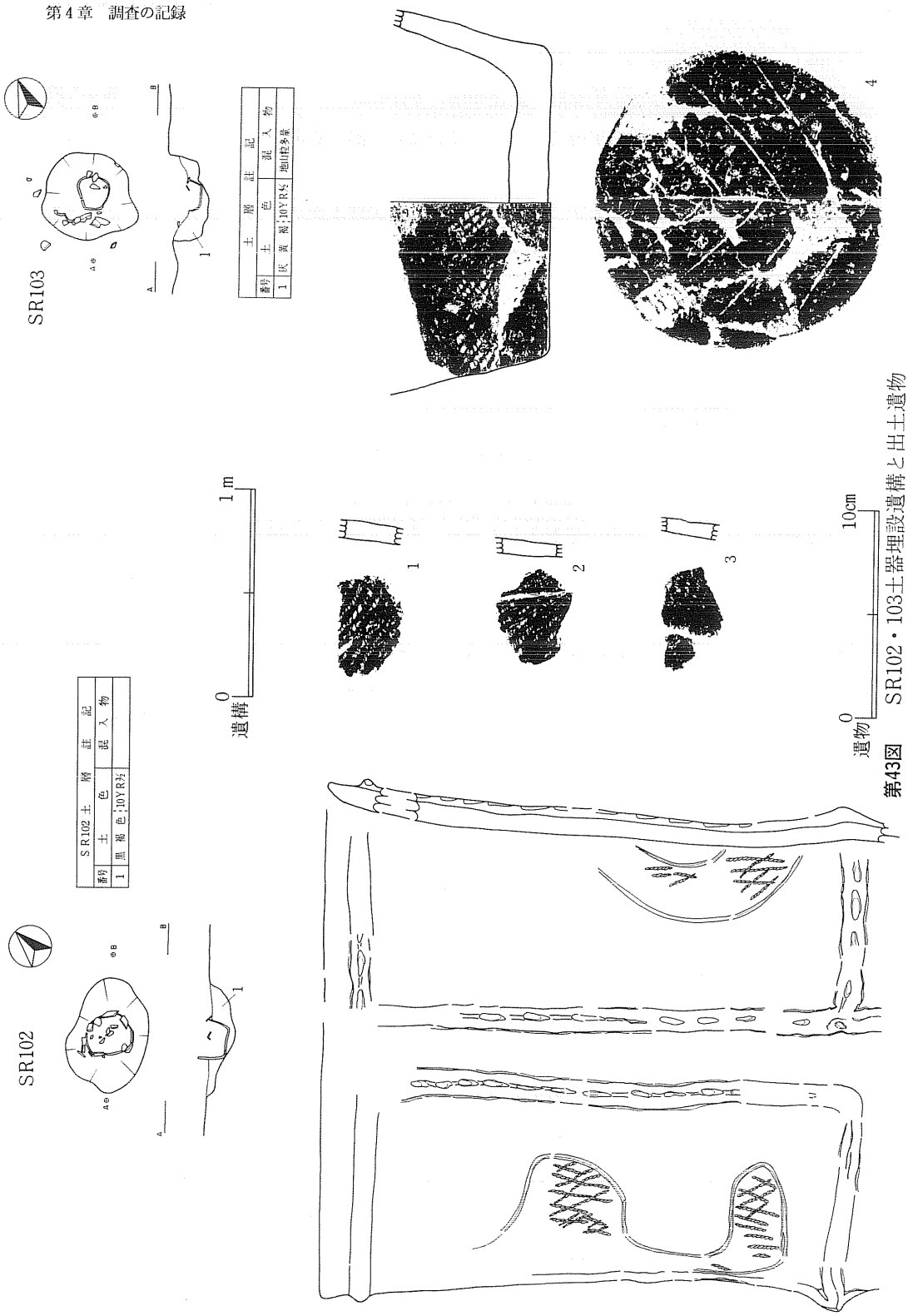
埋設されていた土器は、口縁部を折り返し口縁風に肥厚させた深鉢形土器の上半部である。口径27.4cm、現高15.2cm、器厚0.5～0.7cm。肥厚させた口縁部の上面は丁寧に磨かれ、胴部にはＲＬ原体の縦位回転ないし左上→右下の斜位回転による縄文を施文している。この縄文は胴部を丁寧に磨いた後に施されているようである。また、内面も丁寧に磨かれている。内外面には２次加熱による痕跡が顕著であり、①煤状炭化物の付着（外面）、②火跳ね（内面）等が観察される。胎土は粗い砂粒をそれ程含まず精選されたものと言えよう。縄文時代後期前半に属するものと思われる。土器と掘り方の間の埋土より縦長剝片を利用したスクレイパーが１点出土した。一縁辺に主に背面から加撃して直線的な刃部を作り出したもので、石質は頁岩である。

ＳＲ105　（第44図、図版42・43）

ＬＬ60グリッドで検出した。平面形は長軸90cm、短軸65cmの楕円形を呈し、深さ８cmの浅い鍋底状の掘り込み中に、２個体の土器が重なり横倒しの状態で出土した。１が２の上位に重なっていた。

１は胴部に結節部を持つL原体を縦位回転施文した深鉢形土器である。最大胴径22.2cm、現高22.1cm、器 厚0.6～0.8cm。内外面には２次加熱の痕跡、①器面の赤色変化（両面）、②煤状炭化物の付着（外面）、③火跳ね（内面）等が観察される。胎土には細砂粒が多く含まれる。

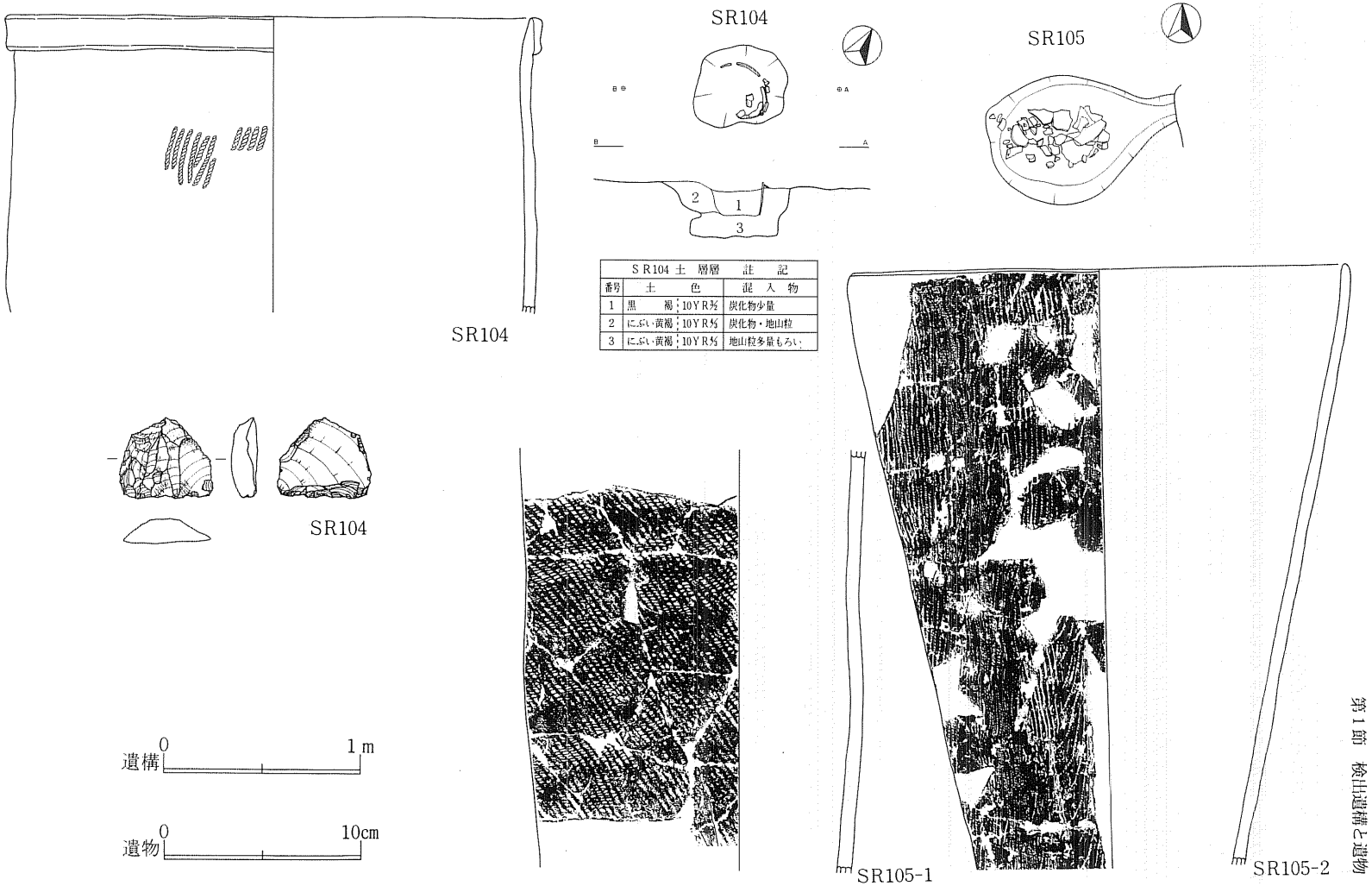
２は細い撚紐を使用したＲ撚糸文を全面に施文した深鉢形土器である。口径25.4cm、現高30.6cm、器厚0.5～0.7cm。施文された撚糸文は必ずしも一様ではなく、撚紐の太さは同じものの、①撚紐を軸に対してほぼ垂直に、間隔を空けて巻き付けた原体、②撚紐を軸の一方には軸



SR102土層註記		
番号	土色	混入物
1	黒褐色 10YR2/2	

土層註記		
番号	土色	混入物
1	灰黄褐 10YR4/2	地山粒多量

第43図　SR102・103土器埋設遺構と出土遺物



SR104 土　層層　註　記		
番号	土　色	混　入　物
1	黒　褐 10YR3/2	炭化物少量
2	にぶい黄褐 10YR5/3	炭化物・地山粒
3	にぶい黄褐 10YR5/3	地山粒多量もろい

第44図　SR104・105土器埋設遺構と出土遺物

に対してほぼ垂直に間隔なく、他方には軸に対して斜めに巻き付けた原体を使用したものと思われる。底部は欠損するものの全体の形状を知る事はできる。ほぼ直線的に外傾する体部が、口縁部においてやや内湾する。口縁部は上につまみ上げた感じを呈する雑な作り出しである。外面底縁部付近にのみ２次加熱の痕跡（器面の赤色変化）が認められる。胎土には粗い砂粒を多く含む。縄文時代後期初頭に属するものと思われる。

ＳＲ106　（第45図、図版21・22・44）

ＬＬ51クリッド、ＳＩ102の覆土中に検出した。直径30cmの円形プランを呈し、深さ21cmの円筒状掘り込み中に底面に接して正立状態の土器が埋設されていた。この土器（１）の内部に倒立状態の土器（２）が出土した。

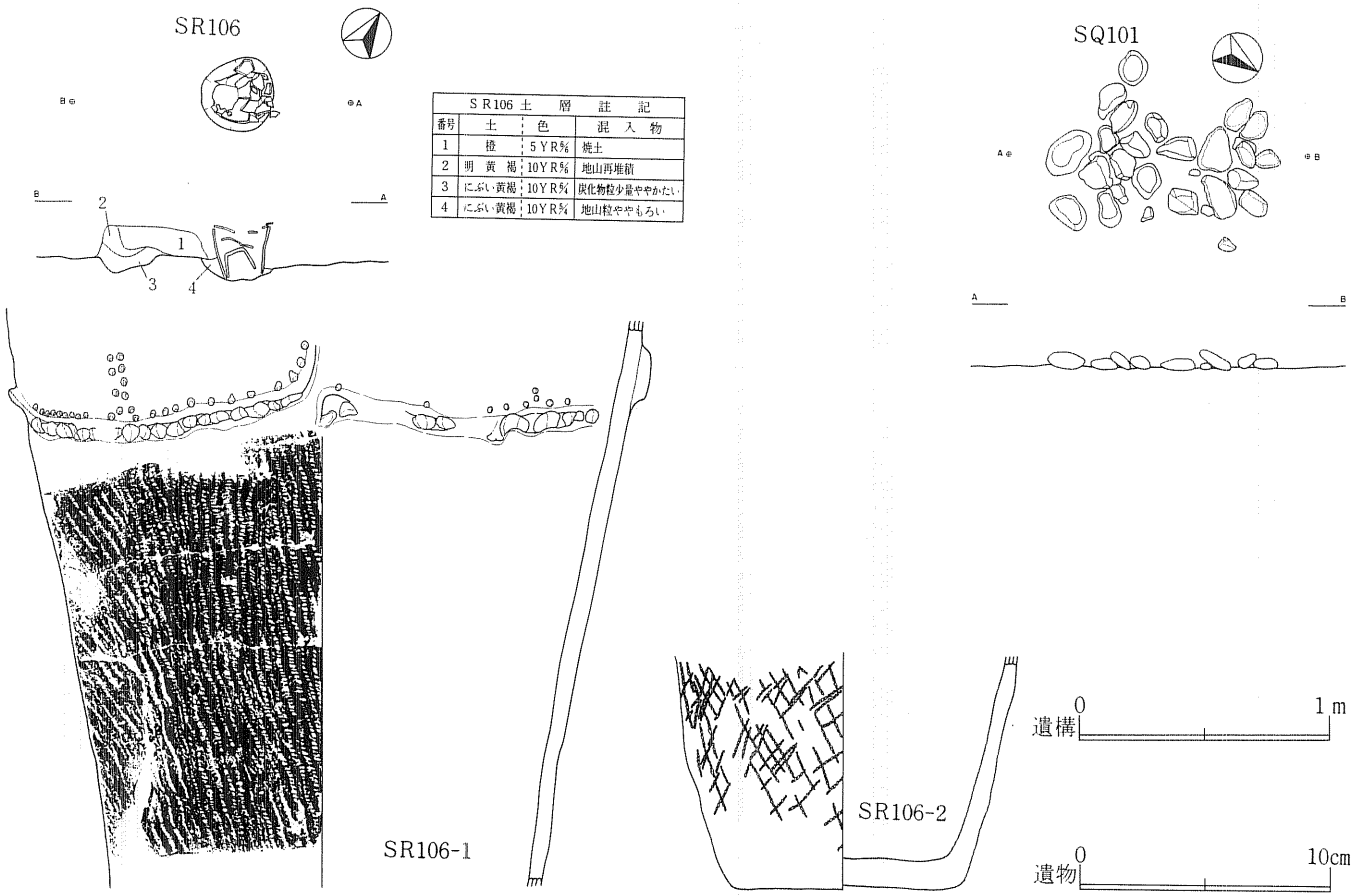
１はおそらく口唇部に存在したであろう４単位の小突起から直線的に垂下し、口頸部において屈曲、口頸部を口唇部に平行に横走した後、末端が胴部に弧状に垂下する隆線を４単位配し、隆線上位を竹管による円形刺突文を沿わせ、隆線上面には爪形の刻み列を施している。横走する隆線により、丁寧に磨かれた口縁部とR撚糸文を施文した地文部とに分けられ、（仮想）小突起間の中間部の口縁部には竹管による２例の円形 刺突文列が縦位に配される。内外面には２次火熱の痕跡、①器面の赤色変化（両面の口縁部）、②煤状炭化物の付着（外面胴部）、③火跳ね（内面）等が観察される。胎土には粗砂粒の他、小石も含まれるが比較的堅く焼成されているようである。最大胴径25.6cm、現高23.1cm、器厚0.6〜0.8cm。

２は２本のＲ撚紐と１本のＲ撚紐を軸に交差させた網目状撚糸文を施文している。外面に器面の赤色変化、火跳ねが認められ、胎土には粗砂粒が多く含まれている。現高9.3cm、底径8.5cm、器厚0.5〜0.8cm、底部厚1.0〜1.2cm。以上の土器は縄文時代後期初頭に属するものと思われる。

（５）配石遺構

ＳＱ101　（第45図、図版21）

ＬＨ52グリッドの地山面上の直径90cmの範囲に、偏平礫あるいは円礫の集合が検出された。礫は表面がほとんど滅していることから段丘礫を含む河原石と判断される。礫の「配列」に規則性を見出すことは出来ず、その直下あるいは周囲においても土坑等の施設を確認出来なかった。



SR106 土　層　註　記			
番号	土	色	混入物
1	橙	5YR6/6	焼土
2	明黄褐	10YR6/4	地山再堆積
3	にぶい黄褐	10YR6/4	炭化物粒少量ややかたい
4	にぶい黄褐	10YR6/4	地山粒ややもろい

第45図　SR106土器埋設遺構と出土遺物及びSQ101配石遺構

（６）遺構外から出土した遺物

①　土器（第46図～第58図、図版45～56）

遺構外から出土した土器は第Ｉ郭に入り込んだ沢（凹地）を中心に調査区全域から検出されている。後世の攪乱・耕地整理などにより層位的に土器の前後関係をとらえる事は不可能であるが、文様・胎土等の諸特徴の差異により時期毎に細分し、土器の持つ情報を記して行く事にする。

第Ｉ群　縄文時代前期初頭から前葉の土器（第46図、図版45）

１類　竹管の押引文を施したもの（１～３）

１・２は同一個体と思われ、地文（ＬＲ原体の横位回転）を施した後に竹管による押引文を施している。沈線状の押引文は最低４条、直線的に横走する。３の押引文は１・２ほど顕著に沈線状を呈さないが、３条の押引文が横走する。本類の土器は胎土に植物繊維を多く含むが、３は砂粒も多く含有する。

２ａ類　ループ文を施したもの（４～９・13～15）

閉端が「環付末端」を呈する原体を横位回転施文したものであるが、前々段多条のものが主体をなす。観察される条の傾きが左上→右下に斜行するもののみであることより、$^{R}\left\{\begin{matrix}^{L}\left\{\begin{matrix}r\\r\end{matrix}\right.\\^{L}\left\{\begin{matrix}r\\r\end{matrix}\right.\end{matrix}\right.$ 前々段多条及び $^{R}\left\{\begin{matrix}^{L}\left\{\begin{matrix}r\\r\end{matrix}\right.\\^{L}\left\{\begin{matrix}r\\r\end{matrix}\right.\end{matrix}\right.$ の原体を横位回転施文したことを窺い知ることができる。胎土はきめが細かく、植物繊維を多く含有する。

２ｂ類　ループ文を施すが植物繊維の含有が少ないもの（10～12）

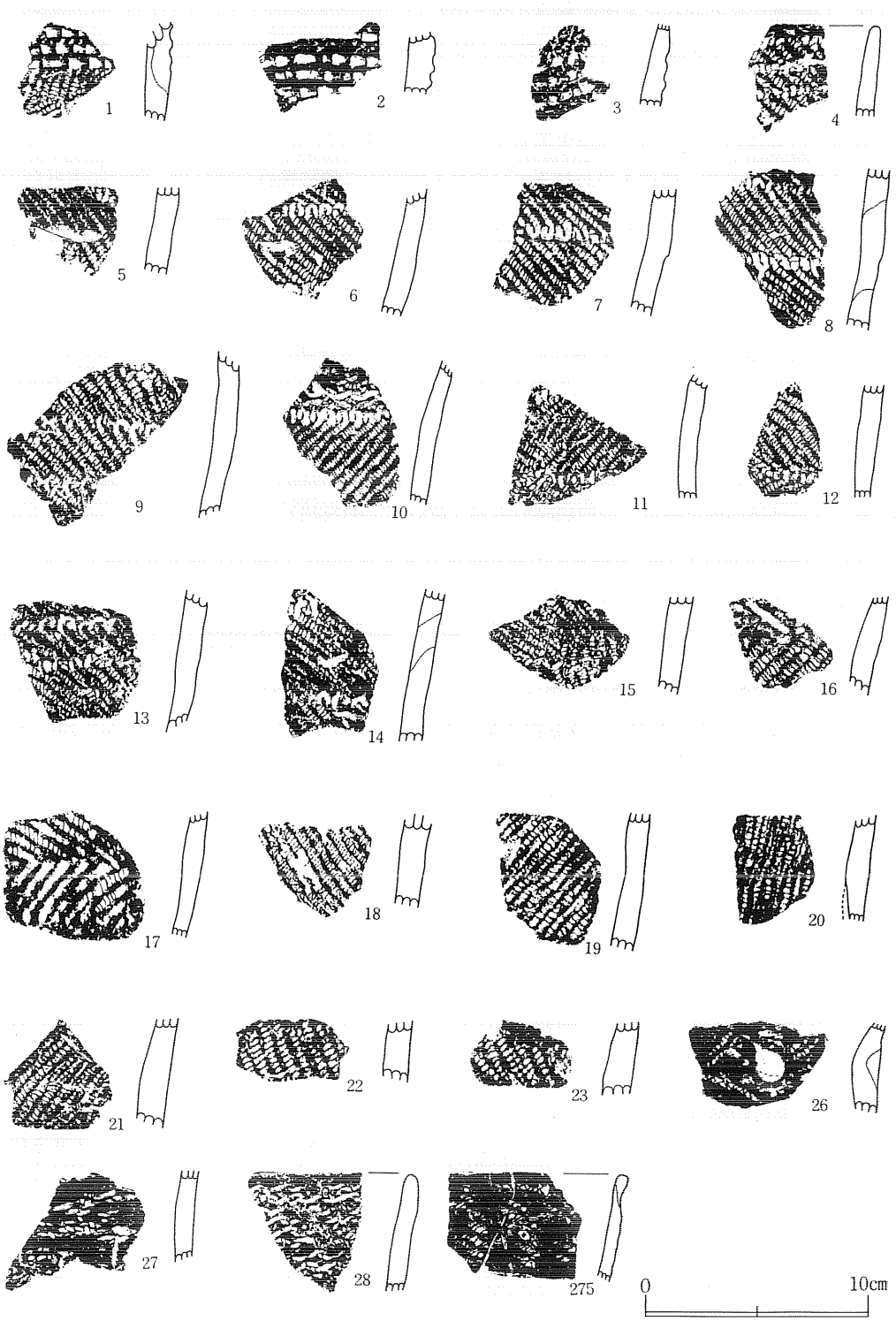
口縁部に結節回転文を施文した後、環付末端を有す前々段多条 $^{L}\left\{\begin{matrix}^{R}\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.\\^{R}\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.\end{matrix}\right.$ 原体を横位回転施文している。胴部には結束第１種羽状縄文が施される。胎土には植物繊維の含有が少なく、粗砂粒の含有が多い。５類の28と同一個体と思われる。

３類　羽状縄文を施したもの（16・17）

２種の異なった撚りの前々段多条を各々上位、下位に横位回転させ、羽状縄文とする。17は縄文施文後、条内に棒状工具を走らせており、条内の節の観察は困難である。２点とも胎土に植物繊維を多く含有するが、16は特に多い。

４類　原体の横位回転による斜行縄文を施したもの（18～23）

全て単節斜行縄文であるが、18のみが前々段多条の原体を回転している。18・23は胎土に多くの植物繊維を含有するが、19～22の胎土は植物繊維を含有するもののきめが細かく精選されたものである。



第46図　第Ⅰ群土器拓影

５類　口縁部に結節回転文を施すもの（26～28）

26の外面には15×20㎜程の楕円形の凹みが見られる。これは刺突文等の文様の一要素とは考え難く、明らかに何かが混入していた痕跡と考えたい。凹みの底面は丸味を持ち、凹みの外周は貼付した粘土が剥れた様相を呈しており、木の実（ドングリ？）と推測できる。28は２ｂ類の10～12と同一個体と思われる。いずれも胎土中に植物繊維を含むが、26の胎土は砂粒をあまり含まず、きめ細かく軽量であるのに対し、27・28は砂粒を多く含む。

６類　無文部と地文部とが交互に縦走するもの（275）

口縁部を強くつまんで、横位に調整し、薄手の口頸部を作り出している。ＬＲ原体を縦位回転施文した後、無文部と地文部とが交互に縦走するように縦位の磨きを施し、無文部の中には縦走する浅い沈線を施すものもある。胎土中には粗砂粒が若干含むが、植物繊維は認められない。

第Ⅱ群　縄文時代前期末葉から中期初頭の土器（第47図、図版46）

１類　口縁部と胴部の境に隆線もしくは結節回転文を巡らし、口縁部文様帯を形成するもの（29～35）

口縁部文様帯には、口縁とほぼ平行して、原体の側面圧痕が数条観察される（34は除く）。使用される原体は、一本の撚紐を軸とし、その軸にもう一本の撚紐を巻き付けた所謂「巻紐」である。29は軸に対し左巻きに巻き付けたもので、口頸部の隆線上にも隆線に垂直に側面圧痕を施している。30は軸に対し右巻きに、31は左巻きに巻き付けている。32は口縁部文様帯に軸に対し左巻きに巻き付けた原体の側面圧痕を口縁部文様帯の他、口唇部にも施し、口頸部には結節回転文を施している。さらに、口縁部文様帯には、小波状を呈す口縁部の波頂部に対応した位置にボタン状貼付文、波頂間の中間に対応した位置に横長の微瘤が施され、胴部には地文が施文されている。以上の土器の内、33・35の胎土には植物繊維が若干含有される。

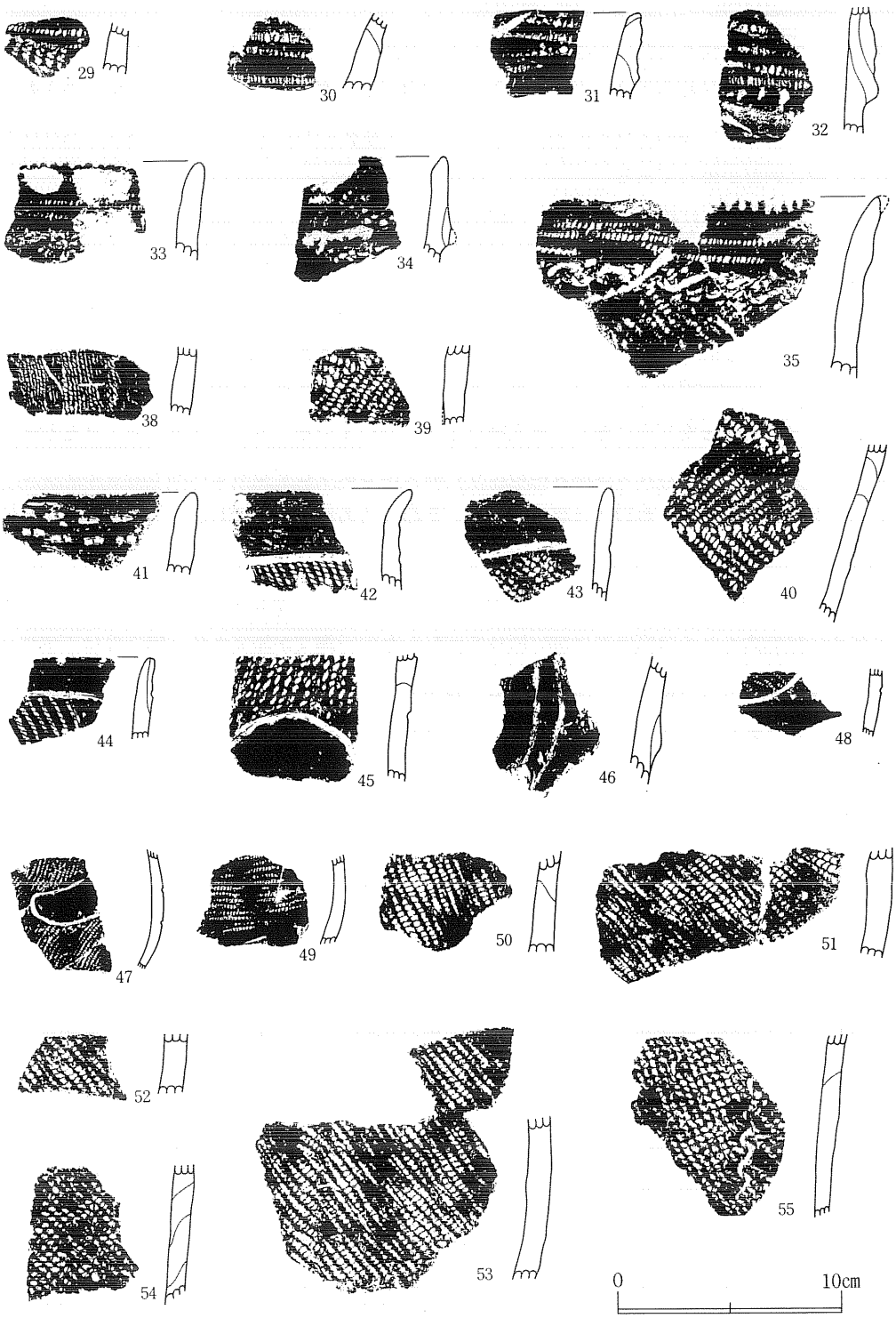
34の口縁部文様帯には巻紐の側面圧痕は施されず、斜行縄文が観察され、胎土には植物繊維が多く含有される。

２類　胴部に撚糸文を施すもの（38）

Ｒ撚紐を軸（棒状のもの）に対し右巻きに隙間なく数回巻き付けた後、斜行気味に巻き続け、さらに隙間なく数回巻き付けた原体を縦位施文している。

３類　胴部に羽状縄文を施すもの（39・40）

各々撚りの異なる２種の原体（ＲＬとＬＲ）の閉端を結束させ一本の原体として、横位回転施文している。胎土には植物繊維も含むが粗砂粒も多く含む。



第47図　　第Ⅱ群・第Ⅲ群拓影

第Ⅲ群　縄文時代中期の土器（第47図、図版46）

１類　口縁部に口縁と平行に刺突列を施すもの（41）

器面に対し横方向から工具の尖端を刺突し、刺突によって一端に盛り上がった粘土を上から押えるなどして、器面を平坦に保っている。胎土には粗い砂粒を多く含有するが、内外面とも丁寧に調整が施してある。

２類　口縁に平行に沈線を一周させ、口縁部を無文とするもの（42～44）

沈線下位に撚糸文ないし斜行縄文を施文するが、42はＲ撚糸文、43はＬＲ原体、44はＲ撚糸文を各々縦位回転している。いずれも胎土中に粗い砂粒を多く含むが、44の内面は丁寧に磨かれ光沢を持つ。口縁部が直立する中にあって、42は外反するものである。

３類　胴部を弧状沈線により区画し、無文部と地文部を対置させるもの（45・47・48）

45はＬＲ撚糸文を地文部に施し、無文部は丁寧に磨いている。地文部が無文部よりも若干高くなっているが、これは文様施文にあたり、無文にしようとする所を何回も磨きをかけているうちに低くなり、それ以外は高くなった。そのところに地文を施し、さらに沈線により区画し、無文部を磨いた結果の所産と考えられる。胎土には多くの粗い砂粒が含有される。47・48は比較的精選された胎土を用い、薄手に作られた壺形土器と考えられる。細沈線により描き、区画内もしくは区画外に細い原体を回転した斜行縄文が施文され、無文部は丁寧に磨かれる。２点とも外面に赤色塗彩の痕跡を留める。

４類　胴部を弧状の微隆線により区画し、無文部と地文部を対置させるもの（46）

胴部に微隆線を貼付して文様区画する。区画内は丁寧に磨かれた無文部であり、区画外は原体判読不明の地文である。

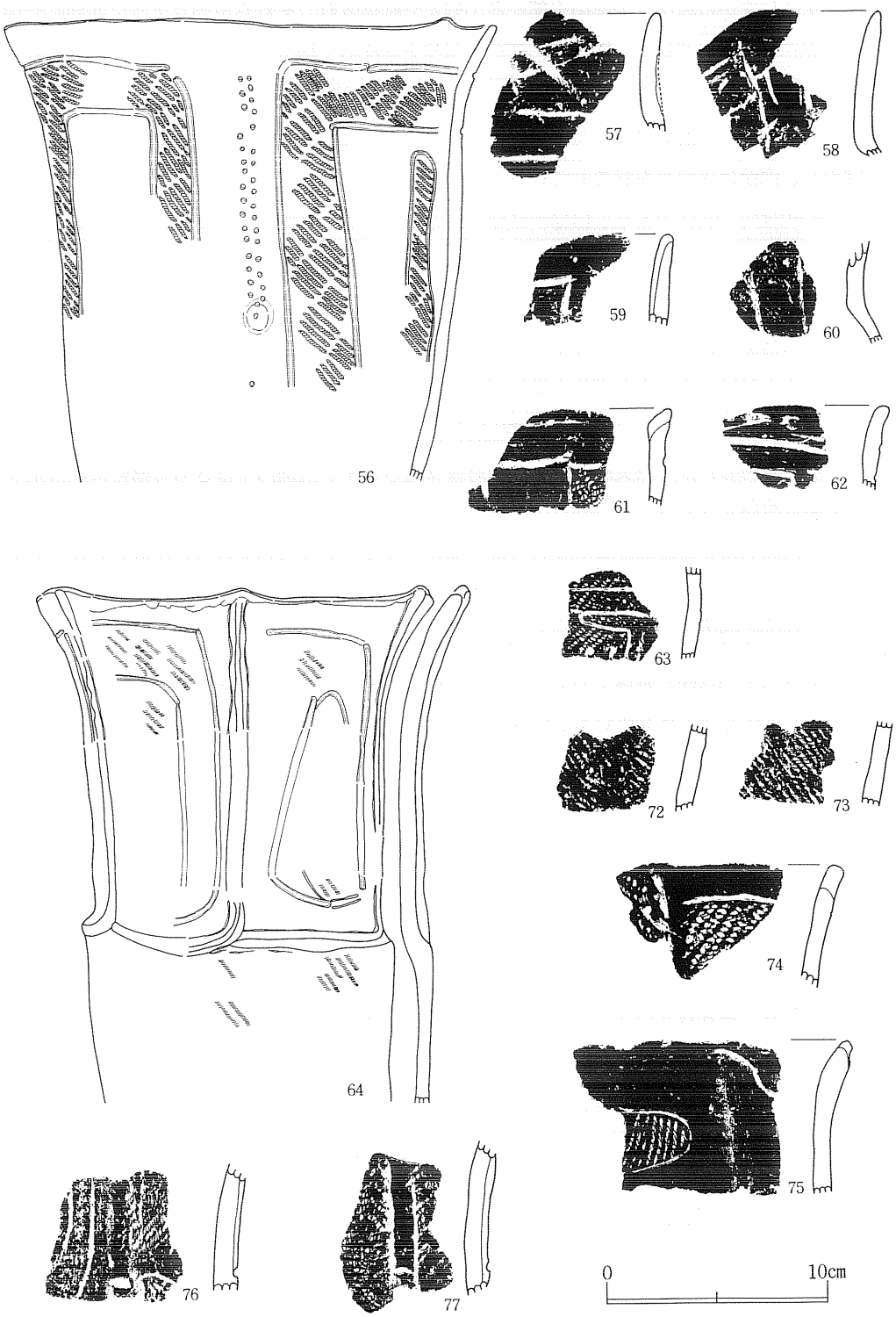
５類　地文のみの胴部破片（49～55）

49は薄手に作られた壺形土器ないしは鉢形土器であろう。体部には細いＬＲ原体を左上から右下へ斜位回転施文し、条を横走させている。内外面とも丁寧に磨かれており、赤色塗彩の痕跡を留める。50～53は同一個体と思われ、ＬＲ原体を縦位回転施文している。胎土に粗い砂粒を多く含み、厚手に作られている。54・55は結節部を持つ前々段反撚の $L\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.\\R\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.\end{matrix}\right.$ 原体を縦位回転施文しており、54の内面には煤状炭化物が多く付着している。

第Ⅳ群　縄文時代中期末葉から後期前葉の土器（第48図～第57図、図版47～56）

１類　沈線のみによる方形区画文が描かれるもの（56～63）

56は口唇部に小突起を数単位配し、胴部に方形区画文を３単位描いている。文様のモチーフは直線的な沈線で下に開口する横位の「ｅ」字状区画文で、区画内にはＬＲ原体を縦位回転施文した斜行縄文を充填している。また、各方形区画文間の中央には円形刺突を施したボ



第48図　　第Ⅳ群土器拓影(1)

タン状貼付文が口縁部と胴部中央部に各１個ずつ貼付され、それらを繋ぐように並列した円形刺突列が施されている。胴部下半部には胴部上半部の文様帯と下半部の地文部とを分ける波状の沈線が横走すると思われるが、一部分しか残存せず全容は不明である。口縁部も含めた無文部は丁寧に磨かれていたと思われるが、二次火熱を受け、外面には煤状炭化物が多く付着し、内面は火跳ねを起こしている。

57～60は同一個体であり、口縁が波状、頸部がくびれる深鉢のものである。描かれた方形区画文全体的のモチーフは知り得ないが、波頂間の胴部に直線的な沈線により描かれているようである。区画内には細いＲ撚糸文が充填され、区画外は丁寧に磨いて無文としている。

61の口唇部は面とりされ内傾している。口唇上及び口縁部は磨いて無文とし、直線的な沈線による方形区画文はＲＬ原体を横位回転施文した後、磨り消しによって無文部と地文部とを対置させている。63はＲＬ原体を縦位回転施文した後、細沈線による方形区画文を描いている。磨り消しによる無文部と地文部の対置は施されず、区画内にはさらに横位に爪形刺突列を配している。

２類　口唇部から直線的に垂下する（微）隆線と沈線が組み合わされ方形区画文が描かれるもの

２ａ類　沈線により無文部と地文部とが対置されているもの（64～77）

64～72・73は同一個体である。口縁に６単位（推定）の小突起を配し、その頂部から直線的な隆線を垂下させている。胴部中央には直線的な隆線が巡り、口唇部から垂下する隆線がこれに連結し、胴部上半には隆線により３方を囲まれた６単位の方形区画文が配される。口唇部から垂下する隆線の内１本の上面には判然としないが刻み様のものが観察される。隆線による方形区画文の中には直線的な沈線による方形を基調とした区画文が描かれ、区画内にはＬＲ原体が縦位回転施文されている。口縁部及び区画外は丁寧に磨いて無文とし、胴部下半にはＬＲ原体を縦位回転施文している。

74・76・77の口唇部から直線的に垂下する隆線上には棒状工具の側面圧痕によると思われる刻みが施されている。74～77の隆線によって囲まれた方形区画内には沈線による方形を基調とした区画文が描かれ、区画内に縄文を施して無文部と縄文部とを対置させている。区画内に施文された縄文は、74がＲＬ原体を縦位回転したもの、75が撚糸文、76・77がＲＬ原体（76）、ＬＲ原体（77）を縦位回転したものである。

２ｂ類　沈線により、無文部と地文部とが対置されていないもの（78～90）

78～87、88～90が各々同一個体である。口唇部に小突起を配し、小突起下を直線的な隆線が垂下する。さらに、小突起下には円孔を有し径17～20㎜のボタン状貼付文が付される。体部には口唇直下からＲ撚糸文が施文され、さらにその上に直線的な沈線による方形を基

調とした区画文が描かれる。区画外の地文部と無文部の対置は行われない。

３類　口唇部から直線的に（微）隆線が垂下するもの

３ａ類　隆線上に刻み、刺突などが施されないもの（91～94）

口縁部が平縁のもの（91）と山形を呈するもの（94）とがある。91～93は地文にＲ撚糸文を施し、隆線の両脇は丁寧に磨いている。93の体部には半截竹管による沈線（区画）文が一部観察される。94は山形口縁の頂部から隆線を垂下させ、口縁部には口唇に沿って幅約20㎜ほどの地文帯を持つ。これは体部のほぼ全体にＬＲ原体を横位回転施文した後、頸部を横位に磨り消した結果によるものと思われる。

３ｂ類　隆線上に断面「Ｖ」字状の刻みを施すもの（95～99）

刻みが刺突によるものと隆線と直交する短沈線によるもの（97）とがある。96は口唇部から垂下する隆線が頸部ないし胴部を直線的に横走する沈線と連結する。98は垂下する隆線の両脇を沈線が垂下する。99は山形口縁を呈し、頂部には沈線による刻みが１個施され、頂部下を杖（ステッキ）状隆線が垂下する。体部には２本のＲ撚紐を軸に交差させた網目状撚糸文が施されている。

３ｃ類　隆線上に指先によると思われる刺突を施すもの（100～103）

断面が「Ｕ」字状を呈し、刺突文の底面には爪の細長い痕跡が観察される。100は平縁の口縁部を丁寧に磨いて無文とし、102・103は隆線の両脇を縦位に磨いて無文としている。103にはさらに隆線に沿って短沈線が縦走する。101・102には地文が観察され、ＬＲ原体の縦位回転によるもの（101）とＲ撚糸文（102）である。

３ｄ類　隆線上に棒状工具の尖端を斜位に刺突したもの（104）

刺突に使用される工具の先端が尖鋭でないもので、刺突文の一つの単位は「Ｄ」形を呈す。104はおそらく、隆線による方形区画を有するものと思われ、その区画内には弧状沈線による区画文が描かれ、沈線区画内には縄文が観察される。沈線区画外は丁寧に磨かれている。

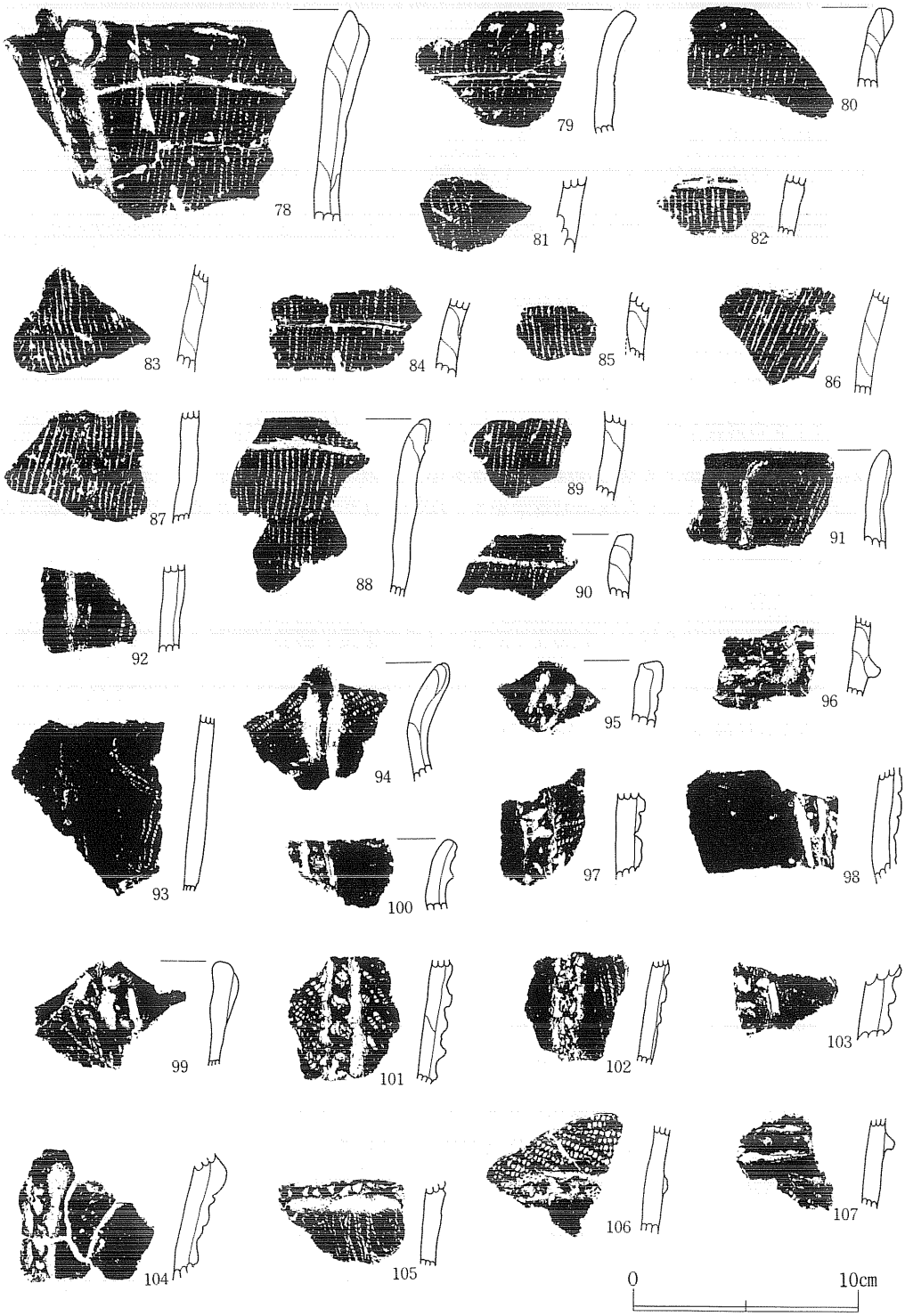
４類　頸部に隆線を巡らし、口縁部と胴部を区切るもの

４ａ類　隆線上に工具の尖端を垂直に刺突したもの（105）

比較的径の小さな円形の刺突列を隆線上に持ち、隆線脇は地文（２本のＲ撚紐を軸に交差させた網目状撚糸文）施文後、横位に調整されている。

４ｂ類　隆線上に半截竹管を斜位に刺突したもの（106）

半截竹管の内側を下にして斜位に刺突したもので、刺突文の１単位は「カマボコ」状の高まりを呈している。口縁部は丁寧に磨いて無文とし、胴部には地文（ＬＲ原体の縦位回転施文）が施される。



第49図　　第Ⅳ群土器拓影(2)

4ｃ類　隆線上に棒状工具の側面を押圧したもの（107）

棒状工具を隆線と直交させて側面押圧している。

4ｄ類　隆線上に指先によると思われる刺突を施すもの

4ｄ－1類（108・109）

刺突文の底面に爪の細長い痕跡が観察される。口縁部は磨いて無文とし、胴部には地文（R撚糸文）が施される。

4ｄ－2類　隆線に沿って竹管による刺突文を施したもの（110）

隆線の上位（口縁部）に刺突文を施している。口縁部は無文を呈し、胴部には地文（L撚糸文）が施される。

5類　頸部ないし胴部に一端が胴部を垂下あるいは口唇部に向けて立ち上がる、数単位の横走する隆線を配すもの

5ａ類　隆線上に刻みを施したもの（111）

刻みは、棒状工具の側面押圧によるもので、工具の一端は尖端を呈していた（刻みの一つにそれが窺える）ようである。

5ｂ類　隆線に沿って竹管による円形刺突文が施されているもの（112・113）

いずれも刺突文は横走する隆線の上位に施され、113は垂下する隆線の両脇にも刺突文を施している。112の口縁部は磨いて無文とし、胴部には斜行縄文が施される。113の地文は網目状撚糸文である。

6類　隆線に沿って、竹管による円形刺突文あるいは棒状工具の尖端による刺突文が施されるものと隆線中央に円形刺突を施したボタン状貼付文を付すものがある。

6ａ類　ボタン状貼付文を持たないもの（114～123）

114は平縁の口縁部に垂下する隆線と一連の粘土を貼付して小突起を配している。隆線の片脇円形刺突文を施し、地文を口唇直下より施文している。115～117は山形口縁であり、円形刺突文は隆線の両脇に施され、117の一口唇上には口唇と平行して沈線が施される。この他、118・120の隆線の両脇にも円形刺突文が施される。119は棒状工具の尖端部側面を垂下する隆線と直交させて押圧している。この押圧（刺突）文はさらに頸部を横走する隆線の上位にも施されている。121～123は頸部を横走する隆線の上位（口縁部）に尖端刺突（121）、竹管による刺突（122・123）を施し、胴部にはＬＲ原体の縦位回転施文(121)、網目状撚糸文等の地文が施される。

6ｂ類　ボタン状貼付文を持つもの（124～136）

124・125は同一個体である。山形口縁の頂部下にボタン状貼付文を付し、それを起点として隆線が3方に展開する。その内、2本は口縁に平行に展開し、隆線上位に棒状工具の

尖端部刺突文が施される。もう１本の隆線は真直ぐ垂下し、隆線上に尖端刺突文を施している。126・127は山形口縁ないし小突起状を呈し頂部下にボタン状貼付文を付している。口唇直下（127の口唇直下約１㎝は無文）から原体を縦位回転した地文が施される。128は平縁で、口縁端にボタン状貼付文が付され、円形刺突文は隆線脇の他、口唇直下にも列をなして施される。129は口縁端に径約16㎜程のボタン状貼付文を付し、その下位に両脇に円形刺突文を施した２本の隆線を垂下させている。130は、口唇部より垂下する隆線の下端（胴部）にボタン状貼付文を付す。

131～136は同一個体である。口唇部より垂下する隆線の下端（胴部）にボタン状貼付文を付し、尖端刺突文を垂下する隆線の片脇及び胴部を横走する隆線の上位に施している。また、横走する隆線の上下両方に地文（細いＲ撚糸文）が施されている。

７類　口唇部から垂下する隆線に沿って短沈線が施されるもの（137・138）

137は尖端を持つ棒状工具で短沈線を引いている。138は山形口縁をなし、頂部下に隆線を垂下させ、その両脇に長さ５㎜程の短沈線を沿わせている。さらに隆線の両脇には隆線を起点とする沈線が斜行している。口縁端は口唇に平行して粘土紐を貼付し、調整して折り返し口縁風に作られ、その上面に、沈線による刻みが施してある。

８類　口縁部もしくは胴部を垂下する２条の平行沈線間に棒状工具による刺突を施すもの

８ａ類　ボタン状貼付文を持たないもの（139・140）

139は波状を呈す口縁部である。先端が丸味を持つの棒状工具により沈線文・刺突文が施されている。地文は網目状撚糸文である。140の刺突文はやや尖端気味の棒状工具を斜位に刺突したものである。胴部には斜行縄文が施文されている。

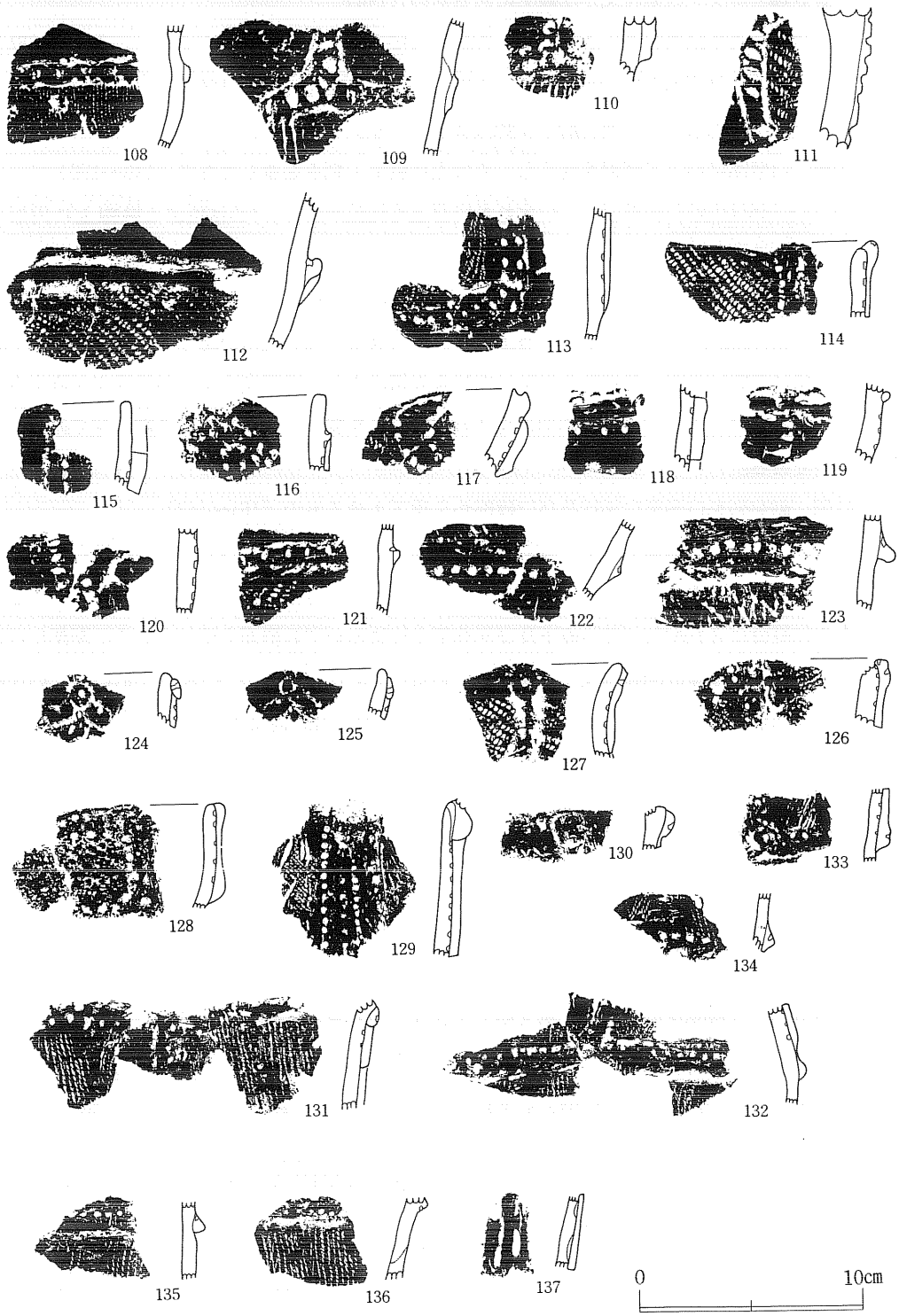
８ｂ類　ボタン状貼付文を持つもの（141）

山形口縁の頂部に刻みを３本施し、頂部下には中央に円形刺突文を持つ径12㎜程のボタン状貼付文を付す。ボタン状貼付文下に２条の平行沈線が垂下し、沈線間に刺突文が施されるが、その他にボタン状貼付文を挟むように「く」の字状の沈線文を対峙させ、その沈線の内側に刺突文を沿わせている。地文には斜行縄文が施されている。

９類　やや大きめのボタン状貼付文を持つもの

９ａ類　ボタン状貼付文から隆線が垂下するもの（142・143）

口縁部が「く」字に曲がる深鉢形土器である。口縁端に径15㎜程のボタン状貼付文を付し、その中央には半截竹管による刺突文が施してある。ボタン状貼付文から垂下する隆線により無文部と地文部とが対置され、一方の隆線上には棒状工具の側面圧痕による２個一対の刻みが施される。地文はＬＲ原体を縦位回転施文したものである。さらに、口縁部には棒状工具の側面圧痕による斜位の刻みが巡る。地文部以外は丁寧に磨かれている。



第50図　第Ⅳ群土器拓影(3)

９ｂ類　ボタン状貼付文が沈線上にあるもの（144）

沈線により区画文を描画し、２本の沈線の接点にボタン状貼付文を付す。ボタン状貼付文の中央には円形の尖端刺突が施されている。区画内には前々段多条 L R R 原体を縦位回転施文し、区画外は丁寧に磨いて無文としている。

10類　口唇部に沿って隆線を巡らし、その上に刺突・刻みを施したもの（145～150）

145・146は山形口縁を呈し、いずれも口唇上を沈線が走る。145は頂部と隆線上に円形の尖端刺突を施し、146は隆線上に隆線に直交する刻みを施している。147～150は平縁の口縁を呈すが、隆線上に刺突文（147）、隆線と斜交する刻み（148・149）、隆線と直交する刻み（150）を施している。147の口唇上には145・146と同様、沈線が走らせてある。150の胴部文様は沈線区画文と弧状粘土板貼付文により構成され、区画文内には斜行縄文が施文される。貼付文は、弧状粘土板の両端に径７㎜程の円孔を施し、両者を２本の細沈線で連絡したものである。

11類　刺突列を口唇部に平行及び口唇部から垂下させるもの（151～157）

151～153は同一個体である。頸部において強く「く」の字状に内屈し、口縁端と屈曲部に対に外側に突出する突起を付している。円形刺突文は口縁部に限定され、２個一対の突起を中心に縦位に３列配し、口唇直下及び屈曲部上位においては器面を巡っている。胴部には地文（ＬＲ原体の縦位回転施文）が施されている。154（山形突起）・155（山形口縁）の頂部下には円形刺突文が垂下し、156の口唇直下には２列の円形刺突文が巡っている。157は口唇に平行する隆線の上面に円形刺突列を施している。

12類　直線的沈線と曲線的沈線を組み合わせて、三角形ないし楕円形を基調とした大区画文を描くもの（副要素として鉤状沈線文を持つものがある。）

12ａ類　無文の口縁部（158・159）

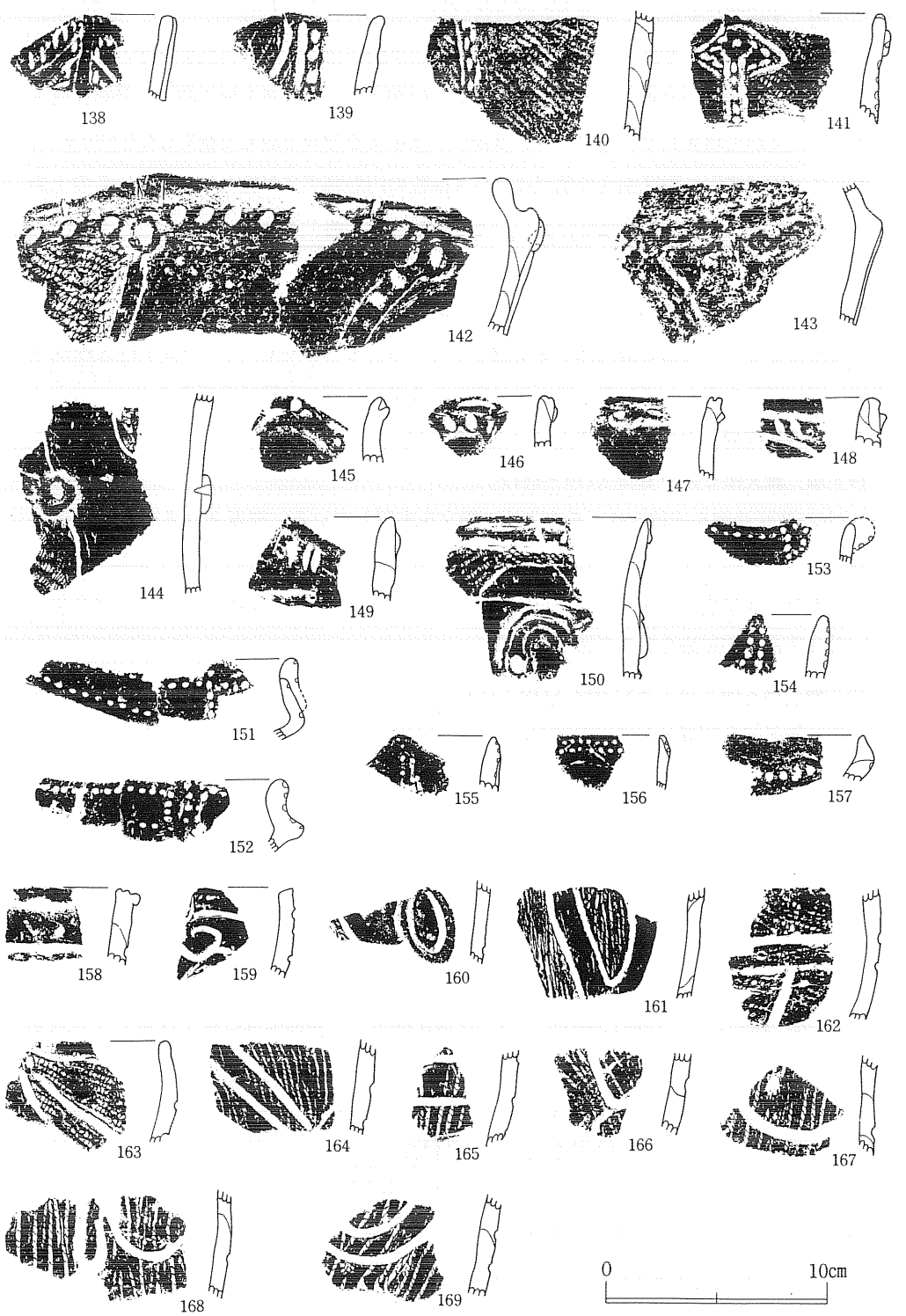
158の口唇上にはＬ撚紐の側面圧痕が２条施され、口縁部には直線的な沈線が横走する。159は口唇部から鉤状ないし「Ｃ」字状の沈線が垂下する。

12ｂ類　沈線間を磨り消し、無文部と地文部とを対置させるもの（160～162）

いずれも地文施文後に沈線を描き、さらに磨り消しによって無文部を作り出している。地文は、斜行縄文（160・161）、Ｒ撚糸文（161）である。

12ｃ類　沈線間を磨り消さないもの（163～170）

いずれも地文施文後に沈線を描いている。地文は163のみが斜行縄文であり、他は全てＲ撚糸文である。168・170には副要素としての鉤状沈線文が描かれている。



第51図　第Ⅳ群土器拓影(4)

12ｄ類　沈線間に充填施文を施すもの（171）

口唇部に沈線を１条巡らし、胴部には弧状沈線を数重に配し、三角形を基調とした区画文及び円（楕円）形区画文を描画している。沈線間には、無文部と地文部とが対置されるように縄文が充填されているが、これは細いＲ撚糸文を方向を変えて施文したものである。さらに、円（楕円）形区画文の頂点には径５㎜程の円形刺突文が施されている。この土器は本遺跡において他に例を見ないものであり、浅鉢形土器であろう。

13類　横走する平行沈線と撚糸文が組み合わさったもの（172～175）

172～174（173・174は同一個体）は平行沈線間にＲ撚糸文を充填施文し、区画外を丁寧に磨いて無文とし、無文部と縄文部とを対置させている。それに対して、175は平行沈線間を丁寧に磨いて無文部としている。区画外に施される縄文は細いＲ撚糸文である。

14類　曲線的沈線と斜行縄文が組み合わさったもの

14ａ類　無文部を持つもの（176・177）

176は弧状沈線を連続させ、その上位に縄文を充填している。充填される縄文は前々段多条 L{R{ε ε ε ε / R{ε ε ε ε 原体を左上→右下に斜位回転施文したものであり、条はやや横走気味である。区画外は丁寧に磨いている。177は沈線間を丁寧に磨り消し無文部としている。地文はＲＬ原体を縦位回転施文したものである。

14ｂ類　無文部を持たないもの（178・179）

地文施文後に沈線文を描いている。

15類　櫛歯状沈線文ないし条痕を施すもの（180～183）

180・181はＲ撚糸文を施文後、櫛歯状沈線を非直線的に描画している。沈線を描くのに使用された原体は半截された工具の先端を調整せず、木目を留めていたものと推測される。182・183は条痕文を施している。

16類　無文地に沈線及び微隆線により文様を描くもの

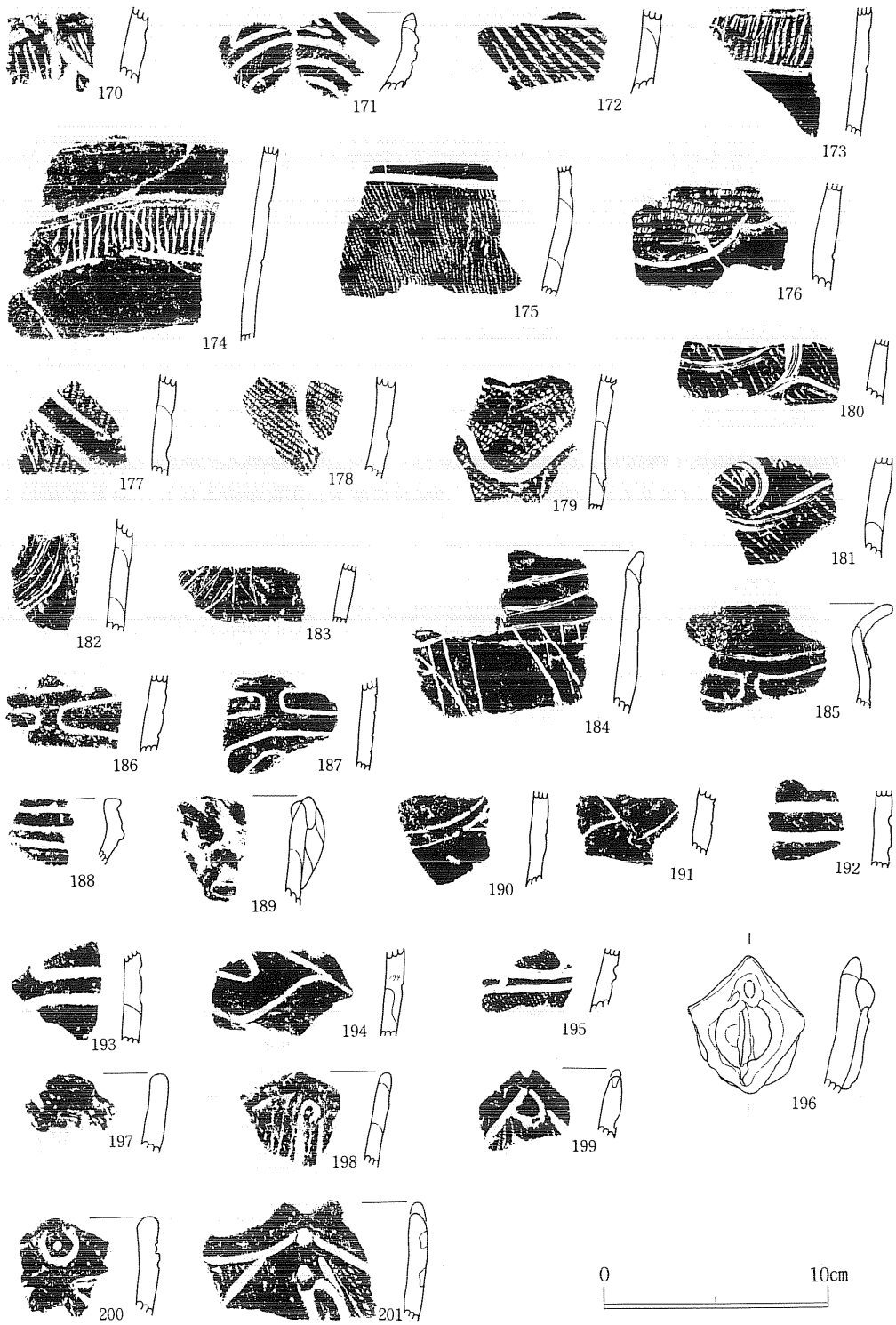
16ａ類　細い沈線によるもの（184～191）

184の口縁部には口唇部と平行に３本の沈線が横走し、胴部には口縁部沈線の下位沈線に起点をもつ直線的な沈線を縦走及び斜走させている。185は内湾する胴部、外傾する口縁部を持つ壺形土器である。微隆線とそれに沿った沈線により文様が描かれる。189は山形口縁の頂部下に２本の粘土紐を絡ませた貼付文を付す。

本類の土器の器面はいずれも丁寧に磨かれている。

16ｂ類　太い沈線によるもの（192～194）

本類の土器も器面を丁寧に磨いているが、192・193には赤色塗彩が認められる。



第52図　　第Ⅳ群土器拓影(5)

17類　横走する数条の沈線を弧状の沈線で連絡するもの（195）

細いＲ撚糸文を地文とし、直線的な沈線及び弧状沈線を描いている。

18類　山形突起ないし山形口縁に文様を持つもの

18ａ類　貼付文によるもの（196）

頂部が尖端をなし、頂部下には瘤状貼付文及び縦断する隆線を持つ環状貼付文が一連の貼付文として付されている。山形突起の一部分に過ぎないので、この貼付文が何をモチーフしたのか即断できないが、本遺跡においては他に例を見ず奇異である。

18ｂ類　沈線ないし刺突によるもの（197～201）

197は頂部に太い棒状工具の側面圧痕を施し、刻みをいれている。頂部下には円形刺突文が観察できる。198の頂部下には左斜め下に開口する小「Ｃ」字状沈線文が配され、この沈線文下には２本の浅い沈線が垂下している。また、地文（撚糸文）が観察される。199頂部には深さ７㎜程の円形刺突文が施され、頂部下には沈線文が展開されている。沈線下位には地文（撚糸文）が観察される。200は頂部下に円形刺突を施し、それを囲むように上方が開口する円形沈線文（ないしは「Ｕ」字状沈線文）が描かれている。201の口縁部は双頭の山形口縁を呈し、谷間に対応する外面には竹管による径７㎜程の円形刺突文が縦位に２個配され、上位刺突文は口唇部に平行する沈線及び胴部に展開される沈線の起点となっている。地文はＲ撚糸文である。

19類　口縁部に付す大形突起（202）

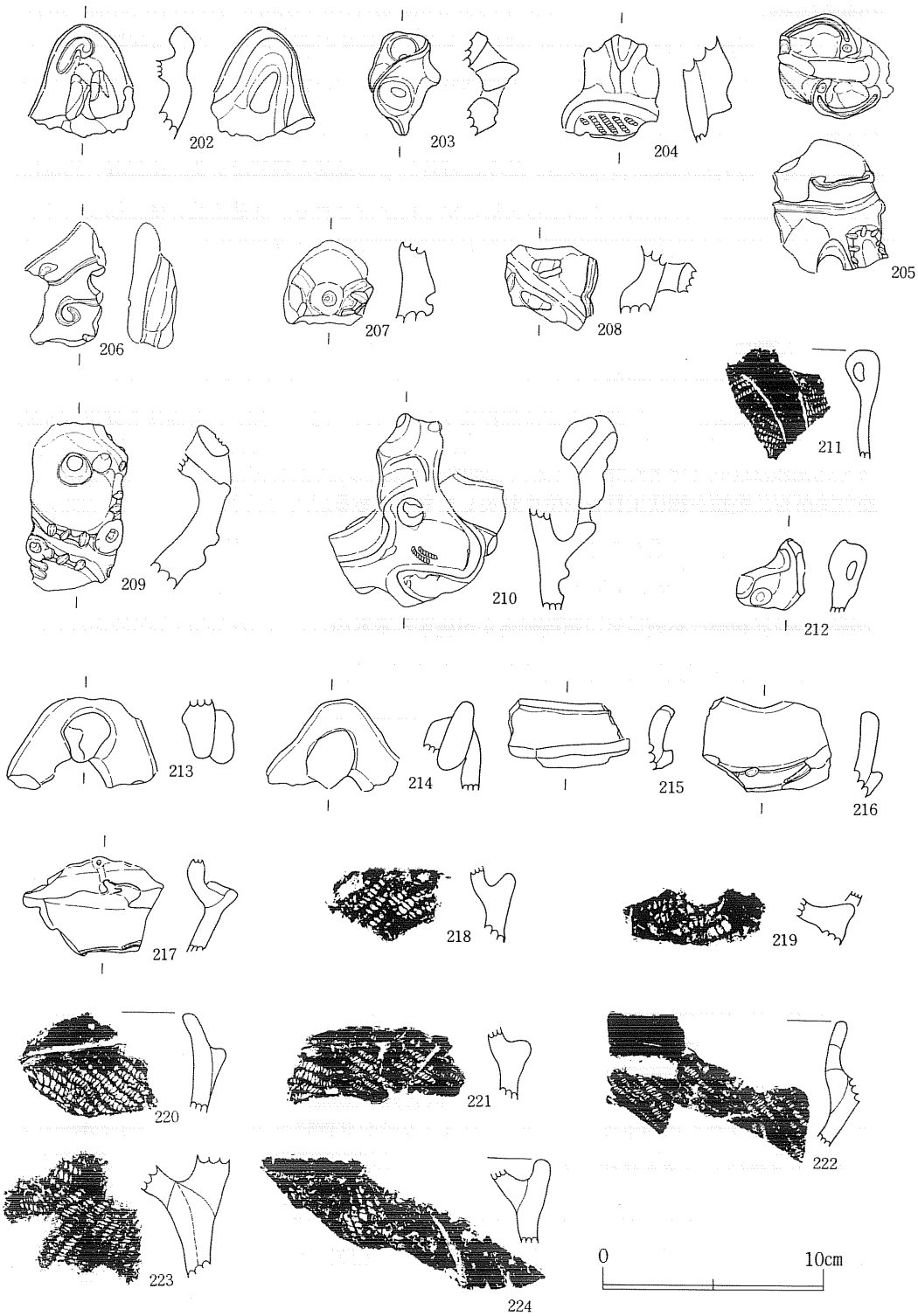
２枚の粘土板を貼り合わせ、器面を調整した後、棒状工具によって中央部に粘土を掻き上げ、中央部に小突起を作り出している。さらに小突起の上位にはステッキ状沈線文が施してある。

20類　橋状把手（203～214）

本類と21類は対をなすものであるが、全体の形状を窺い知ることのできる資料（210～212）が乏しく、ここでは本体（複合口縁）と把手部とを分けて記述することにする。

203～210は長方形の粘土板に隆線（粘土紐）貼付・粘土板貼付・沈線等を施したかなり装飾性の強いものであり、これらは１～３個の貫通孔を有す。207・209は中央に円形の刺突をもつボタン状貼付文を付し、そこから展開される隆線上には刻みが施される。210は、複合口縁の外位口縁から立ち上がる橋状把手に３個の貫通孔を有し、外位口縁の外面には弧状隆線による区画文が描かれている。

211・212の橋状把手は先のものに比べるとかなり単純な作りであり、簡単に外位口縁と内位口縁を橋渡ししている。211の外面には沈線による区画文が描かれ、区画内に地文を施し、区画外は磨かれた無文部を呈す。地文は付加縄文である。212の外面には径５㎜ほどの円孔



第53図　第Ⅳ群土器実測・拓影(6)

が配される。

213・214は馬蹄形（213）及び山形（214）を呈する橋状把手である。この橋状把手は以下の手順で作り出されたものであろう。①馬蹄形（「U」字状）及び山形（「く」の字状）の粘土板を外位口縁と内位口縁に橋渡しする。つまり、粘土板の一端（左側）は内位口縁に、他端（右側）は外位口縁に付される。②①の橋状把手の基部と相前後する外位口縁・内位口縁の位置と橋状把手の頂部とを結ぶ長方形の粘土板が付される。③基部及び粘土板接合部が調整され、全面が磨かれる。214は21類の224と同一個体の可能性がある。

21類　口縁が「く」字に屈曲し、二重の口縁をなすもの（215〜227）

口縁の外側には地文を施すもの（218〜224）と刺突文を施すもの（226・227）とがある。地文はＲＬ原体を縦位回転施文したもの（218・223）、ＬＲ原体を縦位回転施文したもの（220）、前々段多条 L{R{ℓ ℓ ℓ ℓ / R{ℓ ℓ ℓ ℓ 原体を縦位回転施文したもの（221・222）、Ｌ原体を縦位回転施文したもの（224)である。224にはさらに隆線も窺える。刺突文（226・227）は器面に対し横方向から、先端が棒状工具を斜位に刺突したものである。

口縁の外面は丁寧に磨かれ無文を呈するものが一般的である。（本遺跡において、例外はない。）225の内位口縁に付された橋状把手の基部には貫通孔が１個施される。

22類　胴部に数段にわたって、連続刺突文が施されるもの

22ａ類　刺突を器面に対し垂直に施したもの（36・37）

四截竹管を器面に対し垂直に刺突し、刺突列を横走させている。36から窺えるように少なくとも３段の刺突列が横走する。

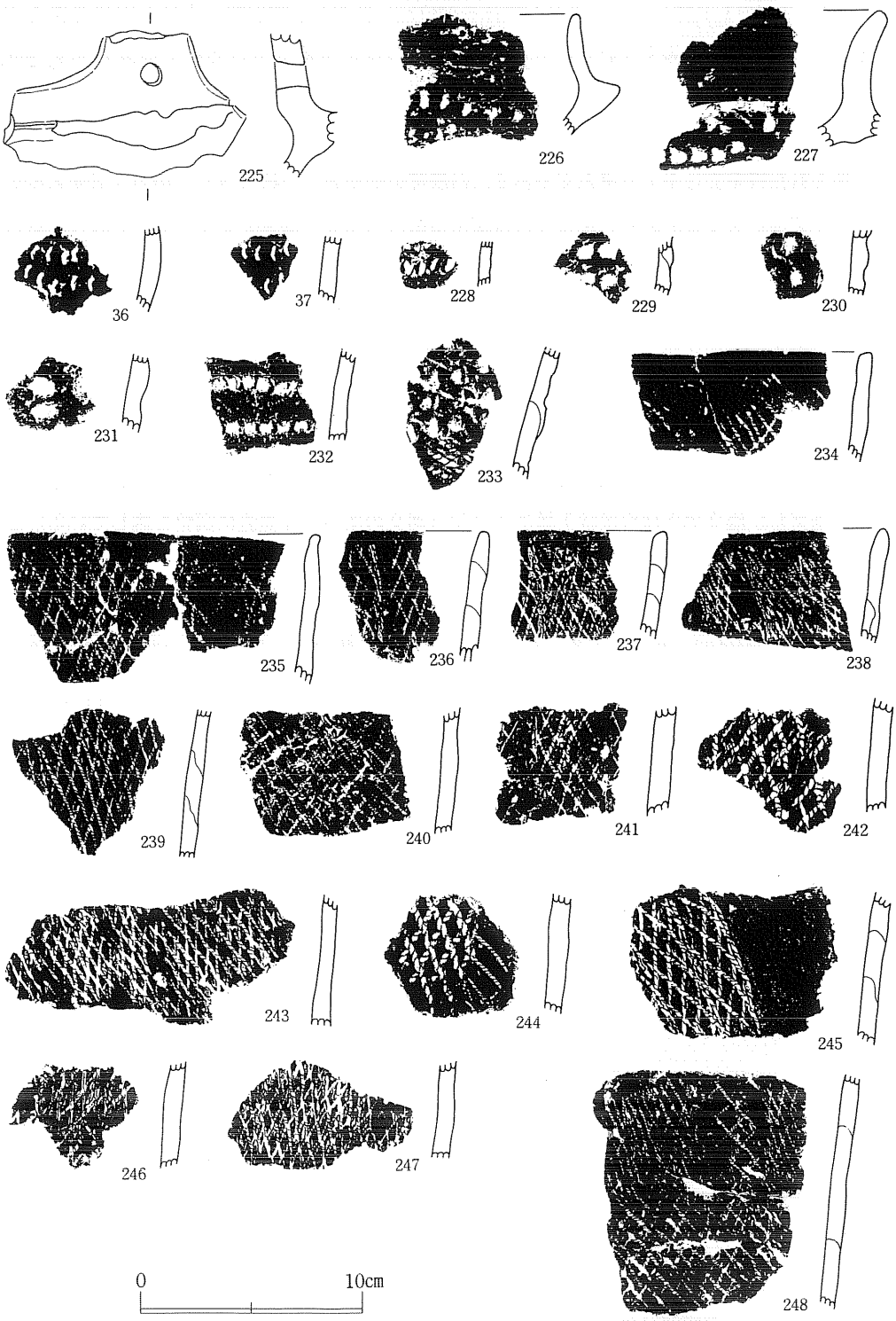
22ｂ類　刺突を器面に対し横方向から施したもの（228〜233）

刺突文には、刺突が左右両方から行われ、爪先でつまんだような様相を呈すもの（228）と一方向のみから棒状工具により一端に粘土を押し寄せる感じに施され、一端に粘土が盛り上がっているものとがある。これらの内、228・232は刺突列の間隔が大きく整然と刺突文が並んでいる印象を受け、他のものは刺突文が混在していると言う印象を受ける。233の下位には斜位縄文が観察される。

23類　ほぼ全面に網目状撚糸文のみが施されるもの（234〜249）

２本の撚紐を軸に交差させて巻き付けた原体を縦位に回転施文している。原体は２本のＲ撚紐を交差させたものが主体をなすが、224は２本のＬＲ撚紐を交差させ、246は２本一対のℓ撚紐とｒ撚紐を交差させている。

口縁端を横位に調整（磨き）して無文とする（234〜238）が、234は特に幅広い無文帯を設けている。また、245は地文施文後、浅沈線により文様区画し、区画外を丁寧に磨いて無文としている。



第54図　第Ⅳ群土器拓影(7)

244は２本のＬＲ撚紐を交差させた原体を縦位回転施文し、空白部に「Ｖ」字状沈線を充填している 。249に施文された撚糸文の網目間には撚紐を巻き付けた軸の痕跡が施文方向（縦方向）と直交して認められる。

24類　ほぼ全面に撚糸文のみが施されるもの（250～273）

施された撚糸文は全てＲ撚糸文である。口縁部の形態として折り返し口縁風を呈するものとそうでないものとがあり、後者の口縁端には横位に調整（磨き）して無文帯を設けたもの（251・252・254・258）がある。255（263も同一個体）は外反する口縁部を呈する。

折り返し口縁風を呈する口縁部（256・257・259～262）は丁寧に磨かれ無文を呈し、平縁のものが主体をなすが、山形口縁（261）のものもある。

底縁部（272）は横位に調整（消し及び磨き）されている。

25類　ほぼ全面に斜行縄文のみが施されるもの（24・25・274・276～290）

24は太めのＲＬ原体を回転させ、胎土は砂粒を含むものの精選されている。25はＬ原体を回転施文し、施文部外は櫛歯状工具により斜行縄文の条にほぼ垂直に調整を施している。２点とも外面に赤色塗彩の痕跡を留める。

274は薄手の比較的小形の深鉢土器に復元される。ＬＲ原体を縦位回転施文している。276・277・282～284は同一個体である。ＬＲ原体を縦位回転施文し、器面には煤状炭化物・煮こぼれ痕が付着している。278～281は同一個体であり、先の276他同様、大形の深鉢形土器に復元される。一端に結節部を有すＬＲ原体を縦位回転ないし横位回転（279）、斜位回転（280）させて施文している。原体を斜位回転した時、条は横走する。285は比較的小形の深鉢形土器に復元されるであろう。細いＲＬ原体を縦位回転施文している。286はＬＲ原体を縦位回転施文している。287・290は大形深鉢土器に復元され、ＬＲ原体を縦位回転施文している。器面には煤状炭化物が多く付着している。288は一端に結節部を有すＬ原体を縦位回転施文している。289は口頸部を持つ胴部上半の資料である。一端に結節部を有すＬＲ原体を縦位回転施文している。

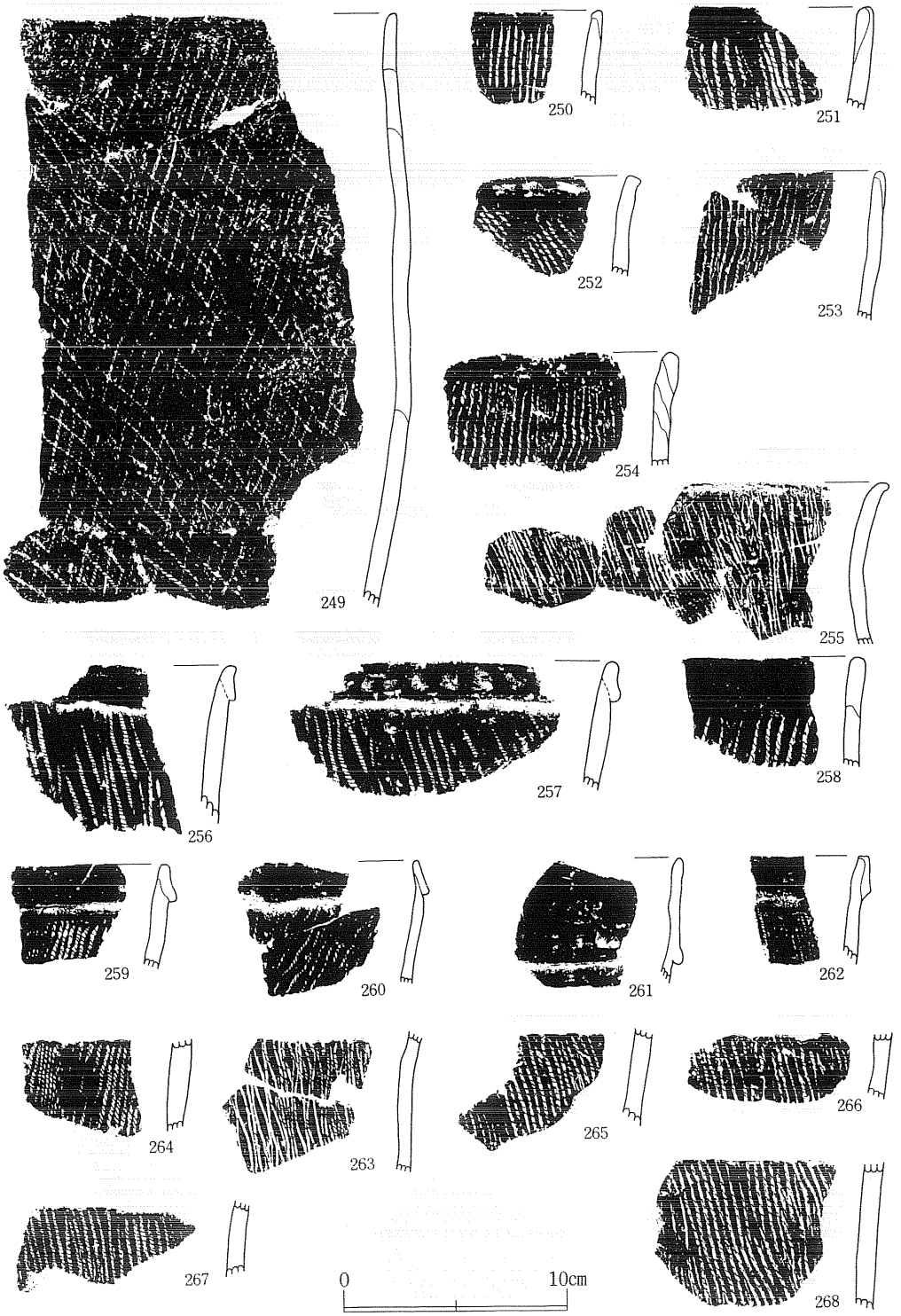
26類　全面が無文のもの（312）

口縁部を横位に、胴部は縦位に磨き、沈線・地文等の文様要素を一切施さない無文の土器で、口径10.3㎝、底径7.0㎝、器高13.3㎝と小型の深鉢形を呈する。

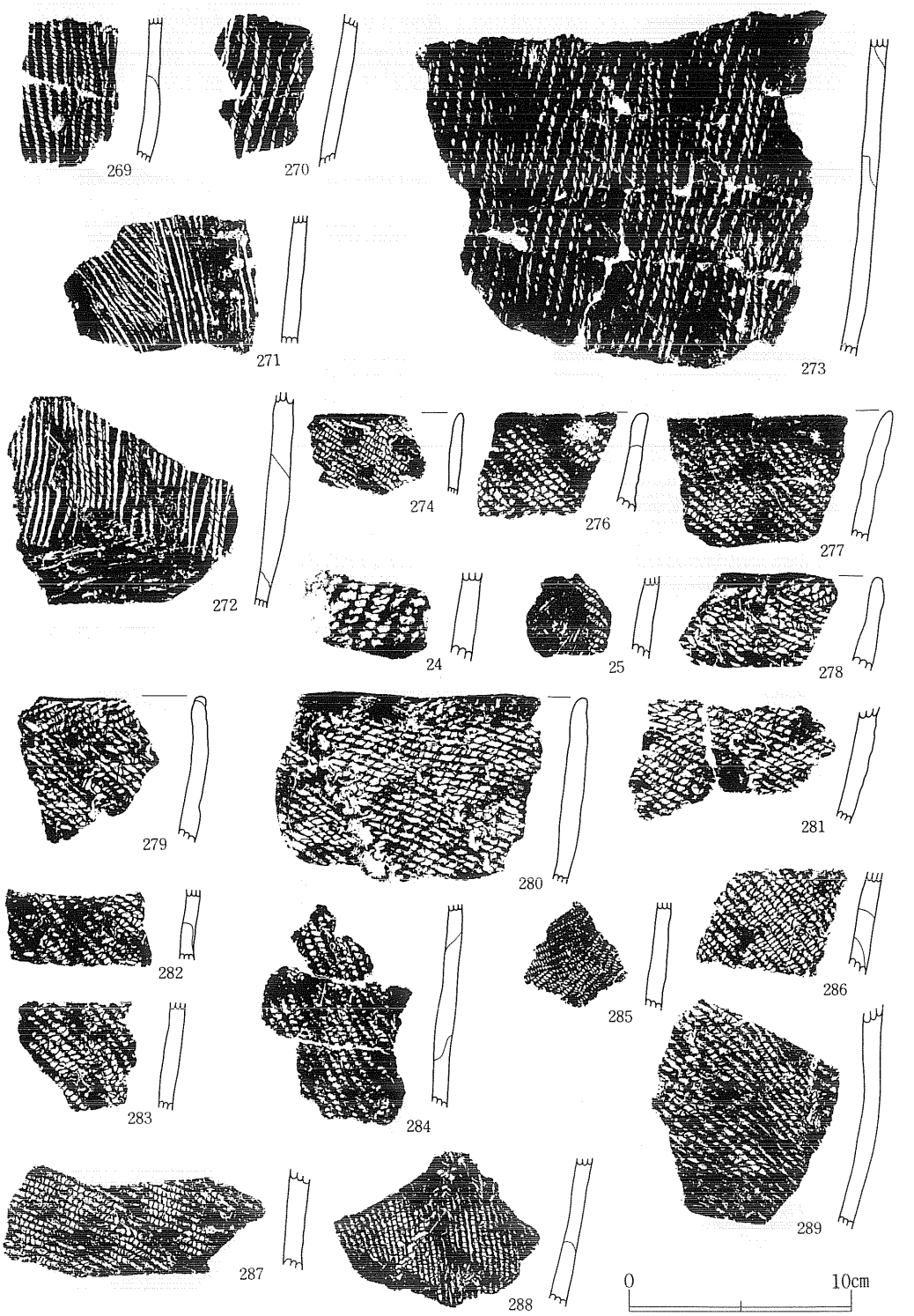
第Ｖ群　底部資料（第57図・第58図）

底部資料を一括して本群とした。（291～304）

全て深鉢形土器の底部と考えられるが、291・292は比較的小型の深鉢形土器に帰属するものである。293～295の底縁部は外側に強く張り出し、294・295・300・301の底面には木葉痕が認め



第55図　　第Ⅳ群土器拓影(8)



第56図　第Ⅳ群土器拓影(9)

られる。また、２次加熱の痕跡（煤状炭化物の付着、器面の赤色変化、火跳ね等）が窺えるものが多く見られる。

第Ⅵ群　小形土器・注口土器（第58図）

小形土器・注口土器などを一括して本群とした。

１類　小形土器（305～310）

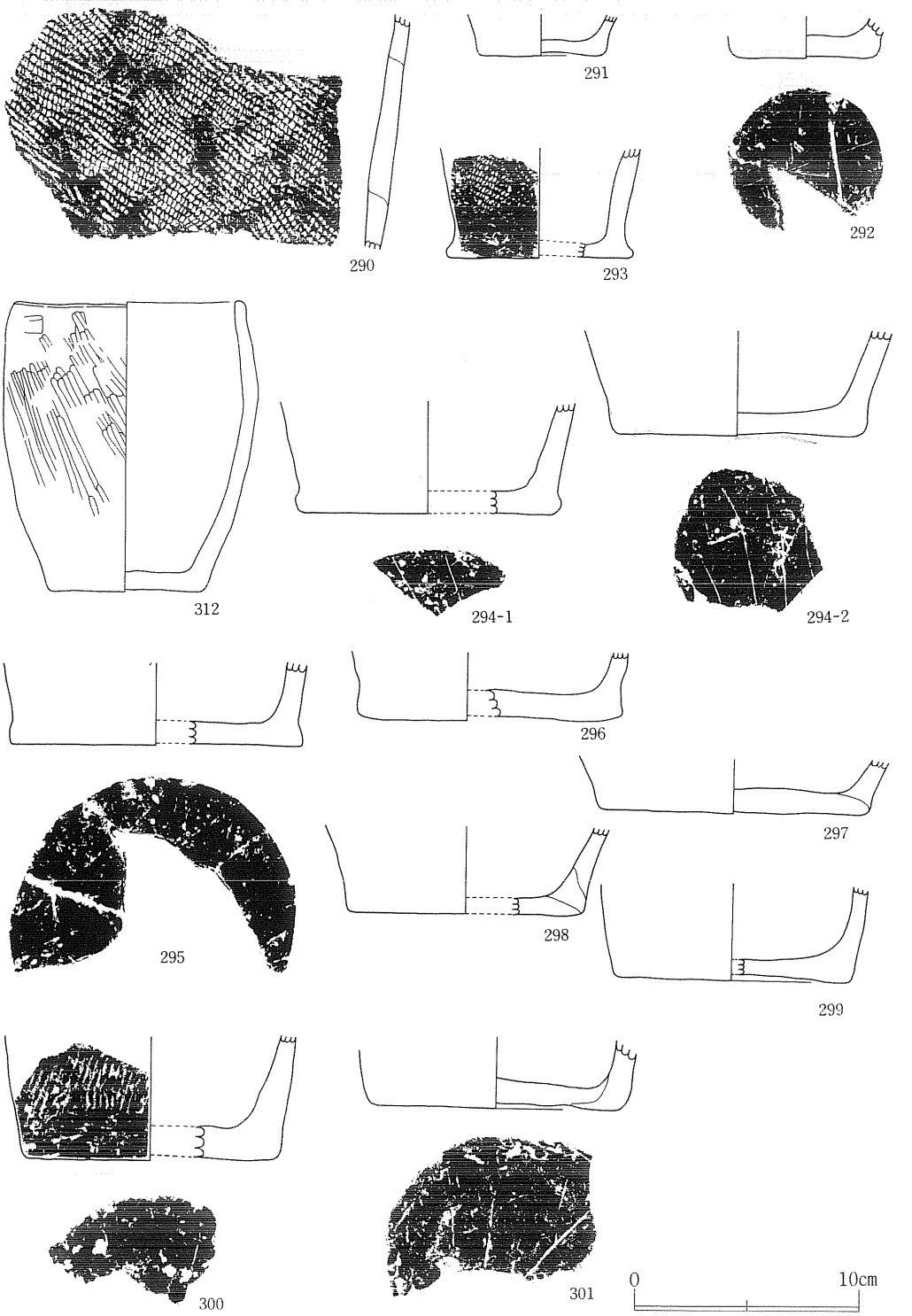
305は台付鉢形土器の小形品である。胴部には（Ｒ＋Ｒ）網目状撚糸文が施文され、赤色塗彩されている。内面には煤状炭化物が付着する。

309は蓋形土器である。つまみ部は欠損するため、その形状を知り得ない。

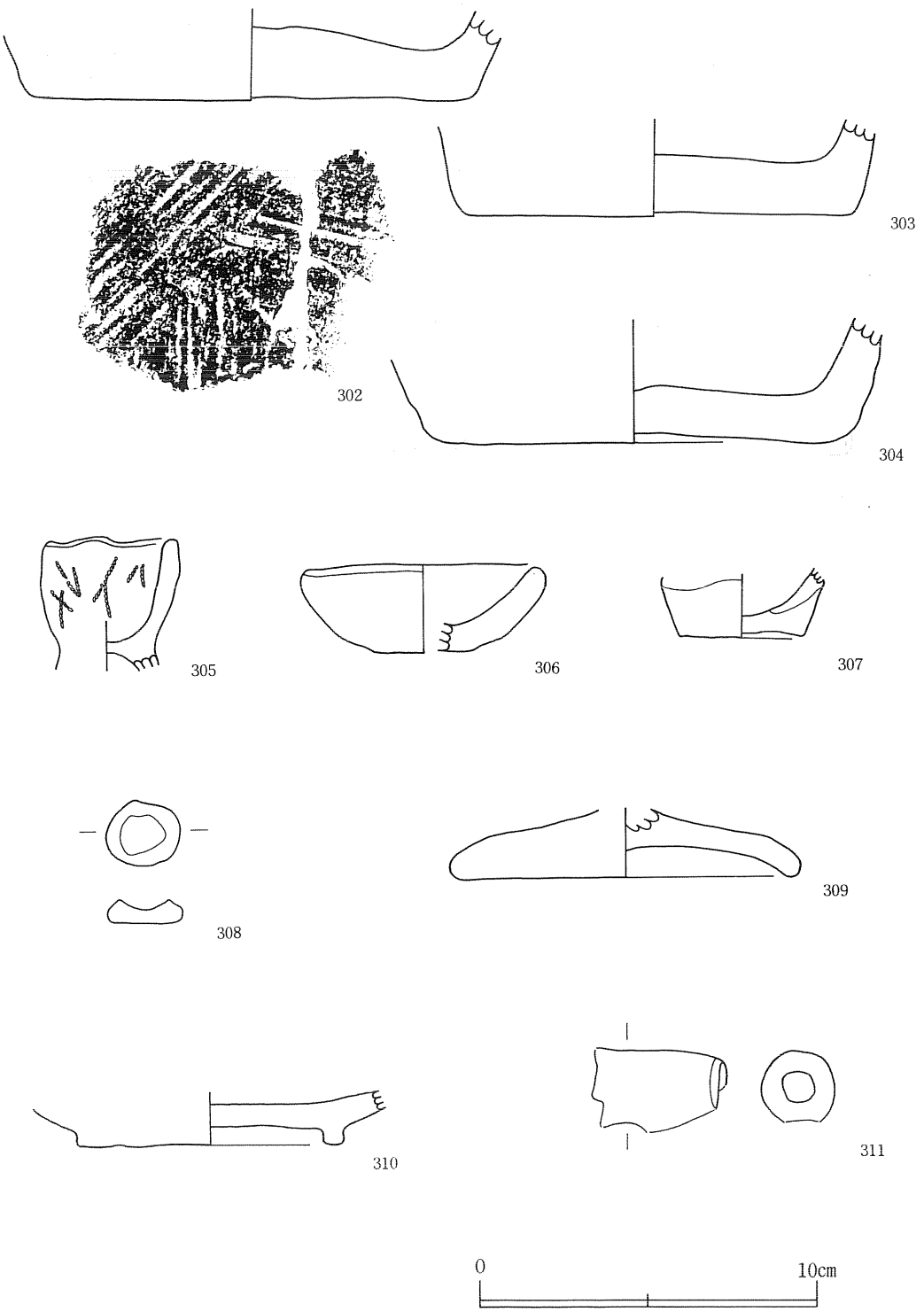
310は台付皿形土器である。高台部は粘土紐を貼付して作り出し、高台底面は面取りがなされている。

２類　注口土器（311）

注口土器の注口部資料である。縄文時代後期末葉から晩期に一般的に見られる注口土器とは異なり、注口部の先端と体部とが橋状に連結していたものと考えられる。器面は丁寧に磨かれている。



第57図　　第Ⅳ群土器・第Ⅴ群土器拓影



第58図　　第Ⅴ群土器・第Ⅵ群土器実測

第1表　遺構外出土土器一覧表

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器形・部位	文様	分類（群一類）	胎土	備考
1	46	45	P4617	埋土	深鉢形　口縁	LR（横位） 押引文	I—1	植物繊維（多）	1・2は同一個体
2	46	45	LM49	Ⅲ	深鉢形　口縁	LR（横位） 押引文	I—1	植物繊維（多）	
3	46	45	MD42	Ⅱ	深鉢形　口縁	押引文	I—1	植物繊維（多） 細砂粒	
4	46	45	MG50	Ⅲ	深鉢形　口縁	ループ文 RL（横位）	I—2a	植物繊維（多）	
5	46	45	MH49	Ⅲ	深鉢形　胴	ループ文 RL（横位）	I—2a	植物繊維（多） 細砂粒	5～9は同一個体
6	46	45	MH49	Ⅲ	深鉢形　胴	ループ文 前々段多条　RL（横位）	I—2a	植物繊維（多） 細砂粒	
7	46	45	MH49	Ⅲ	深鉢形　胴	ループ文 上位—前々段多条　RL（横位） 下位—RL（横位）	I—2a	植物繊維（多） 細砂粒	
8	46	45	MH49	Ⅲ	深鉢形　胴	ループ文 上位—前々段多条　RL（横位） 下位—RL（横位）	I—2a	植物繊維（多） 細砂粒	
9	46	45	MG49	Ⅲ	深鉢形　胴	ループ文 前々段多条　RL（横位）	I—2a	植物繊維（多） 細砂粒	
10	46	45	MJ42	Ⅲ	深鉢形　口縁	結節回転文 前々段多条　LR（横位） ループ文	I—2a	植物繊維（少） 細砂粒	10～12・28は同一個体

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　1　　様	分類（群一類）	胎　　土	備　　考
11	46	45	MH42	Ⅲ	深鉢形　胴	結束第1種羽状縄文 前々段多条（LR＋RL）横位	I－2 a	植物繊維（少） 粗砂粒（多）	
12	46	45	MJ42	Ⅲ	深鉢形　胴	（上位）前々段多条　RL（横位） （下位）ループ文 前々段多条　LR（横位）	I－2 a	植物繊維（少） 粗砂粒（多）	
13	46	45	MH49	Ⅲ	深鉢形　胴下半	ループ文 RL（横位）	I－2 a	植物繊維（多）	13〜15は同一個体
14	46	45	MH49	Ⅰ	深鉢形　胴	ループ文 RL（横位）	I－2 a	植物繊維（多）	
15	46	45	MH49	Ⅲ	深鉢形　胴	ループ文 RL（横位）	I－2 a	植物繊維（多）	
16	46	45	B区Ⅲ郭	Ⅰ	深鉢形　胴	羽状縄文 前々段多条（RL・LR）横位	I－3	植物繊維（多） 細砂粒	
17	46	45	P804	埋　土	深鉢形　胴	羽状縄文 前々段多条（RL・LR）横位 条内調整	I－3	植物繊維（多） 細砂粒	
18	46	45	MF48	Ⅲ	深鉢形　胴	前々段多条　RL（横位）	I－4	植物繊維 精選	
19	46	45	MC54	Ⅱ	深鉢形　胴	RL（縦位）	I－4	植物繊維 精選	
20	46	45	ME52	Ⅲ	深鉢形　胴	RL（縦位）	I－4	植物繊維 精選	
21	46	45	LT46	Ⅲ	深鉢形　胴	RL（縦位）	I－4	植物繊維（多） 精選	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　様	分類（群—類）	胎　　土	備　　考
22	46	45	MI46	Ⅱ	深鉢形　胴	RL（横位）	Ⅰ—4	植物繊維 精選	
23	46	45	MI42	Ⅱ	深鉢形　胴	RL（横位）	Ⅰ—4	植物繊維（多）	
24	56	55	LT59	Ⅱ	深鉢形　胴下半	RL（縦位）	Ⅳ—25	細砂粒	赤色塗彩
25	56	55	MA53	Ⅲ	深鉢形　胴	L（縦位） 櫛歯状調整	Ⅳ—25	粗砂粒	赤色塗彩
26	46	45	MB54	Ⅲ	深鉢形　口　縁	結節回転文 LR（横位）	Ⅰ—5	植物繊維 精選	木の実痕
27	46	45	MH49	Ⅲ	深鉢形　口　縁	結節回転文	Ⅰ—5	植物繊維 細砂粒	
28	46	45	MH42	Ⅲ	深鉢形　口　縁	結節回転文	Ⅰ—5	植物繊維 粗砂粒（多）	10〜12と同一個体
29	47	46	P487	埋　土	深鉢形　口　頸	巻紐側面圧痕	Ⅱ—1	精選	
30	47	46	MG50	Ⅰ	深鉢形　口　縁	巻紐側面圧痕	Ⅱ—1	細砂粒	
31	47	46	ME49	Ⅲ	深鉢形　口縁〜口頸	巻紐側面圧痕 口頸—隆線	Ⅱ—1	精選	
32	47	46	MF51	Ⅱ	深鉢形　口縁〜口頸	巻紐側面圧痕 口頸—隆線・刺突文	Ⅱ—1	細砂粒（多）	
33	47	46	P590	埋　土	深鉢形　口縁〜口頸	巻紐側面圧痕 口唇—巻紐側面圧痕 口頸—結節回転文	Ⅱ—1	植物繊維 粗砂粒	
34	47	46	MG47	Ⅲ	深鉢形　口縁〜口頸	斜行縄文 口頸—隆線	Ⅱ—1	植物繊維（多）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器形・部位	文様	分類（群—類）	胎土	備考
35	47	46	ME49 MB49	Ⅱ Ⅱ	深鉢形　口縁～胴	口唇　巻紐側面圧痕 口縁 口縁—ボタン状貼付文 横長微瘤 口頸—結節回転文 胴—RL（横位）	Ⅱ—1	植物繊維（多） 粗砂粒	
36	54	46	MD50	Ⅲ	深鉢形　胴	四截竹管刺突文	Ⅳ—22 a	細砂粒	36・37は同一個体
37	54	46	ME50	Ⅰ	深鉢形　胴				
38	47	46	ML50	Ⅲ	深鉢形　胴	R撚糸文	Ⅱ—2	細砂粒	
39	47	46	LT42	Ⅰ	深鉢形　胴	結束第1種羽状縄文	Ⅱ—3	植物繊維（多） 粗砂粒（多）	
40	47	46	LT38	Ⅲ	深鉢形　胴	結束第1種羽状縄文	Ⅱ—3	粗砂粒（多）	
41	47	46	LO59	Ⅱ	深鉢形　口縁	刺突列	Ⅲ—1	粗砂粒（多）	
42	47	46	LO59	Ⅱ	深鉢形　口縁	沈線 R撚糸文	Ⅲ—2	粗砂粒（多）	
43	47	46	LN56	Ⅲ	深鉢形　口縁	沈線 LR（縦位）	Ⅲ—2	粗砂粒	
44	47	46	LQ55	Ⅲ	深鉢形　口縁	沈線 r撚糸文	Ⅲ—2	粗砂粒（少）	
45	47	46	LM59		深鉢形　胴	沈線 LR撚糸文	Ⅲ—3	粗砂粒（多）	
46	47	46	MA52	Ⅲ	深鉢形　胴	隆線 地文	Ⅲ—4	粗砂粒	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器形・部位	文様	分類（群一類）	胎土	備考
47	47	46	MD46	Ⅲ	壷形　胴	沈線 RL（縦位）	Ⅲ－3	精選	赤色塗彩
48	47	46	LO50	Ⅲ	壷形　胴	沈線 LR（縦位）	Ⅲ－3	細砂粒	赤色塗形
49	47	46	LP56	Ⅲ	壷形　胴	LR（斜位）	Ⅲ－5	細砂粒	赤色塗形
50	47	46	LO59	Ⅱ	深鉢形　胴	LR（縦位）	Ⅲ－5	粗砂粒（多）	50～53は同一個体
51	47	46	LO59	Ⅱ	深鉢形　胴				
52	47	46	LM59		深鉢形　胴	LR（縦位）	Ⅲ－5	粗砂粒（多）	
53	47	46	LM59		深鉢形　胴				
54	47	46	LP53	Ⅱ	深鉢形　胴	前々段反撚　LRR（縦位） 結節回転文（縦位）	Ⅲ－5	粗砂粒（多）	内面に煤状炭化物付着
55	47	46	LT48	Ⅲ	深鉢形　胴	前々段反撚　LRR（縦位） 結節回転文（縦位）	Ⅲ－5	粗砂粒（少）	外面に煤状炭化物付着
56	48	47	LO46	Ⅱ	深鉢形　口縁～胴	沈線（横位「e」字状区画文） ボタン状貼付文 縦位刺突列 LR（縦位） 口縁一小突起	Ⅳ－1	粗砂粒	外面に煤状炭化物付着 内面に火跳ね
57	48	47	LT58	Ⅲ	深鉢形　口縁～胴	沈線（方形区画）	Ⅳ－1	細砂粒	57～60は同一個体
58	48	47	LT58	Ⅲ	深鉢形　口縁～胴	R撚糸文			
59	48	47	LT58	Ⅲ	深鉢形　口縁～胴	波状口縁			
60	48	47	LT58	Ⅲ	深鉢形　口縁～胴				
61	48	47	MB60	Ⅱ	深鉢形　口縁～胴	沈線（方形区画） L（横位）	Ⅳ－1	細砂粒	外面に煤状炭化物付着

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　様	分類（群―類）	胎　　土	備　　考
62	48	47	ＬＲ56	Ⅲ	深鉢形　口縁～胴	沈線（方形区画）	Ⅳ―１	粗砂粒	
63	48	47	ＬＬ44	Ⅱ	深鉢形　胴	沈線（方形区画） 爪形刺突文	Ⅳ―１	細砂粒	
64	48	47	ＬＮ57 ＬＯ56	Ⅲ Ⅲ	深鉢形　口縁～胴上半	隆線（方形区画）・刻み 沈線（方形区画）	Ⅳ―２ａ	粗砂粒（多）	64～73は同一個体
65	48	47	ＬＮ57			Ｌ（縦位）			
66	48	47	ＬＮ57	Ⅲ					
67	48	47	ＬＯ56	Ⅱ～Ⅲ					
68	48	47	ＬＮ57	Ⅲ	深鉢形　口縁～胴上半	沈線			
69	48	47	ＬＮ57	Ⅲ	深鉢形　口縁～胴上半	隆線 沈線			
70	48	47	ＬＮ57	Ⅲ	深鉢形　口縁～胴上半	隆線（方形区画） 沈線（方形区画） Ｌ（縦位）			
71	48	47	ＬＮ57	Ⅲ	深鉢形　胴中央～下半				
72	48	47	ＬＯ56	Ⅲ	深鉢形　胴下半	Ｌ（縦位）			
73	48	47	ＬＮ57	Ⅲ	深鉢形　胴下半				
74	48	47	ＬＯ60	Ⅲ	深鉢形　口縁～胴	隆線・刻み 沈線（方形区画） ＲＬ（縦位）	Ⅳ―２ａ	粗砂粒	
75	48	47	ＬＯ56	Ⅱ	深鉢形　口縁～胴	隆線 沈線区画文 撚糸文	Ⅳ―２ａ	粗砂粒（少）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　様	分類（群一類）	胎　　土	備　　考
76	48	47	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　　胴上半	隆線・刻み 沈線 ＲＬ（縦位）	Ⅳ―２ａ	粗砂粒（少）	
77	48	47	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　　胴上半	隆線・刻み ＬＲ（縦位）	Ⅳ―２ａ	細砂粒（多）	外面に煤状炭化物付着
78	49	48	ＬＳ39	Ⅲ	深鉢形　　口縁～胴	ボタン状貼付文 隆線 沈線 Ｒ撚糸文	Ⅳ―２ｂ	粗砂粒（多）	78～87は同一個体
79	49	48	ＬＳ39	Ⅲ	深鉢形　　口縁～胴	沈線			
80	49	48	ＬＳ39	Ⅲ	深鉢形　　口縁～胴	Ｒ撚糸文			
81	49	48	ＬＳ39	Ⅲ	深鉢形　　口縁～胴				
82	49	48	ＬＳ39	Ⅲ	深鉢形　　口縁～胴				
83	49	48	ＬＳ39	Ⅲ	深鉢形　　口縁～胴				
84	49	48	ＬＳ39	Ⅲ	深鉢形　　口縁～胴				
85	49	48	ＬＳ39	Ⅲ	深鉢形　　口縁～胴				
86	49	48	ＬＳ39	Ⅲ	深鉢形　　口縁～胴				
87	49	48	ＬＳ39	Ⅲ	深鉢形　　口縁～胴				
88	49	48	ＭＣ52	Ⅱ～Ⅲ	深鉢形　　口縁～胴	沈線 Ｒ撚糸文	Ⅳ―２ｂ	粗砂粒	88～90は同一個体
89	49	48	ＭＣ52	Ⅱ	深鉢形　　口縁～胴				
90	49	48	ＭＢ51	Ⅲ	深鉢形　　口縁～胴				
91	49	48	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　　口　縁	隆線 Ｒ撚糸文	Ⅳ―３ａ	細砂粒（多）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　様	分類（群一類）	胎　　土	備　　考
92	49	49	MA52	Ⅲ	深鉢形　胴	隆線 R撚糸文	Ⅳ－3 a	細砂粒（多）	
93	49	49	LO56	Ⅲ	深鉢形　胴	隆線 沈線 R撚糸文	Ⅳ－3 a	細砂粒（多）	
94	49	49	P914	埋　土	深鉢形　口　縁	隆線 LR（横位） 山形口縁	Ⅳ－3 a	粗砂粒（少）	
95	49	49	LN47	Ⅲ	深鉢形　口　縁	隆線・刻み	Ⅳ－3 b	粗砂粒（多）	
96	49	49	LP48	Ⅲ	深鉢形　口　頸	隆線・刻み	Ⅳ－3 b	粗砂粒（多）	
97	49	49	LN56	Ⅲ	深鉢形　胴	隆線・刻み 地文	Ⅳ－3 b	粗砂粒（多）	
98	49	49	LO56	Ⅲ	深鉢形　胴	隆線・刻み 沈線	Ⅳ－3 b	粗砂粒（多）	
99	49	49	LT55	Ⅱ	深鉢形　口　縁	隆線・刻み 網目状撚糸文 山形口縁	Ⅳ－3 b	粗砂粒（多）	
100	49	49	MB52	Ⅲ	深鉢形　口　縁	隆線・指先刺突	Ⅳ－3 c	粗砂粒（少）	外面に煤状炭化物付着
101	49	49	LR49	Ⅱ	深鉢形　胴	隆線・指先刺突 LR（縦位）	Ⅳ－3 c	粗砂粒（多）	
102	49	49	P1541	埋　土	深鉢形　胴	隆線・指先刺突 R撚糸文	Ⅳ－3 c	粗砂粒（多）	外面に煤状炭化物付着
103	49	49	LS46	Ⅲ	深鉢形　胴	隆線・指先刺突 短沈線	Ⅳ－3 c	粗砂粒（少）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　様	分類（群一類）	胎　　土	備　　考
104	49	49	ＭＥ46	Ⅲ	深鉢形　胴	隆線・刺突 沈線区画文 充填縄文	Ⅳ－３ｄ	粗砂粒（多）	
105	49	49	ＬＦ49	Ⅱ	深鉢形　口　頸	隆線・尖端刺突 網目状撚糸文	Ⅳ－４ａ	粗砂粒（多）	
106	49	49	ＬＳ46	Ⅲ	深鉢形　口　頸	隆線・刺突 ＬＲ（縦位）	Ⅳ－４ｂ	粗砂粒（多）	
107	49	49	ＬＲ47	Ⅰ	深鉢形　口　頸	隆線・工具側面押圧 地文	Ⅳ－４ｃ	粗砂粒（多）	
108	50	49	ＭＢ53	Ⅲ	深鉢形　口　頸	隆線・指先刺突 Ｒ撚糸文	Ⅳ－４ｄ－１	粗砂粒（少）	外面に煤状炭化物付着
109	50	49	ＬＯ56	Ⅲ	深鉢形　口　頸	隆線・指先刺突 Ｒ撚糸文	Ⅳ－４ｄ－１	粗砂粒（多）	外面に煤状炭化物付着
110	50	49	ＭＡ52	Ⅱ	深鉢形　口　頸	隆線・指先刺突 円形刺突文 Ｒ撚糸文	Ⅳ－４ｄ－２	粗砂粒（多）	
111	50	49	ＬＲ51		深鉢形　胴	隆線・刻み ＲＬ（横位）	Ⅳ－５ａ	細砂粒（多）	
112	50	49	ＬＳ51	Ⅲ	深鉢形　口　頸	隆線 円形刺突文 斜行縄文	Ⅳ－５ｂ	粗砂粒（多）	外面に煤状炭化物付着
113	50	49	ＬＲ51	Ⅲ	深鉢形　胴	隆線 円形刺突文 網目状撚糸文	Ⅳ－５ｂ	粗砂粒（少）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器形・部位	文様	分類（群一類）	胎土	備考
114	50	49	ＬＱ56	Ⅲ	深鉢形　口縁	隆線 円形刺突文 ＬＲ（縦位）	Ⅳ－６ａ	細粗砂粒（多）	
115	50	49	ＭＢ46	Ⅲ	深鉢形　口縁	隆線 円形刺突文 山形口縁	Ⅳ－６ａ	粗砂粒（少）	
116	50	49	ＭＢ41	Ⅲ	深鉢形　口縁	隆線 円形刺突文 山形口縁	Ⅳ－６ａ	粗砂粒（多）	
117	50	49	ＭＢ53	Ⅲ	深鉢形　口縁	隆線 円形刺突文 口唇一沈線 山形口縁	Ⅳ－６ａ	粗砂粒（多）	
118	50	49	ＬＯ46	Ⅱ	深鉢形　胴	隆線 円形刺突文	Ⅳ－６ａ	粗砂粒（少）	
119	50	49	ＬＲ47	Ⅱ	深鉢形　口頸	隆線 尖端刺突文	Ⅳ－６ａ	細砂粒（多）	
120	50	49	ＭＣ51	Ⅲ	深鉢形　胴	（隆線） 円形刺突文	Ⅳ－６ａ	粗砂粒（多）	
121	50	49	ＬＮ56	Ⅲ	深鉢形　口頸	隆線 尖端刺突文 ＲＬ（縦位）	Ⅳ－６ａ	粗砂粒（多）	
122	50	50	ＭＡ52	Ⅲ	深鉢形　口頸	隆線 円形刺突文 網目状撚糸文	Ⅳ－６ａ	粗砂粒（多）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器形・部位	文様	分類（群—類）	胎土	備考
123	50	50	ＬＰ50	Ⅲ	深鉢形　口頸	隆線 円形刺突文 網目状撚糸文	Ⅳ—６ａ	粗砂粒（多）	
124	50	50	ＬＰ46	Ⅲ	深鉢形　口縁	ボタン状貼付文	Ⅳ—６ｂ	細砂粒（少）	124・125は同一個体
125	50	50	ＬＲ50	Ⅲ	深鉢形　口縁	隆線・尖端刺突文 尖端刺突文			
126	50	50	ＬＬ55	Ⅲ	深鉢形　口縁	ボタン状貼付文 尖端刺突文 斜行縄文	Ⅳ—６ｂ	粗砂粒（多）	
127	50	50	ＬＯ56	Ⅲ	深鉢形　口縁	ボタン状貼付文 隆線 円形刺突文 ＬＲ（縦位）	Ⅳ—６ａ	細砂粒（多）	
128	50	50	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　口縁	ボタン状貼付文 隆線 円形刺突文	Ⅳ—６ｂ	細砂粒（多）	
129	50	50	ＬＱ55	Ⅲ	深鉢形　口縁	ボタン状貼付文 隆線 円形刺突文 地文	Ⅳ—６ｂ	粗砂粒（多）	
130	50	50	ＬＴ46	Ⅲ	深鉢形　胴	ボタン状貼付文 隆線 尖端刺突文 地文	Ⅳ—６ｂ	細砂粒（少）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　様	分類（群一類）	胎　　土	備　　考
131	50	50	ＬＱ48 ＬＰ48	Ⅲ Ⅲ	深鉢形　胴	ボタン状貼付文 隆線	Ⅳ―６ｂ	粗砂粒（少） 精選	131～136は同一個体
132	50	50	ＬＱ48	Ⅲ	深鉢形　胴	尖端刺突文			
133	50	50	ＬＱ48	Ⅲ	深鉢形　胴	Ｒ撚糸文			
134	50	50	ＬＱ48	Ⅲ	深鉢形　胴				
135	50	50	ＬＱ48	Ⅲ	深鉢形　胴				
136	50	50	ＬＱ48	Ⅲ	深鉢形　胴				
137	50	50	ＬＱ48	Ⅲ	深鉢形　胴	隆線 短沈線	Ⅳ―７	細砂粒（多）	外面に煤状炭化物付着
138	51	50	ＭＢ52	Ⅲ	深鉢形　口　縁	隆線 沈線・短沈線 山形口縁	Ⅳ―７	粗砂粒（多）	
139	51	50	ＭＧ45	Ⅲ	深鉢形　口　縁	沈線・刺突文 網目状撚糸文	Ⅳ―８ａ	細砂粒（多）	
140	51	50	ＭＧ49	Ⅲ	深鉢形　胴	沈線・刺突文 斜行縄文	Ⅳ―８ａ	細砂粒（多）	
141	51	50	ＭＤ47	Ⅲ	深鉢形　口　縁	ボタン状貼付文 沈線・刺突文 斜行縄文	Ⅳ―８ｂ	細砂粒（多）	
142	51	50	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　口　縁	ボタン状貼付文 隆線・刻み ＬＲ（縦位） 複合口縁	Ⅳ―９ａ	粗砂粒（多）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　様	分類（群一類）	胎　　土	備　　考
143	51	50	ＬＲ41	Ⅲ	深鉢形　口　縁	隆線 複合口縁	Ⅳ－９ａ	粗砂粒（多）	
144	51	50	ＬＰ59	Ⅱ	深鉢形　胴	ボタン状貼付文 沈線区画文 前々段多条ＬＲ（縦位）	Ⅳ－９ｂ	粗砂粒（多）	
145	51	50	ＭＢ54	Ⅲ	深鉢形　口　縁	隆線 口唇一沈線・尖端刺突	Ⅳ－10	粗砂粒（少）	
146	51	50	ＬＰ46	Ⅲ	深鉢形　口　縁	隆線・刻み 口唇一沈線	Ⅳ－10	細砂粒（少）	
147	51	50	ＭＩ47	Ⅱ	深鉢形　口　縁	隆線・刺突 口唇一沈線	Ⅳ－10	細砂粒（多）	外面に煤状炭化物付着
148	51	50	ＬＴ38	Ⅲ	深鉢形　口　縁	隆線・刻み 沈線	Ⅳ－10	粗砂粒（多）	
149	51	50	ＬＯ56	Ⅲ	深鉢形　口　縁	隆線・刻み	Ⅳ－10	粗砂粒（多）	
150	51	50	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　口　縁～胴	隆線・刻み 沈線区画文 弧状貼付文 斜行縄文	Ⅳ－10	粗砂粒（少）	
151	51	51	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　口　縁	突起	Ⅳ－11	粗砂粒（多）	151～153は同一個体
152	51	51	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　口　縁	円形刺突文			
153	51	51	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　口　縁	ＬＲ（縦位）			
154	51	51	ＬＰ45	Ⅲ	深鉢形　口　縁	円形刺突列 山形突起	Ⅳ－11	細砂粒（少）	
155	51	51	ＬＱ47	Ⅰ	深鉢形　口　縁	隆線 円形刺突文 山形口縁	Ⅳ－11	粗砂粒（少）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器形・部位	文様	分類（群—類）	胎土	備考
156	51	51	ＬＪ56	Ⅱ	深鉢形　口縁	円形刺突列	Ⅳ—11	粗砂粒（多）	
157	51	51	ＬＴ46	Ⅲ	深鉢形　口縁	隆線・円形刺突文	Ⅳ—11	粗砂粒（少）	
158	51	51	ＬＰ47	Ⅲ	深鉢形　口縁	口唇—Ｌ側面圧痕 沈線	Ⅳ—12 a	細砂粒（多）	
159	51	51	ＭＢ54	Ⅲ	深鉢形　口縁	沈線文	Ⅳ—12 a	精選	
160	51	51	ＭＡ52	Ⅲ	深鉢形　胴	沈線（楕円文） 斜行縄文	Ⅳ—12 b	精選	
161	51	51	ＭＩ47	Ⅱ	深鉢形　胴	沈線（楕円文） Ｒ撚糸文	Ⅳ—12 b	細砂粒（多）	
162	51	51	ＭＪ47	Ⅲ	深鉢形　胴	沈線区画分 斜行縄文	Ⅳ—12 b	粗砂粒（多）	
163	51	51	ＭＬ50	Ⅲ	深鉢形　口縁	沈線区画文 斜行縄文	Ⅳ—12 c	粗砂粒（少）	
164	51	51	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　胴	沈線区画文 Ｒ撚糸文	Ⅳ—12 c	粗砂粒（多）	
165	51	51	ＭＣ52	Ⅱ	深鉢形　胴	沈線区画文 Ｒ撚糸文	Ⅳ—12 c	細砂粒（多） 小石（少）	
166	51	51	ＭＢ52	Ⅱ	深鉢形　胴	沈線（楕円文） Ｒ撚糸文	Ⅳ—12 c	細砂粒（多）	
167	51	51	ＭＢ54	Ⅲ	深鉢形　胴	沈線（楕円文） Ｒ撚糸文	Ⅳ—12 c	細砂粒（多）	
168	51	51	ＭＢ54 ＭＢ52	Ⅱ Ⅲ	深鉢形　胴	沈線（楕円文） 沈線（鉤状文） Ｒ撚糸文	Ⅳ—12 c	細砂粒（多）	
169	51	51	ＭＢ55	Ⅲ	深鉢形　胴	沈線（楕円文） Ｒ撚糸文	Ⅳ—12	粗砂粒（多）	
170	52	51	ＬＴ47	Ⅲ	深鉢形　胴	沈線（鉤状文） Ｒ撚糸文	Ⅳ—12 c	細砂粒（多）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　様	分類（群—類）	胎　　土	備　　考
171	52	51	MA51 MA52	Ⅲ Ⅲ	深鉢形　口縁～胴	沈線（円形文） R撚糸文充填	Ⅳ—12 d	粗砂粒（多）	
172	52	51	ME45	Ⅲ	深鉢形　胴	平行沈線 R撚糸文	Ⅳ—13	細砂粒（多）	
173	52	51	LN56	Ⅲ	深鉢形　胴	平行沈線	Ⅳ—13	粗砂粒（少）	173・174は同一個体
174	52	51	LN56	Ⅲ	深鉢形　胴	R撚糸文			
175	52	51	LP56	Ⅲ	深鉢形　胴	平行沈線 R撚糸文	Ⅳ—13	細砂粒（多）	
176	52	51	LQ60 （SD01）	Ⅱ	深鉢形　胴	沈線区画文 前々段多条LR（斜位）	Ⅳ—14 a	粗砂粒（多）	
177	52	51	LS46	Ⅲ	深鉢形　胴	沈線区画文 RL（縦位）	Ⅳ—14 a	粗砂粒（少）	
178	52	51	LS49	Ⅰ	深鉢形　胴	沈線区画文 斜行縄文	Ⅳ14 b	細砂粒（多）	
179	52	51	LO56	Ⅱ	深鉢形　胴	沈線区画文 LR（縦位）	Ⅳ—14 b	粗砂粒（少）	
180	52	51	LQ60 （SD01）	Ⅱ	深鉢形　胴	櫛歯状沈線文 R撚糸文	Ⅳ—15	粗砂粒（少）	外面に煤状炭化物付着
181	52	51	MC54	Ⅲ	深鉢形　胴	櫛歯状沈線文 R撚糸文	Ⅳ—15	粗砂粒（少）	
182	52	51	LP58 （土塁中）		深鉢形　胴	条痕文 隆線	Ⅳ—15	粗砂粒（少）	
183	52	51	LP58 （土塁中）		深鉢形　胴	条痕文	Ⅳ—15	粗砂粒（少）	
184	52	51	MA54	Ⅲ	深鉢形　口縁～胴	沈線文	Ⅳ—16 a	細砂粒（多）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器形・部位	文様	分類（群—類）	胎土	備考
185	52	52	ＭＢ53	Ⅲ	壷形　口縁～胴	沈線文 微隆線	Ⅳ—16ａ	細砂粒（多）	
186	52	52	ＬＳ54	Ⅰ	壷形　胴	沈線文	Ⅳ—16ａ	細砂粒（多）	
187	52	52	ＬＮ61		壷形　胴	沈線文	Ⅳ—16ａ	細砂粒（少）	
188	52	52	ＬＳ60	Ⅱ	鉢形　口縁	沈線 隆線	Ⅳ—16ａ	細砂粒（多）	
189	52	52	ＬＱ60 （ＳＤ01）	Ⅱ	深鉢形　口縁	隆線 沈線文	Ⅳ—16ａ	細砂粒（多）	
190	52	52	ＭＢ53	Ⅲ	壷形　胴下半	沈線文	Ⅳ—16ａ	細砂粒（多）	
191	52	52	ＭＢ54		壷形　胴下半	沈線文	Ⅳ—16ａ	細砂粒（多）	
192	52	52	ＭＢ60	Ⅱ	壷形　胴	沈線文	Ⅳ—16ｂ	細砂粒（少）	赤色塗彩
193	52	52	ＭＣ54	Ⅱ	壷形　胴	沈線文	Ⅳ—16ｂ	細砂粒（少）	赤色塗彩
194	52	52	ＬＴ48	Ⅲ	壷形　胴	沈線文	Ⅳ—16ｂ	細砂粒（多）	
195	52	52	ＭＤ50	Ⅲ	深鉢形　胴	沈線文 Ｒ撚糸文	Ⅳ—17	細砂粒（多）	
196	52	52	ＬＮ56	Ⅲ	深鉢形　口縁	貼付文 山形突起	Ⅳ—18ａ	粗砂粒（少）	
197	52	52	ＬＴ54	Ⅲ	深鉢形　口縁	円形刺突文 口唇—刻み 山形口縁	Ⅳ—18ｂ	粗砂粒（多）	
198	52	52	ＬＴ58	Ⅲ	深鉢形　口縁	沈線（「Ｃ」字状文） 平行沈線 撚糸文 山形口縁	Ⅳ—18ｂ	細砂粒（多）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　様	分類（群—類）	胎　　土	備　　考
199	52	52	ＭＤ48	Ⅲ	深鉢形　口　縁	沈線文 撚糸文 口唇—尖端刺突 山形口縁	Ⅳ—18ｂ	細砂粒（多）	
200	52	52	ＬＲ50	Ⅲ	深鉢形　口　唇	円形刺突文 沈線文 山形口縁	Ⅳ—18ｂ	細砂粒（多） 粗砂粒（少）	
201	52	52	ＭＢ50	Ⅱ	深鉢形　口　縁	円形刺突文 沈線文 Ｒ撚糸文 山形口縁	Ⅳ—18ｂ	細砂粒（多）	
202	53	52	ＭＤ47	Ⅲ	深鉢形　口　縁	大形突起	Ⅳ—19	粗砂粒（多）	
203	53	52	ＬＴ48	Ⅲ	深鉢形　口　縁	貫通孔	Ⅳ—20	細砂粒（多）	橋状把手
204	53	52	ＬＦ50	Ⅱ	深鉢形　口　縁		Ⅳ—20	細砂粒（多）	橋状把手
205	53	52	ＬＬ43	Ⅲ	深鉢形　口　縁	尖端刺突・刻み	Ⅳ—20	細砂粒（多）	橋状把手
206	53	52	ＬＱ60 （ＳＤ01）	Ⅱ	深鉢形　口　縁	沈線文 貫通孔	Ⅳ—20	粗砂粒（少）	橋状把手
207	53	52	ＭＥ44	Ⅲ	深鉢形　口　縁	ボタン状貼付文 隆線・刻み	Ⅳ—20	細砂粒（多）	橋状把手
208	53	22	ＰＩ124	埋　土	深鉢形　口　縁	貫通孔	Ⅳ—20	細砂粒（多）	橋状把手
209	53	52	ＭＥ54	Ⅲ	深鉢形　口　縁	ボタン状貼付文 隆線・刻み 貫通孔	Ⅳ—20	細砂粒（多）	橋状把手
210	53	52	ＬＮ56	Ⅲ	深鉢形　口　縁	貫通孔 隆線区画文	Ⅳ—20	粗砂粒（多）	橋状把手

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　様	分類（群―類）	胎　　土	備　　考
211	53	52	ＬＱ55	Ⅲ	深鉢形　口　縁	沈線区画文 充填縄文	Ⅳ―20	粗砂粒（少）	橋状把手
212	53	52	Ｐ802	埋　土	深鉢形　口　縁	円孔	Ⅳ―20	細砂粒（多）	橋状把手
213	53	52	ＬＯ56	Ⅱ	深鉢形　口　縁		Ⅳ―20	粗砂粒（多）	橋状把手
214	53	52	ＭＥ53	Ⅱ	深鉢形　口　縁		Ⅳ―20	粗砂粒（多）	橋状把手
215	53	53	ＬＳ47	Ⅲ	深鉢形　口　縁		Ⅳ―21	粗砂粒（少）	複合口縁
216	53	53	ＭＢ54	Ⅲ	深鉢形　口　縁		Ⅳ―21	細砂粒（多）	複合口縁
217	53	53	ＬＲ55	Ⅱ	深鉢形　口　縁	隆線	Ⅳ―21	細砂粒（多）	複合口縁
218	53	53	ＬＬ55	Ⅱ	深鉢形　口　縁	ＲＬ（縦位）	Ⅳ―21	粗砂粒（多）	複合口縁
219	53	53	ＬＴ54	Ⅲ	深鉢形　口　縁	貫通孔 地文	Ⅳ―21	粗砂粒（多）	複合口縁
220	53	53	ＬＯ50	Ⅲ	深鉢形　口　縁	ＲＬ（縦位）	Ⅳ―21	細砂粒（多）	複合口縁
221	53	53	ＬＱ60 （ＳＤ01）	Ⅱ	深鉢形　口　縁	前々段多条ＬＲ（縦位）	Ⅳ―21	粗砂粒（多）	複合口縁　221と222は同一個体
222	53	53	ＬＰ59 ＬＮ56	Ⅱ Ⅲ	深鉢形　口　縁				
223	53	53	ＭＡ46	Ⅲ	深鉢形　口　縁	貫通孔 ＲＬ（縦位）	Ⅳ―21	細砂粒（多）	複合口縁
224	53	53	ＭＥ53	Ⅲ	深鉢形　口　縁	Ｌ（縦位） 隆線	Ⅳ―21	粗砂粒（多）	複合口縁
225	54	53	ＭＡ52	Ⅲ	深鉢形　口　縁	貫通孔	Ⅳ―21	粗砂粒（多）	複合口縁
226	54	53	ＬＳ38	Ⅲ	深鉢形　口　縁	横位刺突文	Ⅳ―21	粗砂粒（多）	複合口縁
227	54	53	ＬＰ56	Ⅱ	深鉢形　口　縁	横位刺突文 隆線	Ⅳ―21	粗砂粒（多）	複合口縁

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器形・部位	文様	分類（群一類）	胎土	備考
228	54	53	LT55	Ⅱ	深鉢形　胴	横位刺突文	Ⅳ—22b	粗砂粒（多）	
229	54	53	MD47	Ⅲ	鉢形　胴	横位刺突文	Ⅳ—22b	細砂粒（少）	
230	54	53	LN43	Ⅱ	深鉢形　胴	横位刺突文	Ⅳ—22b	粗砂粒（少）	
231	54	53	LT53	Ⅰ	深鉢形　胴	横位刺突文	Ⅳ—22b	粗砂粒（多）	
232	54	53	LO56	Ⅱ	深鉢形　胴	横位刺突文	Ⅳ—22b	粗砂粒（少）	
233	54	53	LN42	Ⅱ	深鉢形　胴	横位刺突文 斜行縄文	Ⅳ—22b	細砂粒（多）	
234	54	53	MH52	Ⅲ	深鉢形　口縁	網目状撚糸文	Ⅳ—23	細砂粒（多）	
235	54	53	MA54	Ⅲ	深鉢形　口縁	網目状撚糸文	Ⅳ—23	粗砂粒（少）	
236	54	53	LQ56	Ⅲ	深鉢形　口縁	網目状撚糸文	Ⅳ—23	細砂粒（多）	236と237は同一個体
237	54	53	LO55	Ⅲ	深鉢形　口縁				
238	54	53	LO56	Ⅲ	深鉢形　口縁	網目状撚糸文	Ⅳ—23	粗砂粒（多）	
239	54	54	MA53	Ⅱ	深鉢形　胴	網目状撚糸文	Ⅳ—23	粗砂粒（多）	
240	54	54	LO56	Ⅲ	深鉢形　胴	網目状撚糸文	Ⅳ—23	粗砂粒（多）	
241	54	54	LO56	Ⅲ	深鉢形　胴	網目状撚糸文	Ⅳ—23	粗砂粒（多）	
242	54	54	LP46	Ⅱ	深鉢形　胴	網目状撚糸文	Ⅳ—23	細砂粒（多）	
243	54	54	LP56	Ⅲ	深鉢形　胴	網目状撚糸文	Ⅳ—23	粗砂粒（多）	内面に煤状炭化物付着
244	54	54	LP56	Ⅲ	深鉢形　胴	網目状撚糸文	Ⅳ—23	細砂粒（多）	
245	54	54	LN56	Ⅲ	深鉢形　胴	網目状撚糸文	Ⅳ—23	粗砂粒（少）	
246	54	54	LO56	Ⅲ	深鉢形　胴	網目状撚糸文	Ⅳ—23	粗砂粒（多）	
247	54	54	MB54	Ⅲ	深鉢形　胴	網目状撚糸文	Ⅳ—23	粗砂粒（多）	
248	54	54	LO56	Ⅱ	深鉢形　胴	網目状撚糸文	Ⅳ—23	粗砂粒（多）	
249	55	54	MC54	Ⅲ	深鉢形　口縁～胴下半	網目状撚糸文	Ⅳ—23	粗砂粒（多）	外面に煤状炭化物付着
250	55	54	MB44	Ⅲ	深鉢形　口縁	R撚糸文	Ⅳ—24	細砂粒（多）	

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器形・部位	文様	分類（群一類）	胎土	備考
251	55	54	MA54	Ⅲ	深鉢形 口縁	R撚糸文	Ⅳ—24	細砂粒（多）	
252	55	54	LQ61（SD01）	Ⅰ	深鉢形 口縁	R撚糸文	Ⅳ—24	細砂粒（多）	
253	55	54	LO56	Ⅱ	深鉢形 口縁	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（多）	外面に煤状炭化物付着
254	55	54	MB53	Ⅲ	深鍋形 口縁	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（多）	
255	55	54	LQ49	Ⅲ	深鉢形 口縁	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（多）	255・263・同一個体
256	55	54	LP56	Ⅲ	深鉢形 口縁	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（多）	256・257は同一個体
257	55	55	LP56	Ⅲ	深鉢形 口縁	R撚糸文	Ⅳ—24		折り返し口縁様
258	55	55	LN44	Ⅱ	深鉢形 口縁	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（少）	
259	55	55	LN56	Ⅲ	深鉢形 口縁	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（多）	折り返し口縁様
260	55	55	MB46	Ⅲ	深鉢形 口縁	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（多）	折り返し口縁様
261	55	55	MB46	Ⅲ	深鉢形 口縁	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（多）	折り返し口縁様
262	55	55	LT55	Ⅲ	深鉢形 口縁	R撚糸文	Ⅳ—24	細砂粒（多）	折り返し口縁様
263	55	55	LQ49	Ⅲ	深鉢形 胴	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（多）	255と同一個体
264	55	55	MB59	Ⅲ	深鉢形 胴	R撚糸文	Ⅳ—24	細砂粒（多）	
265	55	55	LP56	Ⅲ	深鉢形	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（多）	
266	55	55	LO56	Ⅲ	深鉢形 胴	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（少）	
267	55	55	MB53	Ⅲ	深鉢形 胴	R撚糸文	Ⅳ—24	細砂粒（多）	
268	55	55	MB53	Ⅲ	深鉢形 胴	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（多）	
269	56	55	LO56	Ⅲ	深鉢形 胴	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（少）	
270	56	55	P1687	埋土	深鉢形 胴	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（少）	
271	56	55	LT50	Ⅱ	深鉢形 胴	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（多）	
272	56	55	MA52	Ⅲ	深鉢形 胴下半	R撚糸文	Ⅳ—24	粗砂粒（多）	
273	56	55	P2319	埋土	深鉢形 胴	R撚糸文	Ⅳ—24	細砂粒（多）	外面に煤状炭化物付着

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　様	分類（群一類）	胎　　土	備　　考
274	56	55	ＬＯ50	Ⅲ	深鉢形　口　縁	ＬＲ（縦位）	Ⅳ—25	粗砂粒（多）	
275	46	45	ＬＯ43	Ⅱ	深鉢形　口　縁	ＬＲ（縦位） 磨り消し・沈線	Ⅰ—6	粗砂粒（多）	
276	56	55	ＬＯ59		深鉢形　口　縁	ＬＲ（縦位）	Ⅳ—25	粗砂粒（多）	外面に煤状炭化物付着
277	56	55	ＬＯ59		深鉢形　口　縁				276・277・282～284は同一個体
278	56	55	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　口　縁	ＬＲ（縦位）	Ⅳ—25	粗砂粒（多）	278～281は同一個体
279	56	56	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　口　縁	ＬＲ（縦位・横位）			
280	56	56	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　口　縁	ＬＲ（斜位）			
281	56	56	ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　胴	ＬＲ（縦位）			
282	56	56	ＬＯ59		深鉢形　胴	ＬＲ（縦位）	Ⅳ—25	粗砂粒（多）	276・277と同一個体
283	56	56	ＬＯ59		深鉢形　胴				外面に煮こぼれ痕
284	56	56	ＬＯ59		深鉢形　胴				
285	56	56	ＭＨ53	Ⅱ	深鉢形　胴	ＲＬ（縦位	Ⅳ—25	細砂粒（少）	
286	56	56	ＭＢ54	Ⅲ	深鉢形　胴	ＬＲ（縦位）	Ⅳ—25	粗砂粒（多）	
287	56	56	ＭＢ55	Ⅱ	深鉢形　胴	ＬＲ（縦位）	Ⅳ—25	粗砂粒（多）	287と290は同一個体
288	56	56	ＭＢ52	Ⅲ	深鉢形　胴	結節有すＬ（縦位）	Ⅳ—25	粗砂粒（少）	
289	56	56	ＭＣ50	Ⅲ	深鉢形　口頸～胴	結節有すＬＲ（縦位）	Ⅳ—25	粗砂粒（少）	細砂粒（多）
290	57		ＭＢ55	Ⅱ	深鉢形　胴	ＬＲ（縦位）	Ⅳ—25	粗砂粒（多）	
291	57		ＬＮ61		深鉢形　底　部		Ⅴ	細砂粒（多）	
292	57		ＭＡ53	Ⅱ	深鉢形　底　部		Ⅴ	粗砂粒（多）	
293	57		ＬＱ50	Ⅰ	深鉢形　底　部		Ⅴ	粗砂粒（多）	
294	57		ＬＱ60 （ＳＤ01）	Ⅱ	深鉢形　底　部	木葉痕	Ⅴ	粗砂粒（多）	
295	57		ＬＯ47	Ⅱ	深鉢形　底　部	木葉痕	Ⅴ	粗砂粒（多）	内面に煤状炭化物付着

No	挿図番号	図版番号	出土地点	層　位	器　形　・　部　位	文　　様	分類（群—類）	胎　　土	備　　考
296	57		ＬＱ55	Ⅲ	深鉢形　底　部		Ⅴ	粗砂粒（多）	
297	57		ＭＡ52	Ⅲ	深鉢形　底　部		Ⅴ	粗砂粒（多）	
298	57		ＬＱ60 （ＳＤ01）	Ⅱ	深鉢形　底　部		Ⅴ	細砂粒（多）	
299	57		ＬＮ56	Ⅲ	深鉢形　底　部		Ⅴ	細砂粒（多）	内面に煤状炭化物付着
300	57		ＬＰ56	Ⅲ	深鉢形　底　部	木葉痕 胴部—Ｒ撚糸文	Ⅴ	粗砂粒（少）	
301	57		ＬＯ56	Ⅱ	深鉢形　底　部	木葉痕	Ⅴ	粗砂粒（多）	
302	58		ＬＰ58 （土壁中）		深鉢形　底　部		Ⅴ	細砂粒（多）	
303	58		ＬＱ60 （ＳＤ01）	Ⅱ	深鉢形　底　部		Ⅴ	粗砂粒（多）	
304	58		ＬＯ56	Ⅱ	深鉢形　底　部		Ⅴ	粗砂粒（多）	
305	58		ＬＯ46	Ⅱ	小型土器	網目状撚糸文	Ⅵ—1	精選	台付鉢形土器・赤色塗彩
306	58		ＭＤ53	Ⅱ	小型土器		Ⅵ—1	粗砂粒（多）	
307	58		ＭＡ52	Ⅲ	小型土器		Ⅵ—1	細砂粒（多）	
308	58		ＭＢ53	Ⅲ	小型土器		Ⅵ—1	細砂粒（多）	
309	58		ＬＴ56	Ⅲ	小型土器		Ⅵ—1	粗砂粒（多）	蓋形土器
310	58		ＭＢ54	Ⅱ	小型土器		Ⅵ—1	細砂粒（多）	（高台付）皿形土器
311	58		ＬＲ53	Ⅲ	注口土器　注　口		Ⅵ—2	細砂粒（多）	
312	57	56	不明	不　明	深鉢形　完　形	磨き	Ⅵ—26	粗砂粒（多）	

② 土製品　（第59図・第60図、図版33・59・60）

遺構外より多数の土器片に混じって、円盤状土製品（24点。この内23点は土器片の周縁を調整し再利用したものである。）、土偶（４点）、土版（１点）、三角土製品（１点）が出土した。（試掘時の土偶１点も第60図31として再掲した。）

円盤状土製品（１～24）　（図版59・60）

22は当初から円盤状土製品として製作されたものである。円形と言うよりは隅丸方形の粘土板の両面にＲＬ原体を回転施文している。後期初頭に属するものであろう。22以外は全て土器片再利用の円盤状土製品である。

以下、諸特徴を第２表にまとめる。

土偶（25～28・31）（31は試掘調査時出土品）　（図版33）

出土地点は25がＭＡ48・Ⅲ層、26がＭＢ54・Ⅲ層、27がＬＱ61（ＳＤ01）・Ⅰ層、28がＭＬ46・Ⅲ層である。

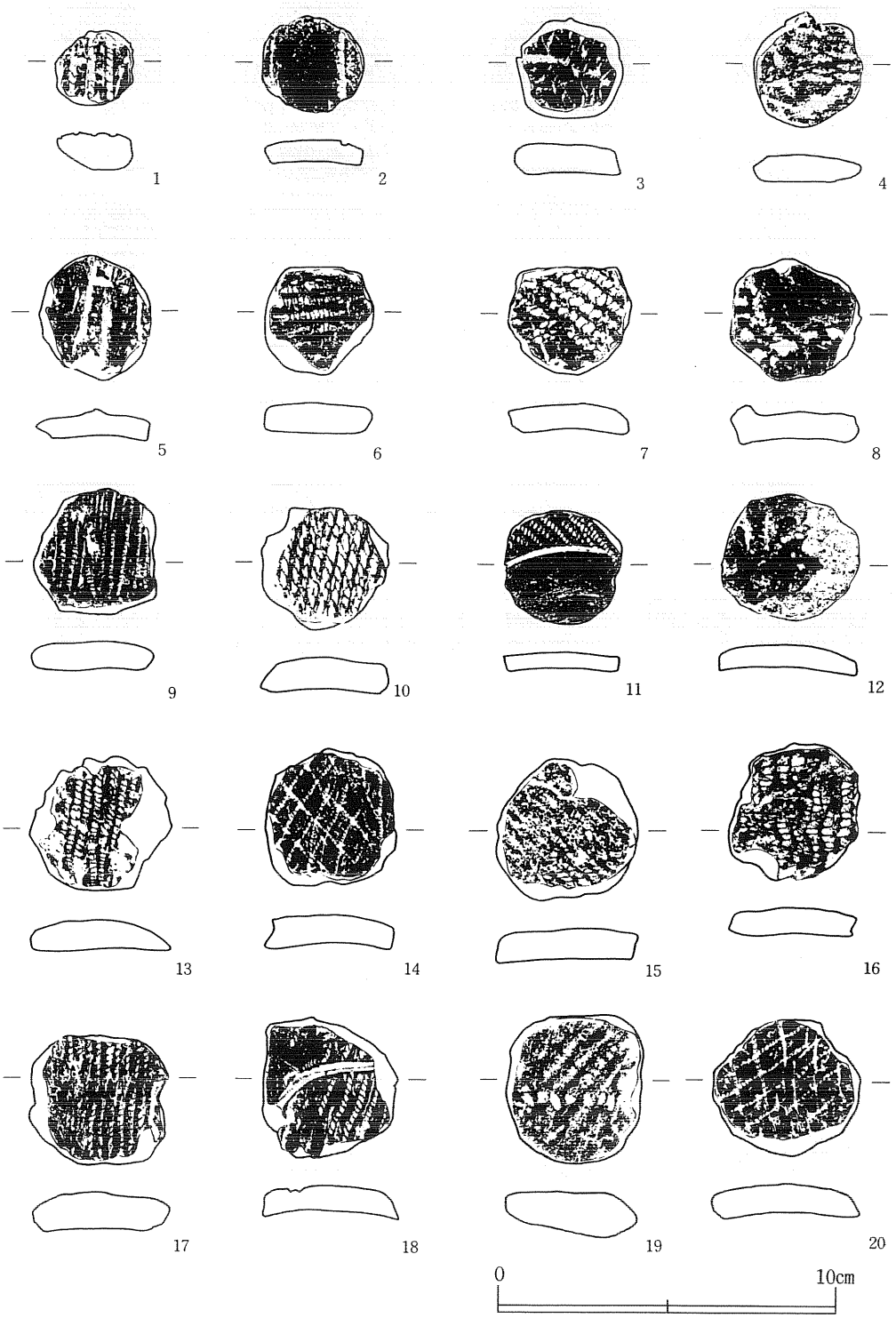
25は逆三角形状を呈する頭部と推測される。表面には細隆線により顔面が描かれ、裏面に頸部及び胴部が取り付いたのであろう。26は破損品であるが、ＳＩ13竪穴住居跡出土の土偶と同様の形態をなすものと推測される。つまり、逆二等辺三角形の土偶に復元される。表面（胸部）には円形の小隆起文が付され、裏面（背部）には２本の細沈線文が描画されている。27・28は腕部の資料である。両面及び肩部には沈線による文様が描かれ、脇の下は無文を呈する。いずれも肩部と脇の下を連絡する貫通孔を有し、28には全面に赤色塗彩が施されている。28はこれ自体一枚の粘土板で作られており、土偶を形作る上での一単位と考えられる。

土版（29）

長方形の粘土板の両面に２条の平行沈線をたすき掛けし、さらにそれに垂直に接する２条の平行沈線を描画している。胎土に粗砂粒を多く含有する。ＬＴ49・Ⅱ層より出土した。

三角土製品（30）　（図版33）

三脚とも部分的に折損しており、全体の形状は把握し難いが、片面が湾曲し、全面が丁寧に磨かれたものである。胎土は砂粒を少々含有するが比較的精選されたものである。ＭＢ53・Ⅲ層より出土した。



第59図　　土製品(1)

第60図　　土製品(2)

第2表　円盤状土製品一覧表

No	出土地点・層位		長軸×短軸(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	文　様	土器分類	部位(器形)	備　考
1	MB53	Ⅲ	23×22	9	4.94	R撚糸文	第Ⅳ群24類	深鉢形・胴部	
2	MA54	Ⅲ	31×27	6	5.99	沈線区画文	第Ⅳ群2a類	深鉢形・胴部	無文部を磨いている
3	LP56	Ⅲ	31×30	8	8.59	(R＋R)網目状撚糸文	第Ⅳ群23類	深鉢形・胴部	
4	LP56	Ⅲ	35×32	8	8.16	隆線 LR原体縦位回転施文	第Ⅳ群2a類	深鉢形・頸部	
5	LP56	Ⅰ	38×32	7 (9)	10.52	隆線 隆線上に刻み	第Ⅳ群3b類	深鉢形・胴部上半	隆線の両脇を磨いている
6	LT39	Ⅲ	32×32	9	7.87	斜行縄文	第Ⅰ群4類	深鉢形・胴部	植物繊維を含有
7	LO59	Ⅱ	37×32	7	10.18	LR原体回転施文	第Ⅳ群25類	深鉢形・胴部	表面に煤状炭化物付着
8	MB53	Ⅲ	39×36	8 (11)	13.82	隆線 隆線上に刺突文 口縁部―無文 胴部――R撚糸文	第Ⅳ群3b類	深鉢形・頸部	
9	LS39	Ⅲ	37×36	9	13.17	R撚糸文	第Ⅳ群24類	深鉢形・胴部	粗砂粒多く含有
10	MK48	Ⅲ	37×37	9	12.25	R撚糸文	第Ⅲ群2類	深鉢形・胴部	粗砂粒多く含有
11	MF46	Ⅲ	35×34	5	7.87	沈線区画文 RL原体回転施文	第Ⅲ群3類	壷　形・胴部	胎土精選 赤色塗彩
12	MH47	Ⅲ	42×39	7	11.70	斜行縄文	第Ⅳ群25類	深鉢形・胴部	2次火熱による器面の赤変
13	LS46	Ⅲ	42×37	9	15.26	R撚糸文	第Ⅳ群24類	深鉢形・胴部	粗砂粒多く含有
14	MB52	Ⅲ	41×40	9	18.09	(R＋R)網目状撚糸文	第Ⅳ群23類	深鉢形・胴部	表面に煤状炭化物付着
15	LP41	Ⅲ	42×41	9	16.65	斜行縄文	第Ⅳ群25類	深鉢形・胴部	細砂粒多く含有
16	MO49	Ⅲ	42×38	7	14.18	LR原体回転施文	第Ⅳ群25類	深鉢形・胴部	

No	出土地点・層位		長軸×短軸(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	文　　様	土器分類	部 位（器 形）	備　　考
17	ＬＰ56	Ⅲ	41×39	11	18.22	Ｌ撚糸文	第Ⅳ群24類	深鉢形・胴部	粗砂粒多く含有
18	ＬＤ49	Ⅲ	41×40	7	15.49	Ｒ撚糸文 沈線文	第Ⅳ群２類	深鉢形・胴部上半	
19	ＫＭ55	Ⅲ	45×41	12	23.14	(ＬＲ＋ＬＲ)結束第１種 横位回転文	第Ⅰ群４類	深鉢形・胴部	細砂粒多く含有 植物繊維含有
20	ＭＢ54	Ⅲ	44×41	8	16.14	(Ｒ＋Ｒ)粗網目状撚糸文	第Ⅳ群23類	深鉢形・胴部	表面に煤状炭化物付着
21	ＫＮ56	Ⅲ	43×40	8	13.10	不明	不明	深鉢形・胴部	細砂粒多く含有 磨滅著しい
22	ＭＢ46	Ⅰ	(37)×(35)	8	(7.62)	ＲＬ原体回転施文	――――	――――	両面に文様 半欠品
23	ＭＢ60	Ⅱ	51×40	12	23.84	ＬＲ原体回転施文	第Ⅳ群25類	深鉢形・胴部	粗砂粒多く含有
24	ＬＭ55	Ⅲ	55×44	12	33.05	ＲＬ原体横位回転施文	第Ⅰ群４類	深鉢形・胴部	細砂粒多く含有 植物繊維多く含有

註　・No.５及びNo.８の厚さの（　）内は隆線を含めた厚さである。
　　・「土器分類」は、①の「遺構外出土土器分類」に準拠する。ちなみに、
　　第Ⅰ群は縄文時代前期初頭から前葉の土器
　　第Ⅲ群は縄文時代中期末葉の土器
　　第Ⅳ群は縄文時代中期末葉から後期前葉の土器である。

③　石器　（第61図～第94図、図版58～73）

遺構外より出土した石器は剥片石器（石鏃・石槍・石錐・石匙・トランシェ様石器・箆状石器）・掻器・削器・鋸歯様石器）、磨製石器（磨製石）、礫石器（打製石・石錘・敲磨器）に大別される。これらの他、不定形の剥片の縁片に調整を施したもの及びフレイクが多量に出土した。以下、各器種ごとに分類、説明を記していくが、整理の都合上、番号の前にアルファベットを付してある。

石鏃	Z	石槍	Y
石錘	D	石匙	P
トランシェ様石器	T	箆状石器	H
掻器	C	削器	S
鋸歯様石器	N	磨製石斧	F
打製石斧	F	石錘	M
敲磨器	K		

石鏃　（第61図、図版58）

21点出土した。形態により５種類に分類する。石質は黒曜石（３・６・17）、メノウ（５・７・９）、頁岩（その他）である。

Ⅰ類　凹基無茎鏃

A　抉れの大きいもの（Ｚ１～Ｚ８）

B　抉れの小さいもの（X11・Ｚ12）

両面とも全面にわたって細い２次調整が施され、Ｚ４の基部両面にはアスファルトが付着し ている。

Ⅱ類　平基無茎鏃（Ｚ９・Z10）

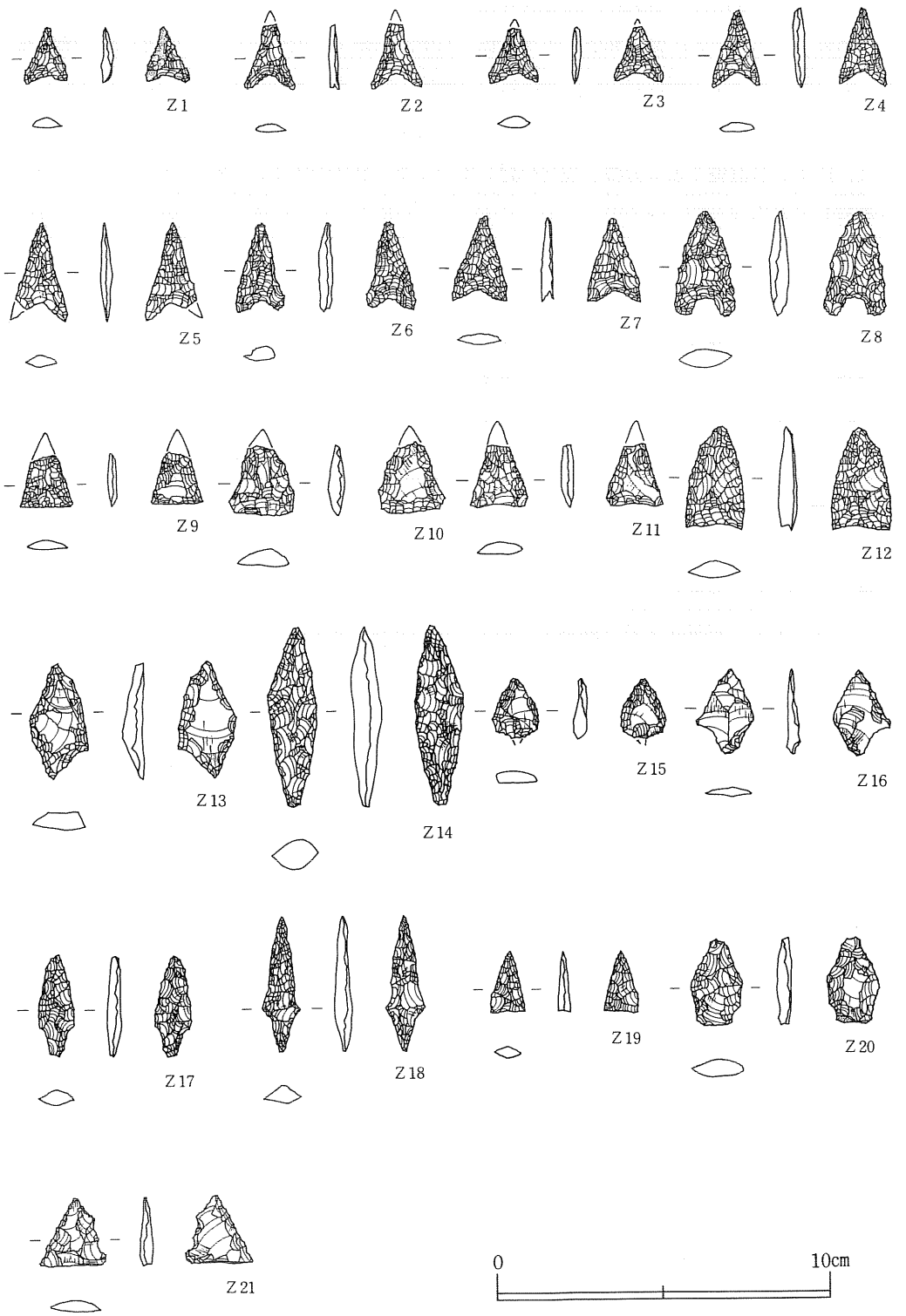
背面には全面にわたって細かい２次調整剥離が観察されるが、主要剥離面にいては主に縁辺に調整剥離が認められる。両方とも尖端を欠損するが、Z10は欠損部に調整剥離を施している。

Ⅲ類　尖基鏃（Z13・Z14）

Z13は両方とも縁辺部のみに２次調整剥離が観察される。Z14は両方とも全面にわたって２次調整が施され、基部は使用によるものか耗しており、石錐とも考えられる。

Ⅳ類　有茎鏃（Z15～Z18）

Z15・Z16は縁辺のみを２次調整し、Z17・Z18は両方と全面にわたって２次調整している。


Z1
Z2
Z3
Z4
Z5
Z6
Z7
Z8
Z9
Z10
Z11
Z12
Z13
Z14
Z15
Z16
Z17
Z18
Z19
Z20
Z21
0
10cm

第61図　石鏃

Ｖ類　基部を欠損し、形態不明なもの（Z19～Z21）

Z19はF全面にわたって、Z20・Z21は縁辺のみを２次調整している。

石槍　（第62図・第63図、図版59）

８点出土した。石質は全て頁岩である。縦長剥離を利用し、全面にわたり２次調整したものと縁辺のみに２次調整を施したもの（Ｙ３・Ｙ５）とがある。Ｙ６は平基であり、Ｙ４・Ｙ７の基部には第１次剥離面ないし礫面が残存する。

石錐　（第63図・第64図、図版59）

８点出土した。不定形の剥片の一端に錐部を作り出したもので、石質はすべて頁岩である。Ｄ１は縦長剥片を利用し、縁片を両面から加撃して錐部を作り出している。尖端は磨耗している。Ｄ２は縦長剥片を利用し、縁片を主要剥離面からのみ加撃して錐部を作り出している。背面には礫面が残存する。一側縁及び主要剥離面に存在する稜の下半部が磨耗している。Ｄ３は横長剥片を利用し、縁片を両面から加撃して錐部を作り出しているが、尖端部は主要剥離面のみからの加撃による。Ｄ４は横長剥片を利用し、錐部を作り出す２次調整剥離は背面のみに認められる。Ｄ５は両面から縁片に加撃して錐部を作り出している。尖端及び側縁下半部が磨耗している。Ｄ６は横長剥片を利用したもので、一側縁に刃こぼれ、磨耗が見られる。Ｄ７は比較的大きめの縦長剥片を利用し、一側縁を背面から、他側縁を主要剥離面から加撃して錐部を作り出している。尖端はやや磨耗している。Ｄ８は大きめの横長剥片を利用し、Ｄ７と同じ方法で錐部を作り出している。

石匙　（第64図～第66図、図版60）

22点出土した。Ｐ１がメノウの横長剥片、P15が頁岩の横長剥片を利用している以外は、全て頁岩の縦長剥片利用している。つまみ部の作り出しは縁片を両面から加撃して行っているものが通例である。２次調整剥離の相違により以下のように分類する。

Ⅰ類　２次調整剥離が一側縁の両面にのみ観察されるもの（Ｐ１）

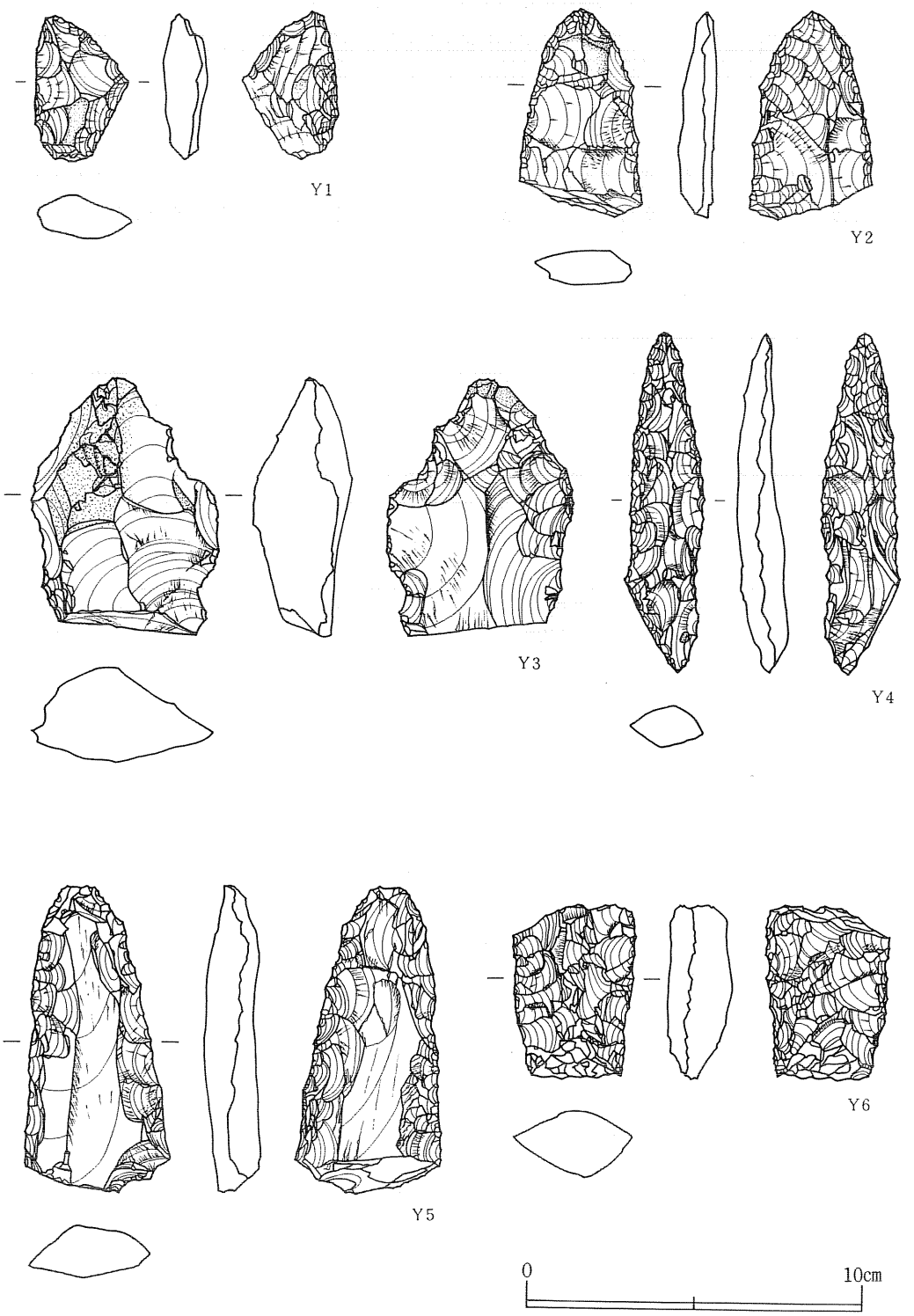
横長剥片を利用したもので、他側縁はヒンジフラクチャーをなす。

Ⅱ類　２次調整剥離が一側縁は背面に他側縁は主要剥離面に観察されるもの（Ｐ２・P17）

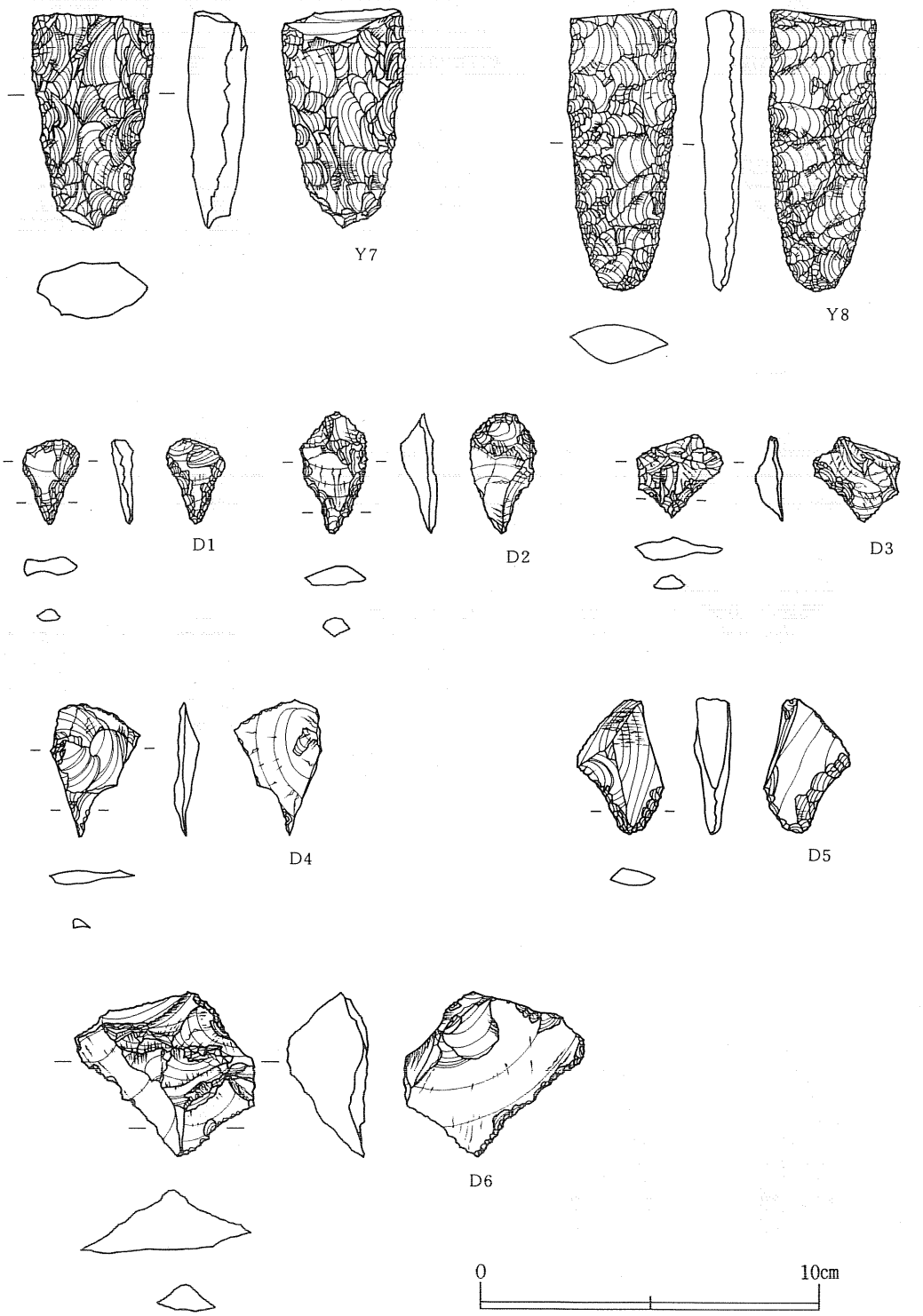
P17の背面には第１次剥離の際の縦方向の稜が残存する。

Ⅲ類　２次調整剥離が背面は全面に及び、主要剥離面においては一側縁のみに観察されるもの（Ｐ３・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７・P10）

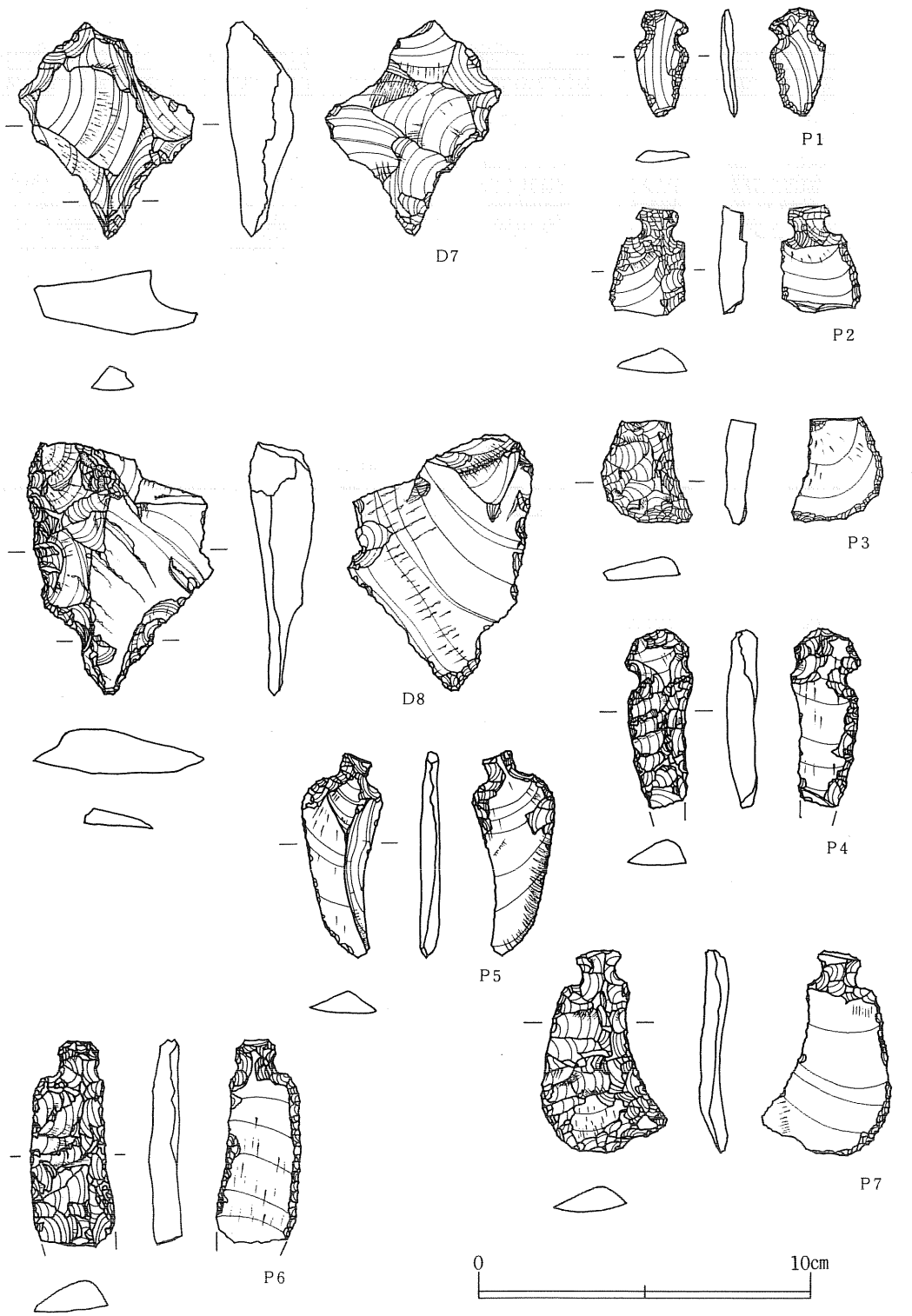
主要剥離面に観察される２次調整剥離は全て外湾する側縁に施されている。Ｐ３は上



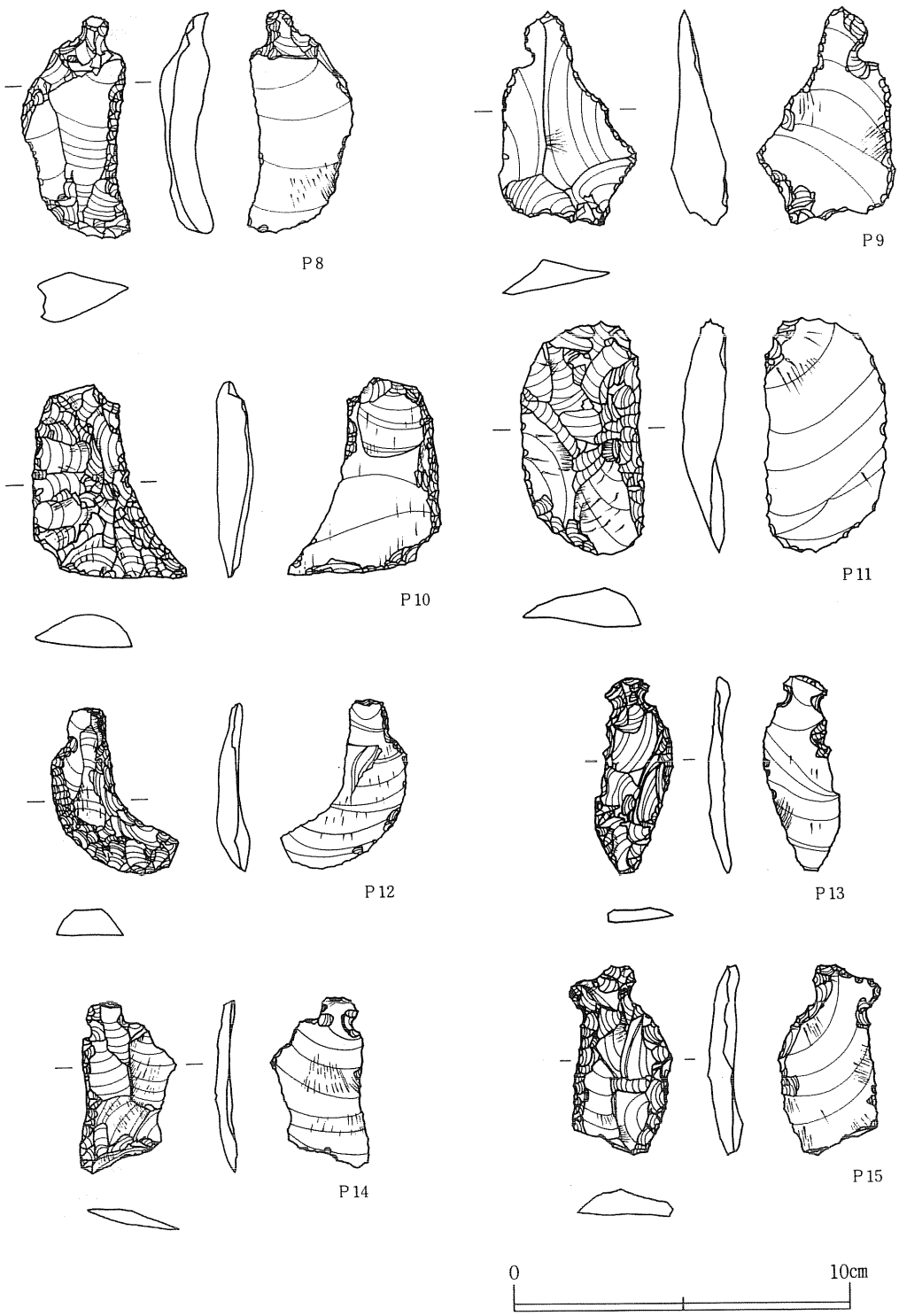
第62図　　石槍(1)



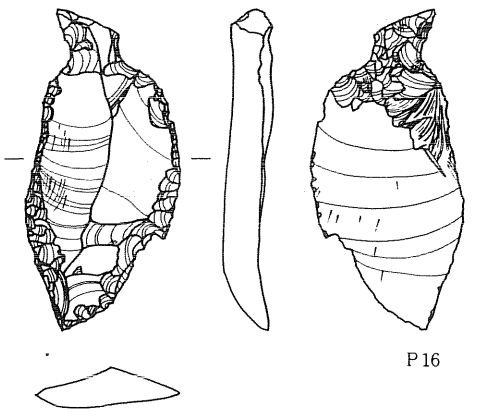
第63図　　石槍(2)・石錐(1)

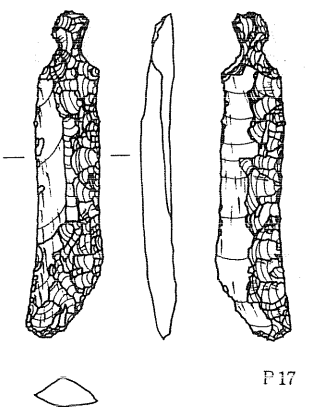


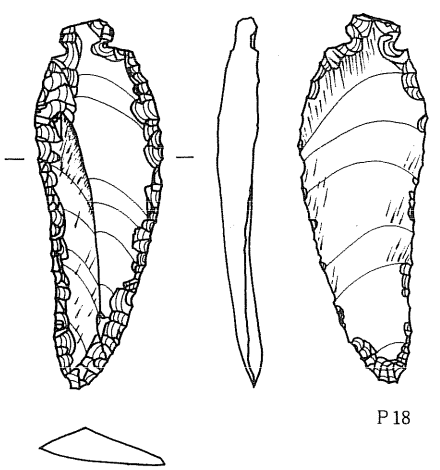
第64図　　石錐(2)・石匙(1)

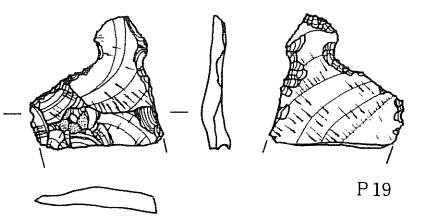


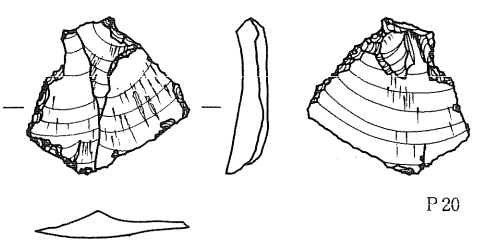
第65図　　石匙(2)

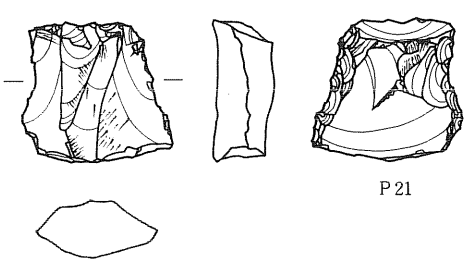


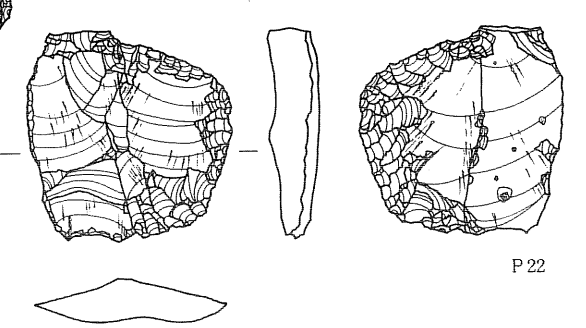












第66図　　石匙(3)

半部、P10はつまみを欠損する。

Ⅳ類　２次調整剥離が側縁上半部（肩部）のみに観察されるもの（Ｐ５）

第１次剥離の際の縦方向の稜が背面に残存する。

Ⅴ類　２次調整剥離が背面の（両）側縁に観察されるもの

Ａ　主要剥離面に２次調整剥離が観察されないもの（Ｐ８・P11・P16・P19）

P15は横長剥片を利用したものであり、また一端が鋭い尖端をなすもの（P16）と丸味を持つもの（P11）とがある。Ｐ８・P16の背面には第１次剥離の際の縦方向の稜が残存する。

Ｂ　主要剥離面の尖端部に２次調整剥離が観察されるもの（P18）

素材剥片を取り出す際の打点が尖端部付近にあり、打瘤を取り去るために主要剥離面の尖端部に２次調整が施されたのであろう。背面には第１次剥離の際の縦方向の稜が残存する。

Ⅵ類　石匙様の剥片を本類とする。（Ｐ９・P20・P22）

Ｐ９は背面からのみの縁片への加撃によって作り出されたつまみ様の部分を持つ。P20・P21の基部には素材剥片を取り出す際の打面が残存し、側縁には抉りを持つ。P20の一端はヒンジフラクチャーをなし、P21の一端は欠損する。P22は基部に素材剥片を取り出した際の打面を留め、側縁は２次調整により一方を緩く外湾させ、他方は強く外湾させている。

トランシェ様石器　（第67図、図版61）

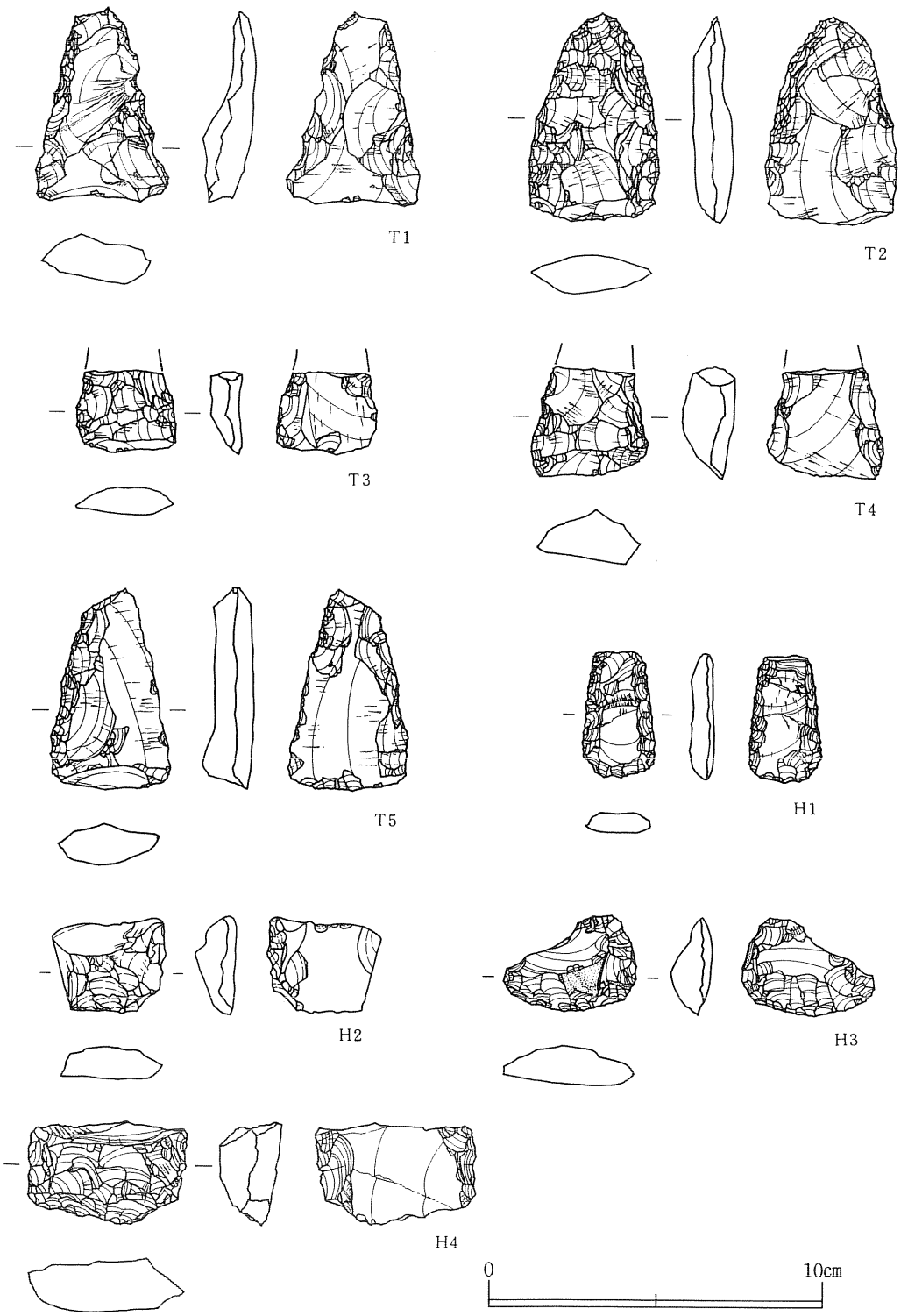
５点出土した。刃部に第１次剥離面ないし自然面を留め、素材剥片を取り出す際の剥離によって生じた鋭い縁片をそのまま刃部として使用しているものである。石質は全て頁岩である。

すべて横長剥片を素材としている。Ｔ１は基部と刃部以外に粗い２次調整を施す。刃縁は直線的である。Ｔ２は背面を刃部以外全面に、主要剥離面は両側縁に２次調整を施す。刃部は一端を欠損するものの直線的なものと考えられる。Ｔ３・Ｔ４の２次調整は背面では刃部を除いて、主要剥離面では、両側縁に施されている。刃縁はいずれも直線的である。Ｔ５の刃縁は弧状をなし、２次調整は一側縁のみが顕著で、他側縁は基部付近にのみ施される。刃部の最大角度は、以下の通りである。

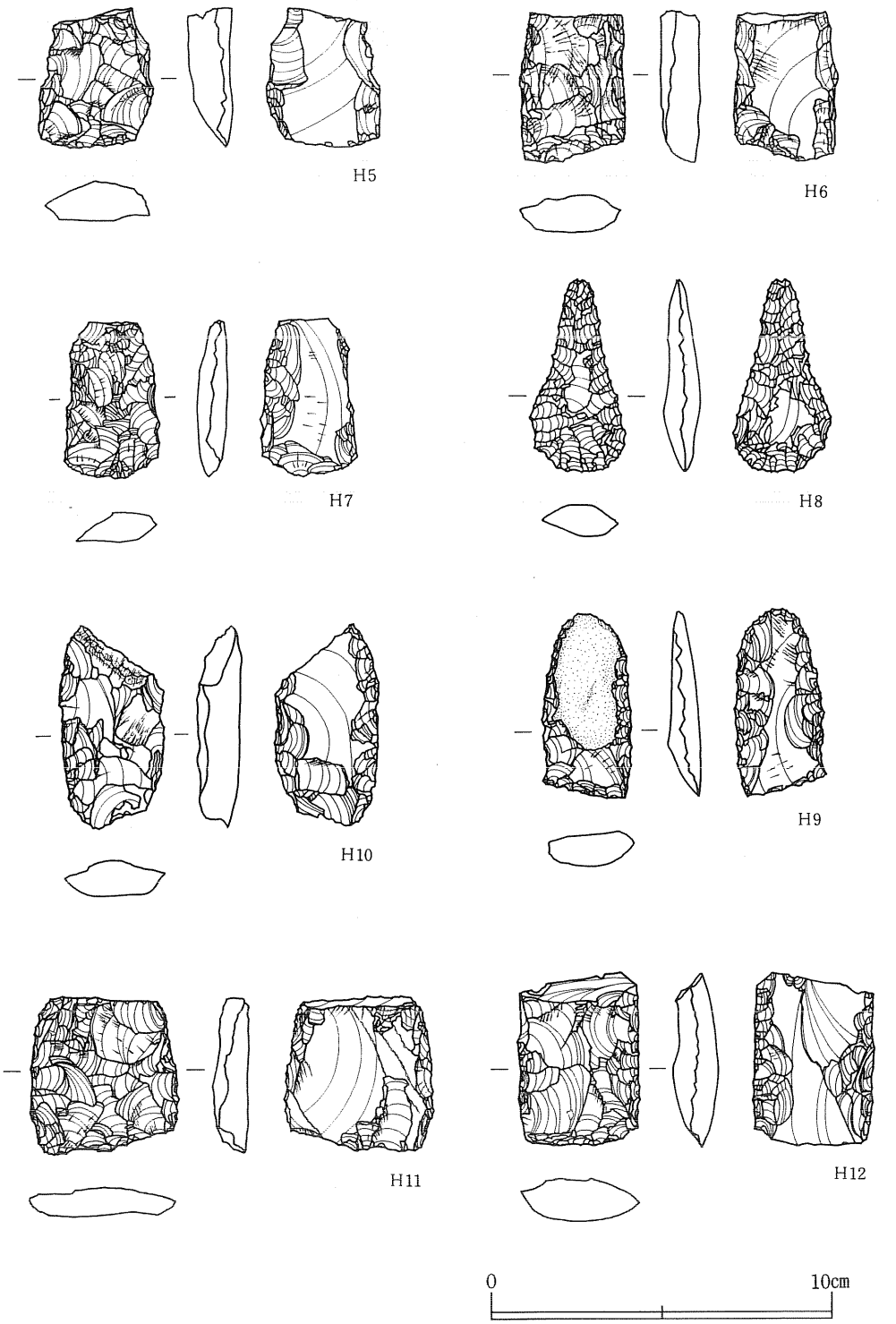
（Ｔ１）52°・（Ｔ２）43°・（Ｔ３）46°・（Ｔ４）43°・（Ｔ５）59°

箆状石器　（第67図～第71図、図版60～62）

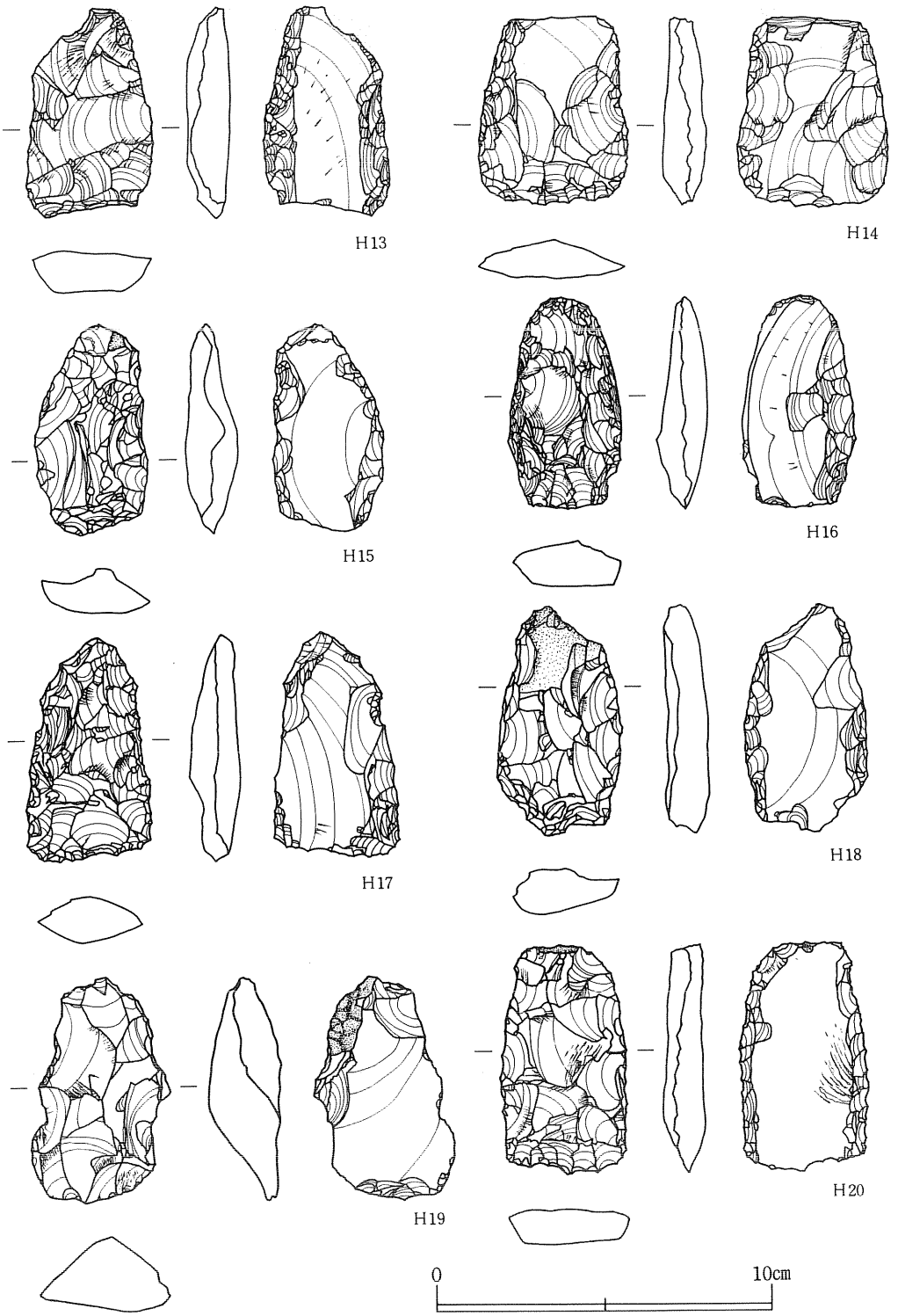
28点出土した。石質は玉髄（Ｈ３）もあるが、頁岩が主体をなす。以下、形態・２次調整の



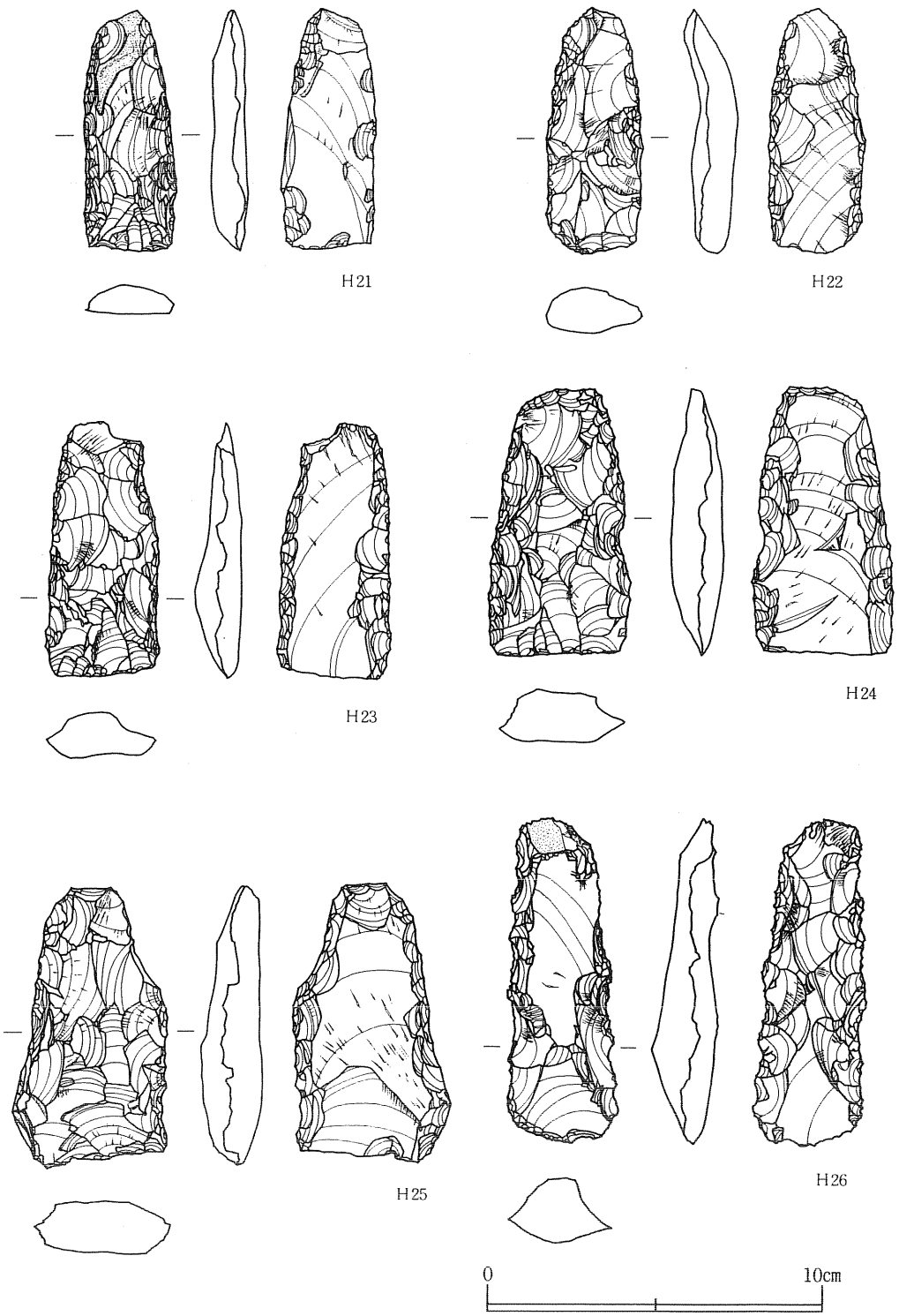
第67図　　トランシェ様石器・篦状石器(1)



第68図　　篦状石器(2)



第69図　　篦状石器(3)



第70図　　篦状石器(4)

状況により分類した。

Ⅰ類　平面形態が台形・三角形・長方形を基調とするもの

A　主要剥離面の一側縁のみに2次調整を施こしたもの（H2・H7・H11・H14・H16・H17・H27）

いずれも横長剥片を利用したものである。背面はほぼ全面に2次調整を施しているが主要剥離面には一側縁のみに調整が施されている。この一側縁のみに施される調整は、おそらく、素材剥片を取り出した際の打瘤を取り去ることが第一の目的と考えられる。刃部は一般的に直線的である。H16の一側縁はヒンジフラクチャーをなし、H27の一側縁には礫面を留める（素材剥片を取り出す際の打面ではない）。

B　主要剥離面の両側縁に2次調整を施したもの（H4・H6・H9・H10・H12・H13・H15・H18・H20・H22・H25・H28）

いずれも横長剥片を利用したものである。背面をほぼ全面にわたって2次調整するものが主体をなすが、礫面を留めるもの（H9）もある。主要剥離面の一側縁に施される調整により、素材剥片を取り出した際の打瘤は取り去られるが、H15・H18においては取りさられず残存している。刃部は一般的には直線的である。

C　主要剥離面にする2次調整が刃部にまで及ぶもの（H1・H3）

H1は両面とも縁片のみに2次調整が施されたもので、縦長剥片を素材としている。刃部は弧状を呈する。H3は半欠品であり、即断はできないが、背面はほぼ全面にわたって2次調整されているものと考えられる。刃部はH1同様弧状を呈する。

D　主要剥離面を刃部及び基部に留めるもの（H26）

横長剥片を素材とし、両面の側縁に粗い2次調整を施している。刃部は主要剥離面からの縁辺加撃による細かい調整により弧状に作り出されている。

E　主要剥離面に2次調整を施さないもの（H19・H21）

H19の背面は粗い2次剥離が施されるのに対し、H21の背面には細かい2次調整が施される。両方とも横長剥片を素材としているが、刃部は弧状を呈するもの（H19）と直線的なもの（H21）とがある。

Ⅱ類　基部が柄状、刃部が円形を呈するもの（H8）

おそらく、横長剥片を素材としたものであろう。両面とも、ほぼ全面にわたって細かい2次調整が施されているが、裏面（主要剥離面）には一側縁に沿って高まりが縦走している。基部の断面形は限りなく正方形に近い菱形を呈する。

掻器　（第71図～第74図、図版63・64）

縁辺に調整を施し刃部を作り出した不定形の剥片が多数出土したが、その内、特徴的なものを32点選び出した。石質はC４のみがメノウであり、他は全て頁岩である。

Ⅰ類　一端が尖頭状を呈するもの

A　主要剥離面が内湾するもの（C５・C11・C33）

縦長剥片を素材とし、基部に打点を有す。両面縁を刃部として使用したものであろう。C33は主要剥離面からのみの縁辺加撃により、背面の周縁に細かい２次調整を施している。

B　主要剥離面が内湾しないもの（C１・C４・C７・C10）

縦長剥片を素材とし、基部に打点を有す。両側縁ないしは一側縁を刃部として使用したのであろう。本類は背面に第１次剥離の縦方向の稜を有すことを特徴とする。

Ⅱ類　一端が弧状を呈するもの

A　主要剥離面が内湾ないし内湾気味のもの（C12・C14・C19・C25・C30）

縦長剥片を素材とし、基部に打点を有すものが主体をなすが、C27の打点は刃部方向に存在する。刃部（使用部位）は弧状を呈す一端に求められよう。形態差によりさらに細分される。

① 正三角形を基調とした小型のもの（C12～C14）

② 扁平な剥片を素材としたもの（C25）

③ 長さに対して幅が非常に小さいもの（C26～C28）

④ 楕円形を基調としたもの（C19・C29・C30）

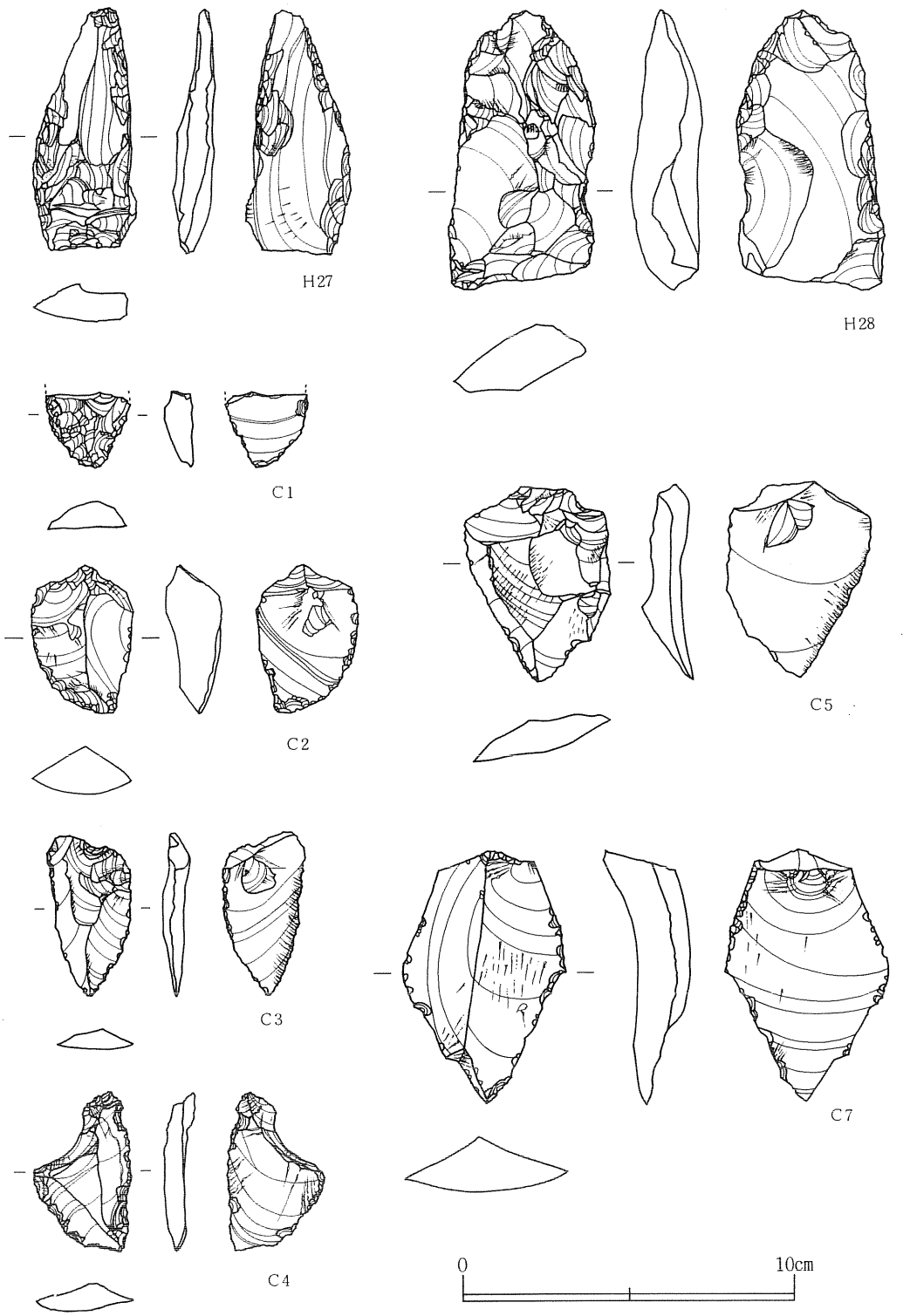
いずれも主要剥離面からのみ縁辺加撃して背面に２次調整を施している。

B　主要剥離面が内湾しないもの（C15・C18・C20・C24・C31・C32）

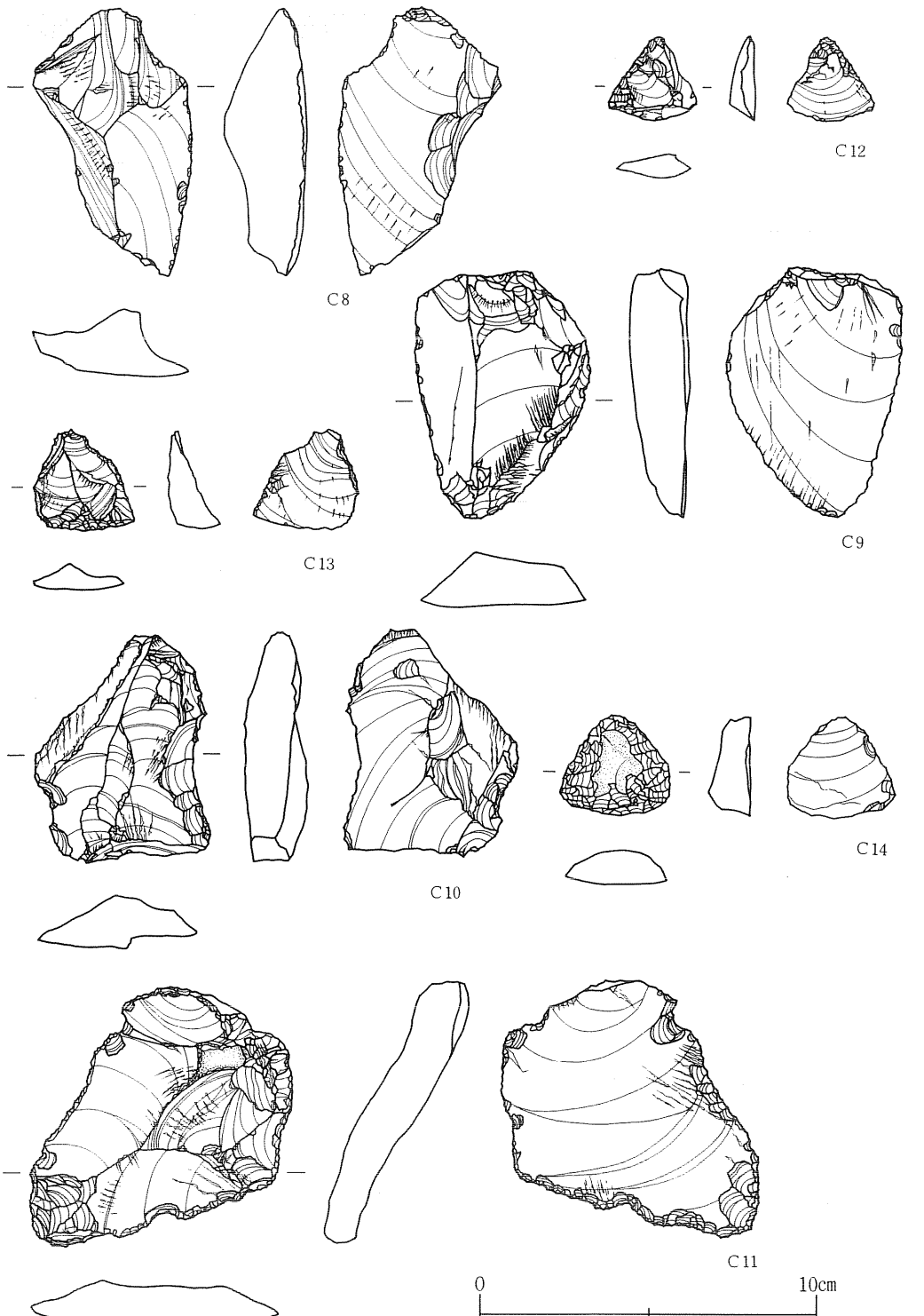
C31のみが横長剥片を素材とし、他は全て縦横剥片を素材としている。弧状を呈する部位を使用したものとおもわれるが、C32は両側縁を使用したのであろう。弧状を呈する部位は両面ないしは片面から縁辺加撃して作り出されている。C22は弧状を呈する部位の両面の縁辺に細かい調整を施し、さらに撥形に成形され、本類において特異な存在と言えよう。

削器　（第75図・第76図、図版65）

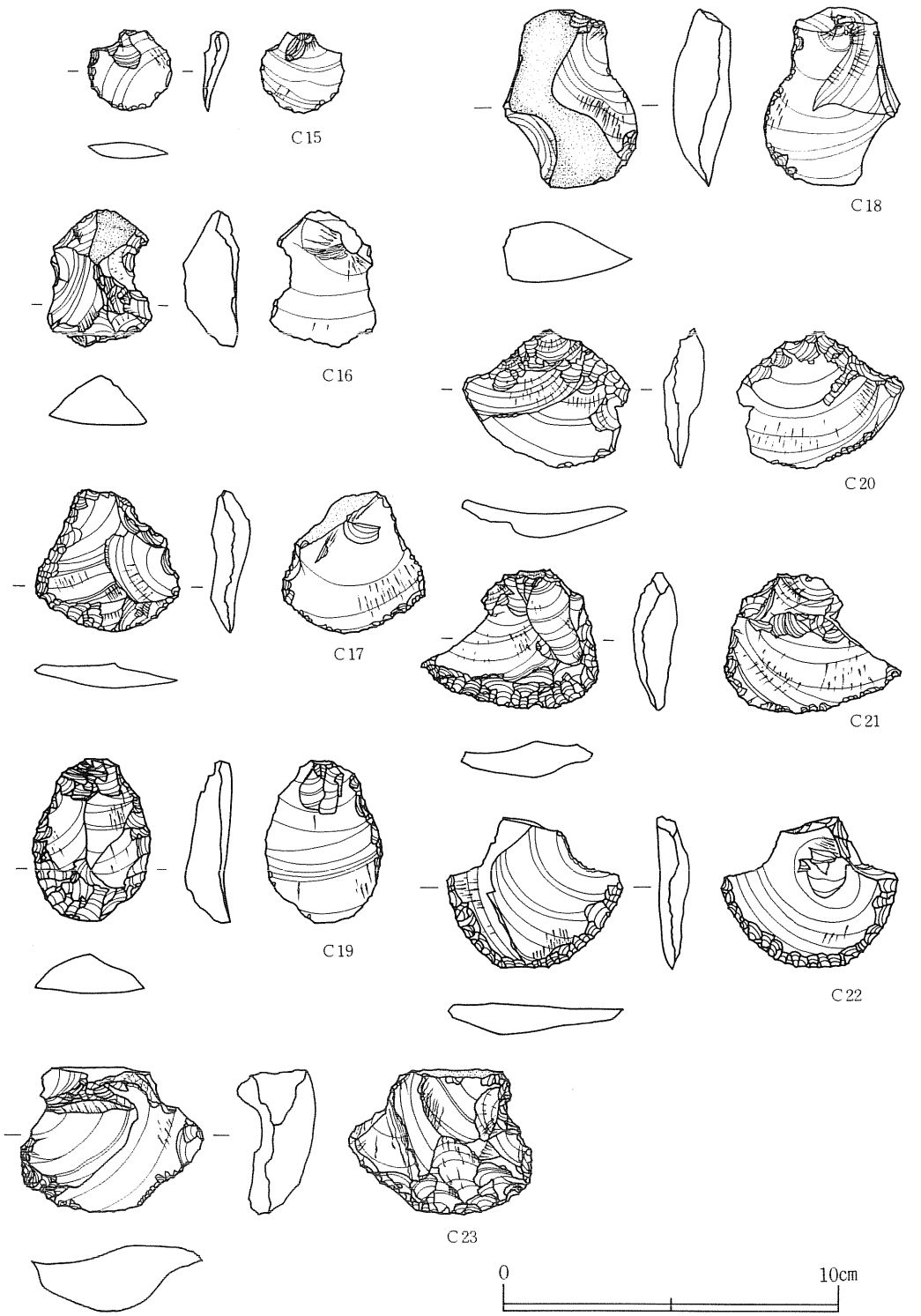
一側縁が内湾ないし直面的で、他側縁が外湾する。三日月形ないし半月形・バナナ形の形状をなす石器である。内湾する側縁に刃部を設け、刃部の最大角度は以下の通りである。



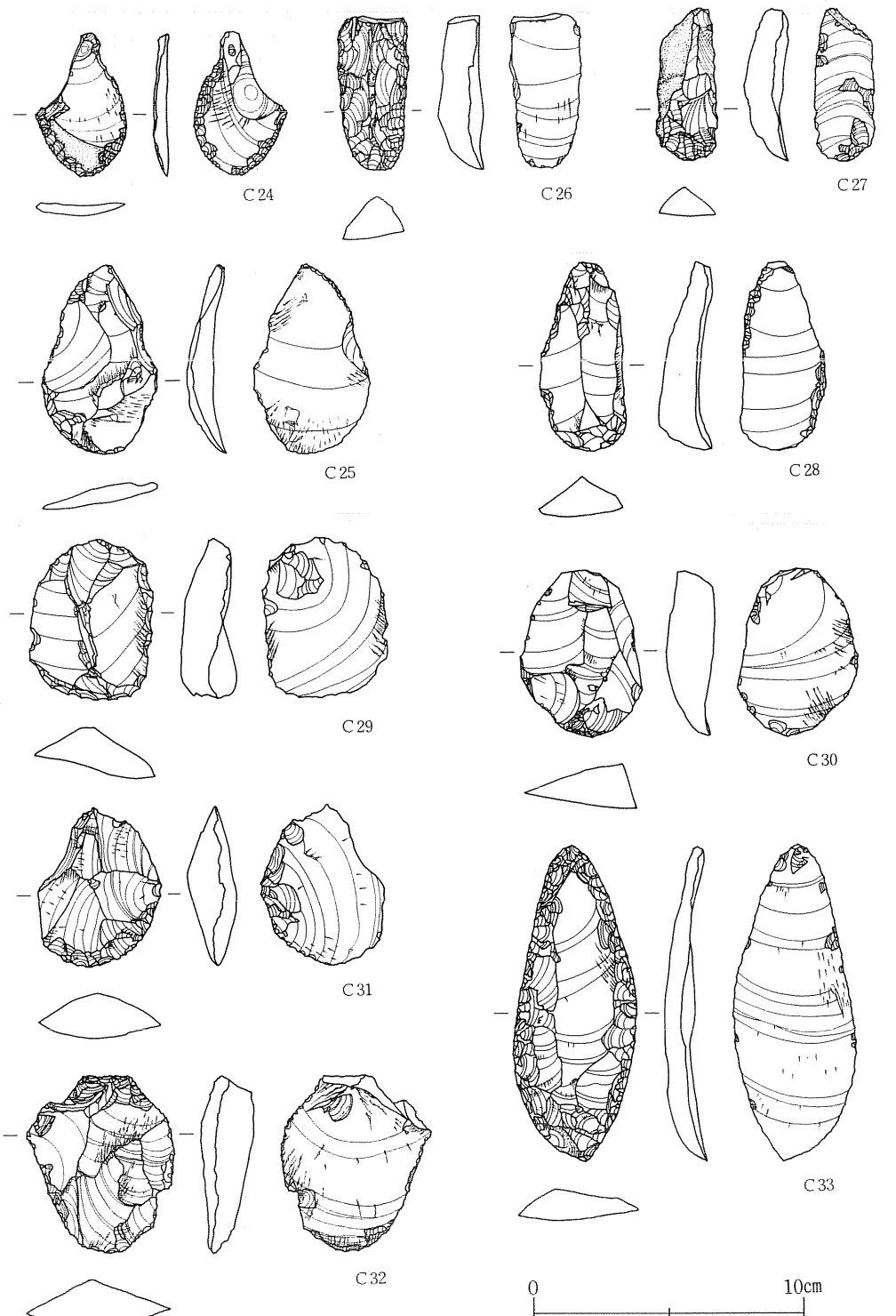
第71図　　掻器(1)



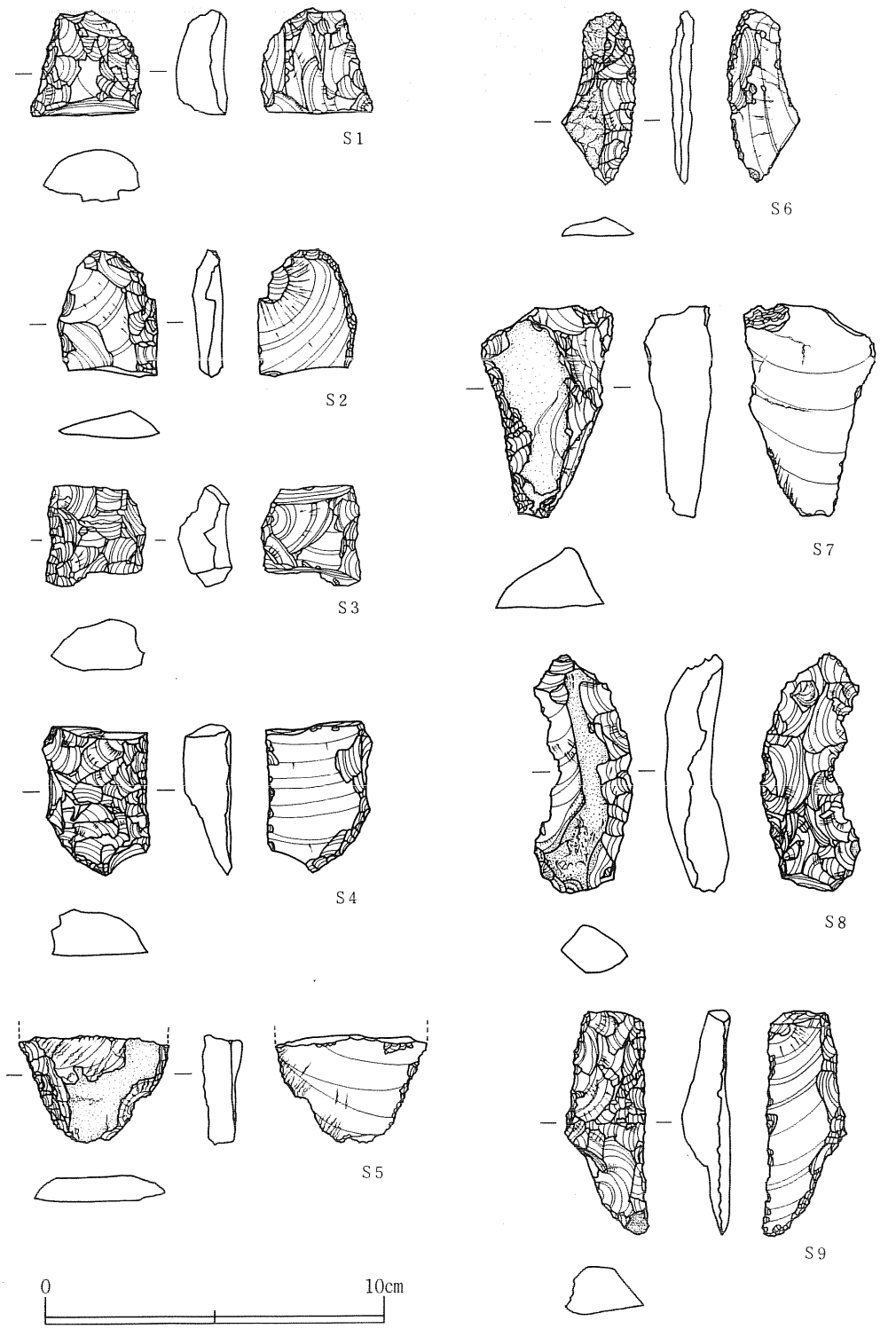
第72図　　掻器(2)



第73図　　掻器(3)



第74図　　掻器(4)



第75図　　削器(1)

（Ｓ１）73°・（Ｓ２）55°・（Ｓ３）51°・（Ｓ４）66°・（Ｓ５）65°・
（Ｓ６）57°・（Ｓ７）61°・（Ｓ８）67°・（Ｓ９）61°・（S10）48°・
（S11）62°

全て縦長剝片を利用するが、石質はＳ７のみがメノウであり、他は頁岩である。主要剝離面を広く残存するものが主体をなし、内湾する側縁は主要剝離面からのみ縁辺に加撃して作り出されている。しかし、Ｓ８は、使用によるものか両側縁への加撃は最終的には背面のみからのものである。また、外湾する側縁は２次調整により作り出されたものとそうでないもの（Ｓ７・S10）とがある。

鋸歯様石器（第76図、図版65）

縁辺を両面から加撃し、両側縁ないし一側縁を鋸歯様に作り出したものである。２点とも頁岩の縦長剝片を利用している。

Ｎ１の一側縁は削器の刃部と同様の形態をなし、刃部の最大角度は53°である。刃部の作り出しは、主要剝離面のみからの縁辺加撃による。背面には第１次剝離の際の縦方向の稜が残存する。全体の形状は半月形ないし三日月形に復元できよう。Ｎ２は樹状を呈するものである。

磨製石斧　（第76図～第78図、図版65・66）

17点出土した。石質は凝灰岩、埦岩（Ｆ８・Ｆ９）、安山岩（F13）、花崗岩（F15～F17）、と多種にわたる。

使用による折損、欠損、刃こぼれ、刃潰れ等がいずれの石にも観察され、F10刃部を折損後、折損面を敲き面として再利用している。またF12は基部を折損後、折損面を打ち込み面とする楔として再利用している 。

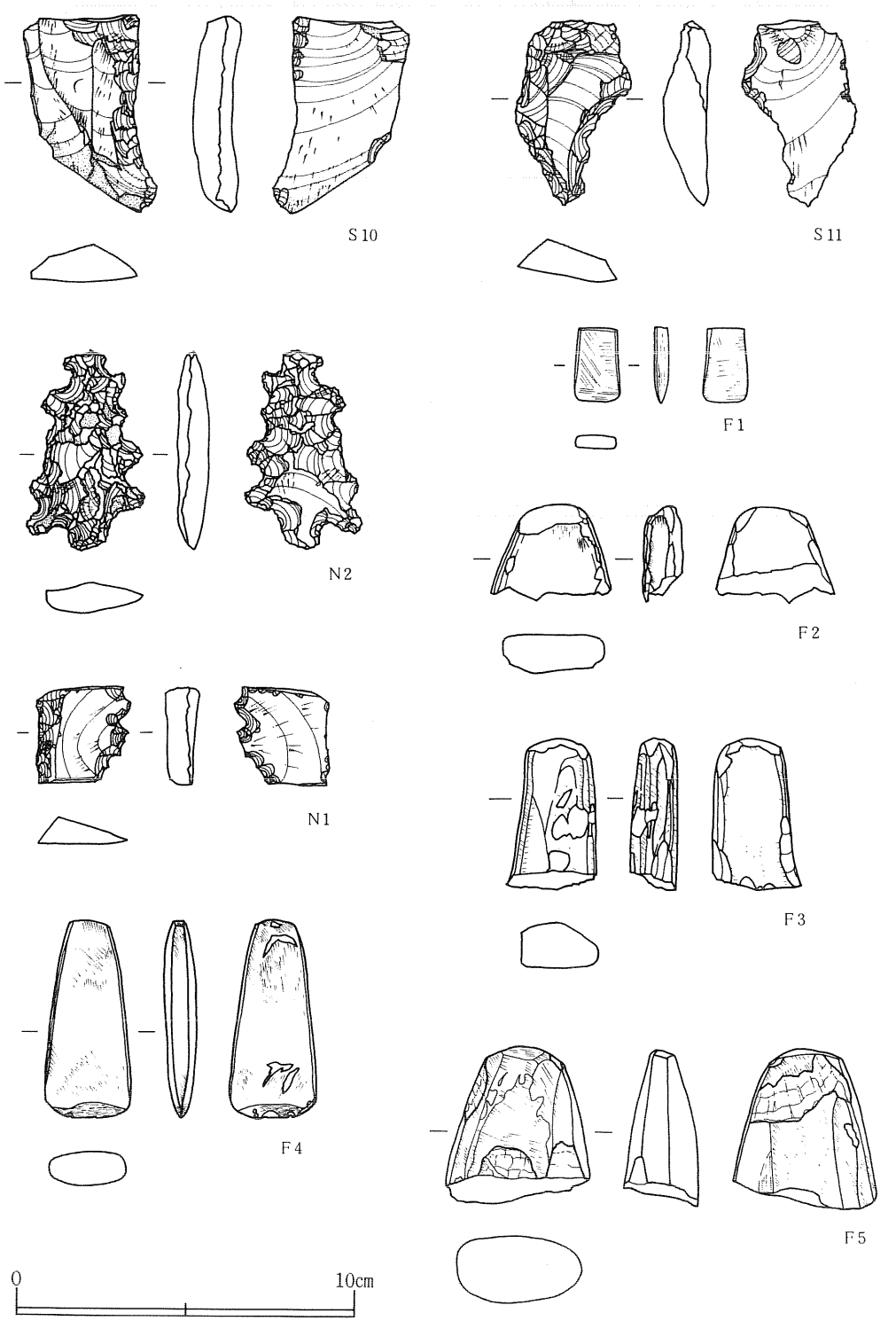
打製石斧　（第78図、図版66）

幅に対して長軸比が大きい長楕円形の扁平な安山岩の一端に片面からのみ加撃して刃部を作り出している。

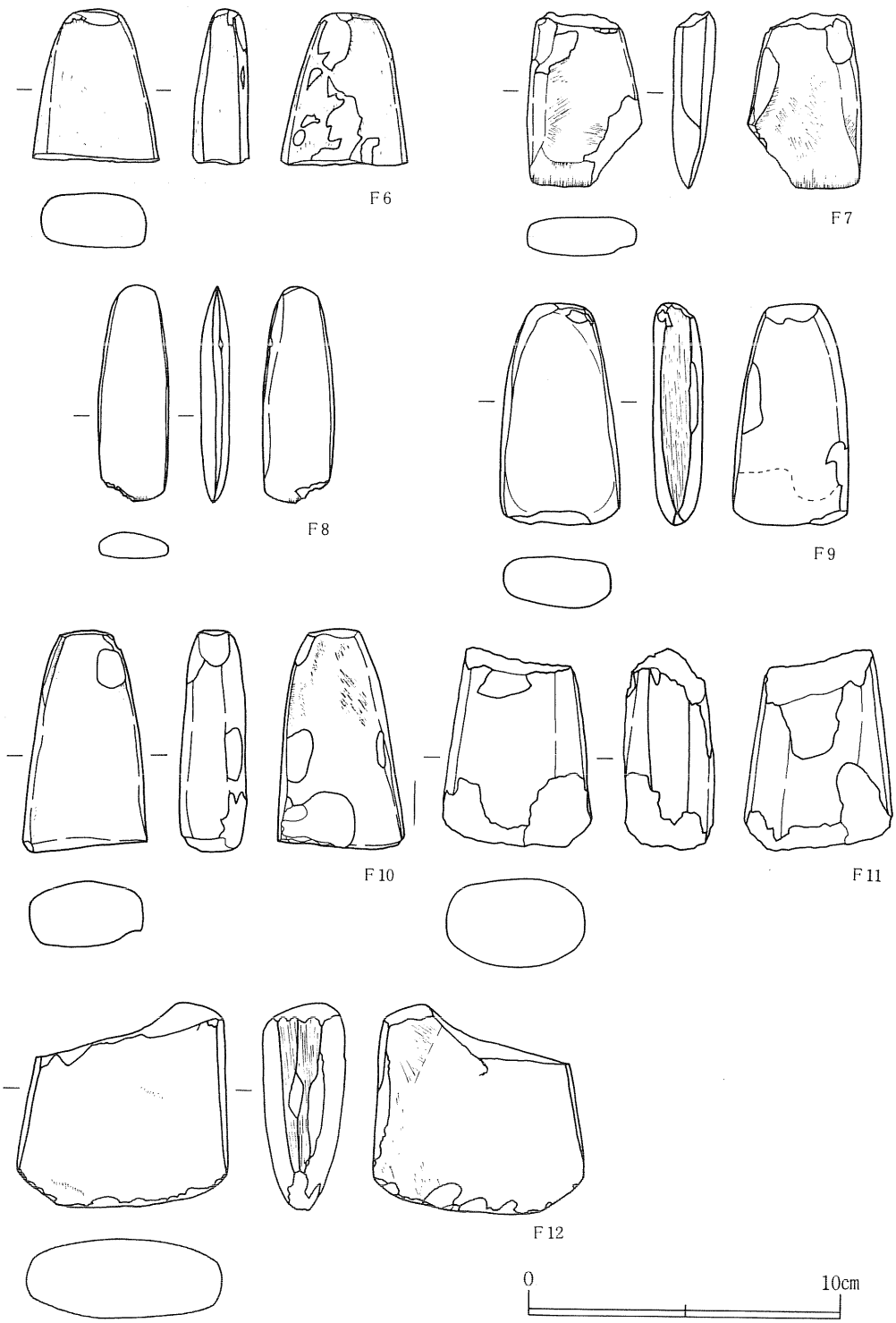
石錘　（第79図～第83図、図版66～68）

43点出土した。礫の相対する軸端に抉りを持つ石器であるが、抉りの部位により２分類される。石質は凝灰岩（Ｍ１・Ｍ６・Ｍ７・M18）、頁岩（M23・M26）、花崗岩（M25・M37）、砂岩（M42）、安山岩と多種にわたる。

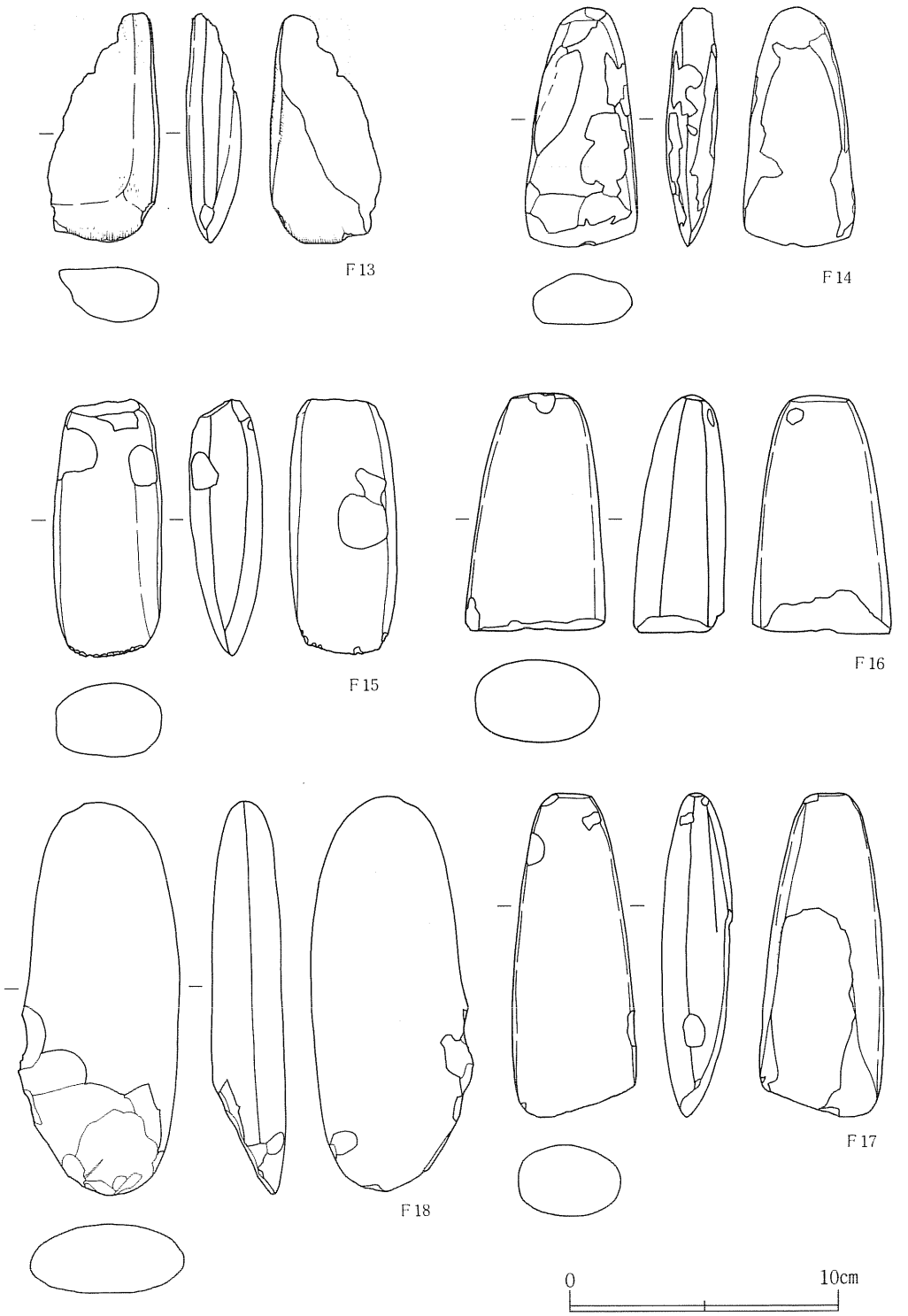
Ｉ類　抉りを長軸端にもつもの（Ｍ１～Ｍ６・Ｍ９～M42）



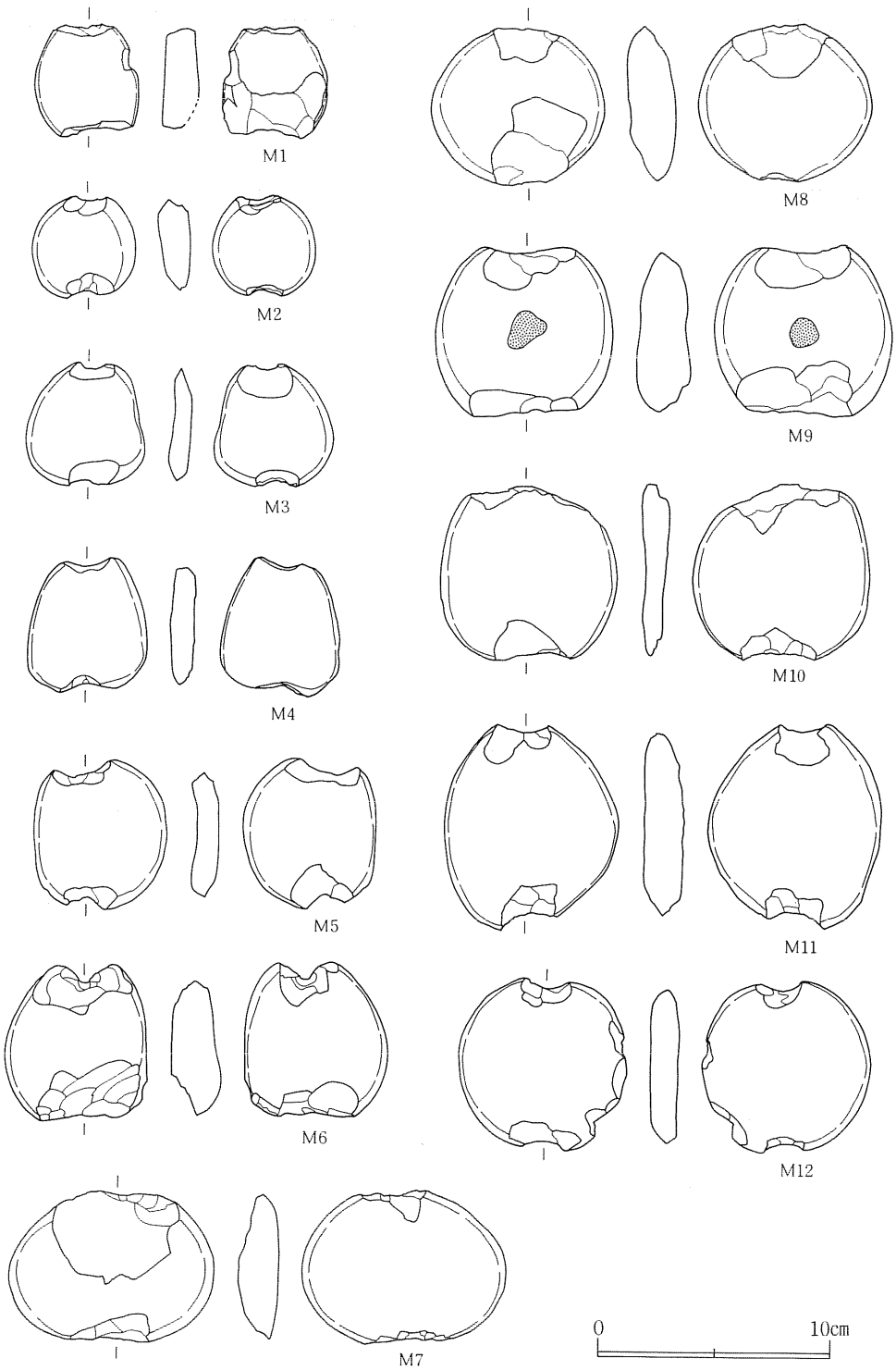
第76図　削器(2)・鋸歯様石器・磨製石斧(1)



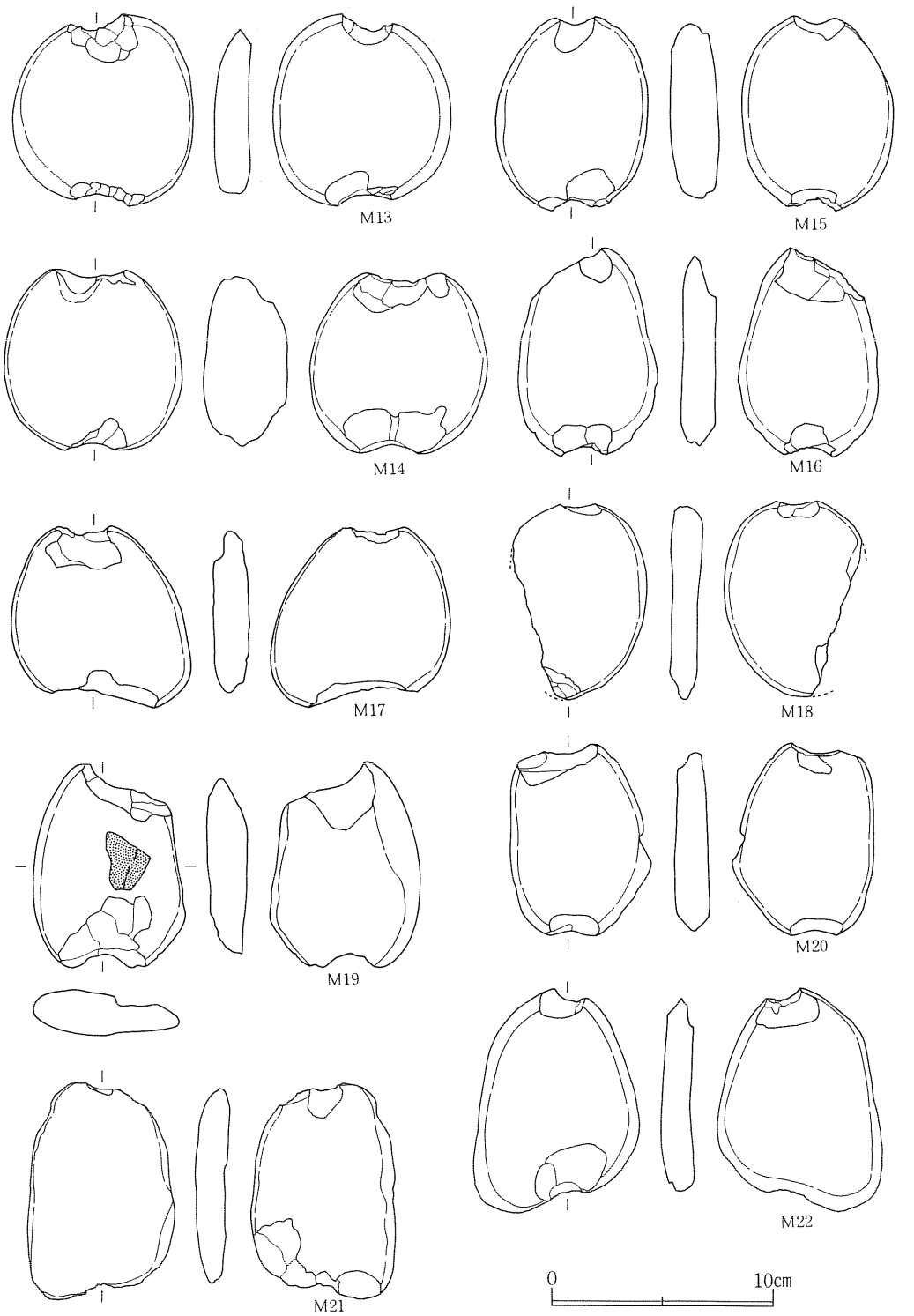
第77図　磨製石斧(2)



第78図　磨製石斧(3)・打製石斧

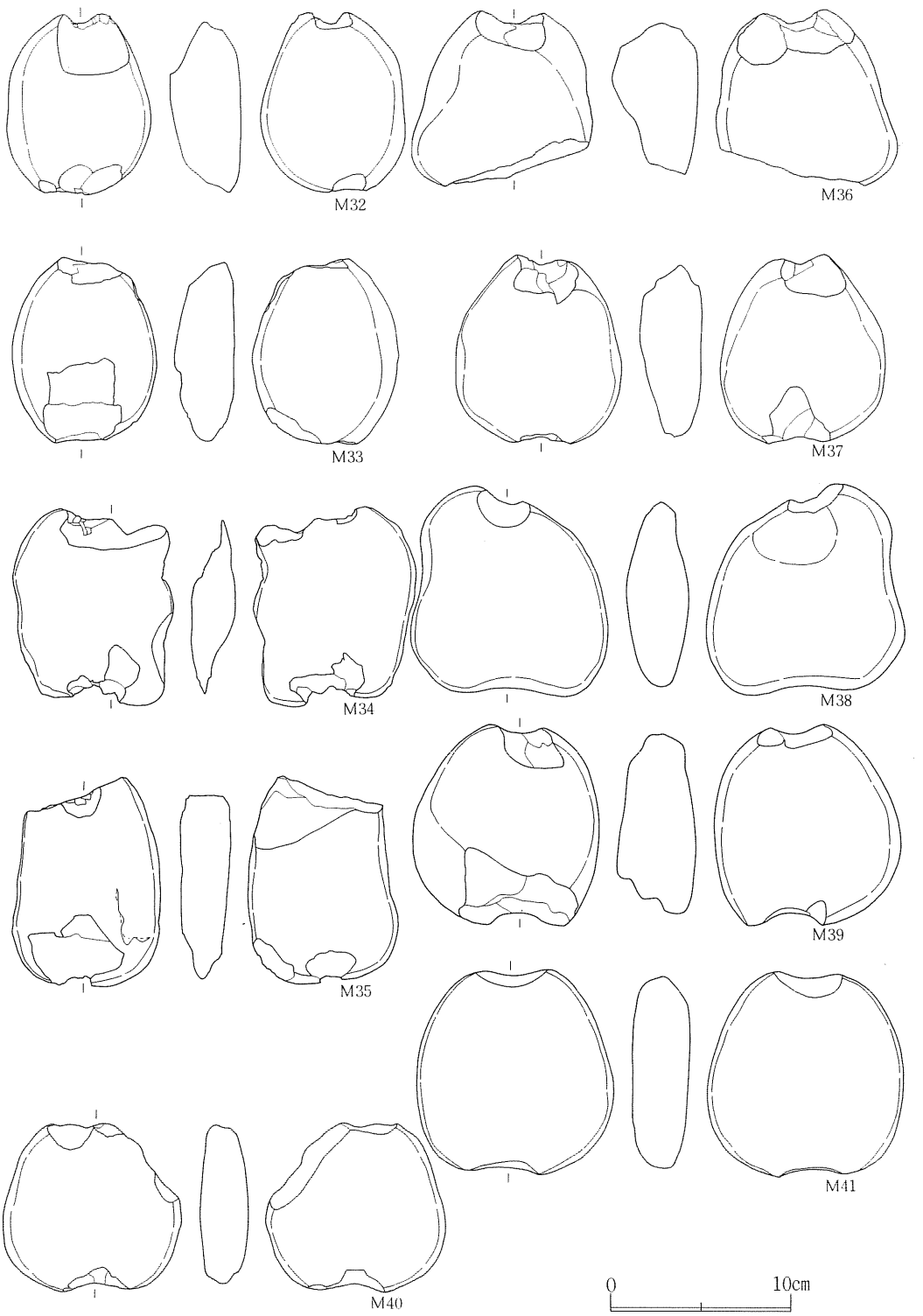


第79図　石錘(1)



第80図　　石錘(2)

第81図　　石錘(3)



第82図　　石錘(4)

Ｍ１～ Ｍ５は30～50ｇと軽量であるのにたいし、M36～M39・M41は400ｇを越える重量である。

Ｍ９は両面に凹みを持ち、所謂「凹み石」としても使用されている。後述する「敲磨器Ⅳ Ｂ類－ａ」と相似た石器であり、相互の関係が指摘される所である。

長軸端の抉れは丁寧に刃潰しを施したものと鋭い刃縁状を呈するものとがあるが、前者が圧倒的に多い。

M38は長軸端の一端のみに抉れが作り出されているが、他端が抉れた礫面をなすことから、錘として紐ないし縄を結縛することに何ら支障をきたさなかったと考えられる。

Ⅱ類　抉りを短軸端にもつもの（Ｍ７・Ｍ８・M43）

Ｍ７・Ｍ８において、両端に抉りを作り出した際の剝離が必ずしも両面に観察されるとは限らない。M43は二等辺三角形を呈す石材の底辺のみに抉りを作り出しているが、抉れた斜辺または両斜辺を利用し紐ないし縄を結縛できないこともない。なお平坦面には凹みがあり、所謂「凹み石」としても利用されたのであろう。

（石錘は以上の２分類の他、重量による分類も可能である。）

①　30～ 50ｇのもの（Ｍ１～Ｍ５）

②　84～ 89ｇのもの（Ｍ６・M10・M12）

③　113～127ｇのもの（Ｍ７・Ｍ８・M16・M17・M19～M21）

④　148～157ｇのもの（Ｍ９・M11・M15・M22・M28）

⑤　179～198ｇのもの（M13・M29・M30）

⑥　220～240ｇのもの（M26・M27・M34・M42）

⑦　283～349ｇのもの（M14・M31・M33・M35）

⑧　400ｇ以上のもの（M36～M39・M41・M43）

敲磨器　（第83図～第94図、図版68～73）

98点出土した。礫をそのまま使用した石器であるが、通常「凹み石」、「磨石」、「敲き石」、「石皿」、「台石」と呼ばれるものが本石器である。一つの石に異種の使用痕が並存し、複数の器名を付さなければならないようなものがあり、ここでは「敲磨器」として一括し、さらに細分していくことにする。石質は花崗岩（K14・K28・K87・K88）、砂岩（K13・K50・K51・K57・K95・K96）、凝灰岩（Ｋ７・K41・K60・K67・K71・K84・K91）、安山岩である。

Ⅰ類　平坦面に凹みのみを持つもの

Ａ　平面形が楕円形もしくは円形のもの

ａ　断面が楕円形のもの（Ｋ１～K29）

b　断面が円形のもの（K30～K35）

B　平面形状がA類よりも幅に対する長さの比が大きいもの

a　断面が楕円形のもの（K36・K45）

b　断面が三角形のもの（K46～K48）

c　平面形状が長方形のもの（K49～K51）

d　平面状がその他のもの（K52～K57）

Ⅱ類　凹みとすり面を持つもの

A　平担面に凹みとすり面を持つもの（K58～K68・K71）

B　断面三角形を呈する礫の一つ稜に凹みを持ち、もう一つの稜がすり面のもの(K69)

Ⅲ類　平坦面に凹みとすり面、縁辺に敲打痕を持つもの（K70・K72～K74）

Ⅳ類　平坦面に凹み、縁辺に敲打痕を持つもの

A　平面形状が円形のもの（K75）

B　平面形状が楕円形のもの（K76～K82）

a　長軸端の一方に敲打による剝離が見られるもの（K79・K81・K82）

b　その他

Ⅴ類　平坦面にすり面のみを持つもの

A　平面形状が楕円形のもの（K83～K90）

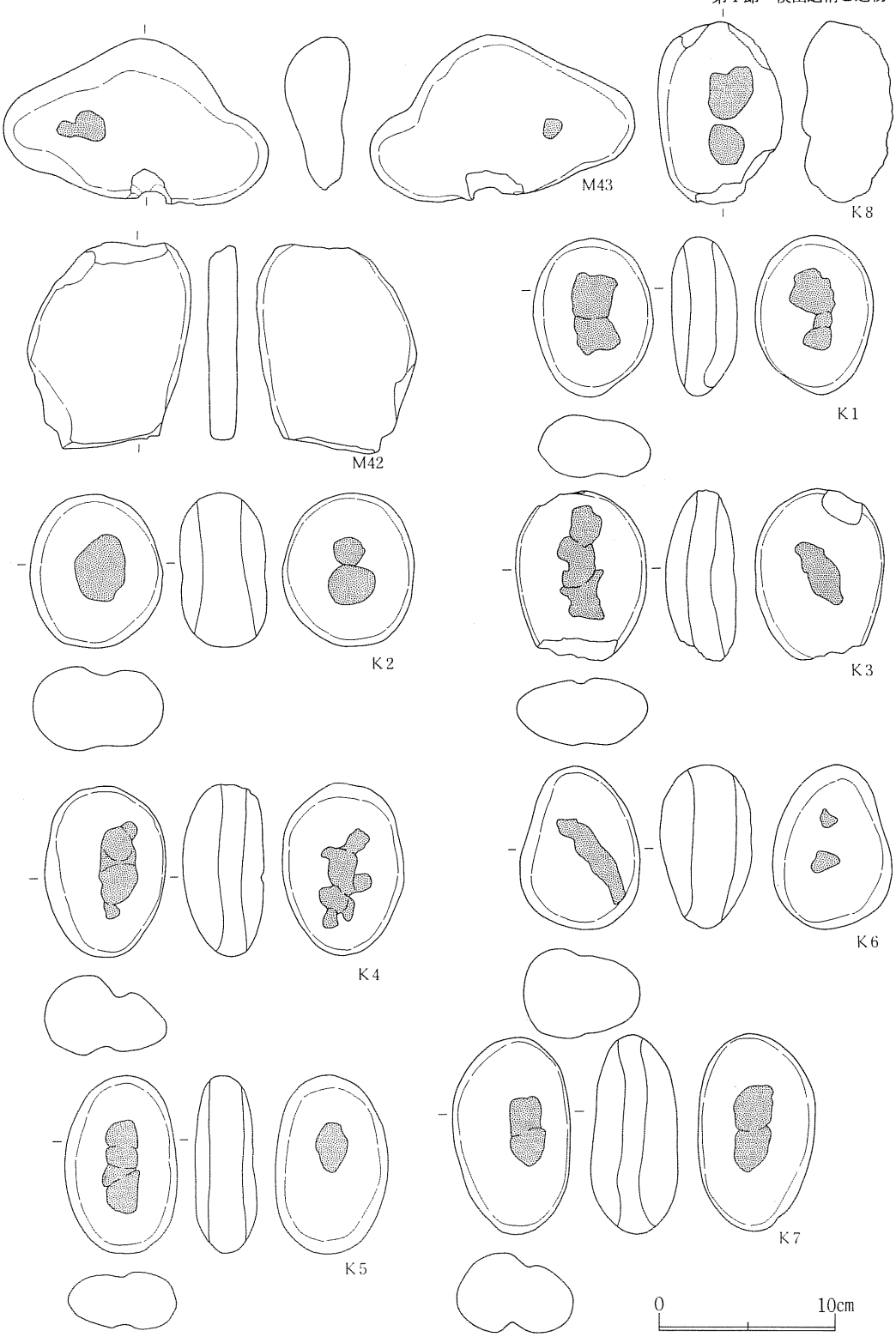
B　三角柱状のもの（K91）

Ⅵ類　長軸端に敲打痕を持つもの（K92・K93）

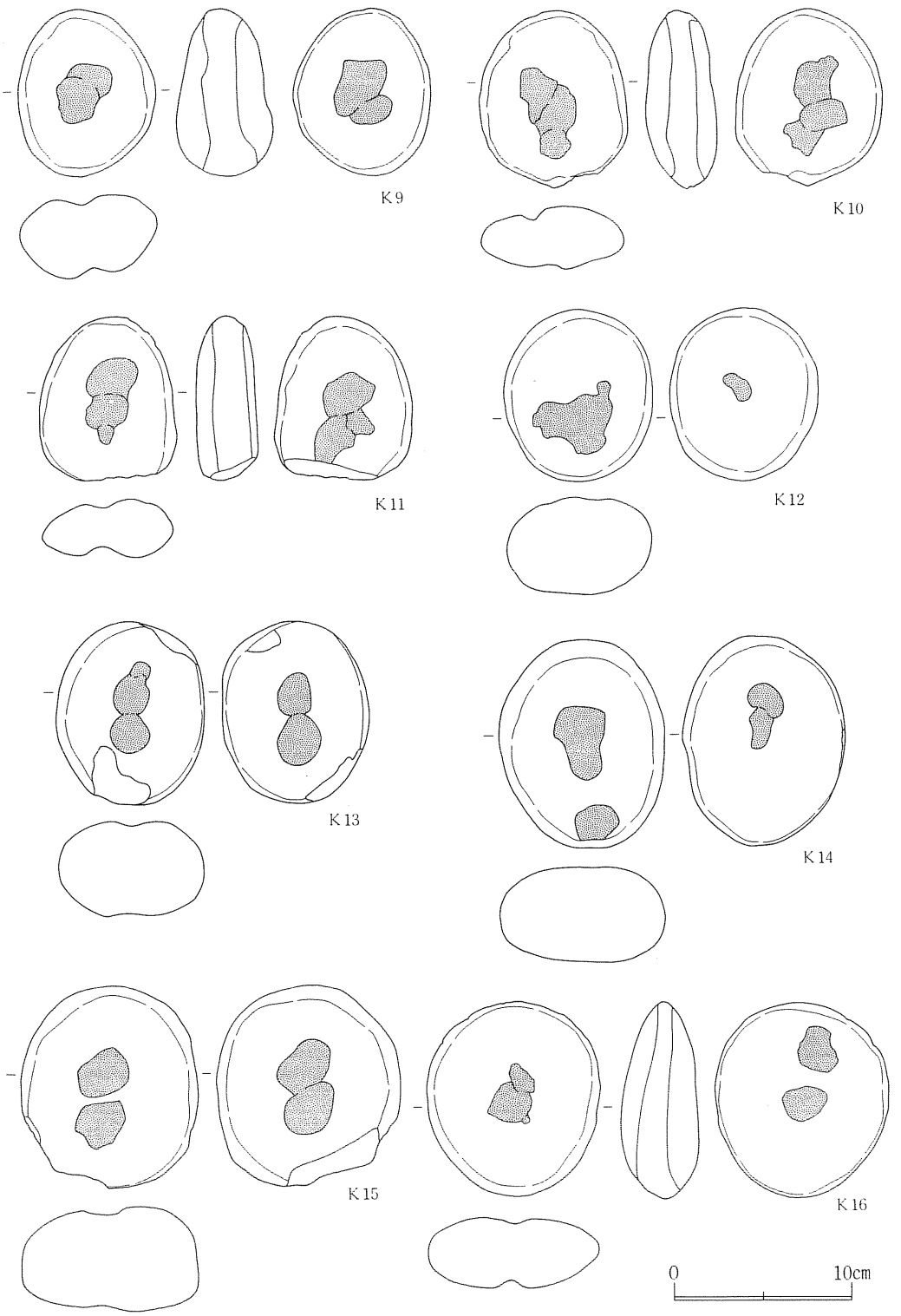
K92は両長軸端に敲打痕を持ち、その部位はほぼ平坦である。K93も両長軸端に敲打痕を有すが、一方は敲打に伴う剝離を生じ、抉れており、他方には小さな凹みが数個存在するのみである。石錘とも考えられる。

Ⅶ類　石皿・台石を本類とする（K94～K98）

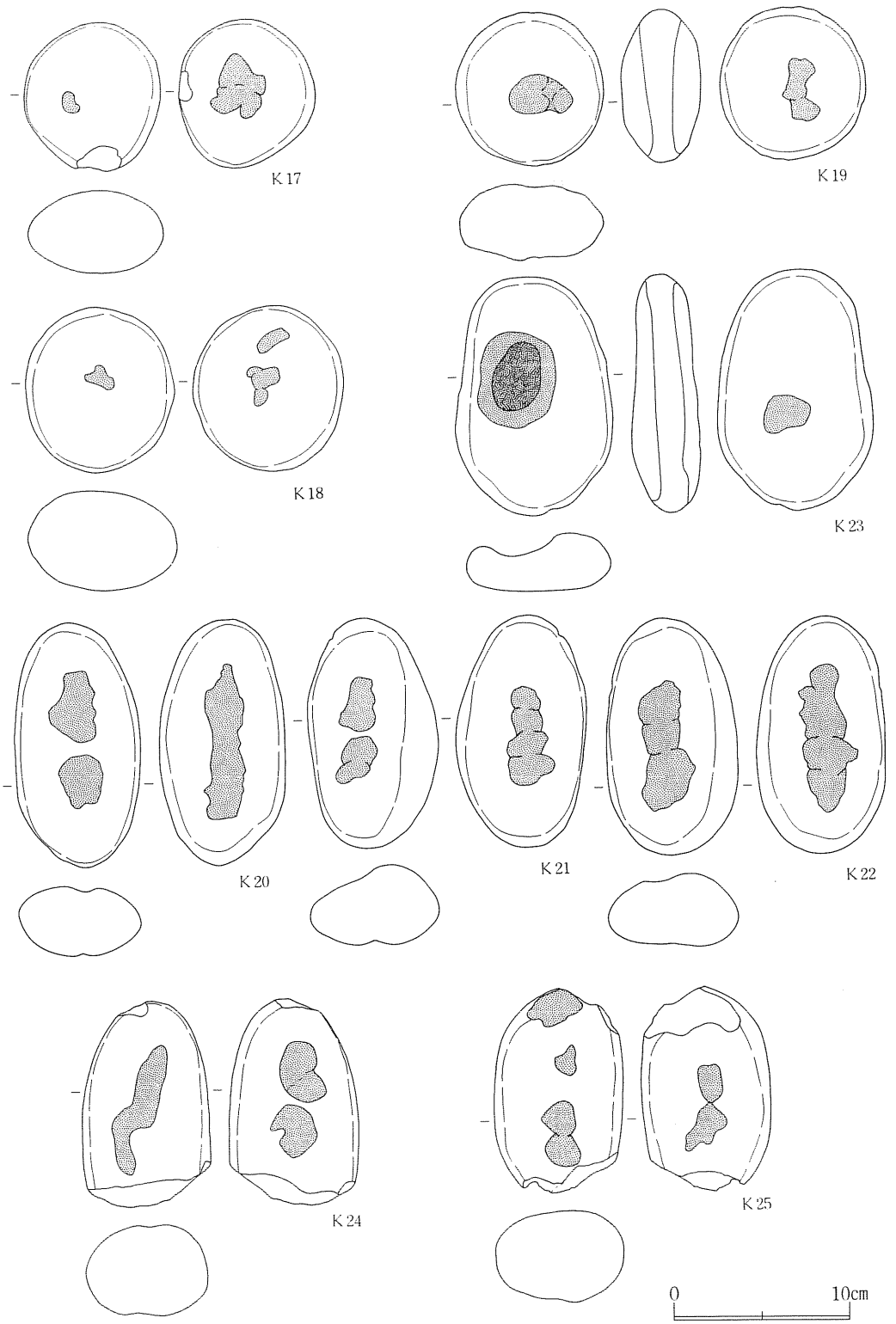
K94は扁平な礫の片面に所在する凹みを利用したもので、凹みの中は外周の高まりに比して磨耗が著しい。K95・K96は砂岩を素材とし、使用面（磨面）は非常に磨耗(K95)ないし使用面に長軸方向の幅広の溝（K96）が存在する。K97は溝状ピットＳＫＴ02坑底面より出土した石皿と同形態のものと推定され、周縁の高まり部分の破損品である。この破損品から復元される原形（使用時における形態）はＳＫＴ02出土のものに比してかなり大形のものと考えられる。K98は、台石の半欠品である。一方の平坦面には凹み、他平坦面には磨りの痕跡（磨耗）が観察される。作業の種類により平坦面を使い分けたのであろう。磨耗した面には火面を受けた痕跡（煤状？）も観察され、火を受けた後も磨りの作業を行っていたことが窺える。



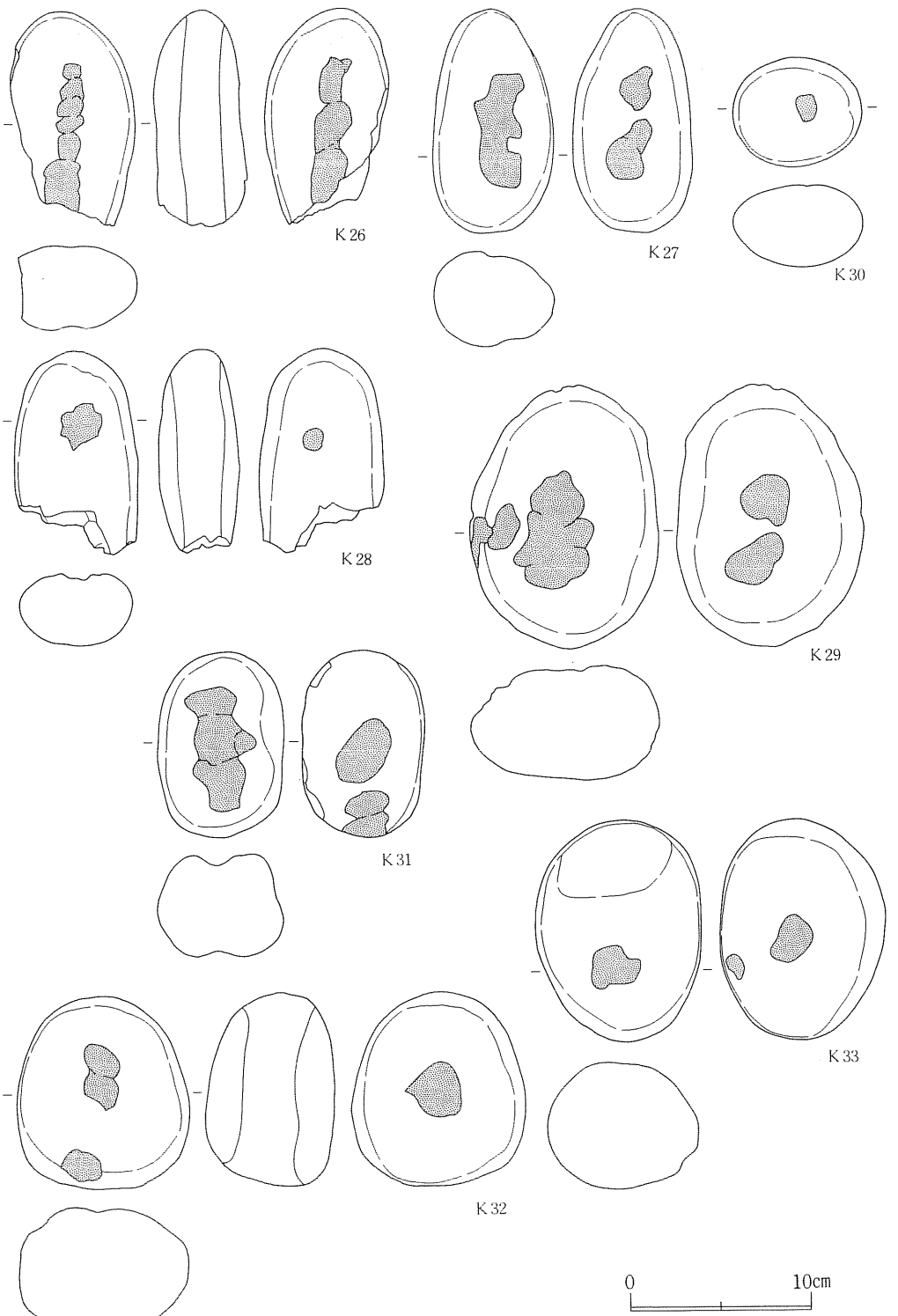
第83図　石錘(5)・敲磨器(1)



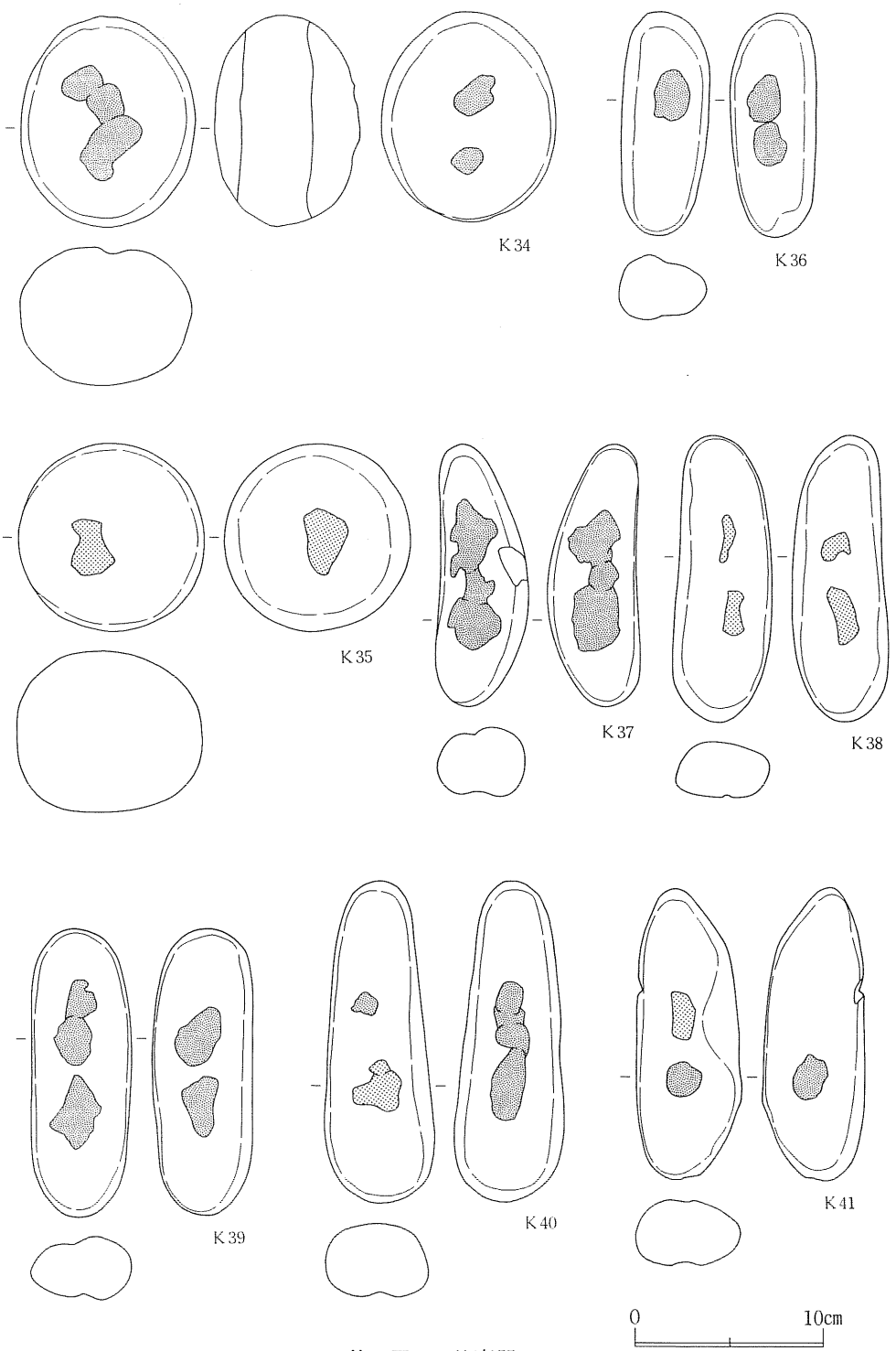
第84図　敲磨器(2)



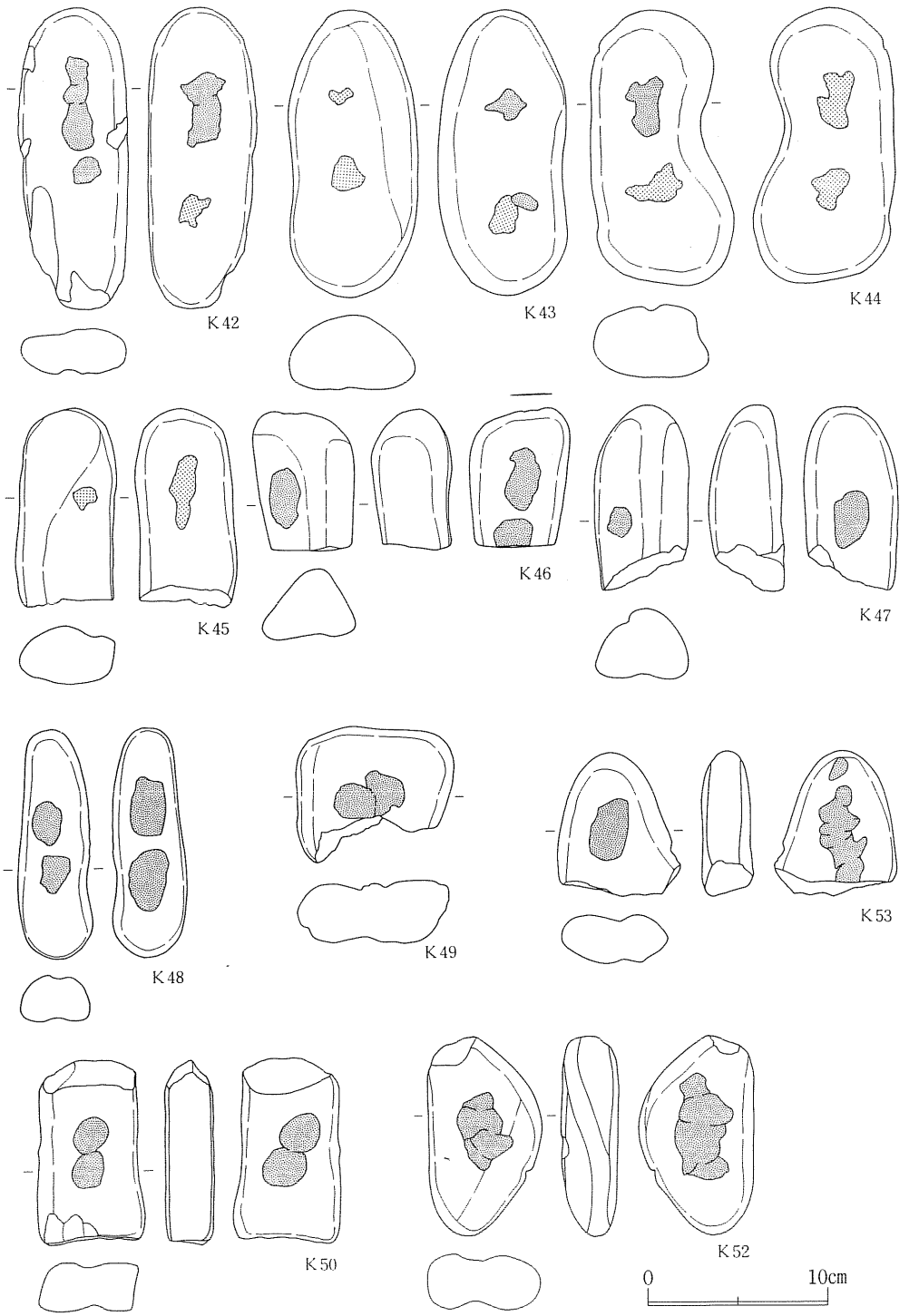
第85図　敲磨器(3)



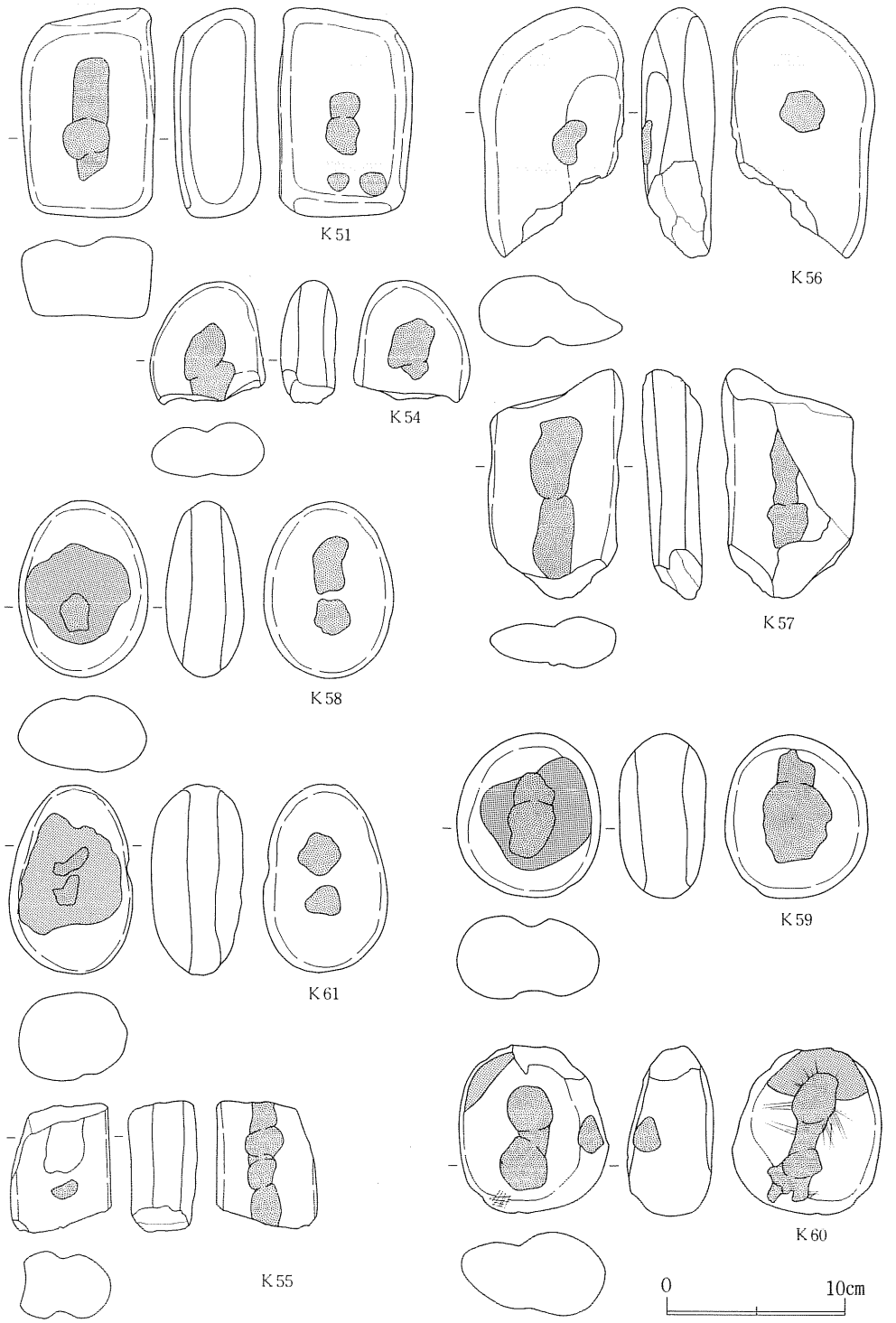
第86図　　敲磨器(4)



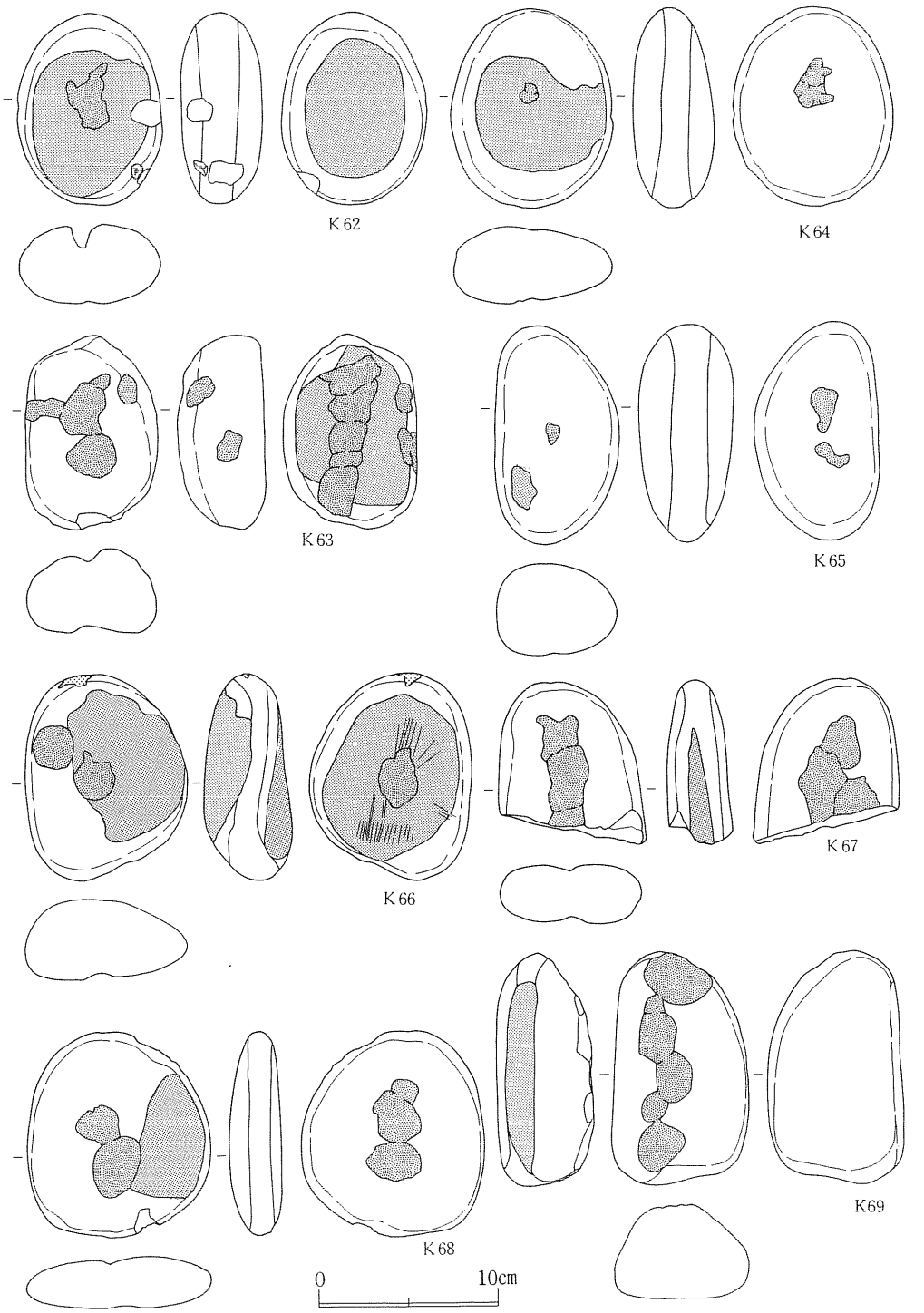
第87図　敲磨器(5)



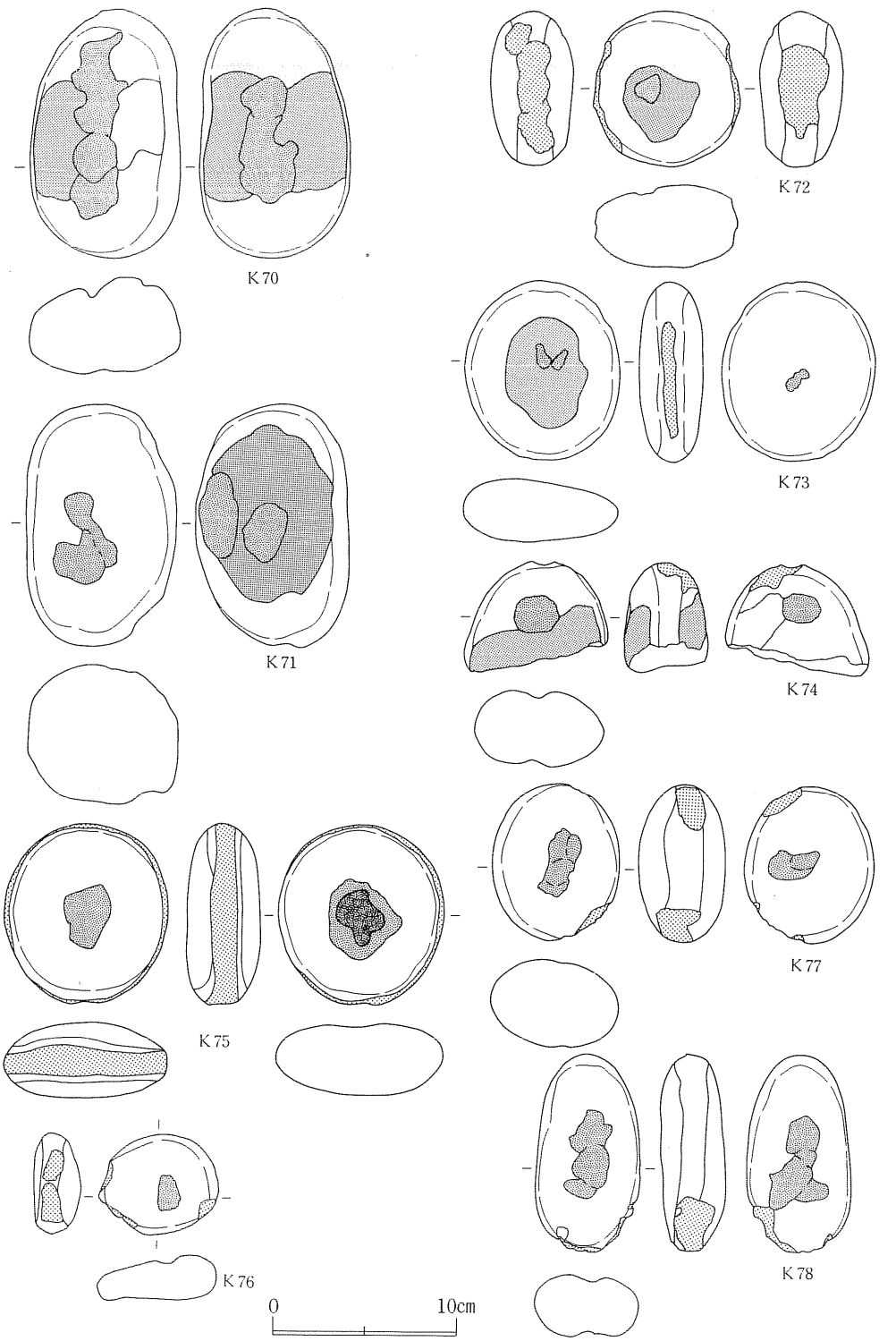
第88図　敲磨器(6)



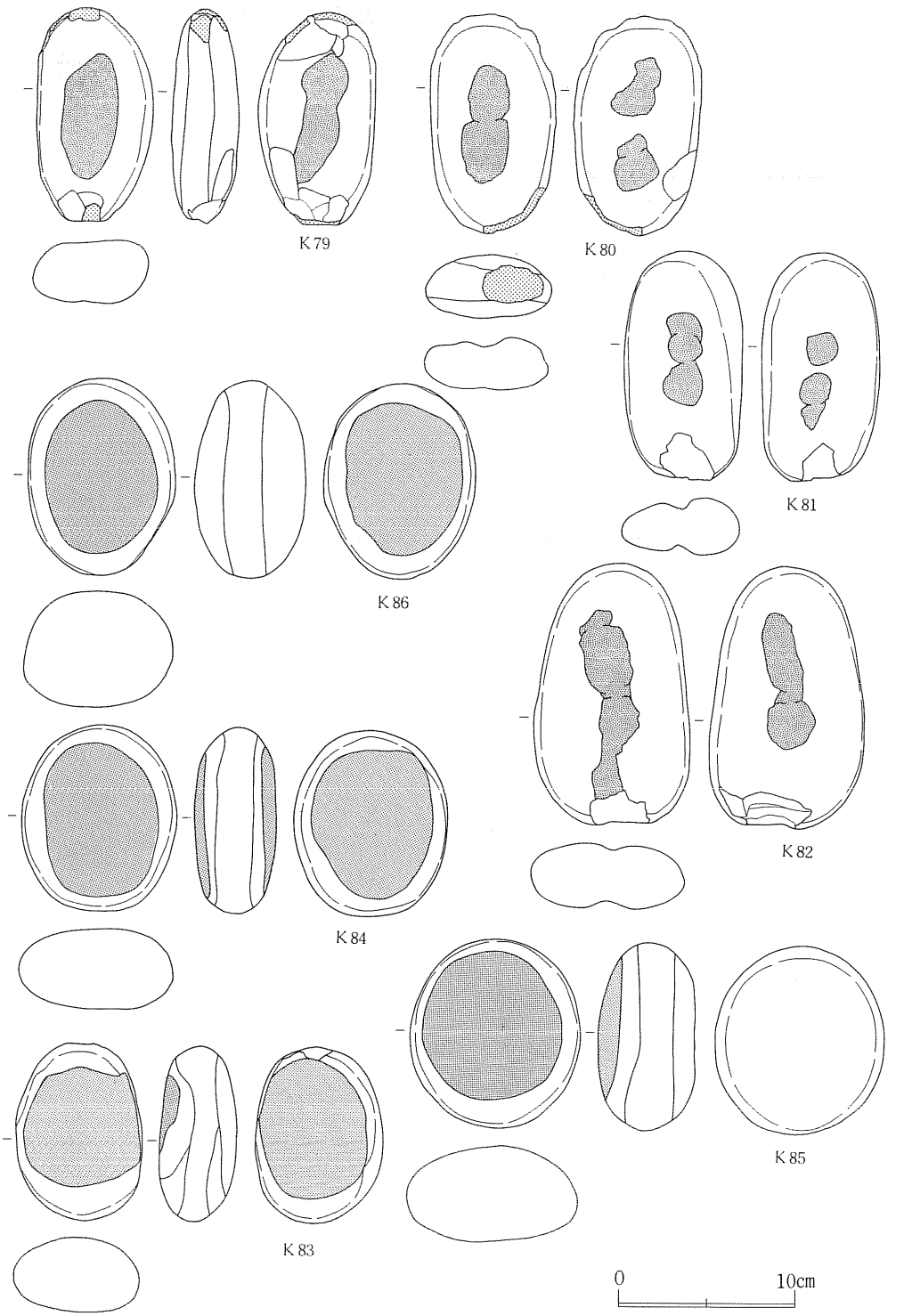
第89図　敲磨器(7)



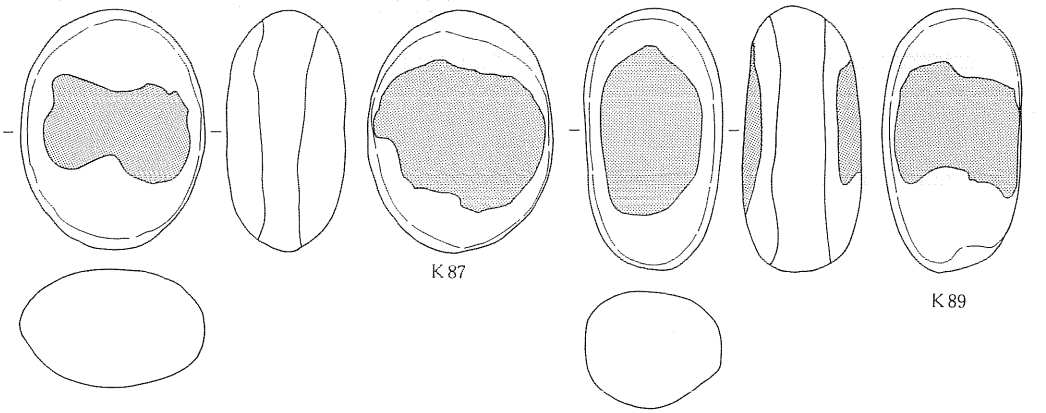
第90図　敲磨器(8)

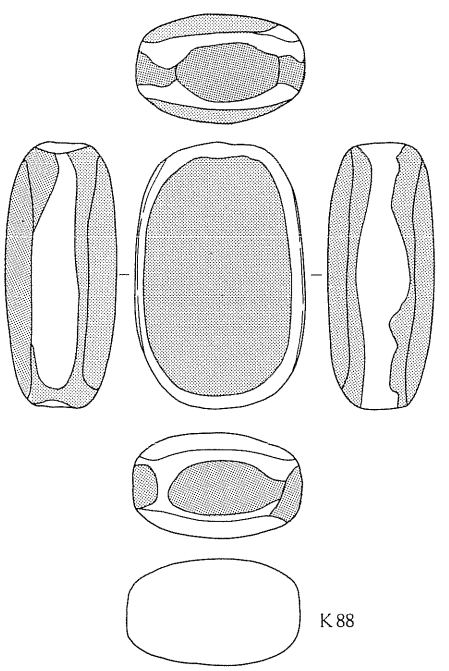


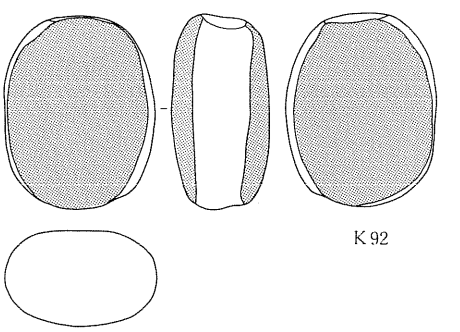
第91図　敲磨器(9)

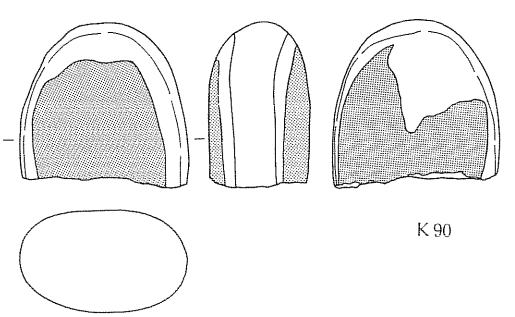


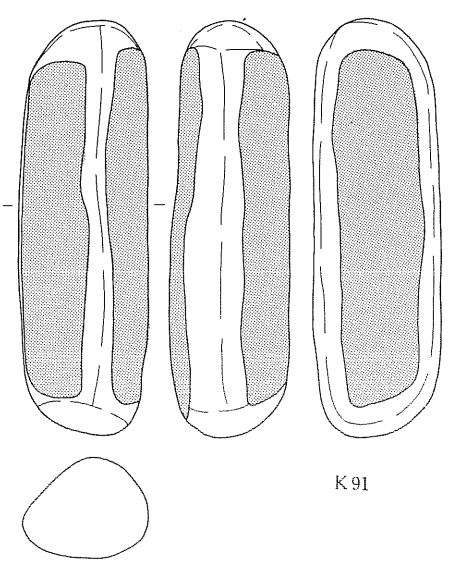
第92図　　敲磨器(10)

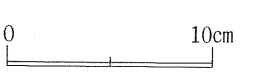




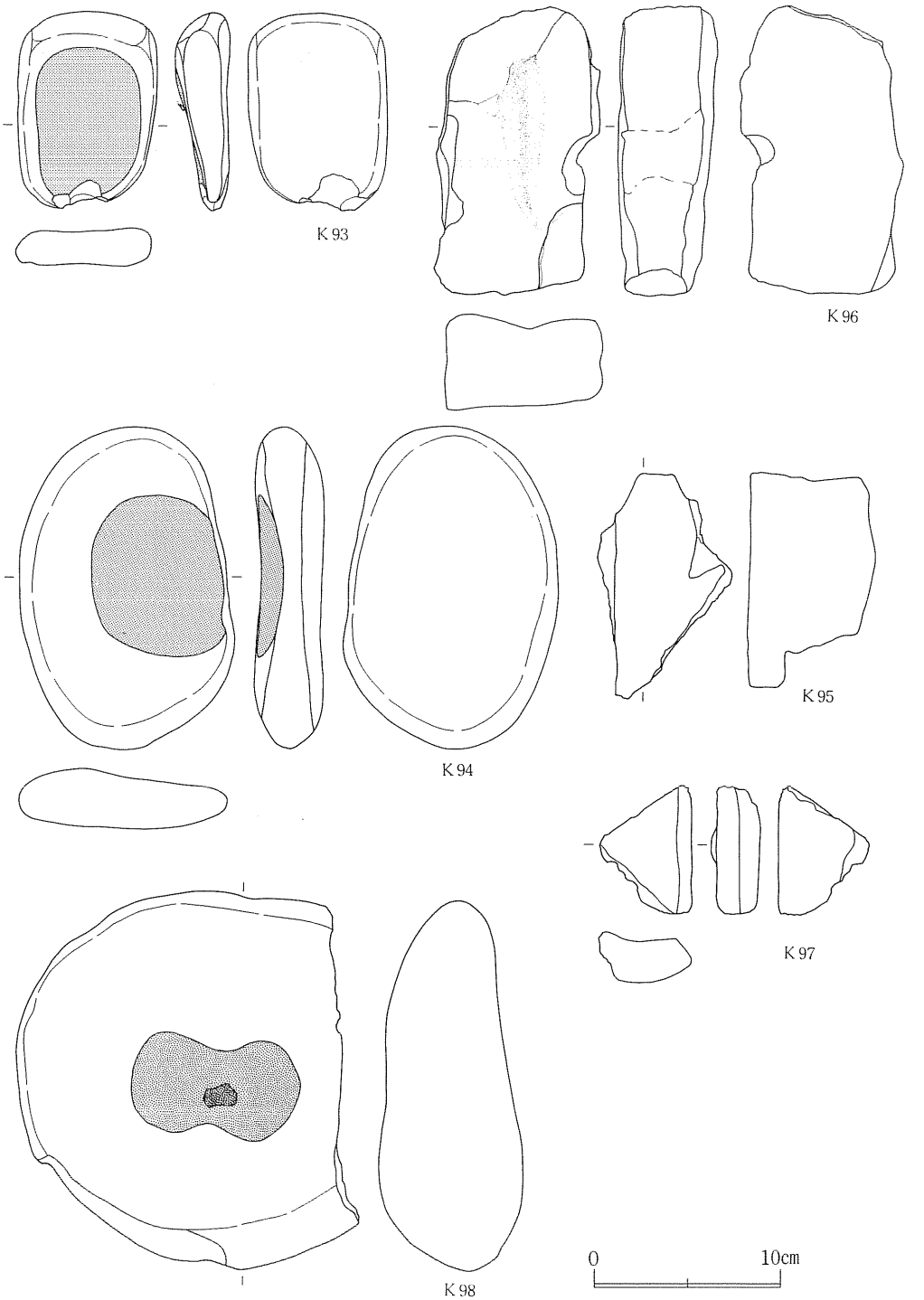








第93図　敲磨器(11)



第94図　　敲磨器(12)

第３表　遺構外出土石器一覧表

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
石鏃											
Z 1	61	58	KP 55	Ⅱ	1.7	1.3	0.4	0.32	頁岩	Ⅰ	
Z 2	61	58	LS 42	Ⅱ	(2.0)	1.5	0.3	(0.47)	頁岩	Ⅰ	
Z 3	61	58	LP 49	Ⅲ	(1.7)	1.5	0.3	(0.46)	黒曜石	Ⅰ	
Z 4	61	58	MG 47	Ⅲ	2.4	1.5	0.3	0.65	頁岩	Ⅰ	
Z 5	61	58	MD 50	Ⅰ	3.0	1.6	0.3	0.83	メノウ	Ⅰ	
Z 6	61	58	註記なし		2.7	1.5	0.4	1.12	黒曜石	Ⅰ	
Z 7	61	58	MF 50	Ⅲ	2.6	1.6	0.4	0.80	メノウ	Ⅰ	
Z 8	61	58	MD 54	Ⅰ	3.2	1.9	0.6	2.45	頁岩	Ⅰ	
Z 9	61	58	MG 47	Ⅲ	(1.6)	1.6	0.3	(0.61)	メノウ	Ⅱ	
Z 10	61	58	LQ 40	Ⅱ	(2.2)	2.1	0.5	(2.02)	頁岩	Ⅱ	
Z 11	61	58	LS 40	Ⅲ	(1.9)	1.8	0.4	(0.98)	頁岩	Ⅰ	
Z 12	61	58	LN 57	Ⅲ	3.1	1.8	0.6	2.58	頁岩	Ⅰ	
Z 13	61	58	KN 57	Ⅲ	3.5	1.8	0.7	3.10	頁岩	Ⅲ	
Z 14	61	58	MC 53	Ⅲ	5.5	1.5	0.9	5.37	頁岩	Ⅲ	
Z 15	61	58	LI 51	Ⅱ	(1.8)	1.9	0.4	0.87	頁岩	Ⅳ	
Z 16	61	58	MH 40	Ⅲ	2.6	1.8	0.4	0.74	頁岩	Ⅳ	
Z 17	61	58	MB 46	Ⅲ	3.1	1.1	0.5	1.25	黒曜石	Ⅳ	
Z 18	61	58	LS 42	Ⅱ	4.1	1.2	0.6	1.45	頁岩	Ⅳ	
Z 19	61	58	NI 46	Ⅲ	(1.9)	2.1	0.4	(0.05)	頁岩	Ⅴ	
Z 20	61	58	LF 37	Ⅲ	(2.6)	1.6	0.5	(1.59)	頁岩	Ⅴ	
Z 21	61	58	LP 53	Ⅲ	(2.1)	2.0	0.4	(1.22)	頁岩	Ⅴ	
石槍											
Y 1	62	59	MI 48	Ⅲ	(4.3)	3.0	1.3	(6.59)	頁岩		
Y 2	62	59	KR 52	Ⅲ	(6.1)	3.7	1.1	(23.48)	頁岩		
Y 3	62	59	LT 46	Ⅲ	(8.0)	5.3	2.9	(98.66)	頁岩		

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
Y 4	62	59	MC 61	Ⅲ	10.2	2.3	1.4	26.78	頁岩		
Y 5	62	59	MA 55	Ⅱ	(9.4)	4.3	1.1	(65.60)	頁岩		
Y 6	62	59	MK 61	Ⅲ	(5.2)	3.5	2.0	(41.54)	頁岩		平基
Y 7	63	59	LN 38	Ⅱ	(6.4)	3.6	1.7	(39.02)	頁岩		
Y 8	63	59	MC 40	Ⅲ	(8.4)	3.1	1.2	(35.08)	頁岩		
石錐											
D 1	63	59	LS 57	Ⅱ	2.5	1.7	0.6	2.03	頁岩		
D 2	63	59	ME 50	Ⅱ	3.6	1.9	1.0	5.81	頁岩		
D 3	63	59	LR 41	Ⅲ	2.1	2.4	0.8	3.14	頁岩		
D 4	63	59	LT 59	Ⅱ	3.9	2.4	0.7	3.32	頁岩		
D 5	63	59	ML 49	Ⅲ	4.1	2.5	1.0	8.30	頁岩		
D 6	63	59	LQ 55	Ⅲ	4.9	5.4	2.4	39.30	頁岩		
D 7	64	59	LO 55	Ⅲ	6.2	5.3	2.1	42.07	頁岩		
D 8	64	59	B区Ⅲ郭	Ⅰ	7.8	5.4	2.0	52.17	頁岩		
石匙											
P 1	64		LQ 60	Ⅱ	3.2	1.7	0.4	2.05	メノウ	Ⅰ	横長剝片
P 2	64		KQ 53	Ⅲ	(3.2)	2.2	0.7	(5.19)	頁岩	Ⅱ	
P 3	64		B区空堀南	土塁中	(3.3)	2.6	0.9	(6.80)	頁岩	Ⅲ	
P 4	64		ME 46	Ⅰ	(5.4)	2.0	0.9	(9.59)	頁岩	Ⅲ	
P 5	64		LR 48	Ⅲ	6.2	2.4	0.6	6.83	頁岩	Ⅳ	
P 6	64		LT 44	Ⅱ	(6.3)	2.5	1.0	(15.92)	頁岩	Ⅲ	
P 7	64		LR 53	Ⅲ	6.2	3.8	0.9	16.77	頁岩	Ⅲ	
P 8	65		LP 49	Ⅰ	6.6	3.3	1.5	19.76	頁岩	ⅤA	
P 9	65		MB 54	Ⅲ	6.6	4.1	1.3	20.00	頁岩	Ⅵ	
P 10	65	60	KS 50	Ⅲ	(5.7)	4.7	1.3	(21.92)	頁岩	Ⅲ	
P 11	65	60	KJ 55	Ⅲ	(7.0)	3.6	1.3	(26.75)	頁岩	ⅤA	
P 12	65	60	MJ 46	Ⅲ	5.3	3.4	0.9	9.95	頁岩	ⅤA	
P 13	65	60	LS 43	Ⅱ	5.9	2.2	0.8	5.55	頁岩	ⅤA	

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
P 14	65	60	MF 51	Ⅱ	5.2	2.8	0.7	6.01	頁岩	ⅤA	
P 15	65	60	MH 50	Ⅱ	(5.5)	3.4	1.0	(12.43)	頁岩	ⅤA	横長剝片
P 16	66	60	MK 48	Ⅲ	8.3	4.0	1.2	31.18	頁岩	ⅤA	
P 17	66	60	LR 42	Ⅲ	8.7	2.0	0.9	12.08	頁岩	Ⅱ	
P 18	66	60	MI 41	Ⅲ	9.8	3.3	1.2	21.71	頁岩	ⅤB	
P 19	66	60	LF 46	Ⅱ	(3.4)	3.5	0.8	(4.75)	頁岩	ⅤA	
P 20	66	60	MJ 51	Ⅲ	4.0	4.3	0.8	9.79	頁岩	Ⅵ	
P 21	66	60	ME 44	Ⅱ	(3.7)	3.9	1.8	(24.28)	頁岩	Ⅵ	
P 22	66	60	MA 49	Ⅰ	5.5	5.4	1.2	34.08	頁岩	Ⅵ	
トランシュ様石器											
T 1	67	61	B区Ⅲ郭	Ⅰ	5.8	4.0	1.4	22.54	頁岩		刃部角52°
T 2	67	61	LH 45	Ⅱ	6.2	3.9	1.2	27.17	頁岩		刃部角43°
T 3	67	61	KR 56	Ⅲ	(2.4)	3.0	0.9	(6.95)	頁岩		刃部角46°
T 4	67	61	KM 56	Ⅲ	(3.3)	3.5	1.6	(16.23)	頁岩		刃部角43°
T 5	67	61	B区Ⅲ郭	Ⅰ	6.1	3.5	1.5	25.91	頁岩		刃部角59°
箆状石器											
H 1	67		LT 52	Ⅱ	3.8	2.1	0.6	7.12	メノウ	ⅠC	
H 2	67		KT 58	一括	(2.8)	3.4	1.2	(8.79)	頁岩	ⅠA	
H 3	67		MH 51	Ⅱ	(2.8)	4.0	1.1	(10.25)	玉髓	ⅠC	
H 4	67		LT 50	Ⅲ	(3.1)	4.8	1.8	(30.34)	頁岩	ⅠB	
H 5	68	61	LG 37	Ⅱ	(4.2)	3.4	1.3	(19.68)	頁岩	ⅠB	
H 6	68	61	MI 41	Ⅲ	(4.4)	3.1	1.2	(18.70)	頁岩	ⅠB	
H 7	68	61	MA 41	Ⅲ	4.6	2.8	0.9	11.76	頁岩	ⅠA	
H 8	68	61	LT 58	Ⅱ	5.6	2.7	1.1	11.64	頁岩	Ⅱ	
H 9	68	61	KO 57	Ⅲ	5.4	2.7	1.0	13.88	頁岩	ⅠB	
H 10	68	61	MH 45	Ⅱ	6.0	3.1	1.2	24.59	頁岩	ⅠB	
H 11	68	61	KR 56	Ⅲ	(4.8)	4.4	1.0	(20.84)	頁岩	ⅠA	
H 12	68	61	MH 45	Ⅰ	(5.1)	3.5	1.3	(26.86)	頁岩	ⅠB	

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
H 13	69	62	LT 57	Ⅱ	(6.1)	3.9	1.3	(32.70)	頁岩	IB	
H 14	69	62	MB 51	Ⅰ	5.7	4.4	1.4	32.59	頁岩	IA	
H 15	69	62	MJ 47	Ⅱ	6.3	3.3	1.6	29.36	頁岩	IB	
H 16	69	62	MF 43	Ⅱ	6.3	3.4	1.6	32.40	頁岩	IA	
H 17	69	62	B区Ⅲ郭	Ⅰ	6.7	3.7	1.5	34.64	頁岩	IA	
H 18	69	62	MD 42	Ⅲ	6.9	4.0	1.5	36.80	頁岩	IB	
H 19	69	62	MJ 47	Ⅱ	6.8	3.9	2.2	44.28	頁岩	IE	
H 20	69	62	MF 45	Ⅲ	6.8	3.7	1.3	39.21	頁岩	IB	
H 21	70	62	ME 51	Ⅰ	7.3	2.9	1.0	24.70	頁岩	IE	
H 22	70	62	MC 42	Ⅰ	7.4	2.8	1.7	29.77	頁岩	IB	
H 23	70	62	MJ 43	Ⅱ	7.7	3.5	1.4	35.61	頁岩	IB	
H 24	70	62	LB 55	Ⅲ	8.1	4.2	1.7	57.56	頁岩	IB	
H 25	70	62	KS 52	Ⅱ	8.4	4.8	1.8	69.84	頁岩	IB	
H 26	70	62	LP 56	Ⅱ	9.8	3.2	2.0	54.45	頁岩	ID	
H 27	71	62	MB 53	Ⅲ	7.5	3.2	1.2	25.13	頁岩	IA	
H 28	71	62	B区Ⅲ郭	Ⅰ	8.6	4.4	2.2	78.45	頁岩	IB	
掻器											
C 1	71	63	MI 41	Ⅲ	(2.3)	2.5	0.8	(3.99)	頁岩	IB	
C 2	71	63	MH 50	Ⅱ	4.5	3.1	1.8	17.63	頁岩	IB	
C 3	71	63	MC 48	Ⅲ	4.9	2.5	0.7	6.93	頁岩	IB	
C 4	71	63	LO 52	Ⅱ	4.4	3.5	0.9	8.10	メノウ	IB	
C 5	71	63	MB 54	Ⅲ	5.9	4.4	1.5	22.94	頁岩	IA	
C 6											欠番
C 7	71	63	MI 47	Ⅲ	7.4	4.8	2.9	43.40	頁岩	IB	
C 8	72	63	MI 47	Ⅲ	8.1	4.6	2.5	61.14	頁岩	IB	
C 9	72	63	LO 50	一括	7.3	5.2	1.8	66.27	頁岩	IB	
C 10	72	63	LO 59	Ⅲ	7.0	5.8	1.9	56.49	頁岩	IB	
C 11	72	63	MB 54	Ⅲ	9.2	7.0	2.0	81.03	頁岩	IA	

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
C 12	72	63	LQ 41	Ⅱ	2.4	2.6	0.8	3.18	頁岩	ⅡA	
C 13	72	63	MJ 43	Ⅲ	3.1	2.8	1.1	6.48	頁岩	ⅡA	
C 14	72	63	LT 58	Ⅱ	2.9	3.3	1.3	11.12	頁岩	ⅡA	
C 15	73	64	MI 50	Ⅲ	2.3	2.4	0.8	2.90	頁岩	ⅡB	
C 16	73	64	LO 50	Ⅱ	4.1	3.1	1.7	17.30	頁岩	ⅡB	
C 17	73	64	LS 53	Ⅱ	4.2	4.3	1.2	14.82	頁岩	ⅡB	
C 18	73	64	MF 40	Ⅰ	5.4	3.7	1.7	32.01	頁岩	ⅡB	
C 19	73	64	B区空堀南	土塁中	4.4	3.4	1.4	20.17	頁岩	ⅡA	
C 20	73	64	LQ 50	Ⅱ	4.0	4.9	1.2	14.12	頁岩	ⅡB	
C 21	73	64	MC 53	Ⅱ	4.5	4.6	1.2	21.04	頁岩	ⅡB	
C 22	73	64	MJ 48	Ⅲ	4.5	5.2	1.1	15.10	頁岩	ⅡB	
C 23	73	64	LQ 48	Ⅱ	4.6	5.5	2.7	43.78	頁岩	ⅡB	
C 24	74	64	LN 41	Ⅱ	5.3	3.4	0.6	6.28	頁岩	ⅡB	
C 25	74	64	MB 43	Ⅱ	7.0	4.4	1.5	19.52	頁岩	ⅡA	
C 26	74	64	KS 52	Ⅱ	5.7	2.6	1.8	25.17	頁岩	ⅡA	
C 27	74	64	MK 49	Ⅲ	5.6	2.2	1.6	16.70	頁岩	ⅡA	
C 28	74	64	KS 52	Ⅲ	7.0	3.1	2.1	32.28	頁岩	ⅡA	
C 29	74	64	B区Ⅲ郭	Ⅰ	6.0	4.6	2.0	43.16	頁岩	ⅡA	
C 30	74	64	A区表土	Ⅰ表採	6.2	4.5	2.2	37.16	頁岩	ⅡA	
C 31	74	64	MB 42	Ⅲ	5.7	4.4	1.7	39.18	頁岩	ⅡB	
C 32	74	64	LT 61	Ⅱ	6.5	5.6	2.0	54.53	頁岩	ⅡB	
C 33	74	64	LL 39	Ⅱ	11.7	4.5	1.6	53.36	頁岩	ⅠA	
削器											
S 1	75	65	MB 47	Ⅲ	(3.1)	3.3	1.6	(16.43)	頁岩		刃部角73°
S 2	75	65	LS 48	Ⅱ	(3.7)	3.0	0.9	(9.21)	頁岩		刃部角55°
S 3	75	65	MI 45	Ⅱ	(3.0)	2.9	1.6	(13.73)	頁岩		刃部角51°

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
S 4	75	65	B区Ⅲ郭	Ⅰ	(4.4)	3.3	1.4	(19.85)	頁岩		刃部角66°
S 5	75	65	MA 56	Ⅱ	(3.3)	4.5	1.0	(17.44)	頁岩		刃部角65°
S 6	75	65	MG 51	Ⅱ	(5.1)	2.0	0.7	(4.99)	頁岩		刃部角57°
S 7	75	65	LR 48	Ⅲ	(6.4)	3.8	2.0	(37.86)	メノウ		刃部角61°
S 8	75	65	LO 50	Ⅱ	7.0	3.0	1.8	27.40	頁岩		刃部角67°
S 9	75	65	KO 55	Ⅲ	(6.7)	2.4	1.6	(17.75)	頁岩		刃部角61°
S 10	76	65	LK 45	Ⅲ	(5.9)	3.8	1.4	(23.39)	頁岩		刃部角48°
S 11	76	65	LQ 50	Ⅲ	5.6	3.1	1.2	18.25	頁岩		刃部角62°
鋸歯様石器											
N 1	76	65	MB 45	Ⅱ	(3.0)	2.7	1.0	(8.54)	頁岩		刃部角53°
N 2	76	65	MD 44	Ⅲ	5.8	3.5	1.0	10.47	頁岩		
磨製石斧											
F 1	76	65	ME 44	Ⅱ	(2.2)	1.4	0.4	(1.61)	凝灰岩		
F 2	76	65	MK 47	Ⅲ	(2.8)	3.5	1.2	(15.40)	凝灰岩		
F 3	76	65	LT 52	Ⅲ	(4.5)	2.7	1.3	(27.46)	凝灰岩		
F 4	76	65	LR 46	Ⅱ	5.9	2.5	1.0	23.38	凝灰岩		
F 5	76	65	B区Ⅲ郭	Ⅰ	(4.7)	4.3	2.3	(59.50)	凝灰岩		
F 6	77	65	LO 46	Ⅲ	4.9	4.1	1.8	58.68	凝灰岩		
F 7	77	65	MC 47	Ⅱ	(5.6)	3.7	1.4	(41.78)	凝灰岩		
F 8	77	65	LD 41	Ⅱ	6.9	2.4	0.9	25.32	玢岩		
F 9	77	65	LN 51	Ⅲ	7.1	3.8	1.6	78.39	玢岩		
F 10	77	66	MJ 45 旧道		7.2	4.1	2.0	110.72	凝灰岩		
F 11	77	66	LP 58	土塁中	(6.4)	4.8	3.0	(146.16)	凝灰岩		
F 12	77	66	MK 51	Ⅲ	(6.6)	6.8	2.7	(170.19)	凝灰岩		
F 13	78	66	B区Ⅲ郭	Ⅰ	(8.7)	4.2	2.0	(75.99)	安山岩		
F 14	78	66	MB 61	Ⅱ	8.9	4.1	1.8	106.05	凝灰岩		
F 15	78	66	LQ 55	Ⅰ	9.6	4.0	2.6	163.19	花崗岩		
F 16	78	66	LO 42	Ⅱ	(9.0)	5.2	3.5	(245.19)	花崗岩		

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
F 17	78	66	LP 55	Ⅲ	12.0	4.6	2.5	212.54	花崗岩		
打製石斧											
F 18	78	66	LR 56	Ⅱ	14.7	6.1	2.7	307.02	安山岩		
石錘											
M 1	79	66	MA 57	Ⅱ	4.8	4.5	1.6	32	凝灰岩	Ⅰ	重量分類①
M 2	79	66	MH 44	Ⅲ	4.4	4.4	1.4	30	安山岩	Ⅰ	重量分類①
M 3	79	66	LO 61	Ⅲ	5.4	5.2	1.1	32	安山岩	Ⅰ	重量分類①
M 4	79	66	LP 60	Ⅲ	5.7	5.2	1.2	39	安山岩	Ⅰ	重量分類①
M 5	79	66	LR 57	Ⅲ	6.5	5.8	1.3	50	安山岩	Ⅰ	重量分類①
M 6	79	66	MB 54	Ⅱ	6.7	6.2	2.1	88	凝灰岩	Ⅰ	重量分類②
M 7	79	66	LP 49	Ⅰ	6.5	8.8	1.9	116	凝灰岩	Ⅱ	重量分類③
M 8	79	66	LT 41	Ⅱ	6.8	7.5	2.1	125	安山岩	Ⅱ	重量分類③
M 9	79	66	LR 45	Ⅲ	7.4	7.7	2.5	148	安山岩	Ⅰ	重量分類④
M 10	79	66	MG 46	Ⅲ	7.7	7.7	1.2	84	安山岩	Ⅰ	重量分類②
M 11	79	66	MC 40	Ⅲ	8.8	7.5	2.0	155	安山岩	Ⅰ	重量分類④
M 12	79	66	MI 41	Ⅲ	7.3	7.3	1.6	89	安山岩	Ⅰ	重量分類②
M 13	80		MG 46	Ⅲ	8.8	8.1	2.1	180	安山岩	Ⅰ	重量分類⑤
M 14	80		MH 40	Ⅲ	8.3	8.1	3.9	283	安山岩	Ⅰ	重量分類⑦
M 15	80		MC 41	Ⅲ	8.9	6.9	2.3	149	安山岩	Ⅰ	重量分類④
M 16	80		LO 44	Ⅲ	9.5	6.3	1.7	113	安山岩	Ⅰ	重量分類③
M 17	80		ME 40	Ⅲ	8.3	8.1	1.8	121	安山岩	Ⅰ	重量分類③
M 18	80		MH 41	Ⅲ	(8.8)	5.8	1.3	(62)	凝灰岩	Ⅰ	
M 19	79		ME 41	Ⅱ	9.4	6.8	2.1	127	安山岩	Ⅰ	重量分類③
M 20	79		MG 46	Ⅲ	8.7	6.4	1.8	126	安山岩	Ⅰ	重量分類③
M 21	79		MA 55	Ⅲ	9.9	6.6	1.8	126	安山岩	Ⅰ	重量分類③
M 22	80		MJ 48	Ⅲ	10.3	7.3	1.9	157	安山岩	Ⅰ	重量分類④
M 23	81	67	MK 42	Ⅲ	(8.6)	7.7	2.2	(101)	頁岩	Ⅰ	
M 24	81	67	MI 43	Ⅲ	(6.0)	7.4	2.0	(97)	安山岩	Ⅰ	

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
M 25	81	67	LF 50	Ⅲ	(6.8)	5.7	4.2	(214)	花崗岩	Ⅰ	
M 26	81	67	MJ 45 旧道		10.4	6.3	2.6	240		Ⅰ	重量分類⑥
M 27	81	67	B区 空堀南	土塁中	9.7	6.7	3.6	237	安山岩	Ⅰ	重量分類⑥
M 28	81	67	B区 空堀南	土塁中	9.2	8.1	1.9	149	安山岩	Ⅰ	重量分類④
M 29	81	67	MI 41	Ⅲ	10.8	7.8	2.0	179	安山岩	Ⅰ	重量分類⑤
M 30	81	67	LP 46	Ⅲ	10.1	8.2	2.1	198	安山岩	Ⅰ	重量分類⑤
M 31	81	67	MG 46	Ⅲ	10.4	8.4	4.3	315	安山岩	Ⅰ	重量分類⑦
M 32	82	67	MJ 45 旧道		10.2	8.0	4.3	349	安山岩	Ⅰ	重量分類⑦
M 33	82	67	KT 53	Ⅲ	10.4	8.0	3.3	298	安山岩	Ⅰ	重量分類⑦
M 34	82	67	MK 45	Ⅲ	10.9	9.0	3.2	226	安山岩	Ⅰ	重量分類⑥
M 35	82	67	MD 40	Ⅲ	11.7	8.4	2.9	290	安山岩	Ⅰ	重量分類⑦
M 36	82	67	ML 49	Ⅲ	(9.9)	10.1	5.0	(407)	安山岩	Ⅰ	重量分類⑧
M 37	82	68	MH 41	Ⅲ	10.5	9.2	3.9	433	花崗岩	Ⅰ	重量分類⑧
M 38	82	68	南区Ⅲ郭	Ⅰ	11.8	11.0	3.5	507	安山岩	Ⅰ	重量分類⑧
M 39	82	68	LI 39	Ⅲ	11.2	10.4	4.4	479	安山岩	Ⅰ	重量分類⑧
M 40	82	68	KP 53	Ⅲ	9.5	10.0	2.8	271	安山岩	Ⅰ	
M 41	82	68	LP 37	Ⅲ	11.6	10.8	3.3	442	安山岩	Ⅰ	重量分類⑧
M 42	83	68	ML 46	Ⅲ	12.5	8.8	1.8	220	砂岩	Ⅰ	重量分類⑥
M 43	83	68	LO 50	一括	9.3	15.3	3.6	519	安山岩	Ⅱ	重量分類⑧
敲磨器											
K 1	83	68	MJ 48	Ⅲ	9.1	6.8	3.7	291.94	安山岩	ⅠA－a	
K 2	83	68	ML 46	Ⅲ	8.3	7.6	4.9	407.46	安山岩	ⅠA－a	
K 3	83	68	MB 53	Ⅱ	9.7	7.4	4.0	345.95	安山岩	ⅠA－a	
K 4	83	68	MF 50	Ⅲ	9.8	6.9	4.7	334.44	安山岩	ⅠA－a	
K 5	83	68	LO 52	Ⅱ	10.1	6.4	3.5	296.68	安山岩	ⅠA－a	
K 6	83	68	LN 44	Ⅲ	9.4	6.9	5.2	375.04	安山岩	ⅠA－a	
K 7	83	68	ME 46	Ⅲ	11.3	6.7	5.0	378.27	凝灰岩	ⅠA－a	
K 8	83	69	LS 55	Ⅱ	10.3	7.1	5.5	438.86	安山岩	ⅠA－a	

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
K 9	84	69	LP 45	Ⅲ	9.4	7.8	5.4	409.54	安山岩	ⅠA－a	
K 10	84	69	ML 46	Ⅲ	10.0	8.4	4.0	383.17	安山岩	ⅠA－a	
K 11	84	69	ML 46	Ⅲ	9.3	7.7	3.5	248.98	安山岩	ⅠA－a	
K 12	84	69	LQ 40	Ⅲ	9.8	8.4	5.8	568.20	安山岩	ⅠA－a	
K 13	84	69	LP 42	Ⅱ	10.4	8.3	5.4	574.79	砂岩	ⅠA－a	
K 14	84	69	LM 54	Ⅲ	12.1	9.3	5.7	973.94	花崗岩	ⅠA－a	
K 15	84	69	LQ 55	Ⅱ	11.7	10.2	6.0	841.78	安山岩	ⅠA－a	
K 16	84	69	LO 46	Ⅱ	11.0	9.7	4.4	487.84	安山岩	ⅠA－a	
K 17	85	69	ME 49	Ⅱ	8.6	7.7	5.3	413.78	安山岩	ⅠA－a	
K 18	85	69	LQ 50	Ⅲ	9.6	8.5	5.8	569.18	安山岩	ⅠA－a	
K 19	85	69	MI 44	Ⅲ	8.7	8.3	4.5	374.71	安山岩	ⅠA－a	
K 20	85	69	MA 50	Ⅱ	14.0	7.2	4.3	513.30	安山岩	ⅠA－a	
K 21	85	69	ML 45	Ⅲ	13.1	7.5	4.7	540.78	安山岩	ⅠA－a	
K 22	85	69	LS 47	Ⅲ	13.5	7.4	4.4	608.91	安山岩	ⅠA－a	
K 23	85	69	B区Ⅲ郭	Ⅰ	13.6	8.9	4.0	572.69	安山岩	ⅠA－a	
K 24	85	69	LM 44	Ⅱ	(12.0)	7.5	6.0	(656.96)	安山岩	ⅠA－a	
K 25	85	69	MB 53	Ⅱ	(11.6)	7.4	5.5	(635.41)	安山岩	ⅠA－a	
K 26	86	70	LM 43	Ⅱ	(12.0)	7.0	5.1	(425.55)	安山岩	ⅠA－a	
K 27	86	70	LS 47	Ⅱ	12.6	6.7	5.5	545.36	安山岩	ⅠA－a	
K 28	86	70	B区Ⅲ郭	Ⅰ	(11.3)	6.9	4.5	(468.20)	花崗岩	ⅠA－a	
K 29	86	70	LQ 50	Ⅱ	14.9	10.7	6.4	1,229.06	安山岩	ⅠA－a	
K 30	86	70	LO 56	Ⅱ	7.1	6.1	4.5	231.89	安山岩	ⅠA－b	
K 31	86	70	LO 52	Ⅲ	10.7	7.0	6.3	489.43	安山岩	ⅠA－b	
K 32	86	70	LG 43	Ⅱ	10.9	9.6	7.2	906.08	安山岩	ⅠA－b	
K 33	86	70	LO 53	Ⅲ	12.4	9.2	7.8	997.32	安山岩	ⅠA－b	
K 34	87	70	LR 61	Ⅲ	11.4	9.4	7.6	837.25	安山岩	ⅠA－b	
K 35	87	70	LO 56	Ⅱ	10.1	10.2	8.2	885.67	安山岩	ⅠA－b	
K 36	87	70	B区Ⅲ郭	Ⅰ	11.9	4.1	3.5	260.27	安山岩	ⅠB－a	

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
K 37	87	70	MF 52	Ⅲ	14.1	5.0	4.0	327.20	安山岩	ⅠB—a	
K 38	87	70	MB 60	Ⅱ	15.4	5.2	3.0	335.37	安山岩	ⅠB—a	
K 39	87	70	LN 56	Ⅲ	15.4	5.4	3.5	365.80	安山岩	ⅠB—a	
K 40	87	70	KP 55	Ⅲ	17.2	5.9	4.4	417.58	安山岩	ⅠB—a	
K 41	87	70	LS 56	Ⅱ	15.5	5.6	3.5	336.24	凝灰岩	ⅠB—a	
K 42	88	71	MF 45	Ⅱ	16.8	6.2	2.6	241.19	安山岩	ⅠB—a	
K 43	88	71	MB 55	Ⅱ	16.0	7.3	4.4	720.63	安山岩	ⅠB—a	
K 44	88	71	LT 59	Ⅱ	15.4	8.2	4.4	676.35	安山岩	ⅠB—a	
K 45	88	71	MG 41	Ⅲ	(11.2)	5.6	3.6	(234.27)	安山岩	ⅠB—a	
K 46	88	71	KP 55	Ⅲ	(7.9)	5.7	4.5	(268.40)	安山岩	ⅠB—b	
K 47	88	71	LO 45	Ⅱ	(10.5)	5.2	4.3	(276.49)	安山岩	ⅠB—b	
K 48	88	71	ME 44	Ⅱ	13.0	4.2	3.0	233.45	安山岩	ⅠB—b	
K 49	88	71	LO 50	一括	7.7	8.8	3.6	254.63	安山岩	ⅠC	
K 50	88	71	MA 51	Ⅲ	10.4	5.9	2.7	186.04	砂岩	ⅠC	
K 51	88	71	MA 48	Ⅲ	10.8	7.6	4.8	608.58	砂岩	ⅠC	
K 52	88	71	LQ 56	Ⅰ	11.2	6.4	3.1	302.89	安山岩	ⅠD	
K 53	89	71	MG 45	Ⅱ	(8.1)	6.9	2.9	(168.05)	安山岩	ⅠD	
K 54	89	71	LM 50	Ⅱ	(6.9)	6.5	3.1	(161.31)	安山岩	ⅠD	
K 55	89	71	LP 56	Ⅲ	(7.3)	5.7	3.9	(220.91)	安山岩	ⅠD	
K 56	89	71	MH 53	Ⅲ	(14.0)	8.1	4.1	(477.72)	安山岩	ⅠD	
K 57	89	71	MH 52	Ⅱ	13.0	7.6	3.3	241.11	砂岩	ⅠD	
K 58	89	71	LN 56		10.0	7.3	4.4	451.38	安山岩	ⅡA	
K 59	89	71	MJ 45 旧道		9.2	8.0	4.7	440.98	安山岩	ⅡA	
K 60	89	71	LO 56	一括	9.5	8.4	4.9	422.05	凝灰岩	ⅡA	
K 61	89	72	LL 56	Ⅱ	10.7	7.0	5.2	517.91	安山岩	ⅡA	
K 62	90	72	MB 61	Ⅱ	10.7	8.0	4.1	462.73	安山岩	ⅡA	
K 63	90	72	MB 54	Ⅲ	11.0	7.4	4.7	440.27	安山岩	ⅡA	
K 64	90	72	LS 50	Ⅱ	11.1	9.0	4.6	542.70	安山岩	ⅡA	

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
K 65	90	72	MB 44	Ⅱ	12.3	6.9	5.3	600.32	安山岩	ⅡA	
K 66	90	72	LH 38	Ⅱ	11.6	9.1	4.8	568.35	安山岩	ⅡA	
K 67	90	72	LR 42	Ⅰ	(9.2)	8.2	3.8	(291.31)	凝灰岩	ⅡA	
K 68	90	72	MA 53	Ⅲ	11.5	10.2	3.0	421.07	安山岩	ⅡA	
K 69	90	72	KN 58	Ⅲ	13.1	7.8	5.4	650.59	安山岩	ⅡB	
K 70	91	72	LR 53	Ⅱ	13.7	8.5	5.3	762.59	安山岩	Ⅲ	
K 71	91	72	ME 53	Ⅰ	13.6	8.4	7.8	971.26	凝灰岩	ⅡA	
K 72	91	72	B区Ⅲ郭	Ⅰ	18.5	8.0	4.6	356.98	安山岩	Ⅲ	
K 73	91	72	KO 56	Ⅲ	9.8	8.5	3.5	392.44	安山岩	Ⅲ	
K 74	91	72	MD 44	Ⅱ	(6.1)	7.8	4.5	(204.38)	安山岩	Ⅲ	
K 75	91	72	LH 53	Ⅱ	9.8	9.0	4.1	480.87	安山岩	ⅣA	
K 76	91	72	LO 56	Ⅱ	6.6	5.5	2.5	111.36	安山岩	ⅣB－b	
K 77	91	72	LT 53	Ⅰ	8.6	7.1	4.8	370.18	安山岩	ⅣB－b	
K 78	91	72	ML 50	Ⅲ	10.8	5.7	3.6	257.37	安山岩	ⅣB－b	
K 79	92	72	LO 50	一括	12.2	6.6	3.9	468.61	安山岩	ⅣB－a	
K 80	92	72	MJ 45 旧道		12.5	7.1	3.3	386.44	安山岩	ⅣB－b	
K 81	92	72	LM 43	Ⅱ	13.0	6.8	3.3	380.47	安山岩	ⅣB－a	
K 82	92	72	LO 60	Ⅱ	15.0	8.9	3.8	645.27	安山岩	ⅣB－a	
K 83	92	72	LM 56	Ⅲ	10.3	7.2	4.4	465.38	安山岩	ⅤA	
K 84	92	72	MF 50	Ⅰ	10.8	8.7	4.7	579.88	凝灰岩	ⅤA	
K 85	92	72	MJ 45	Ⅲ	10.8	9.6	5.8	817.42	安山岩	ⅤA	
K 86	92	73	LQ 60	Ⅱ	11.4	8.6	6.3	835.26	安山岩	ⅤA	
K 87	93	73	LO 59	一括	11.9	9.0	5.9	907.72	花崗岩	ⅤA	
K 88	93	73	MD 53	Ⅱ	12.5	8.5	5.3	1,016.33	花崗岩	ⅤA	
K 89	93	73	LC 42	Ⅱ	13.0	6.8	5.8	725.03	安山岩	ⅤA	
K 90	93	73	LO 60	Ⅱ	(8.2)	8.3	5.3	(489.05)	安山岩	ⅤA	
K 91	93	73	LK 48	Ⅱ	20.5	6.3	5.5	1,027.60	凝灰岩	ⅤB	
K 92	93	73	MI 46	Ⅲ	9.8	7.4	4.8	443.64	安山岩	Ⅵ	

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
K 93	94	73	LN 47	Ⅱ	10.7	7.4	3.2	296.65	安山岩	Ⅵ	
K 94	94	73	LD 48	Ⅲ	17.6	11.5	3.8	1,067.86	安山岩	Ⅶ	
K 95	94	73	B区Ⅲ郭	Ⅰ	(12.5)	7.3	7.3	(569.72)	砂岩	Ⅶ	
K 96	94	73	LP 53	Ⅲ	16.0	9.1	5.0	608.60	砂岩	Ⅶ	
K 97	94	73	LO 59	一括	(7.0)	4.6	3.0	(66.69)	安山岩	Ⅶ	
K 98	94	73	LK 57	Ⅱ	18.2	20.6	8.4	3,680.00	安山岩	Ⅶ	

④　石製品　（第95図、図版74）

本遺跡においては、日常的な道具としての石器の出土量に比べて、非日常的な円盤状石製品（6点）、線刻礫（2点）等の石製品の出土量は少ないと言えよう。

円盤状石製品　（1～6）

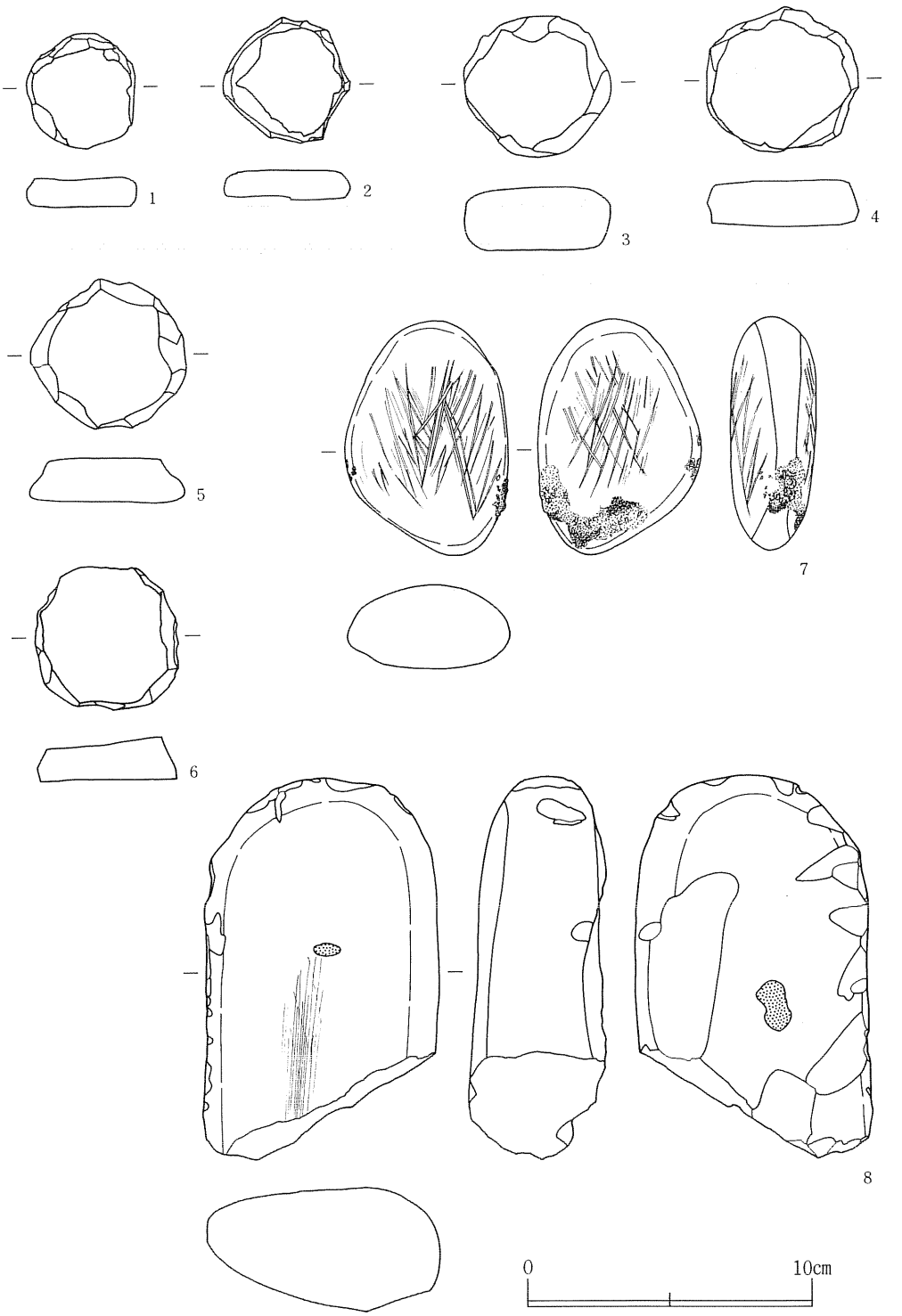
扁平な礫の縁辺を打ち欠いて円盤状に仕上げたものである。以下、諸特徴を表にまとめて記すことにする。

第4表　円盤状石製品一覧表

No.	出土地点・層位		長軸×短軸(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
1	LF50	Ⅱ	40×39	10	20.53	安山岩	
2	MA51	Ⅲ	42×41	10	20.33	凝灰岩	
3	LS49	Ⅰ	50×49	22	91.05	安山岩	
4	LF50	Ⅱ	53×50	15	72.32	安山岩	
5	LP47	Ⅲ	54×52	17	58.70	安山岩	
6	LR49	Ⅲ	53×51	13	54.28	安山岩	厚さ最大17mm、最小10mm

線刻礫　（7・8）

平坦面に線条痕を有すものであるが、線条痕は不定方向ながら長軸からの振れがそれ程大きくなるものではない。7はMM44・Ⅲ層より出土した安山岩製のものである。8はME41・Ⅱ層より出土したものであるが、縁辺には彫刻刀で抉り取った（ないしは削り取った）ような幅2～10mm程の「U」字状を刻みが施されている。この刻みは幅及び施される位置等規則性に乏しいものである。石質は凝灰岩である。



第95図　円盤状石器品・線刻礫

３　平安時代

（１）遺構の概観

平安時代の遺構は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの生活遺構が検出されず、生産遺構である製鉄炉・炭焼窯などを検出した。製鉄炉・炭焼窯の検出地区は、調査区北西側と南東側に区分される。北西側には製鉄炉１基・炭焼窯１基・土坑２基の４遺構が、南東側には炭焼窯３基が（重複を含む）が存在する。北西側に存在する４遺構は製鉄炉に関連する遺構と解釈されるが、85～90ｍ離れる南東側の炭焼窯との相互関連については不明である。

（２）製鉄炉とその出土遺物（第96図、図版75～81）

製鉄炉（ＳＳ01）は、ＭＡ41グリッドで検出した。表土除去の際、調査区北西部から鉄滓が非常に多く出土することが判明し、製鉄炉ないし製鉄関連の遺構が存在すると思われた。プラン確認作業中、鉄滓・炭化物・熱変硬化粘土塊などが集合する箇所があり、そのプランから半地下式竪形製鉄炉と判断した。炉の本体は、長さ92㎝、幅45㎝の「Ｕ」字形平面プランで７～13㎝掘られ、炉床は前庭部側に傾斜している。炉壁は、厚さ５～10㎝で粘土が貼られ上部がやや内傾し炉床に近づくに従い僅かづつ広がっている。炉の前庭部側には排滓施設として径108㎝、深さ26㎝の鍋底状断面をもつ円形土坑が付属している。炉本体と土坑中からは、羽口片・鉄滓半還元塊・炉内滓・炉流出滓・炉外流出滓・鉄塊含遺物・炭化材・炉壁崩壊粘土塊などが出土したが、炉内滓・炉流出滓・炉外流出滓・炉壁崩壊粘土塊が多量である。

炭化材の樹種はクリとサクラ類であった。また、炭化材を試料とする放射性炭素法による年代測定の結果は930±90（Ａ．Ｄ．1,020）年であった。

出土した羽口片は４点である。炉側端部片が２点（１・２）中間部片が２点（３・４）である。１の内面には種子痕が１カ所確認された。１～３の外面には滓が溶着している。４の外面は箆なで整形している。

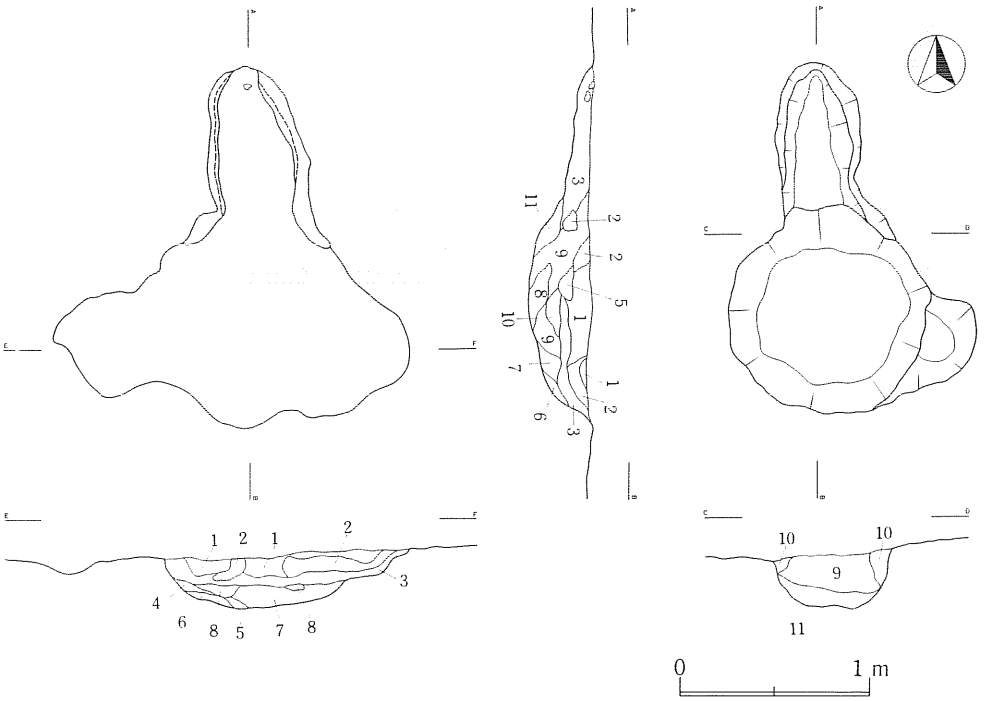
（３）炭焼窯・土坑

①　炭焼窯

炭焼窯は３カ所４基検出した。地山面から上部は、館構築の際削平・整地されたためか失われているのでその窯体構造は明らかではない。

ＳＷ04　（第97図、図版84・85）

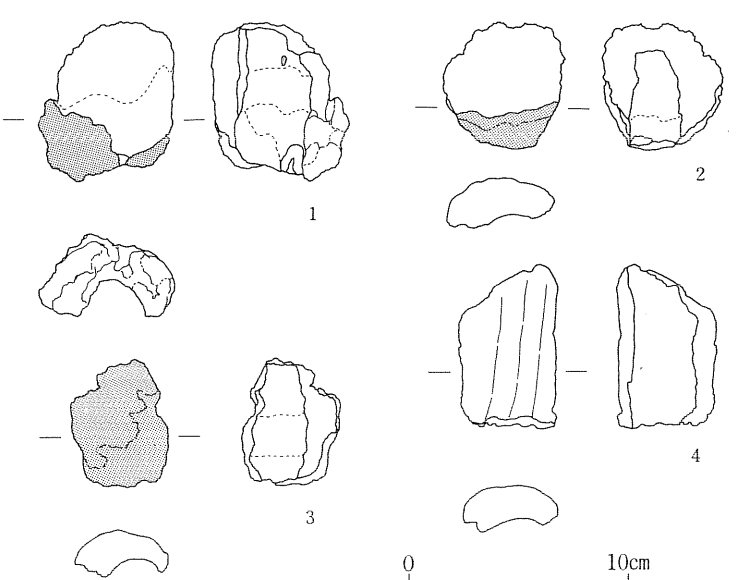
ＬＴ40グリッドの南西向き緩斜面で検出した。長軸190㎝、短軸180㎝の略円形あるいは胴張りの強い方形プランをもち、深さ26～45㎝の鍋底状の断面を呈する土坑である。底面と壁面に高熱による変色（赤色）・硬化がみられることと、埋土中に炭化材が多く出土したことから炭焼窯と判断した。埋土中と底面から多量の炭化材の他、滓の溶着した羽口片１点、鉄滓22点の他、縄文土器片１点、線刻礫１点、フレイク４点が出土した。羽口片は炉側端部の破片で、外



1	橙色砂礫	5YR6/6	鉄滓・炭化物・熱変硬化粘土塊を多く含有する
2	明黄褐色粘土	2.5Y7/6	炭化物を若干含有する
3	赤黒色土	2.5YR3/1	炭化物・鉄滓を多く含有する
4	黒褐色土	5YR3/1	鉄滓を多く含有する

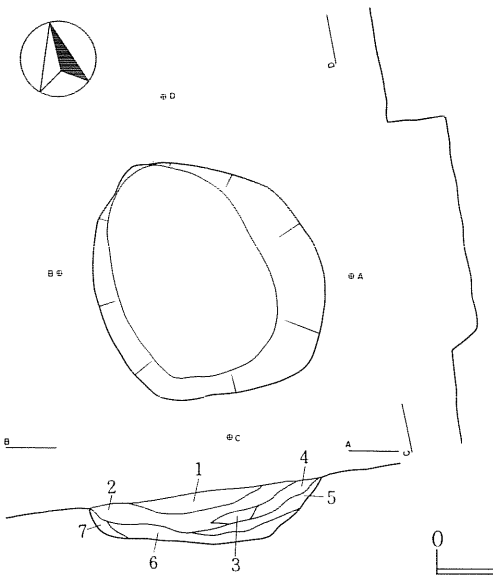
5	浅黄色粘土	2.5Y7/4	
6	黒褐色土	7.5YR3/1	鉄滓を若干含有する
7	黒褐色土	5YR2/2	鉄滓・炭化物を含有する（鉄滓が一番大きい）
8	明黄褐色粘土	2.5Y7/6	炭化物を若干含有する

9	暗褐色砂礫	5YR3/6	鉄滓・炭化物を多量に混入する
10	にぶい褐色粘土	7.5YR5/3	
11	橙色砂礫	5YR6/6	鉄滓・炭化物を若干混入する

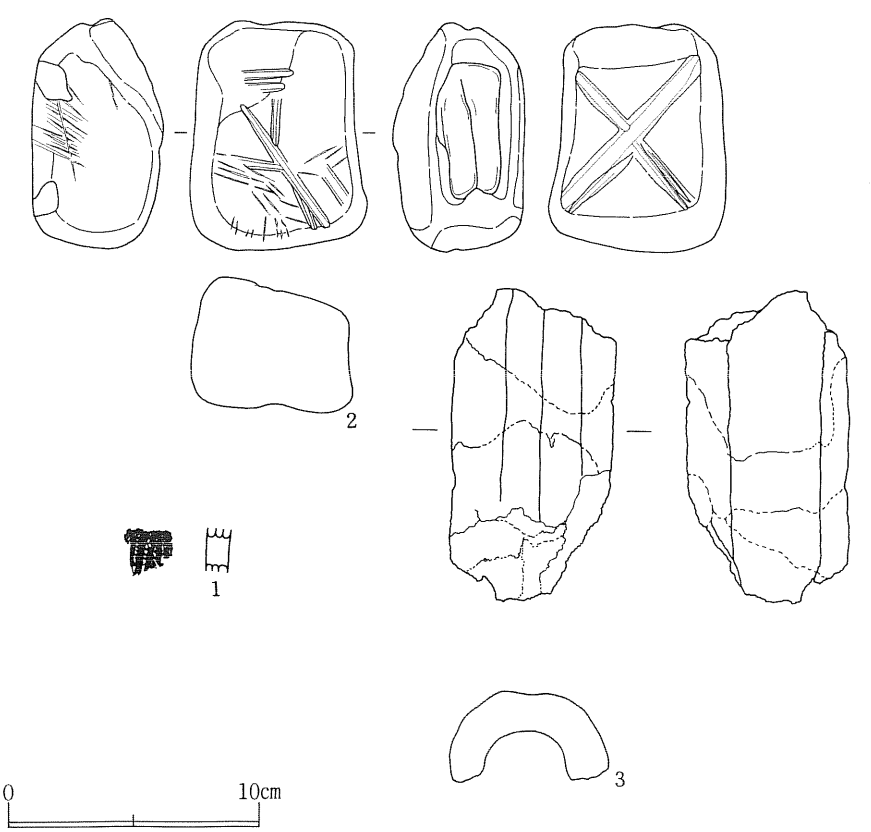


スクリントーン部分は
滓溶着部位

第96図　SS01製鉄炉と出土遺物



SW04　土　層　註　記			
番号	土　色		記入物
1	灰黄褐	10YR4/2	シルト質
2	黒	10YR2/1	腐植土・シルト質
3	黒褐	10YR3/2	炭化物・地山粒若干
4	暗褐	10YR3/3	炭化物・地山粒多量
5	黒褐	10YR3/2	地山粒若干
6	黒褐	10YR3/2	(粘性あり)
7	暗褐	10YR3/4	地山粒多量



第97図　　SW04炭焼窯と出土遺物

面端部から黒飴状の滓溶着→灰色→黄褐色と色調が変化している。

土器（１）はＲ撚糸文を施したものである。線刻礫（２）は両平坦面に「Ｘ」字状の線刻がなされ、角ばった辺には垂直に線条痕が観察される。石質は安山岩である。

ＳＷ110　（第98図）

ＬＣ54・55、ＬＤ54・55のグリッドの平坦面で検出した。長さ167cm、幅150cmの隅丸方形プランを呈し、23～26cm掘り込まれている。底面は平坦であるが、壁面とも高熱による変色（赤色）・硬化がみられた。埋土中から炭化材が多量に出土することと、壁・底面の状況から炭焼窯と判断した。遺物は出土しなかった。

ＳＷ120　（第98図）

ＬＡ47・ＬＢ47のグリッドの中世の柵列跡ＳＡ109の下部で検出した。この土坑は作り替えが行われており、東側を120－Ⅰ、西側を120－Ⅱとして記述する。新旧関係は120－Ⅰ→120－Ⅱ→ＳＡ109である。２つの土坑とも隅丸の長方形プランを呈し、壁面と底面が高熱による変色（赤色）・硬化がみられ、炭化材（木材・禾本科植物）と焼土が大量に堆積していることから、炭焼窯と判断した。他に遺物は出土しなかった。

ＳＷ120－Ⅰは長さ196cm、残存幅95cm、深さ30cmをはかり、平坦な底面とやや外傾する壁面は変色・硬化していた。小さなピットが底面に３カ所穿たれていた。

ＳＷ120－Ⅱは、長さ218cm、幅170cm、深さ41cmをはかり、平坦な底面とやや外傾する壁面は変色・硬化していた。壁面下方に焼土・炭化材が多量に堆積していた。底面の２カ所に柱穴様ピットが穿たれていたが、これはＳＡ109に伴うピットである。

（２）土坑

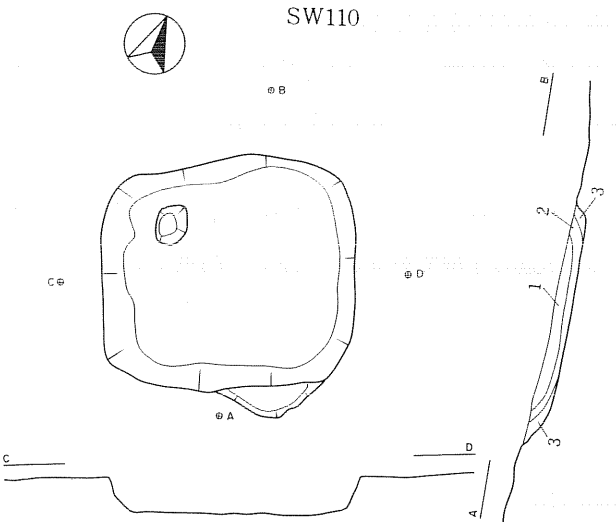
平安時代と考えられる土坑はＳＫ05・54の２基である。

ＳＫ05　（第98図、図版86）

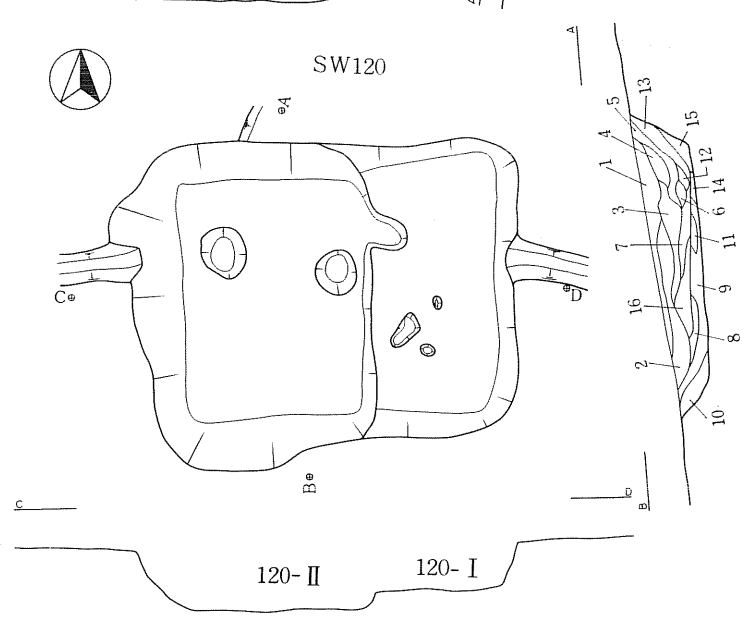
ＭＤ41とＭＥ41のグリッドで検出した長軸120cm、短軸90cmの楕円形プランを呈し、深さ10cmのフライパン状の断面をもつ土坑である。底面は平坦である。底面から滓が溶着した羽口片が１点出土した。

ＳＫ54　（第98図）

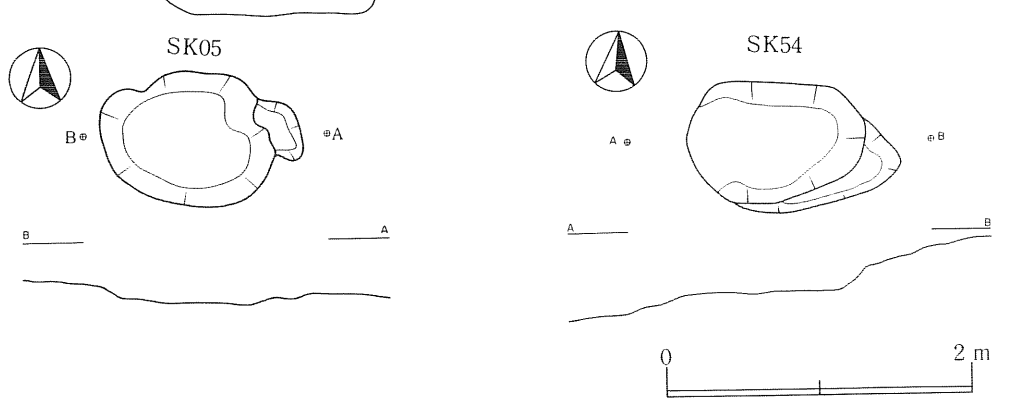
ＬＴ39グリッドの南西緩斜面で検出した。長軸118cm、短軸80cmの楕円形プランを呈し、深さ１～12cmの平坦な底面をもつ土坑である。微細な炭化材が埋土中に多く確認され、底面から鉄滓（流動滓）が４点出土した。また埋土中から縄文土器片３点、フレイク２点が出土した。



ＳＫ110 土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	黒	10ＹＲ2/1	炭化物
2	黒	10ＹＲ1/1	炭化物多量
3	黒　褐	10ＹＲ3/3	地山粒・炭化物



ＳＫ120 土　層　註　記			
番号	土　色		混　入　物
1	暗　褐	10ＹＲ3/3	
2	黒	10ＹＲ1/1	炭化物多量
3	にぶい・黄褐	10ＹＲ5/3	地山土ブロック
4	にぶい・黄褐	10ＹＲ5/3	地山土少量・炭化物少量
5	黒　褐	10ＹＲ3/2	炭化物少量
6	明　黄　褐	10ＹＲ6/6	地山ブロック
7	黒	10ＹＲ1/1	炭化物
8	暗　褐	10ＹＲ3/3	炭化物少量
9	黒	10ＹＲ1/1	炭化物・焼土
10	暗　褐	10ＹＲ3/3	炭化物・地山土多量
11	暗　褐	10ＹＲ3/3	地山粒
12	にぶい・黄褐	10ＹＲ5/3	（粘質）
13	黄　褐	10ＹＲ5/6	（粘質）
14	明　黄　褐	10ＹＲ6/6	地山粒・炭化物
15	暗　赤　褐	5ＹＲ3/6	焼けている地山土・炭化物
16	にぶい・黄褐	10ＹＲ5/3	地山土ブロック



第98図　ＳＷ110・120炭焼窯、SK05・54土坑

（４）遺構外から出土した遺物

遺構外からは、土師器・須恵器の小破片と鉄滓（自然遺物も含む）・砥石・羽口が出土した。鉄滓・砥石・羽口については、年代が明確ではないが、製鉄炉関連の遺物と把えて本時代のに収録する。

①　土師器（第97図１～７、図版82）

土師器は、坏形土器の体部破片１点と底部破片３点、甕形土器の口縁部破片３点と胴部破片６点、底部破片１点である。土師器破片14点の出土位置等は第５表の通りである。

第５表　土師器出土位置等一覧表

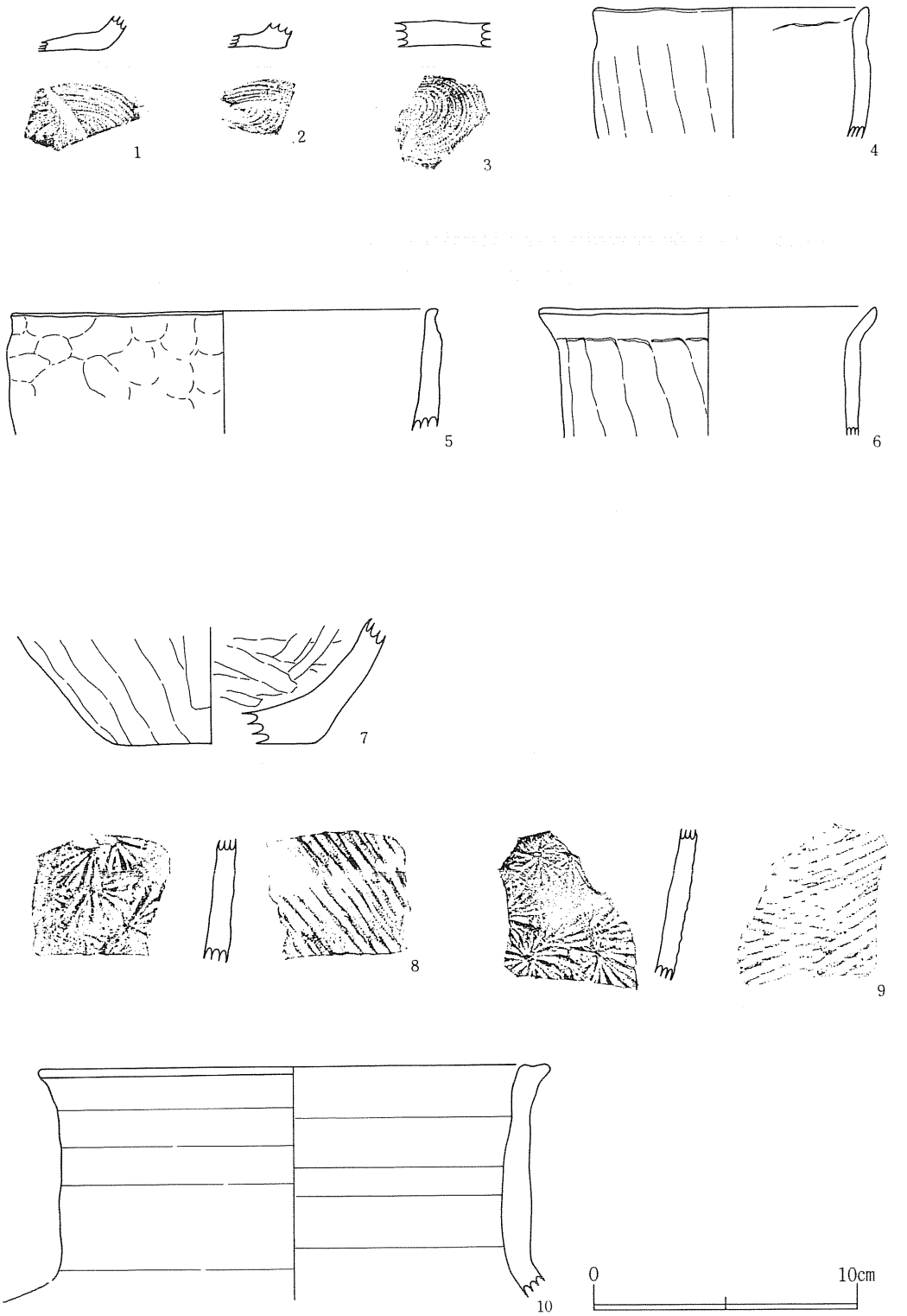
番号	出土位置	註　記	器　種	残存部位	備　考
1	ＫＯ56	ＫＯ56Ⅲ21	坏	体　部	図示せず
2	Ⅲ郭（表採）	Ⅲ郭Ⅰ	坏	底　部	**第99図１**
3	ＭＡ48	ＭＡ48Ⅰ	甕	胴　部	図示せず
4	ＭＢ51	ＭＢ51Ⅱ02	坏	底　部	**第99図２**
5	ＭＦ47	ＭＦ47Ⅲ15	坏	底　部	**第99図３**
6	ＭＧ49	ＭＧ49Ⅱ11	甕	口頸部	**第99図４**
7	ＬＥ55	ＬＥ55Ⅱ01	甕	胴　部	図示せず
8	ＬＩ58	ＬＩ58Ⅱ一括	甕	口頸部	**第99図５**
9	ＬＩ58	ＬＩ58Ⅱ一括	甕	口頸部	**第99図６**
10	ＬＩ58	ＬＩ58Ⅱ一括	甕	胴　部	図示せず
11	ＬＩ58	ＬＩ58Ⅱ一括	甕	底　部	**第99図７**
12	ＬＪ58	ＬＪ58Ⅱ05	甕	胴　部	図示せず
13	ＬＪ58	ＬＪ58P9770－01	甕	胴　部	図示せず
14	ＬＴ49	ＬＴ49Ⅰ	甕	胴　部	図示せず

１～３は、いずれも小破片のため法量は推定不能となっているが、轆轤を成・整形に使用した坏形土器。焼成良好で非常に堅緻である。色調は１が灰褐色、２・３が橙色を呈する。

４は、短い口頸部がやや外傾する甕形土器である。胴部外面を箆なでしている。口頸部内面に粘土紐の積上げ接合痕が認められる。焼成良好で赤褐色を呈する。推定口径10.5cm、現高5.1cm。

５は、短い口頸部が直立し、胴部外面の全面に指頭圧痕が認められる甕形土器である。

口唇は箆状工具で面とりされている。胴部下半には糊状の炭化物が付着している。胎土に砂



第99図　土師器・須恵器

礫が混入している。色調はにぶい黄橙色を呈する。推定口径16.5cm、現高4.7cm。

６は、短い口頸部が外傾する甕形土器である。胴部外面を箆削り調整し、口唇を箆状工具で面とりしている。胎土に細砂を混入している。焼成は良好で橙色を呈する。推定口径13cm、現高５cm。

７は、甕形土器の底部破片である。底部下面に砂粒を付着させる所謂「砂底」である。外面箆削り、内面箆なでで整形している。胎土に礫を多く混入している焼成は良好で暗褐色を呈する。推定底径7.5cm、現高4.9cm。

②　須恵器（第99図８～10、図版82）

須恵器は、壺形土器の口頸部破片２点、甕形土器の胴部破片２点である。４点の出土位置等は第６表の通りである。

第６表　須恵器片出土位置等一覧表

番号	出土位置	註　　記	器　種	残存部位	備　　考
1	LR41	LR41Ⅰ	壺・甕	胴　部	**第99図８**
2	LP42	LP42Ⅱ06	壺・甕	胴　部	**第99図９**
3	ＭＢ50＋Ａ区	ＭＢ50Ⅰ＋Ａ区Ⅰ	壺	口縁部	**第99図10**　接合資料
4	LS39	LS39Ⅰ	壺・甕	口縁部	図示せず

８・９は、大型の壺形あるいは甕形土器である。外面に平行叩き目文、内面に菊花様の放射状当て具痕が認められる。胎土は精選され、焼成も良好である。色調は①が黄灰色、②が灰色を呈する。

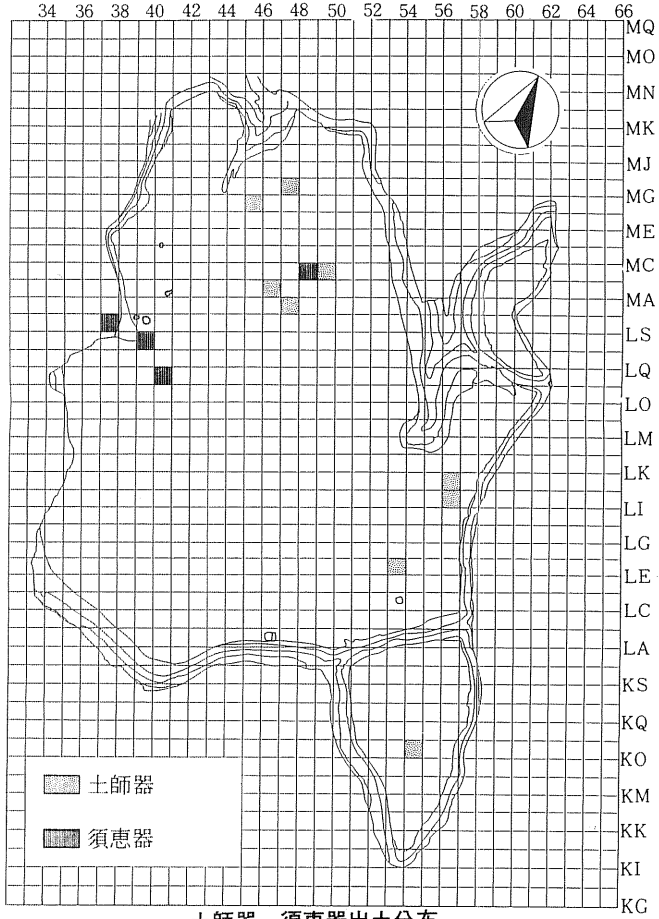
10は広口壺形土器である。灰色を呈するが、口唇上面と内面には霜降り状のくすんだ灰褐色の自然釉が、また外面には灰が霜降り状に付着する光沢のある黒色自然釉が付着している。胎土は精選され、焼成も良好である。口径19.6cm、現高8.9cm。

③　鉄滓（自然遺物も含む）（図版81）

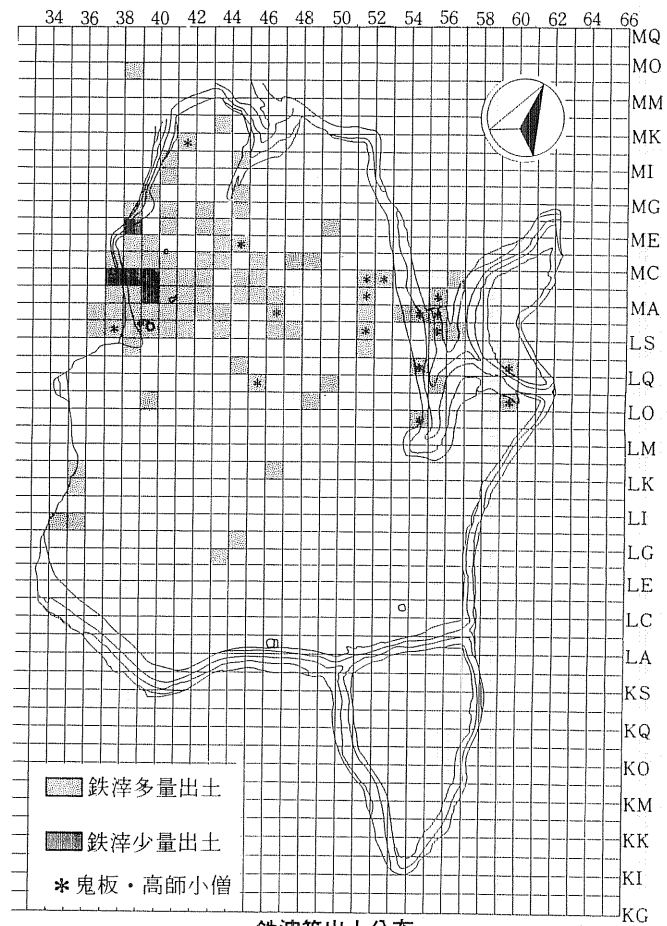
鉄滓としたものには、炉内滓・流出滓・鍛冶滓がある。この他本項では、自然現象により凝固した鉄分である高師小僧・鬼板も扱うことにする。

鉄滓の出土地区は、第７表の通りであるが、濃密に出土したのはＬＳラインとMGライン間・37ラインと46ラインの範囲である。またＬＯライン以南には出土が少ない。

自然遺物である高師小僧は、ＭＡ53・57、ＭＢ53・54、ＭＤ46、ＭＪ43、ＬＮ56、ＬＯ61、ＬＰ47、ＬＱ56・61、ＬＳ39・57・58、ＬＴ48・56・57の17グリッドで、鬼板はＬＴ57グリッドで出土した。高師小僧が多いのは52ラインと57ライン間・ＬＳラインとＭＣライン間の沢部



土師器・須恵器出土分布



鉄滓等出土分布

第100図　遺物出土分布図(1)

第7表　鉄滓出土地区一覧表

南北軸	東　西　軸	南北軸	東　西　軸
M A	39〜44・46〜48・53・57	L F	45
M B	39〜44・46・47・53・54・58	L G	46
M C	39〜45・47・49・50	L H	37
M D	40・41・45・46	L K	37・38
M E	40・42・44・45・51	L N	56
M F	40・42・44・46	L O	41・61
M G	41・46	L P	47・51・57
M H	42	L Q	46・56・61
M I	42・46	L R	40・53
M J	43	L S	38〜40・42・43・45・48・49・57・58
M K	45	L T	38〜45・48・53・55・56・57
M N	40		

分である。

④　砥石（第101図、図版82）

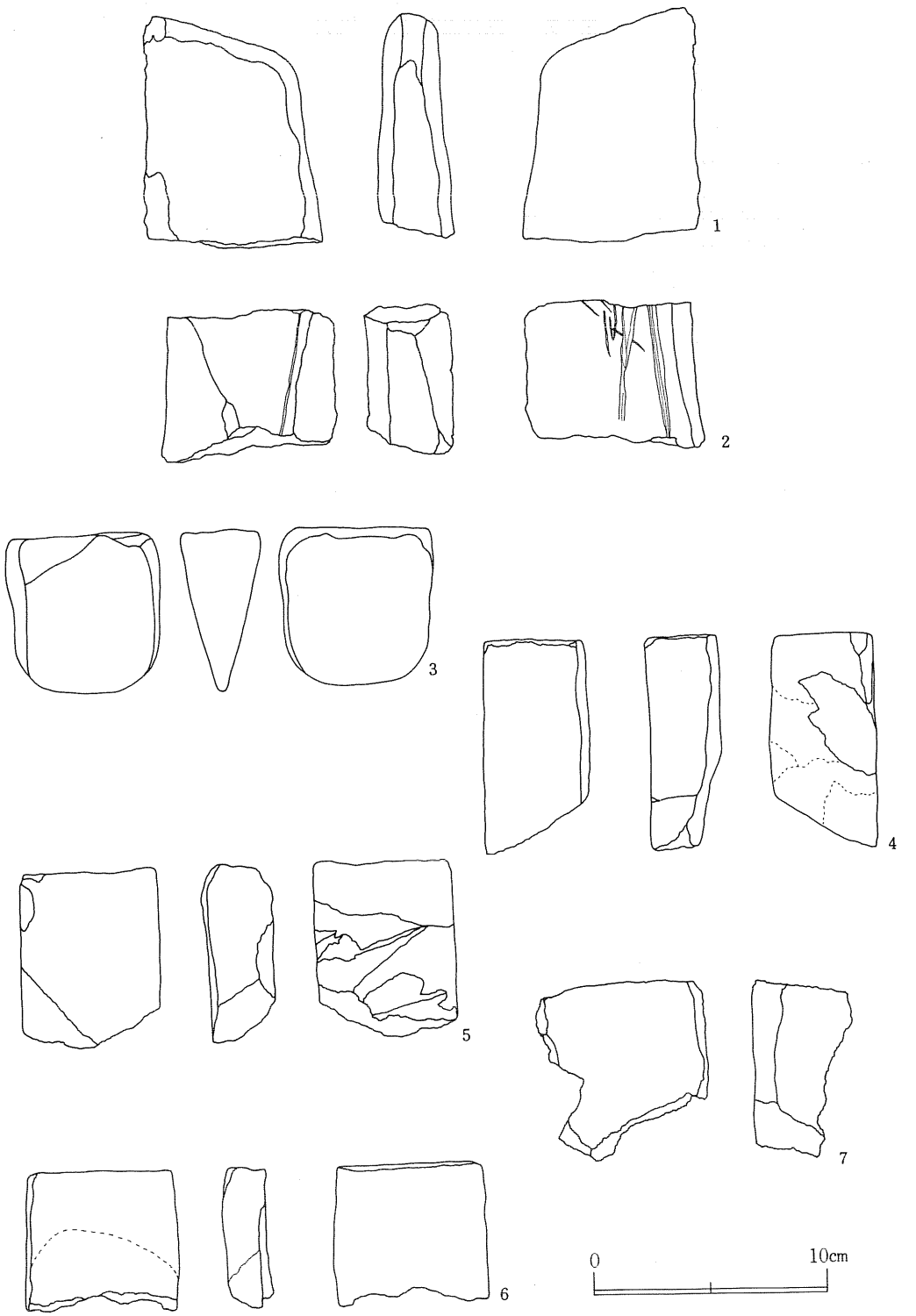
砥石は7点出土した。完形品は1点のみであとは折損品である。自然面を残すもの（1）、母岩からの切断痕のあるもの（4）がある。砥石の出土地区等は第8表の通りである。

第8表　砥石出土地区等一覧表

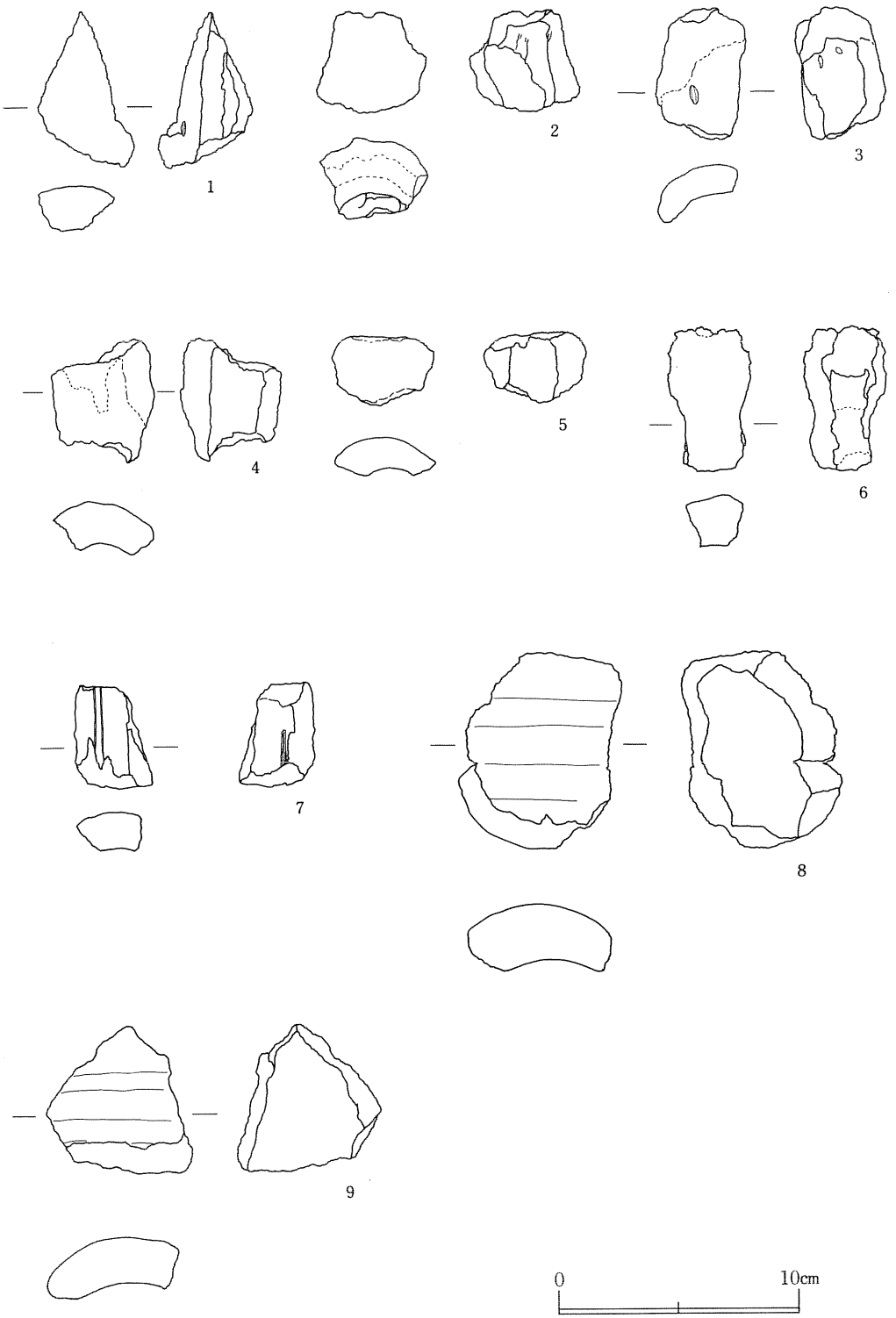
番号	出土地区	註　記	遺存状況	砥面数	研磨溝	石　質
1	LM43	LM43Ⅱ09	折　損	1	なし	凝灰岩
2	MH41	MH41Ⅰ	折　損	2	2面にあり	安山岩
3	MI52	MI52Ⅰ	完　形	4	なし	凝灰岩
4	MI46	MI46Ⅲ01	折　損	3	なし	凝灰岩
5	LL56	LL56Ⅱ05	折　損	2	なし	安山岩
6	MG39	MG39Ⅲ03	折　損	1	なし	凝灰岩
7	LN54	LN54Ⅲ07	折　損	1	なし	安山岩

⑤　羽口（第102図、図版83）

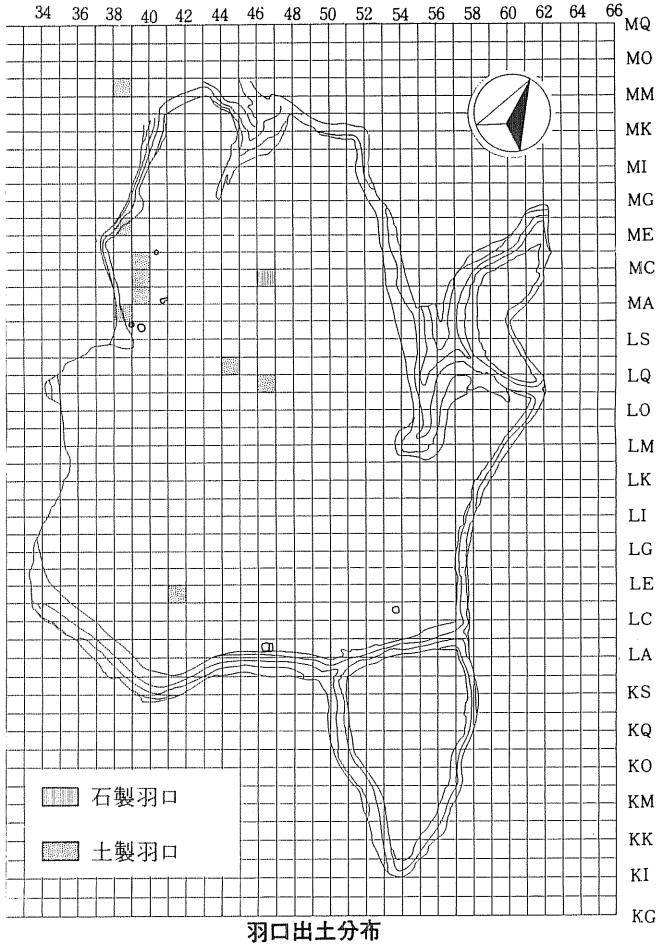
羽口は9点出土したが、いずれも小破片である。7点は土製である。羽口の出土地区等は第



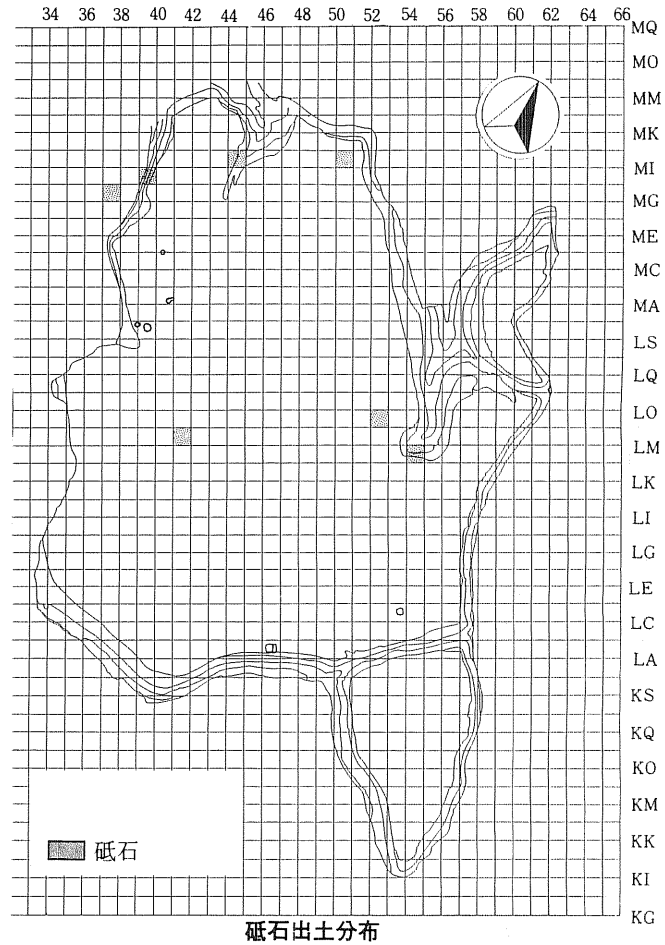
第101図　砥石



第102図　　羽口



羽口出土分布



砥石出土分布

第103図　遺物出土分布図(2)

９表の通りである。

第９表　羽口出土地区等一覧表

番号	出土地区	註　　記	遺存部位	滓溶着	備　　考
1	Ⅲ　郭	南区Ⅱ郭Ⅰ	中間部	なし	胎土に種子痕１カ所
2	ＭＮ40	ＭＮ40Ⅲ05	中間部	両面	
3	ＭＥ40	ＭＥ40Ⅲ10	中間部	なし	胎土に種子痕３カ所
4	ＭＣ41	ＭＣ41Ⅲ24	中間部	外面	
5	ＭＡ41	ＭＡ41Ⅰ	中間部	外面	
6	ＭＢ41	ＭＢ41Ⅱ25	炉側端部	外面	
7	ＬＴ40	ＬＴ40Ⅱ06	中間部	なし	内面に禾本科植物圧痕
8	ＭＢ48	ＭＢ48Ⅰ	中間部	なし	石製
9	表　採	Ａ区表土Ⅰ層表採	中間部	なし	石製

４　中世

（１）遺構・遺物の概観

本遺跡は、段丘縁辺部を堀割りして構築された中世の城館として認識されていた。発掘調査前の現況は、空堀２条が埋没しきらずに残り、２つの郭（第Ⅰ郭・第Ⅲ郭）から構成されると考えられていた。西側の空堀の両側には周囲に比してわずかに土塁状の盛土がありそうな感じがする程度であった。また、調査開始直後の刈払い時に、第Ⅰ郭北側縁辺部に浅い溝状の凹みが巡っているのを確認していたが、開墾時の所作と考えていた。空堀のように大規模なものは別として柵列（板塀）跡が、埋没しきらずに現地表面で確認できるとは予想していなかった。

発掘調査の結果、竜毛沢館は３つの郭から構成されていることが判明した。３つの郭を区画する方法も、柵列（板塀）を巡らして区画した時期の後、空堀で区画した時期に変遷している。

柵列（板塀）は、途絶しながらも各郭の縁辺に巡らされており、２時期に亘って認められた。また空堀も第Ⅰ郭西側に２本、第Ⅰ郭と第Ⅱ郭の間にも２本認められた。これらの空堀もまた２時期あることが、その重複関係から判明した。特に第Ⅰ郭西側のＳＤ03空堀とＳＤ04空堀は、ＳＤ04空堀の廃棄後のＳＤ04空堀掘削に伴う排土をＳＤ04空堀の西側に土塁状に盛土したため、結果的にＳＤ04空堀の上半を人為的に埋め戻している。ＳＤ04空堀には、掘削時に計画的に掘り残した土橋が検出された。また、郭内の建物跡等の周囲を区画する板塀なども検出された。張り出し出入口をもつ竪穴建物跡が４棟、掘立柱建物跡が22棟検出された。ＳＩ01と104竪穴

建物跡からは、珠洲焼の擂鉢片・甕片が出土している。ＳＩ103竪穴建物跡の床面には貫孔のある幅広な杉板材が敷き並べられていた。この竪穴建物跡からは炭化した穀類が約４ℓ出土している。

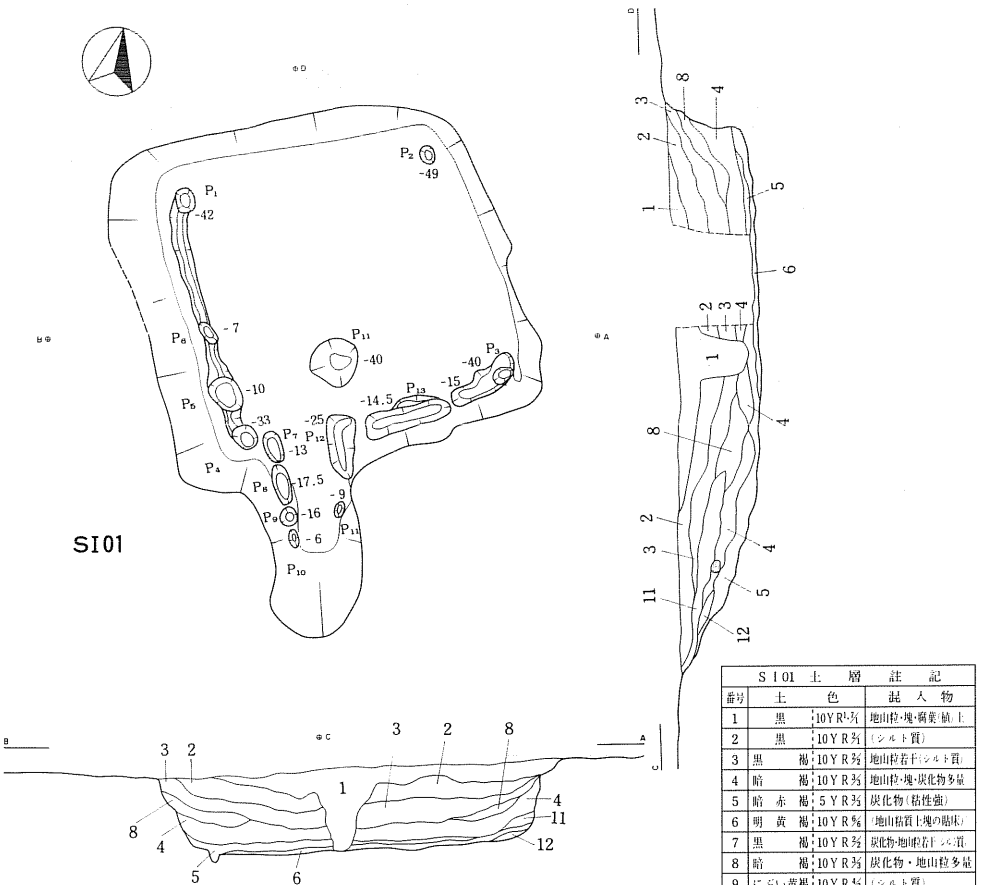
22棟の掘立柱建物跡は、八戸工業大学建築学教室の高島成侑助教授により平面形式や想定される構造形式、その変遷について分析・考察をいただいている。それを見ると大規模な建物の数が多い。発掘当初は、城館とは言え集落の周囲を堀割りした程度と考えていたが、堂々たる役所的構造である。土坑や屋外かまど様焼土遺構も検出されている。

遺構内から出土した遺物は僅少であるが、表土除去中やプラン確認中に出土した遺物の中には中国青磁碗片、珠洲焼の擂鉢片・甕片などが出土している。

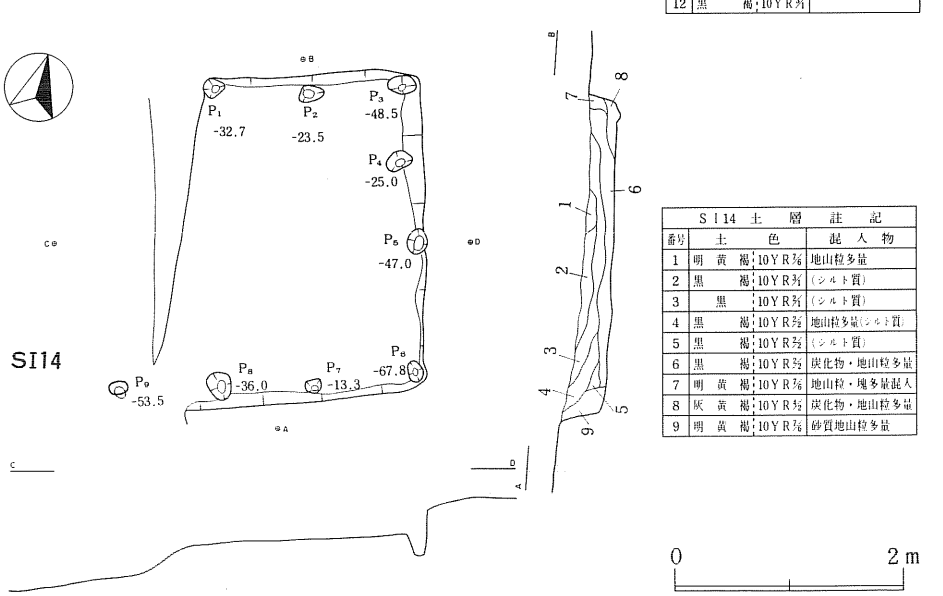
（２）竪穴建物跡とその遺物

ＳＩ01　（第104図・第105図、図版87）

ＭＦ41・ＭＧ41・42のグリッドで検出したが、前年度の試掘トレンチでもその存在が推測されていた。プラン確認時は、暗褐色土中に、黒色土が楕円形に落ち込んでいる状況であり、張り出し部をもつ方形プランとは認識していなかった。平面形は北西側壁283cm、南西側壁284cm、北東側壁267cm、南東側壁318cmのやや不整な方形プランを呈し、南東側壁の中央から西寄りに幅100cm、長さ130cmの半楕円形の張り出し部を付設している。プラン確認面から床面までの深さは60cm～75cmである。床面は明黄褐色地山土を３～５cmの厚さに敷きつめて貼床したものでほぼ平坦である。壁下の床面上には炭化した禾本科植物や炭化材片を検出した。柱穴は各壁隅部に各１カ所と南西側壁下方床面に２カ所検出した。この柱穴間を連結するように南西側壁の下方床面には幅10～15cm、深さ３～８cm、長さ220cmの壁溝が、また南東側の床面に幅15～20cm、深さ５～15cm、長さ78cmと65cmの２条の壁溝を検出した。張り出し部は外側に向かって床面が上昇しており、その両側には柱穴あるいは溝状くぼみが穿たれている。遺物は埋土中から縄文時代の石器２点と珠洲焼の擂鉢片１点および珠洲焼の甕片２点、鉄滓５点が出土した。１はつまみを欠損する石匙である。素材剥片の縁辺に、主要剥離面からのみ加撃して２次調整を施し、両側縁を弧状に作り出している。背面に対する２次調整は、ほぼ全面にわたる。石質は頁岩である。２は所謂「凹み石」であるが、本遺跡における分類では「敲磨器ＩＡ類－ａ」に属する。両面の凹みは２個１対をなす。石質は安山岩である。この他、頁岩のフレイクが６片出土している。３は内面に８条の卸し目が付されている擂鉢の破片で灰色を呈する。４はＬＱ53グリッド第Ⅱ層中出土破片１点とＭＥ51グリッド第Ⅰ層出土破片１点と接合した甕である。推定口径38cm、現高15.5cmである。外面に平行叩目文、内面に無文の当て具痕が認められる。暗灰色を呈する。本資料は胎土分析試料№５として産地同定された。

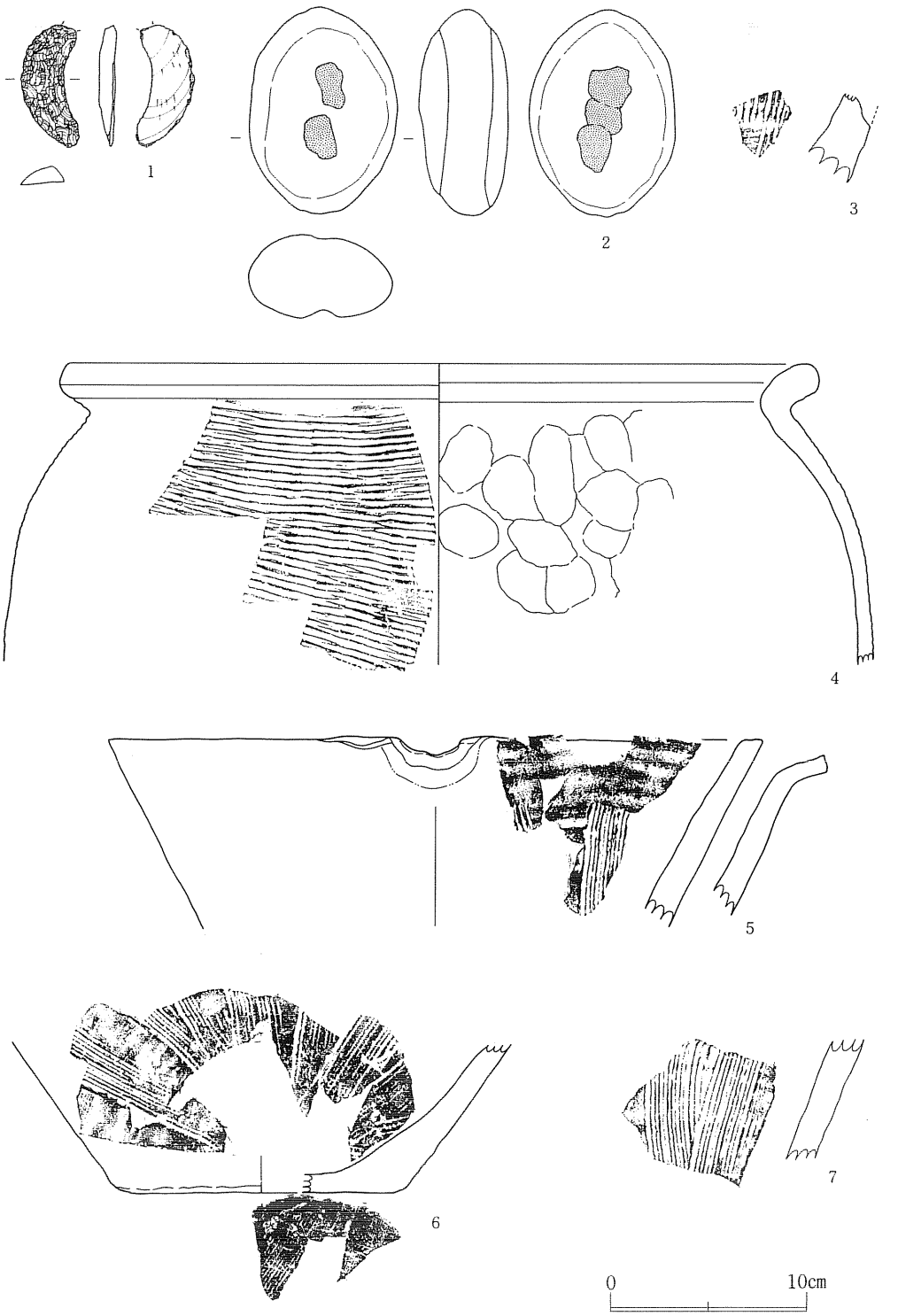


SI01 土層註記		
番号	土色	混入物
1	黒 10YR1/1	地山粒・塊・腐葉・植土
2	黒 10YR2/1	(シルト質)
3	黒褐 10YR3/2	地山粒若干(シルト質)
4	暗褐 10YR3/3	地山粒・塊・炭化物多量
5	暗赤褐 5YR3/3	炭化物(粘性強)
6	明黄褐 10YR6/6	(地山粘質土塊の貼床)
7	黒褐 10YR2/2	炭化物・地山粒若干(シルト質)
8	暗褐 10YR3/3	炭化物・地山粒多量
9	にぶい黄褐 10YR4/3	(シルト質)
10	黒褐 10YR2/2	炭化物(シルト質)
11	黒褐 10YR3/2	地山粒・塊多量
12	黒褐 10YR2/1	



SI14 土層註記		
番号	土色	混入物
1	明黄褐 10YR7/6	地山粒多量
2	黒褐 10YR3/1	(シルト質)
3	黒 10YR2/1	(シルト質)
4	黒褐 10YR2/2	地山粒多量(シルト質)
5	黒褐 10YR2/2	(シルト質)
6	黒褐 10YR2/2	炭化物・地山粒多量
7	明黄褐 10YR7/6	地山粒・塊多量混入
8	灰黄褐 10YR4/2	炭化物・地山粒多量
9	明黄褐 10YR7/6	砂質地山粒多量

第104図　SI01・14竪穴建物跡



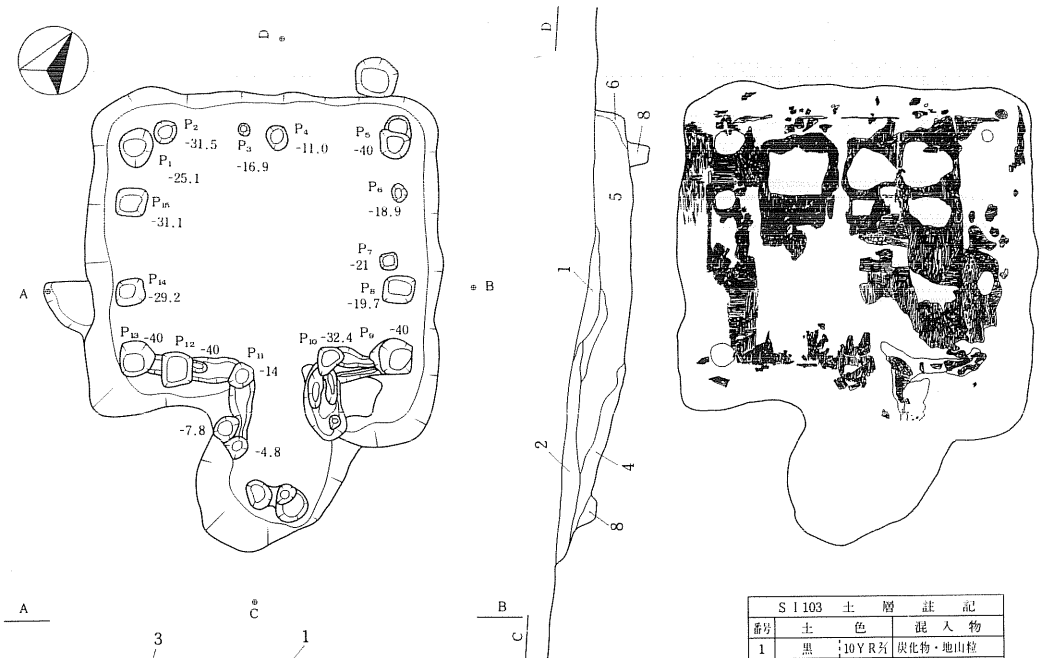
第105図　　SI01・14竪穴建物跡出土遺物

ＳＩ14　（第104図）

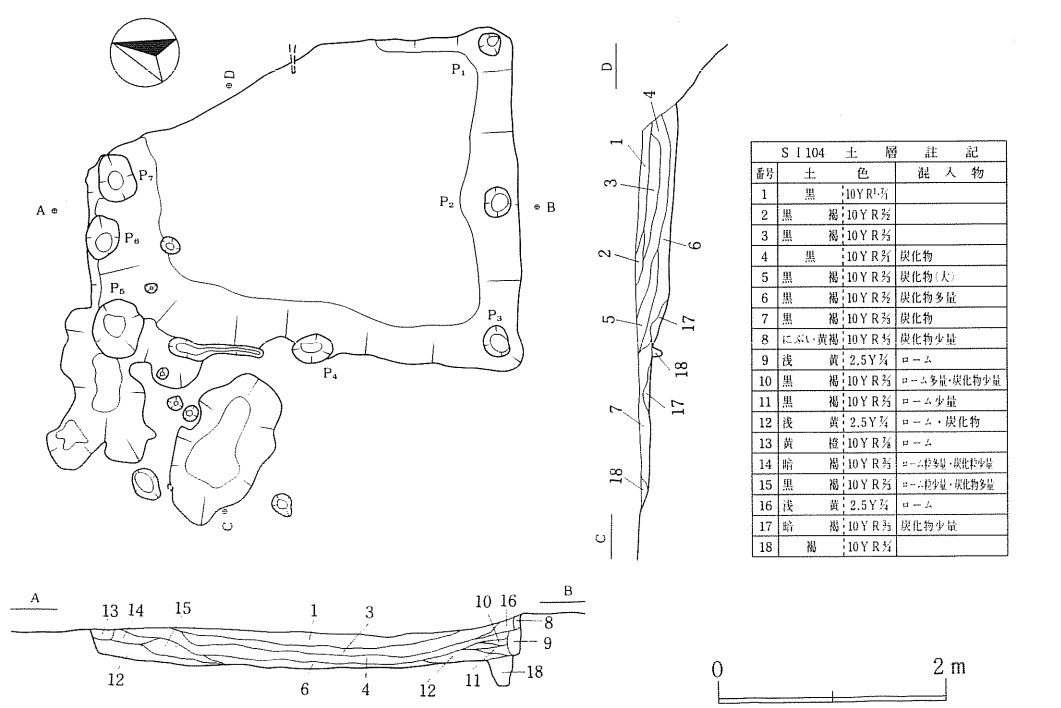
ＭＫ47・48、ＭＬ47・48グリッドで検出したが、西壁は、現農道開削以前に農道として使用されていたため掘削され欠失していた。平面形は、１辺275cmの方形プランと推定されたが、全長が計測できたのは東壁のみで、北壁は185cm、南壁は210cm遺存するのみである。ただし、南壁は床面に穿たれている柱穴の配置状況から全長が推測できた。プラン確認面から、よく踏み固められて平坦な床面までの深さは20～30cmである。埋土は９層に分層したが、微細な炭化材片を多量に混入する黒褐色土・灰黄褐色土が床面を覆っている。柱穴は床面に９カ所検出した。柱穴の配置は各隅部と、各壁長を略３等分した位置となっており、南壁の柱穴間距離は85cm～90cm、北壁の柱穴間距離は83～85cmとなり、ほぼ85～90cmを意識していることがうかがわれる。しかし全長の明らかな東壁下方で67～113cmと柱穴間の距離が乱れている。東壁に接するように床面から５～10cm浮上した状態で炭化丸太材が横倒しており、床面にも焼土、灰、炭化材片が多く堆積していることから所謂焼失家屋である。この竪穴建物跡に張り出し部が付設するかどうか不明である。遺物は出土しなかった。

ＳＩ103　（第106図、図版87～93）

ＬＪ56・57、ＬＫ56・57グリッド検出した。第Ⅱ層（黒褐色土）下半におけるプラン確認面で炭化板材が方形に巡っているのを検出したので、平面的に精査したところ炭化板材の20～25cm外側に微細な炭化材片が混入した方形のプランを確認した。その後、南東壁のほぼ中央に出入口と考えられる半楕円形の張り出し部が付設されていることが判明した。母屋部分の掘り方の規模は、北西壁273cm、北東壁292cm、南東壁286cm、南西壁274cmである。プラン確認面から床面までの深さは33.5cm～55.2cmである。禾本科植物を含む微細な炭化材片を混入する埋土を除去するにつれ、壁面近くを巡る炭化板材は、１枚が幅25cm、厚さ１～1.5cmですき間なく並べ建てられており、外側の床面近くには横木がわたされていることが判明した（内側に横木は検出できなかった）。大量の炭化した禾本科植物や丸太材片を除去したところ、北西側の床面上に幅50～70cm、長さ110～190cmの３枚の板材が北西－南東方向に敷き並べられ、炭化していた。この板材には40×50cm、30×40cm、40×45cm、40×45cm、25×45cmの貫孔が上面側から穿たれていた。柱穴は母屋の床面に各壁面に沿うように壁面から約20cm離れて15カ所（P_1～P_{15}）検出した。各柱穴の直上には床面から５～８cm浮上した状態で芯部が空洞となった炭化丸太材（直径10～15cm）が遺存していた。これら柱穴のうち各壁隅部に位置するP_1、P_5、P_9、P_{13}の中心間距離は、北西と南東が230cm、南西と北東が190cmとなる 。また、南東のP_9－P_{10}、P_{11}－P_{12}－P_{13}間には柱穴を連結するように溝が掘り込まれていた。この溝の直上にも炭化板材が浮上した状態で遺存していた。南西と南東の柱穴列より内側の床面上では幅20～25cm、厚さ１～３cm、長さ25～40cmの炭化板材が倒れこんだ状態で検出された。



SI103 土層註記			
番号	土色		混入物
1	黒	10YR2/1	炭化物・地山粒
2	黒褐	10YR3/2	炭化物・地山粒
3	にぶい黄褐	10YR4/3	炭化物・地山ブロック
4	黒	10YR2/1	炭化物多量
5	黒褐	10YR3/3	炭化物多量・地山粒
6	暗褐	10YR3/4	炭化物少量
7	黒褐	10YR3/2	炭化物微量
8	暗褐	10YR3/3	地山粒



SI104 土層註記			
番号	土色		混入物
1	黒	10YR1.7/1	
2	黒褐	10YR3/2	
3	黒褐	10YR3/3	
4	黒	10YR2/1	炭化物
5	黒褐	10YR3/3	炭化物(大)
6	黒褐	10YR3/2	炭化物多量
7	黒褐	10YR3/3	炭化物
8	にぶい黄褐	10YR4/3	炭化物少量
9	浅黄	2.5Y7/4	ローム
10	黒褐	10YR3/3	ローム多量・炭化物少量
11	黒褐	10YR3/3	ローム少量
12	浅黄	2.5Y7/4	ローム・炭化物
13	黄橙	10YR7/8	ローム
14	暗褐	10YR3/3	ローム粒多量・炭化粒少量
15	黒褐	10YR3/3	ローム粒少量・炭化物多量
16	浅黄	2.5Y7/4	ローム
17	暗褐	10YR3/3	炭化物少量
18	褐	10YR4/4	

第106図　SI103・104竪穴建物跡

また、北東壁の北隅部近くでは、炭化した禾本科植物が、壁面に平行するように床面から５～10cm浮上する状態で検出された。これらの炭化材の位置から、本竪穴建物跡の内部規模は北西側と南東側が260cm、南西側と北東側が215cm、面積5.6㎡と推定される。床面は黄橙色地山土を掘り込んでつくられていたが 、火熱により変色しており軟質であった。南東壁の中央部につくられた張り出し部は、幅130cm、長さ100cmの掘り方規模をもっているが、張り出し部の両側に柱穴とそれを連結する溝が検出され、その上面に遺存する炭化板材等から、使用時は幅70cm、長さは110cmで、床面が外部に向かって上昇する形態である。張り出し部の端部にも柱穴様ピットがあるが、このピットも本建物跡のものとすれば、出入りは張り出しの南東側から「Ｌ」字形に行われたと考えられる。

遺物は、生活用具・什器類は出土せず、埋土中と床面上（特に張り出し部床面上）に炭化した穀類が約４ℓ出土した。殻のついたそばの実が約3.5ℓで、他に大麦、籾米、小豆（？）が少量であった。

ＳＩ104　（第105図・第106図）

ＬＥ57・58、ＬＦ57・58で検出したが、北東側は台地縁辺の崩壊により欠失していた。プラン確認時に、プランの内側に幅10～20cmの浅黄色シルト質土の帯状堆積が検出しされ、「火山灰」が堆積しているのではないかと考えられたが、精査の結果「火山灰」ではなく、掘り下げた「壁面」と壁材との間を埋める「裏込め土」であることが判明した。本竪穴建物跡は、略北－南に長軸方向をもつ長辺380cm、短辺300cmの長方形プランの母屋と西壁隅中央から北西隅間に付設された張り出し部からなっている。埋土には微細な炭化材片が混入していたが、床面上には炭化材片・焼土・灰等は出土しなかった。

張り出し部は、木根による攪乱のため全容を知ることはできないが最大でも幅150cm、長さ150cmと推測される。張り出し部床面に傾斜があったかどうか不明である。母屋部分のプラン確認面から床面までの深さは20～35cmである。床面は壁面近くが中央より５～10cm高くなっていた。

平坦な床面は堅緻である。柱穴は各壁隅部と各壁中央の壁面に穿たれていた。遺物は埋土中から珠洲焼の片口鉢片１点・擂鉢片２点が出土したが、片口鉢片１点（５）はＬＦ57グリッドの第Ⅱ層中から出土した破片と接合した。図上復原であるが口径33.5cm、現高9.6cmである。片口部は「コ」の字形を呈する。内面の卸し目は１単位が12条となっているが、８条の櫛目が２度付されたと思われる。本資料は、胎土分析試料№.６として産地同定された。擂鉢（６）は、ＬＤ53、ＬＦ57、ＬＨ55グリッドの第Ⅱ層中から出土した５片と接合した擂鉢体部下半資料である。内面の卸し目の単位は５条１単位の櫛目を２列にして１単位となし施文しているようであるが、櫛歯の間隔などにバラつきが認められる。本資料は胎土分析試料№.１として産地同定された。擂鉢（７）は内面に12条を１単位とする卸し目が付されている。いずれも灰色を呈する。

（３）　掘立柱建物跡と出土遺物

ＳＢ01掘立柱建物跡　（第107図、図版94）

〔位置〕　第Ｉ郭の北西隅のＭＩ41～43、ＭＪ41～43、ＭＫ42～44のグリッドに位置する。

〔重複〕　他の建物跡等と重複しない。

〔平面形式〕　細長い部屋を繋いだ形式である。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_4通りで8.5m、Ｘ軸方向はY_4通りで9.9mを計測する。Ｙ軸方向はＮ－32°－Ｗである。

〔柱穴〕　直径20～50cmの円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　なし

〔変遷時期〕　第Ⅲ期

ＳＢ02掘立柱建物跡　（第108図・第120図、図版94・104）

〔位置〕　第Ｉ郭の北側中央のＭＤ47～50、ＭＥ44～50、ＭＦ43～50、ＭＧ43～50、ＭＩ45～49のグリッドに位置する。

〔重複〕　ＳＢ03掘立柱建物跡と一部重複するが、ＳＢ03建物跡より新しい。

〔平面形式〕　縁や廊下により区切られた大きな部屋、２室の続き間があり、書院造系統の建物跡である。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_9通りで総長20.60m、Y_9通りで総長32.65mを計測する。本館跡における最大建物跡である。Ｙ軸方向はＮ－42°－Ｗである。

〔柱穴〕　直径20～50cmの円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　（X_8、Y_{10}）柱穴の埋土中から、頁岩の縦長剝片を利用し側縁に剝離が観察される石器が１点出土した。素材剝片を取り出した際の打面・打瘤を基部に残し、背面には第１次剝離の縦方向の稜が残存する。（X_{14}、Y_{10}）柱穴の埋土上半から銅銭４枚〔開元通寶（845年初鋳）、元○通寶（順読）、○元通寶（対読）、判読不明〕が出土した。

〔変遷時期〕　第Ⅳ期

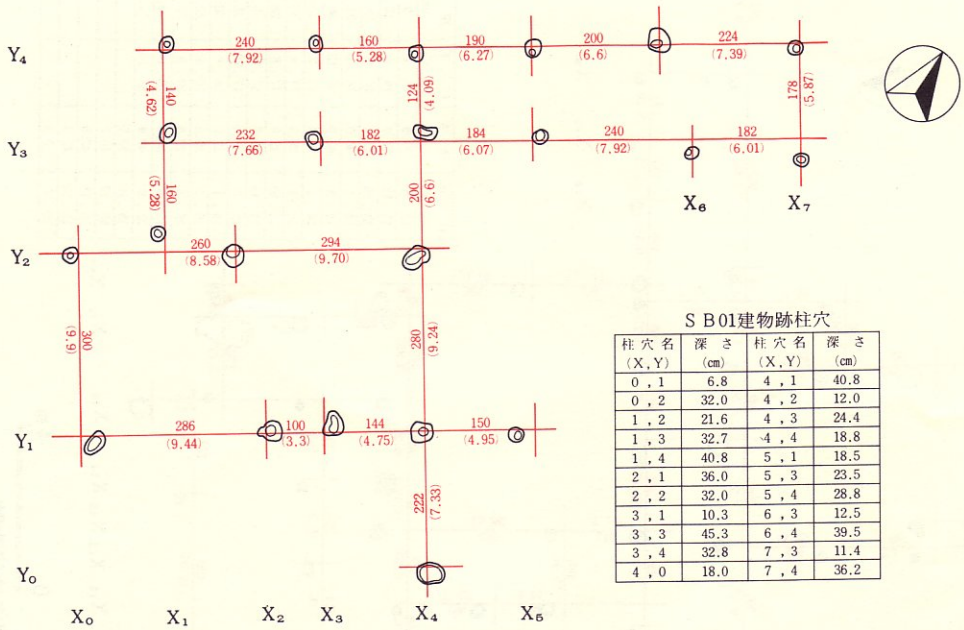
ＳＢ03掘立柱建物跡　（第107図・第120図５・６、図版95）

〔位置〕　第Ｉ郭のＭＤ50～52、ＭＥ50～52、ＭＦ50～52、ＭＧ50・51のグリッドに位置する。

〔重複〕　ＳＢ02掘立柱建物跡と一部重複するが、本建物跡が古い。

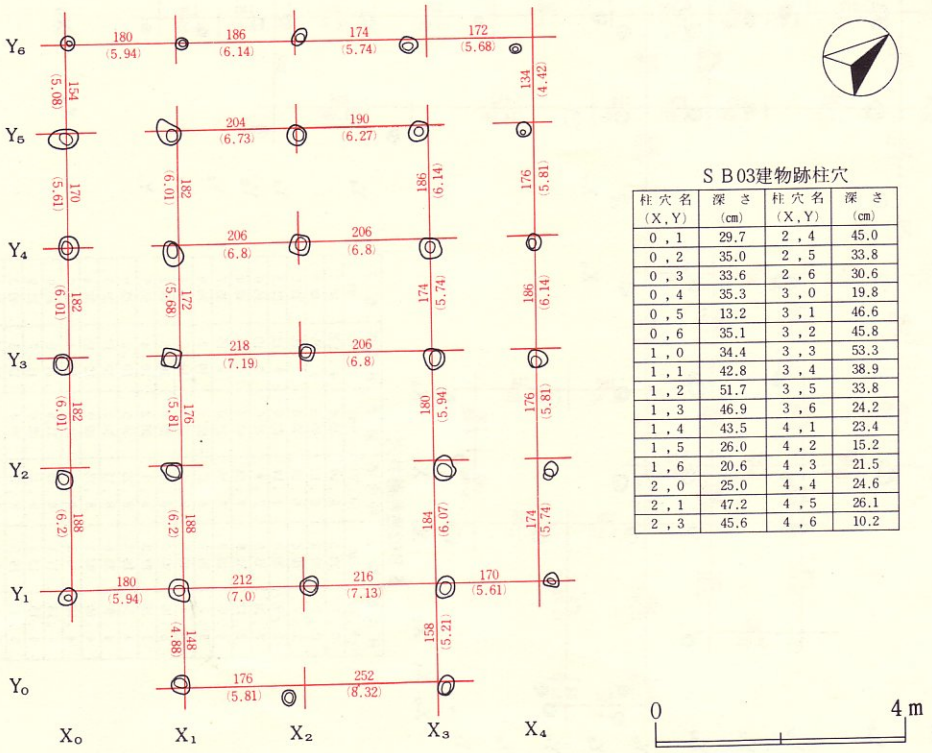
〔平面形式〕　身舎の回りに縁が巡る寝殿造系統の間取りである。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_1通りで10.2m、Ｘ軸方向はY_1通りで7.65mを計測する。Ｙ軸方向はＮ－52°－Ｗである。



ＳＢ01建物跡柱穴

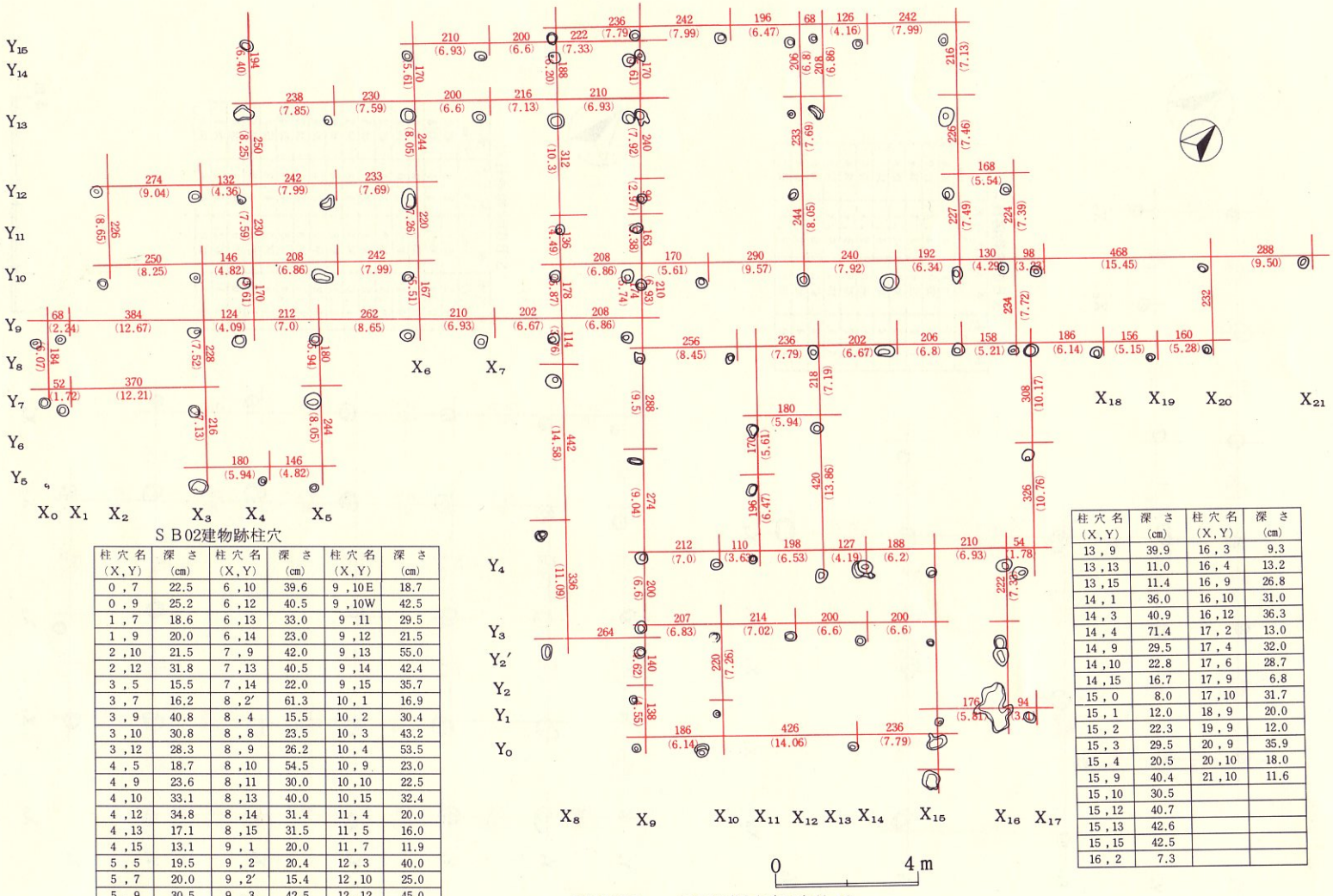
柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0，1	6.8	4，1	40.8
0，2	32.0	4，2	12.0
1，2	21.6	4，3	24.4
1，3	32.7	4，4	18.8
1，4	40.8	5，1	18.5
2，1	36.0	5，3	23.5
2，2	32.0	5，4	28.8
3，1	10.3	6，3	12.5
3，3	45.3	6，4	39.5
3，4	32.8	7，3	11.4
4，0	18.0	7，4	36.2



ＳＢ03建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0，1	29.7	2，4	45.0
0，2	35.0	2，5	33.8
0，3	33.6	2，6	30.6
0，4	35.3	3，0	19.8
0，5	13.2	3，1	46.6
0，6	35.1	3，2	45.8
1，0	34.4	3，3	53.3
1，1	42.8	3，4	38.9
1，2	51.7	3，5	33.8
1，3	46.9	3，6	24.2
1，4	43.5	4，1	23.4
1，5	26.0	4，2	15.2
1，6	20.6	4，3	21.5
2，0	25.0	4，4	24.6
2，1	47.2	4，5	26.1
2，3	45.6	4，6	10.2

第107図　SB01・03掘立柱建物跡



第108図　SB02掘立柱建物跡

SB02建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0 , 7	22.5	6 ,10	39.6	9 ,10E	18.7
0 , 9	25.2	6 ,12	40.5	9 ,10W	42.5
1 , 7	18.6	6 ,13	33.0	9 ,11	29.5
1 , 9	20.0	6 ,14	23.0	9 ,12	21.5
2 ,10	21.5	7 , 9	42.0	9 ,13	55.0
2 ,12	31.8	7 ,13	40.5	9 ,14	42.4
3 , 5	15.5	7 ,14	22.0	9 ,15	35.7
3 , 7	16.2	8 ,2′	61.3	10 , 1	16.9
3 , 9	40.8	8 , 4	15.5	10 , 2	30.4
3 ,10	30.8	8 , 8	23.5	10 , 3	43.2
3 ,12	28.3	8 , 9	26.2	10 , 4	53.5
4 , 5	18.7	8 ,10	54.5	10 , 9	23.0
4 , 9	23.6	8 ,11	30.0	10 ,10	22.5
4 ,10	33.1	8 ,13	40.0	10 ,15	32.4
4 ,12	34.8	8 ,14	31.4	11 , 4	20.0
4 ,13	17.1	8 ,15	31.5	11 , 5	16.0
4 ,15	13.1	9 , 1	20.0	11 , 7	11.9
5 , 5	19.5	9 , 2	20.4	12 , 3	40.0
5 , 7	20.0	9 ,2′	15.4	12 ,10	25.0
5 , 9	30.5	9 , 3	42.5	12 ,12	45.0
5 ,10	25.0	9 , 4	41.0	12 ,13	29.8
5 ,12	18.7	9 , 6	27.5	12 ,14	29.7
5 ,13	19.0	9 ,9E	28.2	13 , 4	33.2
6 , 9	29.0	9 ,9W	14.0	13 , 7	25.0

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
13 , 9	39.9	16 , 3	9.3
13 ,13	11.0	16 , 4	13.2
13 ,15	11.4	16 , 9	26.8
14 , 1	36.0	16 ,10	31.0
14 , 3	40.9	16 ,12	36.3
14 , 4	71.4	17 , 2	13.0
14 , 9	29.5	17 , 4	32.0
14 ,10	22.8	17 , 6	28.7
14 ,15	16.7	17 , 9	6.8
15 , 0	8.0	17 ,10	31.7
15 , 1	12.0	18 , 9	20.0
15 , 2	22.3	19 , 9	12.0
15 , 3	29.5	20 , 9	35.9
15 , 4	20.5	20 ,10	18.0
15 , 9	40.4	21 ,10	11.6
15 ,10	30.5		
15 ,12	40.7		
15 ,13	42.6		
15 ,15	42.5		
16 , 2	7.3		

〔柱穴〕　直径11～40cmの円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　（X_1、Y_3）柱穴と（X_3、Y_3）柱穴の埋土中から珠洲焼甕の破片が出土した（第120図５・６）。５は甕の胴部破片である。外面に平行叩き目文、内面には無文の当て具痕が認められる。６は甕の口縁部破片である。外面は平行叩き目文、内面には無文の当て具痕が認められる。

〔変遷時期〕　第Ⅰ期

ＳＢ04掘立柱建物跡　（第109図、図版95）

〔位置〕　第Ⅰ郭のＭＢ41～43、ＭＣ41～43、ＭＤ41～43、ＭＥ41～43のグリッドに位置する。

〔重複〕　他の建物跡と重複しない。

〔平面形式〕　１間の廊下を挟み、２間×３間と２間×４間の部屋があり、南東に１間四方の突き出しを有する。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_0通りで総長11.4ｍ、Ｘ軸方向はY_3通りで8.3ｍを計測する。Ｙ軸方向はＮ－23°30′－Ｗである。

〔柱穴〕　直径12～40cmの円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　なし

〔変遷時期〕　第Ⅱ期

ＳＢ05掘立柱建物跡　（第110図・第120図７、図版96）

〔位置〕　第Ⅰ郭のＬＲ49・50、ＬＳ48～51、ＬＴ48～52、ＭＡ47～52、ＭＢ47～52、ＭＣ47～52、ＭＤ49・50グリッドに位置する。

〔重複〕　他の建物跡等と重複しない。

〔平面形式〕　北側に３間×３間の部屋、南側に３間×３間（あるいは３間×４間）の部屋があり廊下を兼ねたような庇と孫庇が付けられており、寝殿造系統の間取りである。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_7通りで21.6ｍ、Ｘ軸方向はY_7通りで19ｍを計測する。Ｙ軸方向はＮ－60°－Ｗである。

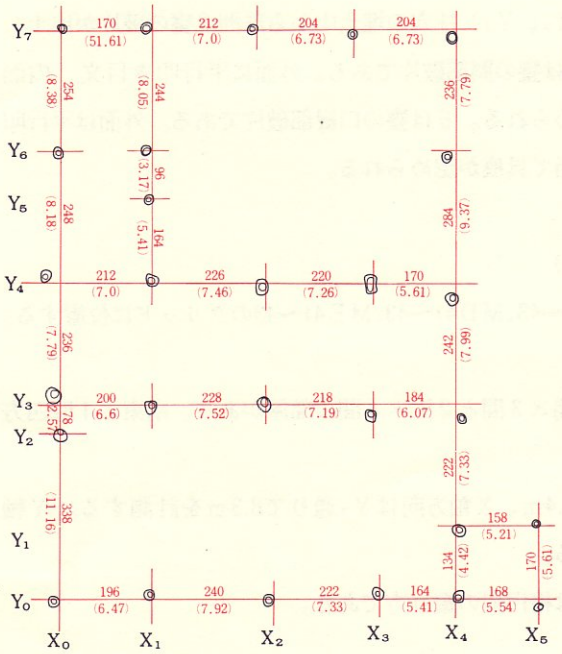
〔柱穴〕　直径20～42cmの円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　（X_2、Y_3）柱穴の埋土中から珠洲焼の擂鉢片１点が出土した（第120図７）。推定口径34cm、現高5.2cm、器厚1.2cmを計測し、内面下半にわずかに卸し目が認められる。

〔変遷時期〕　第Ⅰ期

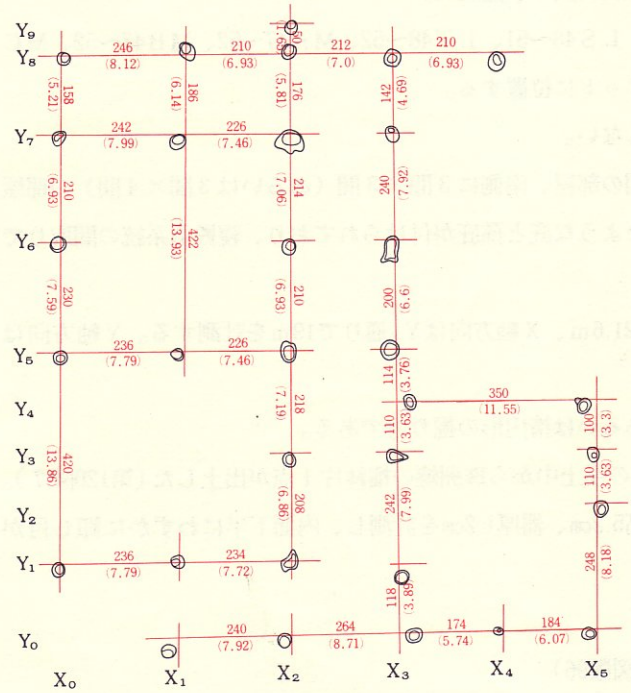
ＳＢ06掘立柱建物跡　（第109図、図版96）

〔位置〕　第Ⅰ郭の西側、ＬＰ41～43、ＬＱ41～44、ＬＲ41～43、ＬＳ41～43のグリッドに



SB04建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0，0	8.0	2，4	19.5
0，2	34.0	2，7	18.0
0，3	35.0	3，0	33.4
0，4	24.5	3，3	20.6
0，6	29.0	3，4	14.8
0，7	24.0	3，7	17.9
1，0	38.3	4，0	14.2
1，3	27.9	4，1	17.9
1，4	17.6	4，3	10.0
1，5	19.3	4，4	13.0
1，6	12.8	4，6	16.2
1，7	12.5	4，7	14.5
2，0	41.2	5，0	21.0
2，3	43.0	5，1	7.2

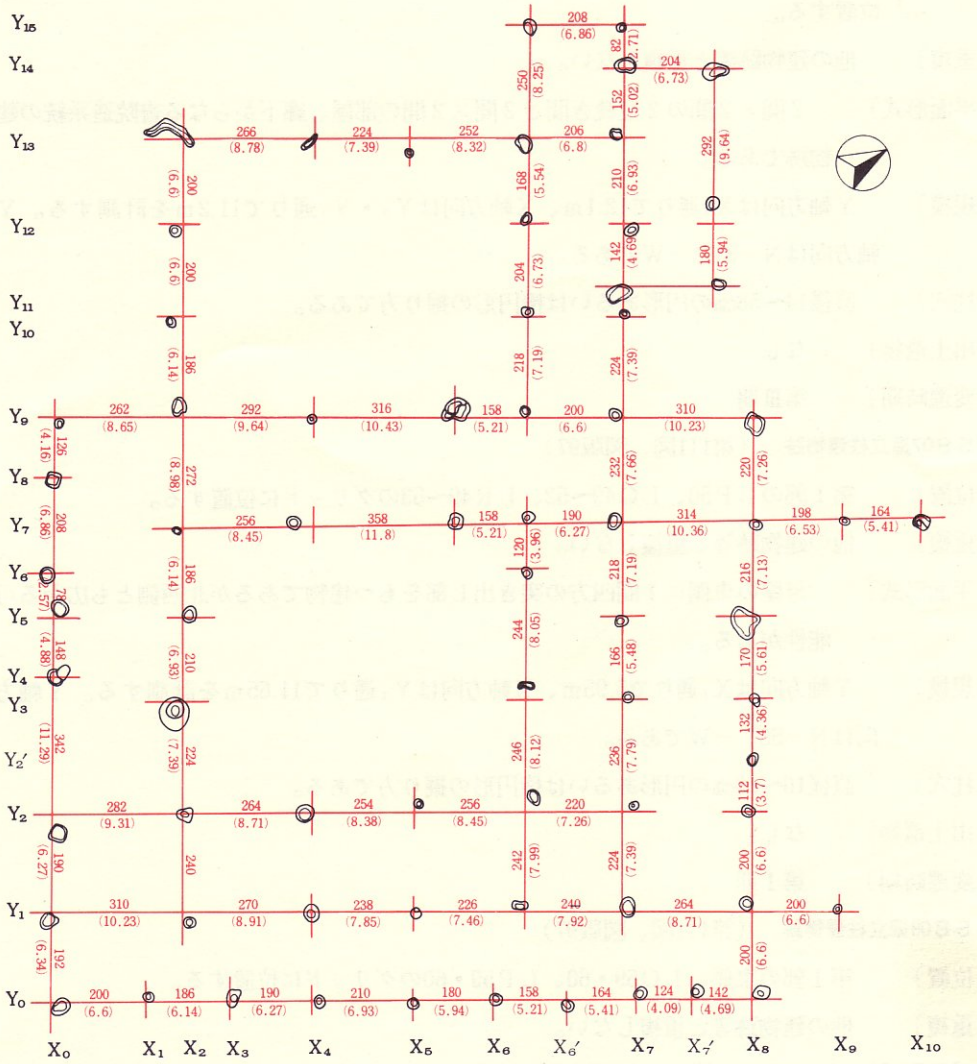


SB06建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0，1	39.5	2，8	23.0
0，5	20.5	2，9	19.0
0，6	27.0	3，0	12.4
0，7	28.2	3，1	22.2
0，8	30.4	3，3	26.2
1，0	32.5	3，4	38.2
1，1	29.0	3，5	27.9
1，5	31.7	3，6	20.6
1，7	28.3	3，7	28.8
1，8	25.3	3，8	29.2
2，0	26.2	4，0	15.6
2，1	38.0	4，8	25.2
2，3	35.7	5，0	39.4
2，5	35.2	5，2	19.8
2，6	34.0	5，3	14.4
2，7	44.5	5，4	22.5

0　4 m

第109図　SB04・06掘立柱建物跡



ＳＢ05建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0 , 0	15.0	3 , 0	37.2	6 , 7	37.9	7 ,14	6.9
0 , 1	20.0	4 , 0	30.0	6 , 9	35.4	7 ,15	22.9
0 , 2	11.1	4 , 1	16.7	6 ,10	35.0	7′, 0	25.0
0 , 4	19.7	4 , 2	9.0	6 ,12	12.0	8 , 0	34.0
0 , 5	11.8	4 , 7	14.5	6 ,13	10.1	8 , 1	14.6
0 , 6	11.2	4 , 9	24.2	6 ,15	18.4	8 , 2	37.2
0 , 8	11.2	4 ,13	11.8	6′, 0	29.4	8 ,2′	15.6
0 , 9	10.6	5 , 0	37.9	7 , 0	16.6	8 , 3	36.5
1 , 0	25.3	5 , 1	21.3	7 , 1	16.6	8 , 5	30.0
2 , 1	16.5	5 , 2	10.3	7 , 2	18.9	8 , 7	33.8
2 , 2	30.0	5 , 7	13.0	7 , 3	34.8	8 , 9	17.4
2 , 3	12.5	5 , 9	15.0	7 , 5	49.3	8 ,11	12.3
2 , 5	25.0	5 ,13	4.3	7 , 7	35.2	8 ,12	23.2
2 , 7	15.0	6 , 0	23.7	7 , 9	41.1	8 ,14	33.8
2 , 9	8.0	6 , 1	23.9	7 ,10	32.1	9 , 1	13.5
2 ,10	13.0	6 , 2	19.5	7 ,11	14.0	9 , 7	33.2
2 ,12	21.6	6 , 3	20.5	7 ,12	30.6	10 , 7	21.0
2 ,13	5.0	6 , 6	57.5	7 ,13	8.5		

第110図　ＳＢ05掘立柱建物跡

位置する。

〔重複〕　他の建物跡等と重複しない。

〔平面形式〕　２間×２間の２室続き間と２間×２間の部屋、廊下からなる書院造系統の建物跡である。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_2通りで12.1ｍ、Ｘ軸方向はY_0・Y_1通りで11.2ｍを計測する。Ｙ軸方向はＮ－31°－Ｗである。

〔柱穴〕　直径14～58㎝の円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　なし

〔変遷時期〕　第Ⅲ期

ＳＢ07掘立柱建物跡　（第111図、図版97）

〔位置〕　第Ｉ郭のＬＰ50、ＬＱ49～52、ＬＲ49～53のグリッドに位置する。

〔重複〕　他の建物跡等と重複しない。

〔平面形式〕　母屋の東側に１間四方の突き出し部をもつ建物であるが北西側とも広がる可能性がある。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_1通りで5.95ｍ、Ｘ軸方向はY_1通りで11.65ｍを計測する。Ｙ軸方向はＮ－58°－Ｗである。

〔柱穴〕　直径16～50㎝の円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　なし

〔変遷時期〕　第Ｉ期

ＳＢ08掘立柱建物跡　（第111図、図版97）

〔位置〕　第Ｉ郭の東側、ＬＯ59・60、ＬＰ59・60のグリッドに位置する。

〔重複〕　他の建物跡等と重複しない。

〔平面形式〕　１間×２間の小規模な建物跡である。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_0通りで6.5ｍ、Ｘ軸方向はY_0通りで2.05ｍを計測する。

〔柱穴〕　直径12～30㎝の円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　なし

〔変遷時期〕　第Ⅱ期

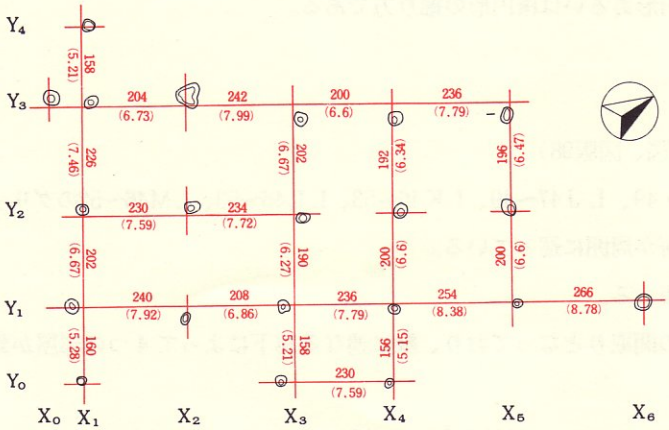
ＳＢ09掘立柱建物跡　（第111図、図版97）

〔位置〕　第Ｉ郭の東側ＬＮ59・60、ＬＯ59・60のグリッドに位置する。

〔重複〕　他の建物跡等と重複しない。

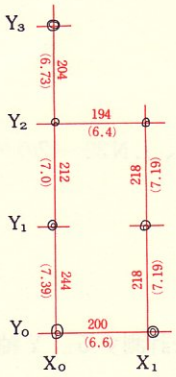
〔平面形式〕　１間×２間の東西棟建物である。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_2通りで2.1ｍ、Ｘ軸方向はY_1通りで4.7ｍを計測する。Ｙ軸方向は



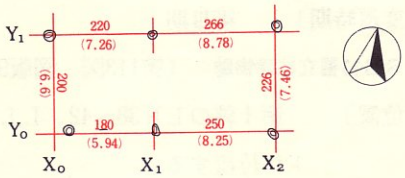
ＳＢ07建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0，3	15.0
1，0	13.9
1，1	17.2
1，2	12.4
1，3	29.8
1，4	9.0
2，1	7.9
2，2	34.2
2，3	19.0
3，0	46.0
3，1	27.3
3，2	33.0
3，3	29.0
4，0	9.0
4，1	19.3
4，2	46.0
4，3	31.4
5，1	13.2
5，2	22.5
5，3	21.3
6，1	37.3



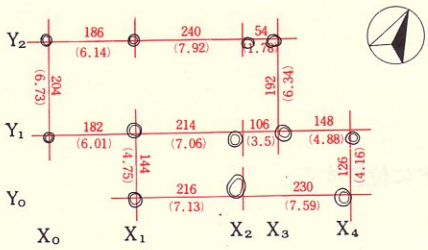
ＳＢ08建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0，0	25.5
0，1	35.0
0，2	16.5
0，3	12.0
1，0	30.5
1，1	34.5
1，2	19.0



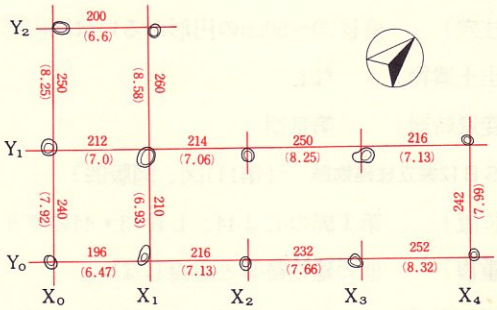
ＳＢ09建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0，0	8.7	1，1	4.7
0，1	11.2	2，0	19.4
1，0	24.1	2，1	24.6



ＳＢ12建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0，1	11.5	2，1	15.5
0，2	14.0	2，2	16.5
1，0	6.0	3，1	32.5
1，1	16.5	3，2	13.5
1，2	16.0	4，0	23.5
2，0	19.5	4，1	19.5



ＳＢ13建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0，0	29.8	2，0	8.0
0，1	24.8	2，1	15.5
0，2	12.3	3，0	8.0
1，0	34.0	3，1	16.0
1，1	10.5	4，0	12.0
1，2	41.0	4，1	7.0

0　4 m

第111図　ＳＢ07～09・12・13掘立柱建物跡

Ｎ－12°　－Ｗである。

〔柱穴〕　直径12～24cmの円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　なし

〔変遷時期〕　第Ⅱ期

ＳＢ10掘立柱建物跡　（第112図、図版98）

〔位置〕　第Ｉ郭のＬＩ48・49、ＬＪ47～49、ＬＫ46～53、ＬＬ46～53、ＬＭ46～52のグリッドに位置する。板塀が周囲に巡っている。

〔重複〕　ＳＢ15と一部重複する。

〔平面形式〕　書院造系統の間取りとなっており、縁に連なる廊下によって４つの部屋が繋がっている。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_1通りで13.8ｍ、Ｘ軸方向はY_8通りで25.15ｍを計測する。

〔出土遺物〕　なし

〔変遷時期〕　第Ⅲ期

ＳＢ11掘立柱建物跡　（第113図、図版98）

〔位置〕　第Ｉ郭のＬＫ38～42、ＬＬ38～42、ＬＭ38～42、ＬＯ40・41、ＬＮ39～42のグリッドに位置する。

〔重複〕　他の建物跡等と重複しない。

〔平面形式〕　書院造系統の間取りである。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_6通りで17.3ｍ、Ｘ軸方向はY_3通りで14.6ｍを計測する。Ｙ軸方向はＮ－28°　－Ｗである。

〔柱穴〕　直径20～50cmの円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　なし

〔変遷時期〕　第Ⅲ期

ＳＢ12掘立柱建物跡　（第111図、図版99）

〔位置〕　第Ｉ郭のＬＪ44、ＬＫ43・44のグリッドに位置する。

〔重複〕　他の建物跡等と重複しない。

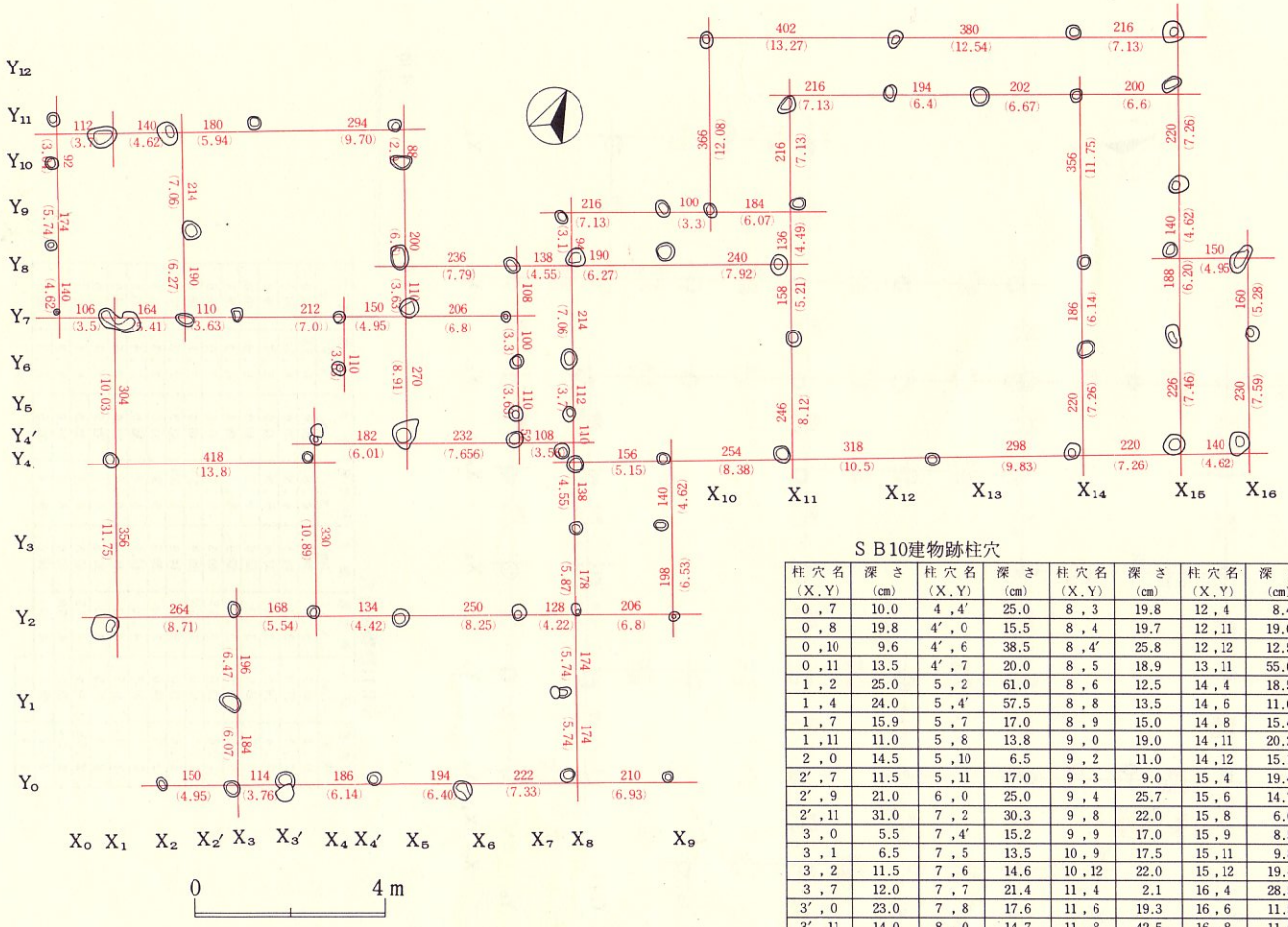
〔平面形式〕　細長い部屋が２つ繋がった平面形を呈する。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_1通りで3.15ｍ、Ｘ軸方向はY_1通りで6.55ｍを計測する。Ｙ軸方向はＮ－26°　－Ｗである。

〔柱穴〕　直径20～50cmの円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　なし

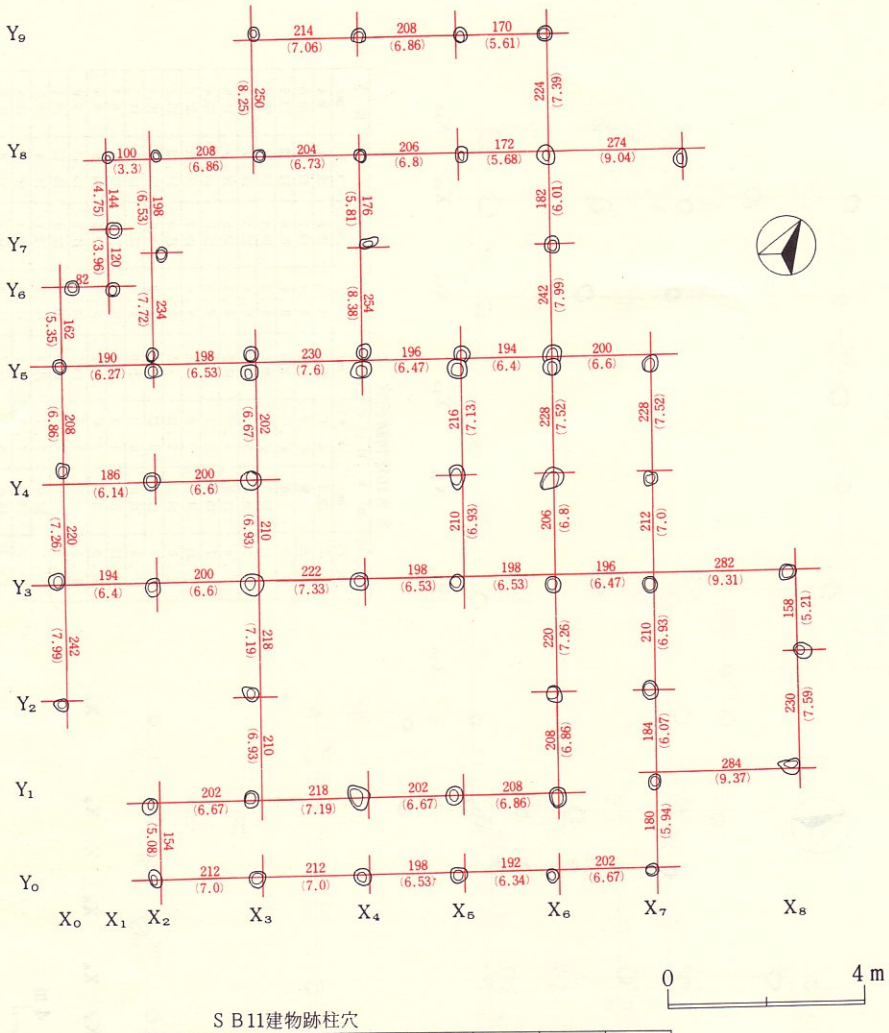
〔変遷時期〕　第Ⅱ期



第112図　　SB10掘立柱建物跡

SB10建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0 , 7	10.0	4 ,4′	25.0	8 , 3	19.8	12 , 4	8.4
0 , 8	19.8	4′ , 0	15.5	8 , 4	19.7	12 ,11	19.0
0 ,10	9.6	4′ , 6	38.5	8 ,4′	25.8	12 ,12	12.5
0 ,11	13.5	4′ , 7	20.0	8 , 5	18.9	13 ,11	55.0
1 , 2	25.0	5 , 2	61.0	8 , 6	12.5	14 , 4	18.5
1 , 4	24.0	5 ,4′	57.5	8 , 8	13.5	14 , 6	11.0
1 , 7	15.9	5 , 7	17.0	8 , 9	15.0	14 , 8	15.4
1 ,11	11.0	5 , 8	13.8	9 , 0	19.0	14 ,11	20.2
2 , 0	14.5	5 ,10	6.5	9 , 2	11.0	14 ,12	15.1
2′ , 7	11.5	5 ,11	17.0	9 , 3	9.0	15 , 4	19.4
2′ , 9	21.0	6 , 0	25.0	9 , 4	25.7	15 , 6	14.7
2′ ,11	31.0	7 , 2	30.3	9 , 8	22.0	15 , 8	6.0
3 , 0	5.5	7 ,4′	15.2	9 , 9	17.0	15 , 9	8.5
3 , 1	6.5	7 , 5	13.5	10 , 9	17.5	15 ,11	9.8
3 , 2	11.5	7 , 6	14.6	10 ,12	22.0	15 ,12	19.4
3 , 7	12.0	7 , 7	21.4	11 , 4	2.1	16 , 4	28.5
3′ , 0	23.0	7 , 8	17.6	11 , 6	19.3	16 , 6	11.5
3′ ,11	14.0	8 , 0	14.7	11 , 8	42.5	16 , 8	11.0
4 , 2	13.0	8 , 1	7.0	11 , 9	10.7		
4 , 4	11.5	8 , 2	15.0	11 ,11	13.0		



ＳＢ11建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0 , 2	38.0	3 , 0	38.0	4 , 8	26.0	6 ,5S	32.0
0 , 3	27.0	3 , 1	44.5	4 , 9	35.0	6 ,5N	28.0
0 , 4	19.5	3 , 2	37.0	5 , 0	31.0	6 , 7	39.0
0 , 5	35.5	3 , 3	52.0	5 , 1	40.0	6 , 8	40.0
0 , 6	30.0	3 , 4	53.0	5 , 3	48.3	6 , 9	28.5
1 , 6	15.0	3 ,5S	40.5	5 , 4	41.0	7 , 0	26.6
1 , 7	40.0	3 ,5N	35.0	5 ,5S	48.0	7 , 1	26.0
1 , 8	24.0	3 , 8	14.0	5 ,5N	35.0	7 , 2	17.5
2 , 0	48.0	3 , 9	20.5	5 , 8	39.0	7 , 3	33.8
2 , 1	40.0	4 , 0	42.0	5 , 9	38.0	7 , 4	30.5
2 , 3	31.5	4 , 1	41.0	6 , 0	23.0	7 , 5	31.0
2 , 4	32.5	4 , 3	32.5	6 , 1	22.5	7 , 8	29.0
2 ,5S	39.5	4 ,5S	42.5	6 , 2	23.0	8 , 1	31.5
2 ,5N	23.0	4 ,5N	35.0	6 , 3	19.8	8 , 2	26.5
2 , 7	28.0	4 , 7	18.0	6 , 4	32.5	8 , 3	36.0
2 , 8	20.5						

第113図　　ＳＢ11掘立柱建物跡

ＳＢ13掘立柱建物跡　（第111図、図版99）

〔位置〕　第Ｉ郭のＬＨ42～44、ＬＩ42・44のグリッドに位置する。

〔重複〕　他の建物跡等と重複しない。

〔平面形式〕　細長い部屋が鍵型に配置された平面形である。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_0通りで4.8ｍ、Ｘ軸方向はY_0通りで9.0ｍを計測する。Ｙ軸方向はＮ―46°―Ｗである。

〔柱穴〕　直径20～45㎝の円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　なし

〔変遷時期〕　第Ｉ期

ＳＢ14掘立柱建物跡　（第114図、図版100）

〔位置〕　第Ｉ郭のＬＤ49～51、ＬＥ49～51、ＬＦ49～52、ＬＧ48～52、ＬＨ48～52、ＬＩ48～51のグリッドに位置する。

〔重複〕　他の建物跡と重複しない。

〔平面形式〕　鍵型に連なる部屋などを廊下がとりまいており、書院造の形式である。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_5通りで18.5ｍ、Ｘ軸方向はY_5通りで14.7ｍを計測する。Ｙ軸方向はＮ―23°―Ｗである。

〔柱穴〕　直径17～45㎝の円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　縄文時代の石器２点が出土した。（X_5、Y_5）柱穴の埋土中からは、頁岩の縦長剥片を利用し、側縁に剥離が観察される石器が出土した。基部に素材剥片を取り出した際の打面、打瘤を残し、背面には第１次剥離の縦方向の稜が残存する。（X_5、Y_8）柱穴の埋土中からは両側縁に２次調整を施した頁岩製の石器が出土した。細かい調整は主に背面のみから縁辺に加撃して施している。

〔変遷時期〕　第Ⅱ期

ＳＢ15掘立柱建物跡　（第115図、図版100）

〔位置〕　第Ｉ郭のＬＥ50・51、ＬＦ49～53、ＬＧ47～53、ＬＨ47～52、ＬＩ46～52、ＬＪ46・50～52のグリッドに位置する。

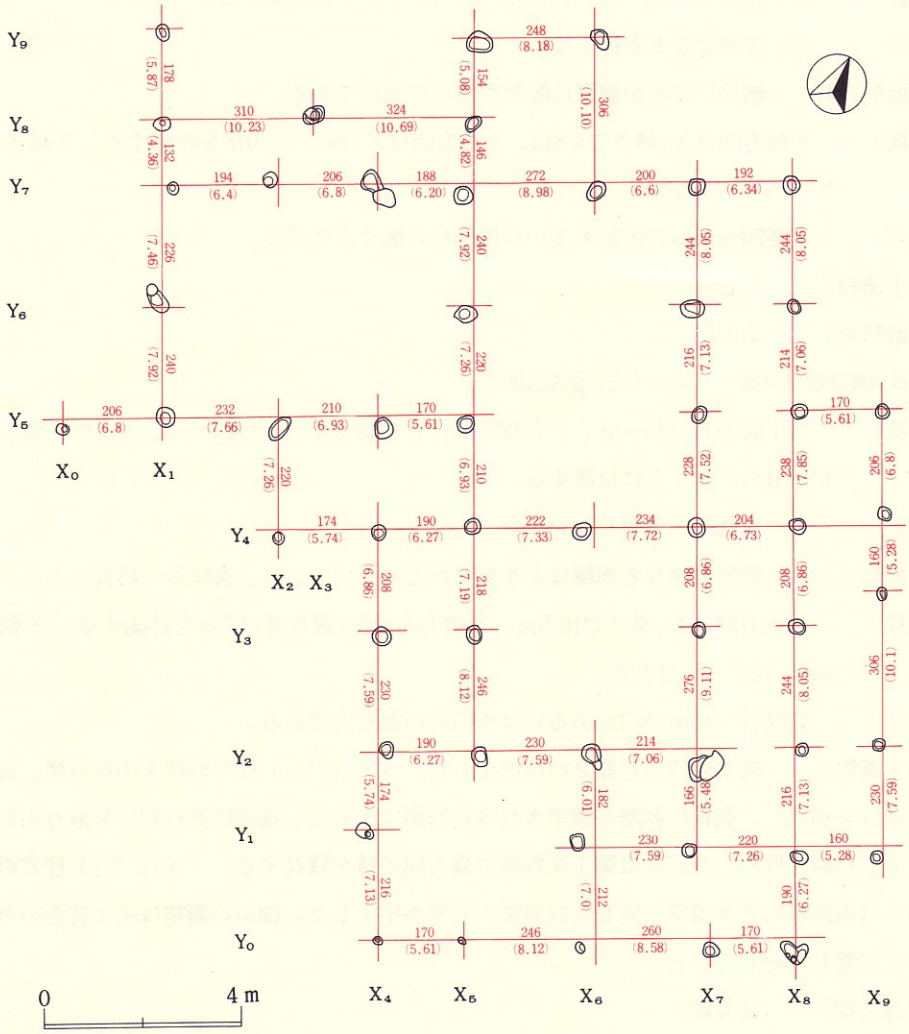
〔重複〕　他の建物跡等と重複しない。

〔平面形式〕　書院造系統の間取りであるが大きく２つに分かれている。

〔規模〕　Ｙ軸方向はX_7通りで19.7ｍ、Ｘ軸方向はY_3・Y_4通りで23.9ｍを計測する。Ｙ軸方向はＮ―15°―Ｅである。

〔柱穴〕　直径20～70㎝の円形あるいは楕円形の掘り方である。

〔出土遺物〕　なし



ＳＢ14建物跡柱穴

柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)	柱穴名 (X,Y)	深さ (cm)
0.,5	12.5	4,4	39.0	6,1	11.0	8,0	10.0
1,5	21.0	4,5	31.3	6,2	11.5	8,1	32.4
1,6	17.5	4,7	19.5	6,4	31.0	8,2	28.3
1,7	16.5	5,0	10.5	6,7	40.0	8,3	38.2
1,8	21.5	5,2	54.0	6,9	27.0	8,4	21.4
1,9	14.0	5,3	35.0	7,0	18.0	8,5	32.3
2,4	10.5	5,4	18.0	7,1	19.5	8,6	29.0
2,5	13.1	5,5	42.0	7,2	12.0	8,7	22.0
2,7	18.3	5,6	49.7	7,3	29.5	9,1	25.5
3,8	24.9	5,7	32.0	7,4	35.4	9,2	20.4
4,0	20.0	5,8	7.1	7,5	24.0	9,3	12.5
4,1	12.0	5,9	33.5	7,6	38.4	9,4	22.0
4,2	20.0	6,0	10.0	7,7	35.1	9,5	36.1
4,3	30.0						

第114図　ＳＢ14掘立柱建物跡